徳川浪人伝（上）

柴田錬三郎

新潮文庫

新潮日本文学アルバム 全20巻

1 森鷗外
2 夏目漱石
3 樋口一葉
4 島崎藤村
5 柳田国男
6 石川啄木
7 谷崎潤一郎
8 高村光太郎
9 有島武郎
10 武者小路実篤
11 志賀直哉
12 宮沢賢治
13 芥川龍之介
14 斎藤茂吉
15 萩原朔太郎
16 川端康成
17 堀辰雄
18 山本周五郎
19 太宰治
20 三島由紀夫

四六判／モノクロ96頁 カラー16頁 折込カラー口絵一点／毎月一巻20日発売

カバー 東啓三郎

柴田錬三郎
徳川浪人伝（上）

新潮文庫

徳川浪人伝（上）

柴田錬三郎

新潮文庫〔草〕一五〇 =25= Y 440

大坂落城後20年、３代将軍・家光の時代の、南蛮財宝をめぐる、公儀隠密団と浪人たちの壮絶な死闘！　気品ある風貌と並々ならぬ腕をもつ浪人織田重四郎は、伊丹の豪族神屋主膳を仇とする12歳の少年とその姉から助太刀を頼まれる。姉弟は、主膳と海外交易を争っていた豪族楠木の遺児で、７年前の夜襲で、父母をはじめ何もかも奪い取られていた。ふたたび襲いかかる徒党の正体は？

ISBN4-10-115025-7 C0193 ¥440E 定価440円

〜〜新潮文庫〜〜

柴田錬三郎の作品

剣は知っていた(上)
〃 (下)
江戸群盗伝
続江戸群盗伝
美男城
眠狂四郎無頼控(一)
〜
〃 (六)
眠狂四郎独歩行(上)
〃 (下)
眠狂四郎殺法帖(上)
〃 (下)
孤剣は折れず
赤い影法師
運命峠(前)
〃 (後)
剣鬼
眠狂四郎孤剣五十三次
眠狂四郎虚無日誌
眠狂四郎無情控
眠狂四郎異端状
徳川浪人伝(上)
〃 (下)

カバー印刷 錦明印刷

新潮文庫

徳川浪人伝

上巻

柴田錬三郎著

新潮社

徳川浪人伝（上）

柴田錬三郎著

新潮文庫

徳川浪人伝

上巻

柴田錬三郎著

新潮社版

3080

徳川浪人伝

上巻

草露風葉

街に、春の風が、土煙りをまきあげていた。
その土煙りを、まっこうからくらって、
「うっ！　ぺっ！」
と、旅商人が、唾を吐き出した。
とたんに、
「こらっ！」
ものすごい呶声が、発した。
腰掛茶屋の床几に、あぐらをかいていた髭だらけの浪人者であった。
「おのれ！　それがしの槍に、なんの遺恨があって、唾を吐きかけ居った！」
横にたてかけていた、おそろしく長い槍を、ひっつかんで、仁王立ちになった。
「遺恨などとは、とんでもない。……つい、気がつきませず――」
「黙れっ！　それがしが、ここに居るのが、目に入らなかったとは云わせぬぞ。この槍をなんと心得る。わが父天堂寺左近が、太閤秀吉殿下の股肱として、この槍をふりかざして、戦場をかけめぐること百七十度び、敵将の首級をあげること三十七。――その子たるわが身に

とっては、妻子にもかえがたい宝物であるぞ。それをなんぞ、士農工商の最下等に属するおのれ如きいやしきやからの唾を吐きかけられては、我慢ならぬ！　それへ、直れ！　亡父の栄誉にかけて、成敗してくれる！」

うそぶきたてた浪人者は、その長槍を、りゅうりゅうとしごいて、ぴたりと、商人の胸もとへ、突きつけた。

旅馴れた商人には、もちろん、浪人者のこんたんが、見えすいていた。

見えすいてはいたが、対手の烈火の憤怒ぶりに対して、

――どうせ、金が欲しいのだろう。

といった態度をかえすと、本当に生命をとられる危険があった。

あくまでいんぎんに、武士に対する敬意とおそれをもって、詫びを入れて、なるべく安あがりで、放免されるようにつとめなければならない。

「申しわけございませぬ！　なにとぞ、ご成敗ばかりはお許し下さいませ。てまえ、国許に、十二人の子をのこして居ります。来年は、十三人になる予定でございます」

商人は、土下座して、地べたへ額をこすりつけた。

「おのれの家庭の事情など、きいてもはじまらん！　宗旨を申せ。それによって、引導を渡してくれる」

浪人者は、商人ののどへ、穂先をふれさせた。

その時――、

「辰馬、止せ。むだだぞ」

背後から、声がかかった。

ふりかえった天堂寺辰馬は、着流しでふところ手の、長身の浪人者を見出した。

「なんだと？　なにが、むだだ？」

「そやつを、ただの商人と思うのか、辰馬。目がないぞ」

長身の浪人者は、笑った。

とたんに――。

土下座していた商人が、猫のすばやさで、逃げ出そうとした。

「こやつ！　逃げるかっ！」

天堂寺辰馬が、長槍をふりかざして、躍起に追おうとした。

しかし、商人の足は、おそろしい早さであった。

あっという間に、三間もひきはなした。

商人は、虎口を完全にのがれた距離とさとるや、ひょいと、首をまわして、

「ざまみやがれ！」

と、あびせた。

瞬間――。

商人は、あっと、悲鳴をあげて、ひっくりかえった。

片足の甲に、小柄が突き立ったのである。

長身の浪人者が、歩み寄って来ると、
「それを抜いて、返せ、波乗り佐兵衛」
と、云って、左手をさし出した。
商人は、痛みをこらえながら、
「織田重四郎様でございましたな、お手前様は――」
「おぼえていたな」
織田重四郎と呼ばれた長身の浪人者は、小柄を受けとると、
「まだ、盗賊をやって居るのか、佐兵衛？」
と、問うた。
「いまは、ごらんの通り、ずぶかたぎの薬売りでございますよ」
「しらばくれるな。一昨日、岡山城下随一の両替屋に、賊がしのび込んで、千両箱をぬすんで逃げた、と大層な噂であったが、どうやら、その手口が、三年前、小倉城下を荒した波乗り佐兵衛のそれと、同じであったな」
織田重四郎は、そう云って、笑った。
商人に化けた盗賊は、手ばやく、傷口をしばっておいて、
「お手前様には、敵いませぬ。観念いたしました」
両手を地べたにつくと、
「半分――五百両で、ごかんべん下さいましょうか？」

と、申し出た。
「渇しても、盗泉の水は飲まぬ、と云いたいところだが……、金は欲しい」
織田重四郎は、云った。
「おい織田、そやつ、盗人か」
天堂寺辰馬が、大股に寄って来て、
「盗人なら、遠慮することはない。そっ首を刎ねて、盗み金を取り上げるのは、天下万民のためにもなるぞ」
「盗賊の上前をはねるのは、武士の面目にかかわりはせぬか」
「冗談ではないぞ。上前をはねるのではない。盗み金をとりかえしてくれるのだ」
「とりかえしたならば、盗まれた家に返してやらねばなるまい」
「織田！　われら浪人者は、飢えて居るのだぞ。誰が好んで、街道で、追い剝ぎのまねなどして居るか。飢えて居るから、やむを得ず、手段をえらんでは居れぬのだ。……どうするのだ、こやつを？」
辰馬に問われて、重四郎は、こたえた。
「おれの、むかしの知りあいだ、この盗賊は――」
波乗り佐兵衛は、天堂寺辰馬をうながして歩き出した織田重四郎を、
「もし――」
と、呼びとめた。

重四郎は、ふりかえって、佐兵衛を視た。
「佐兵衛、もうそろそろ、あぶない吊り橋を渡るのは、止せ。年齢が年齢だぞ」
「織田様。今夜は、どこへお泊りでございますか？」
「たぶん、三石宿だ」
「旅籠へ、お約束の金子を、お持ちいたしましょう」
「呉れとは云わぬが、欲しくないとも云わぬぞ」
重四郎は、云いすてた。
辰馬は、肩をならべると、
「おい、織田――。あの盗人めが、約束など守ると思うのか。なぜ、ここで、金をとりあげてしまわぬのだ？」
と、なじるように云った。
「こちらが、約束したわけではない。むこうが、申し出たのだ。あの男は、約束は守るだろう。ただ、こっちが、受けとるか、受けとらぬか――ためらいがあるだけだ」
重四郎は、こたえた。
「どうも、お主という人間は、よくわからん」
辰馬は、首を振った。
知りあってから一年あまりになるが、辰馬は、まだ、重四郎の素姓を知らなかった。
重四郎は、なぜか、語るのを避けていたのである。

織田と名のるからには、あるいは、織田信長に縁つづきの家の出身かも知れなかった。その風貌にも、ただの浪人者とちがった気品があった。
態度にも、毅然としたところがあった。腕も立った。天稟に加えて、なみなみならぬ兵法修業をしたふしも、うかがわれる。
辰馬は、興味をもって、つきあって来たが、重四郎の胸中を視ることは、一度も、許されていなかった。
――なにか、ただならぬ志をひそめているのではないのか？
そういう疑いも、わいていた。
二人は、ここ半年あまりは、広島城下はずれの古刹に居候していた。
重四郎が、急に思い立った様子で、
「京へ上る」
と、云い出したので、辰馬もついて来たのであった。
岡山城下で、路銀が、尽きた。
浪人者のみじめさは、旅の途次で、すこしずつ工面しなければならないことであった。
重四郎が、旭川の護岸工事で、二派にわかれて争っている人足組の一方の用心棒に、十日ばかりやとわれ、その前金を辰馬がもらって一足さきに、岡山をはなれていたのである。
辰馬は、姫路で、なにかの臨時仕事にありついて、重四郎を待つことにしていたのである。

重四郎は、どうやら、人足組の用心棒がいやになって、後金をすてて、わずか二日で出て来た様子である。

春の風は、しきりに、二人の浪人者へ、土煙りをあびせてゆく。

重四郎と辰馬が、峠ふたつを越えて、三石宿へ着いたのは、日が昏れてからであった。

旅籠が三軒あるだけのさびしい宿場であった。

三石から三里で、有年坂峠に至る。そこからが、姫路藩であった。

「織田、京でおちつくつもりか？」

夕餉をすませた時、辰馬がたずねた。

「いや、いずれ、江戸へ出る」

「江戸へ出て、何をする？」

「まだ、きめて居らぬ」

「お主の腕前なら、町道場をひらけるが……」

「そんな気はない」

「どうも、わからん」

辰馬が、首を振った。

「わからん、とは？」

「お主のことがだ」

「おれは、これだけの人間でしかないが……」

「いや、ちがう。お主は、われわれ、食いつめ浪人とは、どこか、ちがう。お主の胸の裡には、何かが、かくされて居る。そうに、ちがいない」

「そう思うなら、そう思ってくれていてもよい」

「それだ。その云いかただ」

「正直でない、と云うのか？」

「というよりも、お主は、自分と世間とのあいだに、距離を置いて、冷やかに物事を眺める余裕を持って居る。飢えた人間には、そんな余裕はないはずだが、お主は、いつも、おちつきはらって居る。そこが、われわれとは、どこか、ちがうのだ」

「……」

重四郎は、こたえずに、月の光がおちて来た山峡へ、目を置いている。

その横顔は、おどろくほど端整であった。

「寝るか」

辰馬が、すこしやけくそぎみに、云った折であった。

「二階のお客さまあ、たずねて来た人が、ありますよ」

階下から、声がかかった。

「上げてくれ」

重四郎が、こたえた。

「あの盗人め、約束を守り居ったの」

辰馬は、重四郎を視て、首をひねり、
「お主は、盗人にまで好かれるふしぎな魅力を持って居るのか」
と、云った。
部屋に入って来たのは、しかし、波乗り佐兵衛ではなかった。
旅装束の若い女であった。
商家の内儀ふうにつくっているが、よく光る切長な双眸にも、すっきりした襟もとあたりにも、仇っぽさがうかがわれた。
そこいらにざらに見かける容子ではなかった。
「さわと申します」
挨拶してから、
「佐兵衛さんにおたのまれして、おうかがいした者でございます」
と、告げた。
「佐兵衛は、どうしたのだ？」
重四郎が、たずねた。
「追手が、かかりまして、表街道を歩けなくなったのでございます」
さわという女は、こたえた。
「それで――？」
「金子五百両、貴方様におとどけする約束を、やむなく、さきへのばして頂かねばならなくなったことを、お詫びしてくれ、と……。でも、お約束は、必ず、守って、お渡しつかまつる由にございます。それで、とりあえず、わたくしから、お渡しするように、と――」
さわは、懐中から、紙で包んだ金をとり出して、重四郎の前にさし出した。
「二十両ございます。……あとの四百八十両は、大坂で、お渡しいたしたい、と佐兵衛さんは、申しておいでございました」
「まるで、こっちが借金取りになったようだな」
重四郎は、笑った。
「いえ、佐兵衛さんは、その代りに、お願いの筋がある由でございます」
「なんだ？」
「貴方様のお腕前を、一度だけ、おかりしたいのだそうでございます」
「……」
さわは、重四郎を正視しながら、つづけた。
「摂津伊丹に、神屋主膳という豪族の家がございます。伊丹で、平家館、といえば、京大坂までひびいている名門でございます。その神屋主膳を仇とねらう者が居ります。その者に、助太刀をお願いいたしたいのでございます」
「仇討をする者は？」
「当年十二歳になる少年でございます。姫路の城下はずれに、二十歳の姉と一緒に住んで居ります」

「豪族といえば、郎党も多勢やしなって居るのだろう？」
「はい、館は、まるで、城構えだと申しますし、勿論、手勢をかかえていると存じます」
「そこへ、十二歳の少年をつれて、乗り込め、というのか。無理な相談だな」
そう云いながらも、重四郎は、平然としている。
「ばかげて居る！」
辰馬の方が、大声をあげた。
「みすみす斬られに、押し入るようなものではないか。話にならん」
しかし、さわは、まばたきもせずに、重四郎を見つめて、
「お願いできましょうか？」
と、返辞をもとめた。
「その少年に会ってみなければ、なんとも、返答しかねる」
「お会わせいたします」
さわは、こたえた。
重四郎は、さわを見かえして、
「ところで、そなたは、ただのかたぎの女房とは見えぬが……？」
と、云った。
さわは、自分のことをきかれて、はじめて、目を伏せた。
「そなたも、盗賊仲間か？」

重四郎は、ずばりと、たずねた。
「わたくしの素姓は、どうぞ、ごかんべん下さいまし。佐兵衛さんの仲間ではございませんが、似たり寄ったりの者には相違ございません」
さわは、こたえた。
このおちつきぶりは、身に武芸がそなわっている証拠である。それも、尋常ではない修業でおのがものにしたに相違ない、と重四郎は、看てとった。
当時、若い女が一人で、道中するなどとは、ふつうでは、考えられないことだった。
戦国時代のあらあらしい余風は、いたるところに残って居り、街道上に、斬られた死体が横たわっていても、さまで珍しくはない時世であった。
これを事件として、役人が吟味して、道中止めをするなど、かなり後世になってからのことであった。
この女は、若く美しい。
当然、道中にうろつく狂暴な手輩の狙うところになろうが、それをおそれず、平気で旅をしているのは、のばされた猿臂をはねのけるだけの自信があるからに、相違ない。
「では、明朝、出なおして参りまして、姫路まで、お供つかまつります」
さわは、云いのこして、去った。
「妙な女だな。ただ者ではあるまい」
辰馬が、云った。

「浮世に、食いつめた人間があふれて来ると、さまざまな奇形の者が現われて来るようだ」

重四郎は、そう云いすてて、ごろりと仰臥すると、後頭で手を組み、じっと、天井を仰いだ。

常とはちがった光が、その双眸にたたえられた。

「お主、本当に、十二歳の少年に助太刀して、神屋主膳とやらいう豪族を、討つ気か？」

辰馬が、眉宇をひそめて、たずねた。

「なんとなく、承知してしまったかたちになったな」

「おいおい……、これは、人足喧嘩の用心棒になるのとは、ちがうぞ」

「勿論、わかって居る」

「ひとつしかない生命を、むだに、あの世へ鞍がえさせることになるのだぞ」

「必ずしも、死ぬとは、きまって居るまい」

「いや、きまって居る。お主が、いかに腕が立っても、大名に劣らぬ手勢を擁した豪族館へ斬り込むなど、狂気沙汰だ」

「辰馬――」

「なんだ？」

「人間という奴は、おもしろいものだな。狂気沙汰と判って居りながら、ふっと、それをやってみたくなる。そういう気持を起してみるのは、人間のおもしろさだな。そうは、思わぬか」

「冗談ではない。ばかばかしい。……おれは、まっぴらだ」

「お主までも、死出の途連れにしようとは、云わぬ」

深夜――四更（午前二時）をすぎていたろうか。

「おい――」

ひくくおしころした重四郎の声が、辰馬に、かかった。

「おい、辰馬、目をさませ」

ゆさぶられて、辰馬は、「う、う……」と、うなって、ねむりからさめた。

「なんだ？」

「しずかに――」

重四郎は、ちょっと沈黙を置いてから、

「起きて、身仕度せねばなるまい」

と、云った。

「どうしたというのだ？」

「廊下に忍んで、われわれの寝息をうかがった者が居る。……この旅籠は、包囲されている気配がある」

「包囲されている？　何者どもに、狙われているのだろう？」

「わからぬ。ただ、そこいらのごろつきの輩とは、ちょっと質のちがう連中らしいことは、はっきりして居る」

「武士か？」
「まず――な」
「お主の方に、狙われるおぼえがあるのか？」
「べつに、こうまでものものしく包囲されるおぼえはない。しかし、狙われても、ふしぎはない過去は、持って居る」
「まきぞえは、ごめんだぞ」
「もう、まきぞえになって居る。……ともかく、ふりかかった火の粉は、払わねばなるまい」
二人は、すばやく身仕度をした。
「敵は、幾人ぐらいと、みる？」
辰馬が、きいた。
「わからぬ。しかし、十人以下ということはあるまい。忍びの術を身につけているらしいから、手ごわい、といえる」
「こちらから、斬って出るのか？」
「敵は、夜明け前を、襲撃の時刻と、うちあわせているらしい。時間はあるから、こちらは、充分に、敵の裏をかくことができる」
曽て、このような危機に、しばしば、遭ったことがある重四郎のようであった。
すでに、どう動くか、思案は、成っていた。

重四郎は、辰馬の肩に乗るや、天井の張りじまいの板をはずした。
そして、辰馬とともに、天井裏にしのんだ重四郎は、ほこりのつもった梁をつたって行きながら、
「これが広い屋敷だと、血なまぐさい振舞いをせずに、脱出できるのだが……、やむを得ない」
と、云った。
空いている部屋をさがして、降りると、
「待つか、それとも、機先を制して、とび出るか――いずれが得策かな」
と、闇の中で、独語した。
辰馬は、重四郎の動くままに、順うよりほかに、すべを知らなかった。
山峡の深夜は、おそろしいほど、静寂の冷気が、はりつめている。
あと半刻あまりで、夜が明けようとする頃あい――。
重四郎と辰馬が寝ているはずの部屋へむかって、音もなく忍び寄ったのは、四人の男であった。
板戸を、さっとひきあけて、風の早さで、四人が、侵入した。
次の瞬間であった。
襲った者たちが、逆に襲われる事態が、そこに起った。
廊下から、一個の黒影が、四人の侵入者の背後に立ったのである。
はっ、となって振りかえった侵入者たちの狼狽は、けだし、重四郎たちがもし襲われてい

たとしても、その狼狽にまさるものであった、といえる。
その狼狽ぶりを、充分に自らの利とする迅業が、織田重四郎にはあった。
闇の中に、人間の肉と骨を断つ音が、瞬時に、継続した。
刃と刃の噛み合う金属音は、全くなかった。
辰馬が、そっと、首をのぞけた時には、重四郎一人が、室内に、立ちのこっていた。
「やったの！」
辰馬は、感嘆した。
四人を、一太刀ずつで斬り仆した腕の冴えは、舌をまくに足りた。
辰馬も、重四郎が、これほどのすざまじい手練の持主であるとは、知らなかった。
「闘いは、これからだ」
重四郎は、云った。
「表と裏に、四五人ずつがいる」
「お主のこの腕前なら、なんの造作もなく、斬り伏せられるだろう」
「そうは、かんたんには、いくまい。矢か鉄砲玉が飛んで来る危険がある」
「屋根から襲うか？」
「それも、よかろうが……、おれが、表へ、堂々と斬って出る隙に、お主は、屋根づたいに、隣りの厩へ飛べ。継立馬をぬすんで、さきへ、逃げろ」
「いや、おれも――」

辰馬が、云うと、
「一人の方がよい。正直に云わせてもらうと、お主は、実戦には向かぬ男だ」
重四郎は、云った。
皮肉なことだが、見かけは、比較にならぬくらい、辰馬の方が、逞しい偉丈夫で、敵をおそれさせるに足りた。
しかし、重四郎は、辰馬が意外に腰抜けであることを、看破していたのである。
「すまぬ！」
辰馬は、詫びた。
「おれが、斬って出たら、同時に、屋根を走れ」
重四郎は、そう云いのこしておいて、ゆっくりと、階段を降りはじめた。
階下にも、敵がひそんでいる、と予測してよかった。
重四郎の総身には、ひさしぶりに、はげしい闘志が、張りめぐらされていた。
敵の正体が不明なだけに、かえって、生命をむだには落せなかった。
「おのれら、何者ぞ！」
凄まじい一喝が、街道へ向ってあびせられたのは、それから、数分ののちであった。
十三夜の月明下に――。
誰何に応える鋭い矢唸りが、起った。
その瞬間には、重四郎は、おのが五体を、鞠のように、路上へころがしていた。

はね起きたせつなには、もう敵の一人を、まっ向唐竹割りに、斬り下げていた。
「意趣ならば、堂々と名のるがよかろう」
重四郎は、八双にかまえながら、云った。
討手は、かなり距離を置いて、布陣し、沈黙をまもった。
闇が、うすくなっている時刻であった。
重四郎は、黒衣の討手たちのかまえを、見わたし、
「隠密、とみたぞ、おぬしら――」
と、云った。
それは図星であったらしく、討手陣は、猛然と、襲いかかって来た。
これに対する重四郎の反撃は、旋風に似ていた。
躍る。
斬る。
跳ぶ。
斬る。
重四郎の五体が翻天するたびに、そこに、屍がたおれた。
裏手にあった討手がたが、走り出て来た時には、もうそこに生き残っていたのは、たった一人であった。
その一人も、大きくのけぞるのをみて、新手は、うめきたてて、重四郎へ、斬りつけて来た。

重四郎は、走りはじめた。
辰馬が、自分のみ馬をとらず、厩から、二三頭、往還へ追い出しておいたのを、重四郎は、みとめたのである。
その一頭へ、とび乗って、馬腹を蹴るはやさに、討手がたは、追いつけなかった。
重四郎は、まっしぐらに、馬をとばしながら、
――あれらが、公儀隠密たちであったとしたら、どういうことなのか？
それを、考えていた。
公儀隠密は、使う剣は、柳生流である。柳生流に、虎乱という術がある。
これは、多勢をもって、一人の強敵を討ちとる時に、使う。
重四郎を包囲して、襲いかかって来た討手陣は、その虎乱を使ったのである。
柳生流を知る重四郎が、見あやまるはずはなかった。
公儀隠密が、自分たち名も知れぬ浪人者を、ものものしい布陣をもって、討ちとろうとして来た。これは、かんたんに考えただけでは、すまされないことだった。
なにかの誤解であろう、と思いたいところであったが、公儀隠密ともあろう者たちが、誤解するとは、考えられなかった。
それに――。
もう、七八人を斬り伏せてしまっている。

——いそがしいことになったな。

重四郎は、胸のうちで、独語した。

このおちつきは、性格の太さもあるが、死地をいくたびもくぐって来て、きたえられたためのものでもある。

重四郎を乗せた馬は、風のはやさで、有年坂峠を越えた。

峠下の腰掛茶屋のならんだ立場へ着いた時、路上へ、すっと立った者があった。

さわという女であった。

いつの間にか——夜のうちに、ここまで来ていたのである。

「旦那——、こちらへ」

うながすさわの表情は、きびしい色をみせていた。

「なんだ？」

「ご案内したいところがございます」

さわが、云った。

いくばくかののち、重四郎は、さわと肩をならべて、かなり深い森を、くぐっていた。

重四郎は、この女の素姓に、興味をもっていた。

夜のうちに、有年坂峠を越えていたのは、三石のあの旅籠が、襲撃される、と感づいたからではないのか。

「そなたは、われわれが、襲われる、とどうして、判った？」

重四郎は、問うてみた。

「仔細は申しあげられませぬが、わたくしも、追われている身でございます」

さわは、こたえた。

「公儀隠密にか？」

「え？」

さわは、重四郎へ、視線を向けた。

「おれも、これで、いろいろな経験を、のぞまずして、積まされて来た。あの討手たちが、公儀隠密であることぐらいは、判る」

「……」

「そなたが、公儀隠密に追われている身ならば……、われわれが襲われた理由も、読める」

「……」

「そなたが、われわれをたずねて来たのを、公儀隠密たちは、知って、われわれを、そなたの一味と、思いまちがえた。そうではないのか」

「……」

「そなたが、公儀にたてつく何やらの徒党の一人であるとすれば、だ」

「織田重四郎様——」

「うむ？」

「貴方様は、そうと読みとりながら、いかにも、平然としておいでございます」

「あわててもしかたがあるまい。人間の運命というやつは、なるようにしか、ならぬ」
「でも……、やはり、わたくしどもには、不敵な御仁と存じられます」
「一味徒党にひき入れたい、と思っているのか。それならば、あきらめてもらおう。徒党を組むのは、好きではない。一人で生きているのが、気楽だと思って居る。……そなたらが、時の強い権勢に反抗して、何やら、企てているのだ、とすれば、こっちは、なるべく、無縁でいたいものだ。面倒なことは、きらいな性分だ。……尤も、あの公儀隠密の追跡をかわして、そなたが、どこかへかくまってくれる好意は、すなおに、受けることにする」
重四郎は、一応、念を押しておいた。

人生花

さわが、重四郎を案内したのは、古びた寺院であった。山門など、ひと押しすれば、音たてて、崩れ落ちそうであった。
境内は、しかし、塵ひとつ落ちていなかった。
金木犀が咲いて、佳い匂いをただよわせている。
さわは、方丈の玄関に立つと、案内を乞うた。
若い納所が現われて、

「あ、これは、さわ様」
と、おどろきの表情をみせて、奥へ取次ぎに入った。
納所から、そう呼ばれるところをみると、氏素姓のある女に相違ない。
さわと重四郎は、囲炉裏のある部屋へみちびかれた。
そこに、老僧がいた。
ただの僧侶ではない証拠は、額から眉間を割って、頬へ走っている凄まじい刀痕であった。
鼻梁高く、見事な風貌であった。前身が、勇武を誇った高名の武将であろうか。
老僧は、さわを見ると、微笑して、
「三年ぶりかな。よう生きのびて居ったものだの」
と、云った。
さわは、微笑をかえして、
「和上も、おすこやかで、おめでとう存じまする」
と、挨拶した。
「十年、無駄に生きのびた。と申して、むりに死ぬこともないのでの」
「百歳までの長寿をお持ちなさいませ」
「百まで生きのびるとすれば、あと三十年もあるぞ。これは、もう面倒だ。さすがに、目もかすんで参ったし、耳も遠くなって来た。先日は、井戸端で、足をすべらせて、したたか腰を打って、五日も起き上れなんだ。ぶざまなものだ、おいぼれは……」

そう云ってから、老僧は、はじめて、重四郎へ、視線を向けた。
「お手前、昨夜あたり、人を斬られたかの？」
何者か、問う前に、ずばりと云いあてた。
「血がにおいますか？」
重四郎は、べつに、あわてずに、ききかえした。
「むかし、さんざ、人を斬ったものでな」
老僧は、たんたんとして、こたえた。
「なんとなく、それがわかるのじゃな」
「和上――」
さわが、真剣な面持で、
「この御仁を、四五日、おかくまい下さいませぬか。この御仁が、是非なく血闘なされたのは、わたくしのせいでありますゆえ――」
と、たのんだ。
「あいかわらず、公儀隠密どもに、追いまわされているとみえるの」
「いたしかたありませぬ。……どうぞ、おねがい申します」
「そなたは、どうするのじゃ？」
「わたくしは、今夜のうちに、立去ります」
さわは、こたえた。

「お手前、なんと名のられる？」
老僧は、さわが夕食を手伝うと云って、立って行ったあとで、重四郎に、たずねた。
「織田重四郎と申す」
「織田？」
老僧は、重四郎の容貌を、あらためて、凝視した。
重四郎は、すぐに、先手を打った。
「それがしが物心ついた時には、父母はみまかって居り、おのれがいかなる素姓か、ついに知り申さぬ」
「成程――」
老僧は、重四郎の言葉の裏を読んで、うなずいてみせた。
「お手前の素姓は、天知る地知る、じゃな。……剣のわざは、自信がおありの模様じゃな？」
「いささか――」
「斬ったあとの業念は？」
「……」
重四郎は、そう問われて、ちょっと返辞にまよった。
「ははは……、よいよい。若いうちは、業力を以て、神力を押しやる勢いがあってよい。愚僧も、そうであった」
「失礼ながら、ご住持は、武将であられたか？」

重四郎は、問うてみた。

「なんの、ただの猪武者での。いくさをするのが面白うて、あちらこちらと、駆けまわっただけのことでな。一城のあるじになるには、器量が遠く及ばず。ははは……こうして、片田舎の古寺に巣ごもりできたのさえ、ありがたいと思うて居る」

――この老僧も、おれと同じく、素姓をかくそうとしている。

重四郎は、直感した。

やがて、さわが、食膳をはこんで来た。

その時、老僧は、妙なことを云った。

「世が世であれば、箸しか持たぬ身が、いまは、給仕の側にまわる。浮世は変るものかな」

さわは、無表情で、老僧の椀へ、麦飯を盛り、重四郎へも、すすめた。

――よもや、この女が、姫君、と呼ばれる身分であったとは思われぬが……。

重四郎は、さわの横顔へ、一瞥をくれた。

大名の息女にしては、その横顔にたたえられているのは、あまりにも仇めいた色香であった。

この色香は、遊里でみがかれた、と解釈した方がよさそうである。

――とすると、前身は、太夫であった、とみるべきか？

重四郎は、想像してみたものの、もしそうであったならば、あまりにも、はげしい変り様であり、そこには、なにか深い秘密があると考えられる。

――いずれであれ、おれとは、べつに、かかわりのないことだ。

食事がおわった時、老僧は、重四郎に、

「お手前に、太刀を一振り、進呈いたそうかの」

と、云った。

重四郎は、有難く受けることにした。いまの差料は、無銘の二流品だったからである。

老僧は、奥へ入ったが、すぐ、地味なつくりの剣を携げて、もどって来ると、無造作に、重四郎の前に置いた。

「磨りへらしてはあるが、よく斬れる」

重四郎は、抜きはなって、面前へかざしてみた。

そして、幾分間か、じっと、刀身へ、目を置いていた。

長さ三尺を越えている豪剣であった。

地鉄こまやかに、麗わしく、焼刃は小直刃と見まがうくらい、いかにもみごとであった。

表裏ともに、棒樋をかいて、ほとんど切先にまで及んでいる。

八幡大菩薩の文字が、彫られ、かしらに、梵字が、なかば磨滅している。

おそらく、百年いやそれ以上のあいだに、磨ぎへらされたものであろうが、なお、これが名剣である価値は、みじんも減じてはいない。

「銘は？」

重四郎は、問うた。

「来国俊」
老僧は、こたえた。
「国俊！」
まさしく、古今に傑出した名剣であった。
「ご存じかな、肥後の阿蘇山にある阿蘇神社の神宝として、来国俊は、納められてある。螢丸、という」
「きき及んで居ります」
「あれは、にせもの。実は、螢丸は、これじゃて――」
老僧は、云った。
重四郎は、おどろいて、老僧の顔を見まもった。
螢丸の名は、あまりにも、有名であり、神秘のうわさが、伝えのこっている。
「まことであろうか？」
思わず、重四郎は、ききかえさずには、いられなかった。
「ははは……、まことじゃ。螢丸に相違はない。お主が、使うてみれば、わかる。この太刀には、ふしぎな斬れ味がある。他の、名刀と称するものとは、ちがうの」
「……」
「ためしに、境内の樹を、両断してみなされ」
老僧は、すすめた。

重四郎は、べつに、起とうとはしなかった。しかし、あらためて、眺めれば、この三尺余の白刃から、におい立つ妖しい神秘の剣気が感じられた。
「いずこの馬の骨とも判らぬ素浪人に、どうして、このような名刀を、下さるのか？」
重四郎は、その不審を問うた。
「気まぐれじゃな」
老僧は、こともなげな口調でこたえた。
「名刀であるからこそ、使うてみねばなるまい。世が泰平になれば、名刀は、屋敷奥ふかく、しまわれてしまう。宝のもちぐされとは、これを云うの。……名刀は、大いに使われなければならぬ。……お主は、これからも、大いに、人を斬りそうじゃ」
建武三年二月――。
足利尊氏と弟直義は、南朝の軍勢に追われて、兵庫から九州へのがれた。
そして、豊後の大友氏とむすんで、勢威をもりかえした。
肥後の菊池一族は、足利勢を迎え撃って、多々羅ノ浜に戦った。
この時、阿蘇の兄弟（惟直、惟時、惟澄）は、一族郎党を率いて、菊池氏に加わって、大いに勇猛ぶりを発揮した。
しかし、戦いは利あらず、南朝の忠臣らは、大敗して、四散した。
阿蘇の惟直は、多々羅ノ浜で、深傷を負い、肥後の小竹山で、割腹して果てた。
その弟九郎惟時は、見知らぬ村里をさまようちに、いやしい田夫に生捕られた。

三男惟澄は、奔って、矢部城に帰るや、ただちに、兵をたてなおして、肥後筑後の野に、死闘を展開して、南郷城を抜いた。

延元二年には、わずか五十余騎の手勢をひきいて、砥用、小池の諸城を攻め落した。

さらに、小弐頼尚と、田崎原にたたかい、一色少輔入道とは、大塚原でたたかって、いずれも敗走せしめた。

次いで、菊池武重とともに、合志城を攻め、翌三年には、ふたたび、頼尚とたたかい、仁木義長ともしばしば、激突した。

まさに、鬼神の猛戦ぶりであった。

惟澄とその手勢が、斬り伏せた敵は、三千余人と、つたえられている。

この惟澄が、腰に佩びていたのが、来国俊――螢丸であった。

ところで――。

螢丸、という称名の由来であるが、これは、神秘の伝説となって、後代に伝えられている。

多々羅ノ浜の死闘は、史上にも有名なように、はじめから、南朝勢は、死を決していた。

阿蘇兄弟も、生きては還らぬ覚悟であった。

しかし、惟直、惟時、惟澄の三人ともが、討死してしまえば、阿蘇の名家は、絶える。

そこで、惟直は、惟澄に、

「お前は、死んではならぬ。いかに重傷を受けるとも、一命を保って、脱出せよ」

と、命じておいたのである。

そこで、死闘の果てに、惟澄のみは、血路をひらいて、矢部城まで、しりぞいたのであった。

けだし、惟直、惟時の両兄は、惟澄に重囲を脱せしめるために、阿修羅となって、おのが身を犠牲にしたに相違ない。

矢部城に、生きて還った惟澄は、その夜、泥のごとくねむった。

死闘したなごりとして、惟澄のかたわらに投げ出された太刀は、はばき元から切先まで、寸分の隙間もなく、さながらササラのごとく欠けてしまっていた。

死んだようにねむる惟澄が、みた夢は、奇妙なものであった。

無数の螢が、舞って来て、ササラとなった太刀の刃にとまったのである。

朝になって、惟澄が、目ざめてみると、不思議や、太刀は、刃こぼれひとつない、元の白刃にもどっていた、という。

「ササラのごとくに欠け損じた刃が、夢の中で、螢がとんで来て、とまったために、一夜のうちに、旧のごとく復した、などという伝説は、つくりごととしても、あまり上手とは、申せぬ」

老僧は、そう云って、笑った。

「この細直刃は、研ぎへらしたためと存ずる。これだけ研ぎへらして、旧に復すのは、容易ではなかったと存ずる」

重四郎が、云った。

「左様さの。惟澄に命じられた研ぎ師は、研げども、研げども、あまりのすざまじい刃こぼれに、往生して、夢を見たのであろうかの。研いでいる小屋のまわりをとび交っている螢が、刃にとまって、一夜にして、刃を旧に復してくれたら、どんなにうれしかろう、と想像しているうちに、それを夢にみた——そうであったろうか」

「いずれにしても、細直刃になおして、なお、これまでに、われわれの心をうばうとは、稀代の名剣と申せる。それがしのごとき浮浪の無頼者が腰に佩びるのは、あまりにもったいない、と存ずる」

「ははは……、遠慮は、無用じゃ。いまも申した通り、名刀は、大名屋敷の倉や神社の宝物殿で、ねむるべきものではない。なんと理屈をつけてみたところで、刀は人を斬るために、つくられた品じゃ。されば、これは、生命の危険にさらされた者が、常に腰に佩びてこそ、名刀の価値があると申すもの。所持するにお主がふさわしい、とみたゆえ、進呈いたすのじゃ」

「それでは、頂戴つかまつる」

重四郎は、ありがたく、受けることにした。

そこへ、さわが、近づいて来た。

「では……、わたくしは、ひと足おさきに、参ります。姫路にて、お待ちいたします」

そう告げるさわを、老僧は、じっと眺めて、

「かげがうすいの、そなた——」

と、云った。

「自身でも、あまり長い生命とは、思って居りませぬ」

さわは、おちついて、こたえた。

「いかんの。生命は、大切にせねばなるまい。……織田重四郎殿、この女性の護衛役をひきうけて頂こうか。お主自身を守るものは、できたのじゃから、ひとつ、お願いいたそう」

「いえ、それは、無用でございます」

さわが、つよく、かぶりを振った。

「この御仁と二人連れで、道中いたしましては、すぐに、敵がたの目につきますゆえ、はなれて参った方が、危険がさけられます」

「本街道を行けば、目立つであろう。間道を行けばよろしかろう、間道をな——」

老僧は、そう云うと、ころものかげから、一枚の絵図面をとり出して、ひろげてみせた。

「姫路への間道は、これじゃ。天正の頃、忍びの者がはしった道じゃて……。地下の者たちでさえ、近隣の村へ行ける道、ぐらいにしか考えて居らぬが、実は、そうではない。京の都へ通じて居る」

夜が、しらじらと明けた時刻——。

織田重四郎とさわは、とある峠の頂上に、立っていた。

丑刻（午前二時）に、古刹を出て、闇の中を歩きつづけて来たのであった。

小松がまばらにちらばった峠であった。あかい地肌が、いちめんにむき出されていて、山

獄の風情には乏しい。

古ぼけた雨乞い堂が建っていて、万字つなぎの格子には、婦女子の髪やたにしが無数にぶらさがっていた。

重四郎とさわは、その格子の前に腰を下ろして、明けて来る景色を、眺めていた。

ひくい山が、いくつか重なりあって、目路をさえぎっていた。急斜面の底に、人家が木の間がくれに、ちらばっている。

「貧しい里だな」

たちのぼって来る炊煙を、見下ろしながら、重四郎は、つぶやいた。

さわは、重四郎の横顔を、ちらと見やった。

「貴方様は、こうした貧しい里で、おくらしなされたことが、おありでございますか？」

「八歳から十五歳まで、土佐の海辺で、育てられた。山と海と、岩と波と、鳥と魚が、わたしのくらしのすべてだった。ならいおぼえたのは、山犬や狐を追いかけまわして、なぐり殺すことと、海の底へもぐって、魚を突き刺すことだけであったな」

「貴方様を、世話なされたのは？」

「足が不自由で片目の年寄りであった。顔にもからだにも、あの住職よりもすざまじい刀創槍傷がついていた。……その年寄りが、わたしに教えたのは、たったひとつ、背を敵に見せてはいけない――それだけであった」

「……」

「人間が、奇形の異端者になるのも、ならぬも、その育ちかたによるようだ」

重四郎は、なげ出すような口調で、云った。

感受性の鋭敏であった少年時代を、想いかえしてみて、重四郎に、全く欠如していたのは、人の心のあたたかさであった。

重四郎を育ててくれた老人は、表情にも言葉にも、みじんも優しさを示さなかった。

まるで、重四郎を、闘争の権化にでも、仕上げようとするかのように、きたえることばかりに専念したのである。

老人は、重四郎が血まみれになって、山犬とたたかって、これを仕止めると、

「それでこそ、男子でござる！」

と、ほめたたえた。

荒浪をのりこえて、遠くの島へ泳ぎ着くまでは、いかに苦しいと叫んでも、そ知らぬ顔で、小舟をこぎつづけていた。目もくらむような断崖絶壁をすべり降りたり、よじのぼらせることに、まるで、残忍な快感でも、あじわっているかのごとくであった。

「わたしは、なんのために、このような修業をせねばならんのだ？」

その不審をたずねると、老人は、冷然として、

「若が、男子だからじゃ」

と、こたえていた。

重四郎が、

――爺が、おれに愛情を持たなかったのではない。かくし通しただけなのだ。

と思いかえすようになったのは、つい近年にいたってからであった。

老人は、愛情をあらわす、などということは、もってのほかと、おのれをきびしく戒めていたに相違ないのだ。その生涯の大半を、戦場をかけめぐることに終始し、主君の馬前で討死することこそ武辺の最高のほまれと信じて疑わなかった老人が、一人の少年を預かり、育てるに臨んで、おのが流儀に方針をたてたのは、むりはない。

きたえること。きたえぬくこと。

そのためには、おのれを鬼にする。

それが武辺というもの、と確信し、実践したのだ。

老人は、その臨終の牀に在っても、重四郎に対して、心の弱さをみせようとはしなかった。

「よいかな、若――。敵に背を向けてはならぬ、ということを、決して忘れめさるな」

老人は、その言葉をくりかえしたばかりであった。

しかし、老人が亡くなって、孤独になった時、重四郎の心に生れたのは、空虚なさびしさばかりであった。

鬼と化した老人によってきたえられたはずの精神は、意外にも、不具者の劣等感にも似たむなしさにつつまれていたのである。

そして――。

この十五年間、重四郎がたどって来たのは、世人のためはおろか、おのれ自身の利にもならぬ無頼の道であった。

ゆくりなくも、見知らぬ山里を眺めて、重四郎の感慨は、陰湿な、暗いものであった。

さわは、重四郎の横顔に刷かれた孤独な自嘲の色を、そっとみとめた。

「貴方様は、女人を愛されたことが、おありでしょうか？」

不意に、そう問われて、重四郎は、視線を、さわに向けた。

「いや――、まだ、そのような女人には、出会うて居らぬ」

「もし、お会いなされば、浮世の見かたも、かわりましょう」

「そなたは、どうなのだ？　男を慕うたことがあるのか？」

「ございます」

さわは、はっきりとこたえた。

「ただ、慕うた男が、世にもまれな卑劣者であったのが、わたくしの不幸でございました」

「……」

「でも、慕うたことは、まちがいないことでありますゆえ、その男に裏切られても、憎んでは居りませぬ。遠くへ押しやってしまうことに努めて参りました」

「遠くへ押しやる、か。……わたしの少年の頃の記憶も、近ごろになって、かなり遠いものになった」

重四郎は、そう云って、かわいた声をたてて笑った。

その笑い声が、さわの胸に、しみ入った。

その峠からの下りは、ゆるやかで、朝陽のさしそめた道を辿るのは、なんとなく、たのしかった。

すくなくとも、さわは、心がなごみ、すこし浮き浮きして来るようであった。

道は、山腹を幾曲りかして、二人を、里へみちびいた。

里といっても、人家は十軒あまりしか見当らず、それぞれ、松や竹でかこって、はなればなれに、ひっそりと、わびかまっていた。

重四郎は、一瞥して、

——ただの貧しい農家ではないようだが……。

と、思った。

二人は、老僧から、

「お主らは、夕映えの里という村を通る。そこに、千羽鶴という家がある。立寄って、昼食でも、摂って行くがよい。わしが云うた、と申せば、もてなしてくれよう」

と、云われていたのである。

夕映えの里。

優しい称呼にふさわしい景色であった。

田畠は、わずかだが、桑や果樹が、ゆたかにしげっていたし、山と山がほそくせばまったむこうには、海がひらけていて、遠浅の砂地が、白く浮きあがっていて、漁船が三四艘ひきあげられている。

人家はすくないし、くらしになんの不自由もないとみえる。

道は、人家から、かなりはなれたところを、まっすぐにのびていた。

重四郎とさわは、黙々として、歩いて来て、とある地点で、申しあわせたように、足を停めた。

「千羽鶴という家へ、立寄られますか？」

さわが、問うた。

「寄ってみることにいたそうか。腹も空った」

重四郎は、表街道から遠くはなれたこの静かな里のたたずまいに、ある興味をおぼえていた。

それぞれの家の構えと、家と家との間隔と位置と、そして村ぜんたいのつくられかたに、重四郎は、ふかい考慮がはらわれている、と察知していたのである。

桑畑をへだてて、畦径を通っている人影をみとめて、さわが、

「もうし——」

と、声をかけた。

村人は、笠をあげて、こちらを見た。

笠のかげの容貌は、はたして、農夫のいやしさがなかった。

「千羽鶴、と申される家は、どちらでしょうか？」

農夫は、うなずくと、

「ござれ。案内いたす」
と、武家言葉で、こたえた。
二人は、そのあとに、したがった。
かなりの年配の村人は、先に立って歩きながら、
「お手前がた、どちらから、ござった？」
と、たずねた。
「沢井村の歓喜寺から、参りました」
さわが、こたえた。
すると、村人は、
「右近様は、ご健勝でか？」
と、問うた。
老僧は、前身を、右近と名のったのであろう。
「あのぶんでは、百歳までの長寿を保たれましょう」
「それは、重畳でござる」
重四郎は、この時、直感が働いた。
——あの老僧と、この夕映えの里は、ただならぬ深い縁でつながれているに相違ない。
しかも、それは、他国の者には、秘密としている、と思える。
村人は、桑畑をすぎ、小幅の川に架けた土橋を渡ったところで、

「千羽鶴家は、あそこでござる」
と、指さした。
高い石垣がめぐらされ、庭にいちめんに桃の花を咲かせた家が、前方に在った。
さして大きな構えではないが、幾棟かの土蔵をひかえさせている。
重四郎は、この里の人家の配置が、千羽鶴と称するその家を中心にして、為されていることに気がついた。
村人は、冠木門まで案内すると、黙って、一礼して、踵をまわした。
門を入った時、重四郎とさわは、不意に、庭からほとばしる凄まじい懸声をきいた。
桃の花のあわいに——。
木太刀を構えている者の姿を、見かけて、重四郎は、自分の予感が当ったのを、さとった。
やはり、ただの村里ではなく、主家を喪った残党が、永住の地を、ここにえらんだのだ。
その主家は、おそらく、徳川家に弓を引いて、とりつぶされ、禍いは、家臣らに及んだものであろう。
公儀の詮議の目をのがれるために、世間と隔絶した山峡の底をえらんだ、と推測できる。
「何者だ？」
木太刀の素振りをしていた者が、誰何した。若々しい声音であった。
「旅の者、とお思い頂こう。歓喜寺の住持のすすめによって、立ち寄らせて頂いた」
重四郎がこたえると、家の者は、桃の花をくぐって、近づいて来た。

まだ二十歳あまりの、骨格逞しく、双眸に鋭い光を持った若者であった。
じっと、見知らぬ男女を見据えて、
「歓喜寺の住持のすすめとは、まことだな？」
と、念を押した。
他国者に対して、強い疑惑心を抱いているようであった。
「ご迷惑なら、すぐに、立ち去り申す……。歓喜寺で用意してもろうた弁当をつかわせて頂きたい、と思って、寄せて頂いたまでのこと。他意は毛頭ない者どもです」
「貴公――」
若者は、重四郎に向って、一歩近づくと、
「できる御仁だな？」
と、云った。
突如――。
「ええいっ！」
凄まじい懸声とともに、木太刀が、重四郎めがけて、宙を截って来た。
重四郎は、斜め横に跳んだ。
「やあっ！」
若者が、初太刀を宙でピタリと停めざま、かわした重四郎に対して、この太刀を、横薙ぎに、送りつけて来たのは、さすがであった。

ただ、この攻撃を受けながら、重四郎の方には、抜き合しもせずに、素手であしらう充分の余裕があった。
その横薙ぎの一閃の迅業を、どうかわしたか、次の瞬間には、重四郎は、無言の気合を発して、若者の五体を、もんどりうたせていた。
若者は、しかし、屈せず、地べたから、はねあがった。
「おのれ、曲者っ！」
呶号するや、庭をつッ走って、縁側へとびあがるや、たちまち、座敷から、大身の槍をひっつかんで、奔り出て来た。
重四郎は、眉宇をひそめて、舌打ちした。
対手が、必死の勝負を挑んで来れば、やむなく剣を抜かねばならなかった。
これは、面倒なことになる。
「止さぬか！　試合をもとめて、参った者ではない！」
「云うなっ！　おのれは、当家をさぐりに来た公儀隠密であろう！」
「お主の父御はおいでではないのか？」
「当主は、それがしだ！」
「隣家に、年配の衆がいるならば、呼んでもらおう」
「たぶらかそうとしても、乗りはせぬぞ！」
短気で、一途に思いきめたら、猪突しか知らぬ性情の持主のようであった。

しかも、しまつにおえぬのは、腕にかなりの自負を持っていることであった。
この村里に、生れて育った身としては、今日まで、強敵と立合ったことはなかったであろう。
いまはじめて、地べたへころがされて、かっと逆上してしまったのだ。
大身の槍を構えて、じりじりと肉薄して来るさまは、手負い猪に似ていた。
重四郎は、なお、両手を空けたまま、眉宇をひそめて、佇立していた。
さわは、遠くはなれて、黙って、見まもっている。
穂先が、二尺の近さに、迫った。
「抜けっ！」
若者は、叫んだ。
「こちらは、止せ、と申しているのだ」
それに対する返答は、猛然たる突きであった。
紙一重で、耳もとを掠めさせた重四郎は、はじめて、憤りの声を発した。
「止さぬと、不具になるぞ！」
「なにおっ！」
若者は、遮二無二、突きまくって来た。
重四郎は、危ういところでかわしつづけながら、あとへあとへ、退った。
そして、ついに、玄関からさし出た土廂の柱へ、背をつけてしまった。

もはや、重四郎には、抜きつけに、白刃を放つよりほかに、身の守りようはなくなった。
その時であった。
冠木門を、走り入って来た人影が、
「左門！　客人に対して、無礼のふるまい、許しませぬ！」
と、叱咤した。
「母上！　こやつは、公儀隠密に相違ありませんぞ！」
左門と呼ばれた若者は、吼えるように叫んだ。
「かるがるしゅう、人を疑うものではありませぬ」
気品のある老婦人であった。
息子をたしなめておいて、
「どなた様でございましょう？」
「ただの旅の者です」
歓喜寺の老僧にすすめられて、訪れた、と云われると、老婦人は、微笑して、
「どうぞ、お入り下さいませ」
と、いざなった。
「母上！　そやつが、公儀隠密なら、むざむざ、敵をもてなすことに相成りますぞ」
左門が、どなりたてた。
「左門――、たとえ、この御仁が、公儀隠密がたであったとしても、わたくしどもにとって、

べつに、敵対せねばならぬ理由は、ありますまい」

「母上！　われら一族が、徳川家によって、どのような屈辱を与えられ、いかなる虐待を加えられたか――そのことを、もう、お忘れになったのか！」

「忘れはしませぬ。けれど、そのようなことを、他国の御仁に、おきかせするものではありますまい」

武人の妻として、能くできた女性のようであった。

質素だが、いかにも、前身をしのばせる容子であった。

重四郎とさわを、座敷へ招じておいて、老婦人は、しばらく、姿をみせなかった。

やがて、茶道具を持って、現われると、二人に、弁当をつかうようにすすめた。

重四郎は、襖にも、天井にも、いちめんに、無数に描かれている鶴を眺めながら、

「むかし、長曽我部元親は、鶴を好んで、城内に、百羽も飼うと同時に、襖にも、調度品にも、千羽鶴を描かせた、ときいたことがありますが、ご当家は、長曽我部家に、ゆかりがござろうか？」

と、たずねた。

老婦人は、微笑しながら、

「ご推測は、そちらさまのご随意でございます。さきの代のことは、申し上げてもはじまりませぬ。片田舎の名も知れぬ郷士の家で、ひと休みした、とのみ、ご記憶下さいますように――」

と、こたえた。

重四郎は、内心、

――やはりそうであったか。

と、合点した。

――この家は、長曽我部家の裔に相違ない！

もし、この千羽鶴の家が、南海に雄名をとどろかせた土佐の国主長曽我部宮内少輔元親の末裔であるとすれば、これは、まぎれもない名門といわねばならなかった。

長曽我部元親は、ただ武勇が秀でたばかりの一驍将ではなかった。

文学を修め、礼楽を講じ、風流多才の士でもあったのである。

千羽鶴を好んだのも、その風流のあらわれであったろう。

元親は、月に六回、家臣を集めて、書を読み、武を講じ、学風を大いに興した。また、国内の名所を録し、古歌を編集して、『袖鏡』と名づけて、近衛竜山公に献じたこともあった。

近衛公は、大いに賞揚して、

「長曽我部は、木曽義仲のごとき田舎武士にあらず、風流にして、才藻に富める一佳客と申すべし」

と、人に語った、という。

四国全土をきり取った武将、ときけば、どれほどの猛者か、と想像するが、平常は柔和で、声音はやさしく、相対する人は、春風のそよぎをおぼえた。

元親は、豊臣秀吉の大軍に攻められて、抗すべからざるを知って、土佐一国にしりぞいたが、晩年、親しい人に、

「勢いというものに、いたずらに反抗するのは、武辺の意地と申すものではなく、思慮の浅いことを示して居る。人は、ひとたび、生を享けたからには、いのちを大切にせねばならぬ」

と、語った、という。

長曽我部家を継いだのは、その四男盛親であった。

父の血を享けて、盛親もまた、風流を好み、おのが器量を知る武将であった。

幼名を千熊丸といい、父元親が秀吉に帰服するや、質子として大坂に入り、秀吉の左右に奉事した。

慶長四年五月、元親が逝くや、そのあとを承けて、父の官名を襲い、二十二万二千石の太守となった。

やがて、徳川家康と石田三成とが、天下を分ける戦いを起すや、盛親は、心を豊臣家に寄せていたので、大坂へ上った。

盛親の働きはめざましかった。

伏見の攻城に参加し、これを陥れるや、転じて、伊勢に入り、阿濃津城を攻めて、これを抜き、すすんで美濃にむかい、南宮山下に陣した。

関ガ原に、味方が総敗北するや、盛親は、兵を収めて、本国土佐へ、還った。

いったんは、井伊直政のとりなしによって、領土安泰とみえたが、盛親が京都に上るや家康は、たちまち、口実を設けて、その封土を奪いあげた。

盛親は、頭髪をおとして法体となり、名を幽夢とあらためて、上京柳ノ辻にかくれて、浪人の境遇にあまんじた。

ところが——。

土佐にあっては、盛親の家臣らは、

「君をはずかしめられて、むざと城を徳川家に引渡すことはならぬ。報恩の者は、一領の具足をかついで集まれ」

と、八方へ、檄をとばした。

たちまち——。

土佐浦戸城へ、かけ集まった者は、一万余。

一領具足組と称し、竹内総左衛門を首領におしたてて、徳川家より接収にきた軍勢を、寄せつけず、

「本領安堵を許さぬ、との御議ならば、せめて半国だけでも拝領して、主人盛親を迎えたし」

と主張して、断乎としてゆずらなかった。

城を嬰守すること五十余日、ついに、力つきて、首領ら主だった士が割腹したために、城は明け渡された。

いかに、元親・盛親が、家臣を愛したか、このことで知れる。

盛親は、十五年を経て、豊臣秀頼の招きに応じて、大坂城に入り、大坂冬の陣、夏の陣に、獅子奮迅の働きをみせて、散った。

あれから、二十年の歳月が流れ過ぎている。

もし、この夕映えの里の住人が、長曽我部一族とすれば、元親・盛親の不屈の士魂を受け継いで、節操を守りつづけている、ということになる。

重四郎は、老婦人が、あえて過去を語らぬ以上、こちらも、ただの行きずりの旅人として、立去ることにした。

「ご造作になりました」

重四郎は、礼をのべ、さわをうながして、立った。

「先程のせがれの振舞い、お忘れ下さいますように――」

老婦人は、たのんだ。

「見も知らぬ他国者を警戒なさるのは、当然の仕儀と存ずる」

重四郎とさわは、母屋を出た。

冠木門へ向って、歩きかけて、さわが、

「まあ、きれい！」

と、視線を右手の土塀ぎわへ、とめた。

入る時には、気がつかなかったことであったが、そこに、木蘭が、白い厚い花弁をひらいていた。

春の陽をあびるにふさわしい温雅と隠逸をひそめた、大きくゆったりとしたその純白の花は、いかにも、このかくれ里の支配者の家に、ふさわしいものに、眺められた。

門をくぐって出た時、重四郎が、ひくく、

「日月逝く、歳、我と与ならず、か」

と、つぶやいた。

その横顔を、そっと視るさわのまなざしに、ひとつの哀しみの色が、うかべられた。

二人は、しばらく、黙って、歩いた。

やがて、かなりの勾配の坂道にさしかかって、重四郎とさわは、期せずして、頭をまわして、夕映えの里を眺めた。

明るくしずかである。

人影はない。

――このようなくらしが、まことの幸せというものかも知れぬ。

重四郎は、想った。

さわも、同じ想いであったろう。

ふたたび、歩き出した時、重四郎が、云った。

「おのれ自身の一生を、どう生きるか……、考え及ばぬうちに、老いることか」

「……」

さわは、俯向いて、自分の足もとを見つめているばかりであった。

合縁奇縁

「来たっ！」

天堂寺辰馬は、目をひきむいて、小さく口走った。

馬は、途中で、すてていた。

いざという場合、どこへでも、身をかくせるように、徒歩になっていたが、それだけに、絶えず、追いつかれる心配をしていなければならなかったのである。

はやく、織田重四郎が追いついてくれればいい、と祈っていたが、どうやら、これはあきらめた方がよさそうであった。

——あいつ、斬り死したかも知れぬ。

その想像が、しだいに、実感をともなって来ていた。

辰馬は、自分が、見かけ倒しに、相当臆病者であることを、みとめざるを得なかった。

死ぬのは、おそろしかった。たったひとつしかない生命であった。そう、やすやすと、すてては、たまらなかった。

それにしても——。

自分とくらべて、織田重四郎という男は、なんという不敵な勇気を持合せていることだろう。その勇気にふさわしい腕前も、そなえていた。

——戦国の時世であったら、一国一城のあるじになれたであろうが……。

辰馬は、もう重四郎が死んだもの、と思いあきらめることにして、街道を、いそいでいたのである。

馬蹄の音が、後方から——丘陵の切り通しのむこうに起るのを、きいて、辰馬は、とび上らんばかりに、戦慄した。

「来たっ！　ついに、追いつきやがった！」

数騎である以上、追手と受けとって、まちがいはない。

辰馬は、血眼をぐるっとまわして、雑木林の蔭に、古ぼけた小さな神社があるのを見かけると、脱兎のごとく、奔った。

格子扉をひきあけて、中へとび込んだ時には、心臓は、破れるほど早く高くなっていた。

首をすくめながら、格子ごしに、街道を疾駆して行く五騎を見送って、

——やっぱり、そうであったわい。

と、ふうっ、と吐息した。

このまま、歩いて行けば、必ず、どこかで発見され、包囲されるに相違ない。

さりとて、備前へひきかえすのも、なんとなく億劫だった。

「ええい、くそっ！　勝手にしろ！」

大声で、独語して、どさりと、あぐらをかいた。
とたんに――。
「うるさいのう――」
片隅の薄闇の中から、声が、かかった。
「な、なんだっ？」
辰馬は、あまりの不意に、全身を粟立てつつ、ふりかえった。
壁ぎわに、寝そべっている者をみとめた。
「なんだ、貴様？」
「きき たいのは、こっちの方だ」
やおら起き上った男は、大きく背のびをやった。
目が馴れると、男が、こっちと同じ浪人者であることが、判った。
髭だらけである。骨格は、たくましい。
辰馬の方は、三石の旅籠で、髭を剃りおとしてしまっている。
その浪人者の髭は、そのつもりでのばしているとみえて、あごからかなり長く、たれている。
「お主、追われて居るな？」
長髭の浪人者は、云いあてた。
ねむっていたのではないらしい。

「お主の知ったことではない」
「たしかに、知ったことではないが、安息のじゃまをされては、文句を云いたくなる」
「ここは、お主の家ではないぞ。誰が入ろうと勝手ではないか」
「それは、そうだな。しかし、先住権というものはある」
「先住権？」
「十日前から、泊って居るのでな」
長髭は、そう云って、笑った。
「では、一文無しか」
「いや、金は持って居る。百両ばかりな」
「百両?!」
「おかしいか？」
「あたりまえではないか。百両も路銀を所持して居って、なぜ、こんな破れ社に入り込んで居るのだ？」
「いまに、わかる」
「なに？」
「そう、いちいち、肩肱を張るな」
長髭は、大あくびして、
「酒が欲しいな。……お主、買うて来んか？」

と、云った。
「まっぴらだ」
「飲みたくないか。おごるぞ」
「飲みたくない」
「飲んで、すこし、おちついたらどうだ。堂々たる体軀を持ちながら、そうきもが小さくては、自分自身やりきれなかろう」
「なにっ！　貴様、愚弄するか！」
「本当のことを申したまでだ。……みとめるだろう」
「うるさいっ！」
「腹を立てても、いまは、どっこい、出て行けぬ。ははは……先住者に敬意をはらってもらおうか」
おそろしく、口が達者である。
こうなると、辰馬は、妥協するのも、はやかった。
「それがしは、天堂寺辰馬。よろしく――」
あっさりと、頭を下げてみせた。
「千本強兵衛だ。主取りしたことなし。親兄弟縁者なし。腕は一刀流、相当強い」
「ここで、十日間も、いったい、何をしているのだ？」
「人を待って居る」

「人を？」
「うむ。三年前に、約束をした、ここで落ち合おうとな」
「やはり、浪人者か？」
「いや、女子だ。それも、若くて、美しい――」
四半刻も経つと、千本強兵衛は、
「いかん。やはり、酒がないと、おちつかん。……買うて来るか」
と、云って立ち上った。
辰馬は、黙って、見ていた。
千本強兵衛は、出て行きがけに、
「お主、わしが、もどるまでに、念仏をとなえていたらどうだ？」
と、云った。
「なんのために――？」
「おちつくためだ。わしは、人を斬る時、必ず、口のうちで、南無阿弥陀仏をとなえることにして居る。これは、いい。南無妙法蓮華経でもいいが、これは、チト威勢がよすぎるな」
そう云いのこして、出て行った。
「なんだ、あいつ！」
辰馬は、すっかりけむりにまかれたかたちであった。
ごろりと横になると、腹が、ぐうっと鳴った。酒よりも、飯が欲しかった。

――しかたがない、ひとねむりしてやるか。
目蓋を閉じたが、とても、ねむれそうもなかった。
重四郎の顔や、さわという女の容姿が、浮んだり、消えたりした。
その時、足音が、近づいた。
「小父様――」
若い女の声に、辰馬は、はね起きた。
「小父様、おいでか？」
「千本強兵衛殿のことか？」
格子ごしに、すかし視ながら、辰馬は、問うた。
市女笠のかげからのぞいているあごが、白い。
「そうです」
「いま、酒を買いに行った。上って、待たれるがいい」
「はい」
娘は、辰馬が格子扉を開けてやると、上って来て、笠をあげた。
目鼻立ちが、はっきりしていて、大きな黒瞳が澄んでいた。
――なるほど、美女だ。
辰馬は、千本強兵衛の言葉が嘘ではなかったのを知った。
「貴方は、どなたですか？」

娘は、たずねた。
「ちょっと事情があって、この社殿に、身をかくした者。べつに、怪しい者ではない」
娘は、入って来ると、市女笠をぬいだ。
「遠くから、来られたのか？」
「はい、肥後から――」
「一人でか？」
「連れは、途中で、相果てました」
「……？」
娘は、辰馬へ視線を向けると、
「どこかで、お目にかかりましたか？」
と、たずねた。
「いや、記憶にないな。それがしは、肥後には参って居らぬ」
「人ちがいかしら……？」
娘は、ちょっと首をかしげた。
一人旅をする勇気を持っているだけあって、おちついている。
――いったい、どういう素姓のむすめか？
辰馬は、興味を持った。
娘は、

「すこし、つかれましたゆえ、横になります」
そうことわって、むこう向きに寝そべった。
見知らぬ、いかめしい浪人者の目に寝姿をさらすことをすこしも意に介さない態度は、不敵というよりほかはない。
辰馬は、無視されたようで、すこし不愉快になった。
千本強兵衛が、酒の小樽をぶらさげて、もどって来た。
「ほう――、春奈、来たか」
その寝姿へ、微笑を投げてから、辰馬に、
「美しかろう」
と、云った。
「まさしく――」
辰馬は、うなずいた。
「美しい上に、ただの娘ではない」
「ただの娘でないとは？」
「武芸が、できる。お主程度の男が、三人や四人、襲いかかっても、苦もなく、片づけてしまうの」
「まさか！」
「まさか、と疑うなら、やってみるか。……春奈、起きぬか」

強兵衛に、声をかけられたが、娘は、
「もうしばらく、寝かせて欲しい」
とこたえて、起きようとしなかった。
強兵衛は、酒を、辰馬にもくれて、飲みはじめた。
「天堂寺辰馬氏は、何を目的に、生きて居るかな？」
「べつに――」
「目的もなしの、その日ぐらしか」
「志など立てても、こうも浪人者が、うようよしている世の中では、どうもならん」
「若いくせに、あきらめが、はやすぎるのう」
「そういうお主には、何か大志でもある、と云われるのか？」
「ある！」
千本強兵衛は、はっきりと、うなずいてみせた。
「うかがおうではないか」
「天下を取る――これじゃな」
強兵衛は、こともなげな口調で、こたえてみせた。
「天下を取る！　冗談ではない。本気で考えているならば、狂人だ。それとも、おれを、からかって居るのか」
「本気だ。……天下を取るという志は、狂気の沙汰、と思うお主は、性根がケチすぎる」

「たった百両の軍資金を持って、天下を取る夢想をして居るのか。天下泰平だわい」
辰馬は、ばかばかしさに、首を振った。
「ははは……、天下を取る、にも、いろいろあるぞ。徳川幕府を倒さねば、天下を取れん、と考えるのは、常人の考えだの。ほかにまだ、手段はあるぞ」
その時、春奈という娘が、ぱっと起き上った。
「小父様。あまり、かるがるしゅう、他人に、多弁をきかせるのは、止された方がよいと存じます」
「ははは……、そうであったの。機事、密ならざれば、害をなす、だ。石のもの云うならいあり、か」
「それがしを、警戒されるには及ばぬ。他人のことには、一向に興味はござらん」
辰馬は、云った。
云いながら、内心では、
——いったい、どういう大きな企てをやっているのか？
と、興味をそそられていた。
「われわれは、一刻後には、ここを発つ。天堂寺辰馬氏は、どうする？」
強兵衛が、たずねた。
「どちらの方角へ行かれるのか？」
「まず——京へ」

「実は、それがしも、京へ参る予定でござる」
「それならば、同行つかまつろう、と申したいが、春奈が許してくれまいな」
「い、いや——、それがしは、一人で、参るゆえ、すておかれい」
そうこたえながら、なろうことなら、この二人に、ついて行きたい、と思った。
春奈は、そ知らぬ顔をしている。
こちらから、たのむわけには、いかない。
——えい、くそ！　あまりだらしない態度も見せられんわい。
辰馬は、自分に腹を立てた。
街道へ出て待っていれば、織田重四郎が追いついてくれるような気もした。
「では、それがしは、一足おさきに、参る」
辰馬は、一礼して、起とうとした。
とたんに——。
ぎくっとなって、耳をすました。
馬蹄の音が、こちらへ向って、近づいて来る！
「い、いかん！」
辰馬は、狼狽した。
「追手が、来る！」
強兵衛と春奈の視線をさけつつ、辰馬は、どうすればいいか、わからぬままに、顔を歪め

た。

強兵衛が、つと立って、格子扉へ寄り、前方を眺めて、

「ふむ――、来るの」

と、云った。

「まきぞえにしては、相すまぬが、や、やむを得申さん。味方して下されい」

辰馬は、たのんだ。

「あれらは、いったい、何者かな？」

「それが、一向に見当も、つき申さん。……忍びの術を心得て居るところをみれば、隠密か、とも……」

「隠密！」

春奈の表情が、さっとひきしまった。

「小父様。いかがなさる？」

「ふむ――」

強兵衛は、近づいて来る三騎を、じっと見やっていたが、

「やむを得ぬ！」

「隣家で起った火事でも、自家は火の粉を払わずばなるまい」

強兵衛に、そう云われて、辰馬は、歓喜した。

――有難い！

「味方して下さるか」

「窮鳥ふところに入れば、猟師もこれを殺さず――か。まあ、しかたがない。春奈、よいな？」

「はい」

春奈は、うなずいた。

馬を進めて来たのは、いずれも、おもてを包んだ武士であった。

鳥居わきで、馬をすてると、ゆっくりと、境内に入って来た。

いずれも、おし黙って、社殿へ歩み寄ると、階（きざはし）の下で、ならんだ。

と――。

中央の者が、階をのぼって、格子扉へ顔を近づけた。

「……む？」

ひくく声をもらして、扉を、ぱっとひき開けた。

薄暗い板敷に、男女が一組、もつれ合っていて、扉を開く音に、ぱっとはなれた。

「なんだっ！」

いかがわしい行為を見とがめられて、居直る、という態度を、千本強兵衛は、巧みにつくった。

「無断で、扉を開くとは、無礼であろうがっ！」

「神聖な社殿をけがしておいて、その態度は、何事ぞ！」

「うるさいっ！　祭りを放棄されたこのぼろ社から、神など、とっくに、立去ってしまって居るわい」

強兵衛は、呶鳴りたてた。

ふつうの武士なら、苦笑して、ひきさがったにちがいない。

公儀隠密であった。

「神がおわすか、おわさぬか、一応、奥を調べる」

そう云って、踏み込んで来た。

御神体を安置した奥殿には、辰馬がかくれている。調べさせるわけには、いかなかった。

春奈のからだが、躍り立った。

対手は、強兵衛に対しては、油断がなかったが、若い女に対しては、神経を配っていなかった。

その不覚が、杖に仕込んだ白刃でぞんぶんに、脾腹を、刺しつらぬかれる不運をまねいた。

しかし、さすがは、公儀隠密であった。

重傷に屈せず、脱兎のごとく、走り出て、朋輩に、

「こ、ここだっ！」

と、絶叫した。

その時はもう、強兵衛が、疾風を起して、外の二人めがけて、襲いかかっていた。

ただの決闘ではなかった。

二人のうち一人が、ぱっと身をひるがえして、鳥居まで奔り、馬へとび乗っていた。

強兵衛は、残った一人と、猛然と斬りむすんだ。

ようやく、敵に血煙りあげさせた強兵衛は、

「春奈、いそがねばならんぞ！」

と、叫んだ。

「はい！」

「裏手から、山へ、間道が通じて居るはずだ。どうせ、対手は、間道を逃げたとみて、追って来るであろうがな」

強兵衛と春奈は、社殿わきを、走り抜けて、かなりの密林の中を、いそぎはじめた。

二人とも、奥殿にひそんだ辰馬に、かまってはいられなかった。

社殿内で、いかがわしい行為に耽っている、とみせかければ、辰馬を追って来た者たちは、ひきさがってくれるだろう、と思っていたが、とんだ誤算であった。

「隠密であったな。しかも、あの太刀使いは、柳生流だったようだ。公儀の面々に相違なかろう」

強兵衛は、看破していた。

織田重四郎も、三石宿の往還上でのたたかいに、敵が柳生流虎乱を用いるのをみて、かれらが公儀隠密と、さとっている。

「公儀隠密が、なぜまた、あのような底の浅い浪人者を、追いまわしているのでしょう？」

「当人は、追われるおぼえがない、と申していたが、人ちがいをされているのかも知れぬ。いずれにしても、とんだ火の粉が、頭上にかかって来たものだ」

密林を抜け出ると、かなりの急坂になった。

山は、段々に重なりあって居り、これに入れば、身をかくすところは、いくらでもあるように思われる。

一気に中腹までのぼった折、麓から、

「おーい！　待ってくれえっ！」

と、辰馬の必死の叫び声が、追いかけて来た。

春奈が舌打ちした。

「小父様。討ちすてて参りましょう。生かしておいては、面倒です」

冷やかに、云った。

「いや――袖すり合ったのも他生の縁と申すわい。すてておけ」

「だけど、追手がたには、わたしたちも同類とみなされます。迷惑ではありませぬか」

「そなたが、足弱なただの娘ならば、わしも、やむを得ず、あの男を討ちすてて、縁を断ったであろうがな。……どうなるか、追わせてみようではないか」

強兵衛は、どうやら、かなりの運命論者のようであった。

二人は、辰馬に勝手に追いかけさせておいて、さっさと登って行った。

辰馬の方は、無我夢中であった。

すてて行かれると、生命はない、という恐怖が、まるで忍者のように、足を速めさせた。

前の二人が、頂上を越えようとした時には、距離を半分にも、縮めていた。

「ま、待ってくれ！　それがしも、つれて行ってくれ！」

辰馬は、叫びつづけた。

ひとつの山を越え、次の山へ登りかかった時、辰馬は、とうとう、強兵衛と春奈に追いついた。

「た、たのむ！」

辰馬は、ふりかえった強兵衛に、合掌してみせた。

強兵衛は、苦笑した。

「お主も、よほど、臆病者とみえる」

「生命を二つも持って居るならば、このように、必死にはなり申さん」

辰馬が、こたえると、春奈が、さげすみをこめて、

「くだらぬ生命を――」

と、吐きすてた。

辰馬は、なんとののしられようと、ひとつしかない生命を、むだにすてるわけにはいかなかった。

「ともかく、供をさせて頂く」

「のぞみはせぬが、やむを得まい」

強兵衛は、辰馬が、ついて来るにまかせた。
その山の頂上を、すぐそこにのぞんだ地点で、春奈が、
「小父様！」
と、鋭く呼んだ。
眼下の、ちょうど密林がきれて、水の涸れた小さな渓谷がのぞいている地点に、十数個の黒い人影を、みとめた。
追手に相違ない。
「かくれなければなりませぬ、小父様」
春奈は、そう云いながら、きらりと、辰馬の方へ、冷たい視線を走らせた。
「さて——どこへ、かくれるか？」
強兵衛は、見わたしたが、山肌の透けるまばらな松のひろがりがあるばかりであった。
「小父様。頂上へのぼり立つと、追手の目にさらされます」
「さりとて、この山腹には、ひそむべき場所は、見当らぬぞ」
「頂上を避けて、山腹をまわって行こうではござらぬか」
辰馬が、云った。
三人は、樹蔭をえらびつつ、斜面を横へ急ぎ出した。
やがて、行き当ったのは、岩石の露出した断崖ぶちであった。
「いかん！　やはり、頂上へ登るよりほかに、すべはあるまい」

強兵衛が、そう云った時であった。
辰馬が、わっと叫びをあげて、ころがった。
強兵衛は、春奈の右手に、杖に仕込んだ白刃が、抜き持たれているのを、見た。
「春奈！　なんとする！」
強兵衛は、春奈の強気に、唖然となった。
辰馬は、ごろごろと、ころがってから、はね起きざま、抜きあわせて、春奈の第二撃を、かろうじて、受けとめた。
「そ、それで……、そなたは、女かっ！」
辰馬は、春奈をにらみあげて、叫んだ。
春奈の顔は、能面のようにうごかなかった。
「春奈、止さぬか！」
強兵衛が、叱りつけて、近づこうとすると、春奈は、ぱっと跳び退った。
そして、第三撃を、辰馬へ、あびせた。
辰馬には、その第三撃を、受けとめたり、かわしざまに反撃するわざはなかった。
おのれ自身でも、わけのわからぬ絶叫をほとばしらせて、はねのがれるのが、かろうじてであった。
その背後に、辰馬を受けとめてくれる土も木も岩もなかった。
ひろびろとした空間が、待っていたばかりである。

辰馬のからだは、悲鳴をそこにのこしておいて、はるかな谷底へ、落下して行った。

強兵衛は、岩の上に立ってのぞきおろす春奈を視やって、

「気丈夫なむすめよのう――」

と、呟いた。

春奈は、強兵衛のそばへ、もどって来ると、

「小父様は、寛大にすぎます」

と、云った。

「ここまで来れば、追手をふりきれるではないか」

「わたくしは、あのような臆病者は大きらいです」

「憎めない男ではないか。正直なところがよい」

二人は、いそいで、その山を越えて行きながら、いささか、気まずい気分になっていた。

「小父様は、これまで、たびたび、信頼した者どもから、裏切られておいでではありませんか」

「裏切るより、裏切られた方が、気楽であろうな」

「裏切られたため、生命をおとす危機を迎えたこともおありです」

「しかし、こうして、生きて居るぞ。……わしのことは、措くとして、そなたは、そのようにあまりに気丈夫だと、生涯好きな男にめぐり会えぬかも知れぬぞ」

「よろしいのです。わたくしは、一生独身で通します」

「それは、いかん。女子は、男に惚れ、これに仕えるのが、幸せだて――」

「そのようなことより、小父様の企ては、進んでいるのですか？　まだ、五里霧中なのではありませぬか？」

「うむ――、大層な計画を樹てたことは、樹てたがな、むつかしいわい」

「わたくしは、三十余人の腕におぼえのある浪人衆を、集めました」

「そなたの美しさが、三十余人も集めることができたか」

「わたくしの熱意にうごかされた御仁たちです。それぞれ、ひとかどの人物ぞろいです。来月早々には、京へ上って参ります」

「来月早々にか。これは、気ぜわしいことだ」

「小父様の方が、ぐずぐずなされていたのです。もうのっぴきならぬことになって居ります。小父様の肚のうちが、いまだにぐらぐらしているようでは、困ります」

「ぐらぐらはして居らぬが……、のんびりと貧乏ぐらしをして居るのも、わるくないような気もしている。正直なところだ」

「いけませぬ！　小父様は、天下を取る、とわたくしに、お誓いになったのです」

泥沼の底から、必死にもがいて、なんとかして、水面上へ浮びあがろうとする悪夢から、意識をとりもどしたとたん、辰馬は、肩と腰の激痛に、

「うっ！」

と、うめいた。

「気がつかれたようだな」

声をかけて来た者が、そばにいたので、辰馬は、そっちへ、視線を向けた。

どこかで、出会ったおぼえのある顔が、そこにあった。

どこで出会ったか、思い出す努力よりも、辰馬は、生命のたすかった歓喜で、ぐるぐると屋内を見わたした。

草庵であった。

おのれは、囲炉裏ばたへ、寝かされている。

「ご浪人――。わしの顔を、もうお忘れか？」

そう問われて、辰馬は、あらためて、その顔を仰ぎ、はっとなった。

「おっ！　お主は――」

「ははは……、思い出して頂いたか」

笑った顔は、波乗り佐兵衛のものにまぎれもなかった。

「お主が、おれを救うてくれたのか？」

辰馬は、信じられない気持であった。

「松の枝へ、ぼろのように、ひっかかっておいでござった。どうして、崖から落ちられましたな？」

「うむ。いろいろと、あってな。……それより、お主は、どうして、ここにいるのだ？」

「盗賊という者は、諸国の山中に、かくれ家を用意して居りますからな。……織田様とは、お別れになりましたか？」

佐兵衛は、どうやら、そのことを訊ねたいばかりに、救ってくれたのかも知れぬ。

脅して金子をまきあげようとした辰馬を、救ってやる義理は、佐兵衛にはないのだ。

「三石宿で、得体の知れぬ忍びの者どもに、襲われたのだ」

辰馬は、語った。

黙ってききおわった佐兵衛は、

「ぶじに、お逃げになったかな」

と、じっと、炉火を見つめた。

辰馬は、起き上った。肩と腰に、相当な打撲傷を負うていて、骨が疼く。

顔をしかめつつ、

「お主は、ただの盗賊ではあるまい」

と、云った。

「さわという女子を使いにやったので、疑うておいでですかな。手前は、ただの盗賊ですよ」

「しかし、あの女は、途方もない仇討の助太刀を、織田にたのんだぞ。お主も、その仇討のことに、加わって居るのであろう？」

「勿論、姫路においでの楠木の若が、神屋主膳の館へ斬り込まれる企ては、存じて居ります

よ。しかし、存じて居るだけのことです」
「そうではあるまい。五百両で、織田重四郎を助太刀させる才覚は、お主のあたまから出たものであろう」
「……」
佐兵衛は、返辞をせずに、炉火を見つめつづけていたが、やがて、
「ここで、ゆっくり二三日、休養なさることだ。わしは、出て行かねばならぬ」
と、云った。

白河姉弟

まぶしいくらい明るい陽ざしが、さし入っている縁側に、古びた内裏雛が、置かれていた。
節句がおわって、もう数日が過ぎていた。
この古びた内裏雛は、また、一年、暗いところへ、しまわれることになる。
床の間の雛段を、襷がけで、とりかたづけている静香が、亡き母から、これをゆずられて、もう七年経っている。
母は、若い頃、京都の御所づとめをしていて、その時、高貴のお方から、下賜された、という。

由緒ある古雛であった。
静香は、これをとり出して、かざる時、幸せであった少女時代を想いうかべる。
父は、豪放な人柄であったが、決して、家の者を呶鳴りたてることをせず、絶えず、高い笑い声をたてている人であった。静香は、父の笑い声が、好きであった。
静香を膝へのせて、父は、一言云っては、わっはっは、と笑い、二言口にしては、また笑っていた。
父の笑い声が、屋敷の内に絶えぬかぎり、幸せが満ちているようであった。
母は、父と反対に、ものしずかで、何事にもひかえ目な、優しい女性であった。
静香は、幼な心にも、父が母を、妻にえらんだのが、よく判るような気がしたものだった。
七年前の秋、あのおそろしい出来事さえなければ、伏見の屋敷に、幸せはつづいていたはずなのだ。
静香の心は、しぜんに、その日の記憶をよみがえらせて、重く沈む。
――どうして、あのような、おそろしい出来事が、起ったのであろう？
静香にとって、それは、解くことのできない謎であった。
「……お嬢様」
庭から呼ばれて、静香は、われにかえった。
「え――？」
静香が、視線を向けると、老僕の嘉七が、ぐったりと死んだようになっている弟の数馬を、

せおうていた。

「どうしました？」

静香は、眉宇をひそめた。

嘉七は、黙って、上って来ると、静香に手つだわせて、数馬を、牀へ横たえた。

顔にも手足にも、打傷やかすり傷がついていた。

「また、喧嘩をしたのですね」

静香は、ため息をついた。

「お父上様に、ご気性がよう似ておいでございます。いやなものはいやだ、と仰言って、決して妥協などはなさいませぬ」

嘉七は、誰と喧嘩をしたかは、語らずに、そう云った。

数馬は、この姫路の城下はずれの里で、まわりの少年たちを、ぜんぶ敵にしている、といってもよかった。

それは、数馬のせいではなく、この家が、憎まれているためであった。

この家と、はばかりなく交際してくれる家は、一軒もなかったのである。

静香は、弟の傷だらけの寝顔を、さみしく、見まもって、

——この不幸が、いつまで、つづくのであろう。

と、思った。

「……う、う……、むっ！」

数馬が、うめいて、烈しく、身もだえた。

そして、

「ちくしょうっ！」

と、叫んで、はね起きようとした。

嘉七が、あわてて、おさえつけた。

また、ぐったりとなった数馬は、そのうち、くちびるをふるわせて、なにか、つぶやいた。

いかにも、くやしそうな色が、寝顔に、うかんでいる。

「よほど、くやしいお思いをなされた、とみえる」

嘉七が、つぶやいた。

静香は、だまって、弟を見まもっているばかりであった。

「お嬢様——」

嘉七が、呼んだ。

「お話、申し上げたいことがございます」

「なんでしょう？」

「お嬢様は、ご両親様のご無念を、はらしたい、とお考えになったことが、ございますかな？」

嘉七は、問うた。

静香は、老僕へ、まなざしをかえした。

「それは……、いくども、考えました」

父母に悲惨な最期をとげさせた敵は、はっきりと、判っていることであった。

摂津伊丹に、公儀でさえも遠慮しているほどの、陰然たる勢威を誇っている神屋主膳という豪族が、その敵であった。

摂津で、

「平家館」

と、きけば、誰知らぬ者はない。

敵は、疑う余地もなく、その豪族と判明してはいるものの、これを討つには、あまりに、こちらの存在は、微弱すぎるのであった。

二十歳の娘と十二歳の少年と、たった二人の姉弟の力で、どうなるものでもないのだ。

斧を振りかざすカマキリのあわれさを、静香は、あじわっている。

「敵を討たねばなりませぬ！」

不意に、嘉七が、語気をつよめて、云った。

静香は、びっくりして、老僕の真剣な面持を、見なおした。

「それは、……討てるものなら、討ちたいのだけど……」

「お嬢様！」

嘉七の眼光は、別人のように鋭いものになっていた。

「てまえは、お嬢様と若様のお供をして、この家に移って参ります途中、石清水八幡宮へ、お詣りして、景清塚に、必ず、若様に、仇を討たせたてまつります、と祈願いたしたのでございます」

と、云った。

静香は、思い出した。

嘉七が、石清水八幡宮の中にある景清塚の前に、長い時間、ぬかずいて、祈りをこめていたことを——。

主君や親の敵を討とうと志す者は、京の都を通る際には、必ず、石清水八幡宮へ詣でて、景清塚の前に、ぬかずくのを、ならわしとしていた。

平家の猛将悪七兵衛景清は、主君の讐をむくいんとして、このところにかくれ、将軍源頼朝が、当山へ参詣の折をねらった、という故事があり、その報復の一念を、後世の同じ志を持つ者は、受け継ぎたい、と願ったのである。

嘉七もまた、その一人であったのだ。

この老僕は、静香が生れる以前から、屋敷に、いた。

静香が、嘉七をただの下僕ではない、と感じたのは、まだ七八歳の頃であった。

ある日の夕がた——。

嘉七が血まみれの姿になって、奥庭に入るのを、静香は、偶然見かけたのである。

——手当をしてやらねば、死んでしまう！

静香は、幼な心にも、心配して、そっと、あとをついて行った。

すると、奥庭の茶亭に、父がいて、嘉七を迎えたのであった。

静香は、父が、血まみれの嘉七を、介抱してやろうともせず、優しい言葉もかけてやらず、きびしい態度で、なにか、報告をきいているのをみて、いぶかったものだった。

父は、報告をききおわると、一言、

「休息せい」

と、云っただけであった。

その時、嘉七は、

「忍びのお役目をつとめることかなわず、お詫びのいたし様もございませぬ」

と、平伏したのであった。

その後、嘉七は、年に一度か二度、みじかくて十日、長くて一月あまり、屋敷から姿を消すことがあった。

父の命令に相違なかったが、静香が、母にたずねても、返辞は、してもらえなかった。

屋敷内に在る時は、この上もなく忠実で、優しい下僕なのであった。

ある日——わが家の運命を一変させる惨劇が起った時、嘉七は、ちょうど、何処かへ出かけていて、留守であった。

嘉七は、五日後に、帰って来て、幼い姉弟だけが、生き残っているのを知って、驚愕したことであった。

父に生命を捧げた忠僕は、こんどは、幼い姉弟に、忠節をつくすべく、おのれに誓いをたてたのである。

「お嬢様。てまえは、数馬様が、成人なさるのをお待ちして居りました。しかし、もう、お待ちできなくなりました」

嘉七は、云った。

「爺や——。数馬は、まだ十二歳です。子供同士の争いでも、このように、あわれなすがたになるものを、どうして、平家館のあるじに、斬りつけることが、できましょうか」

「もとより……、若様お一人の力では、とうてい、仇を討てる道理が、ございませぬ。……しかし、強い助太刀があれば」

「助太刀？　わたくしたちに、助太刀して下さる御仁が、どこに居りましょう」

「お嬢様！」

老僕の顔に、一瞬、はげしい気色が刷かれた。

「助太刀して下さる御仁は、必ず、見つけることができまするぞ！」

「え？」

静香は、あらためて、嘉七の顔を見なおした。

「申し上げましょう」

嘉七は、云った。

「もうお嬢様には、お気づきのことと存じます。てまえは、甲賀出の忍びの者でございます。若い頃は、織田家にやとわれ、さまざまの働きをつかまつりました。のちに、豊臣家にやと

われ、大坂城が炎上いたすまで、真田幸村様の麾下に在ったのでございます。忍びの者ゆえ、豊臣家が滅びた上からは、また、別の家にやとわれれば、それまでのことでございましたが、公儀では、それを許しては下さらず、大坂城の残党として、てまえを捕えようといたしました。忍びの者として、多少、名が売れて居りましたし、時には徳川大御所のお生命をもうかがう働きもいたしましたので、関東方の忍びの者たちの憎しみを買っていたからでございます。……逃げかくれしているうちに、偶然のことから、お父上様に、救われ、忍びの者としてではなく、下僕として、ご奉公することに相成りました。……もはや、打明けてもかまいますまい。実は、お父上様は、ただの豪族ではなく、幕府が厳しく禁じる異国との交易を、なさって居りました。堺の港には、お父上様の交易船は三艘もあり、大きな倉が七棟もならんで居ったのでございます。しかし、公儀の監視の目が、日に日に、きびしくなるにつれて、異国との交易は、むつかしくなりました。……もとより、てまえは、下僕でございますので、お父上様のご苦労は、百分の一も、わかっていた次第ではございませぬ。お屋敷内では、いつも、豪快な笑い声をたてておいでございましたが、内心は、どのような、苦しい思いを抱いて、おすごしなされていたか、想像にあまりあることでございました」

「……」

静香は、父の仕事が、海外交易であったことを、いま、はじめて、きかされた。

屋敷には、海外交易をしている者が当然集めるであろう珍しい品など、ひとつもなかったのである。

父は、要心して、南蛮の品は、どこか、べつの場所にたくわえていたに相違ない。

嘉七は、つづけた。

「てまえは、下僕のぶんざいでありながら、ついに、決意して、お父上様に、お役に立ちたい、と申し出て、おのがわざが、いささかでもお役に立てば、救って頂いたご恩がかえせる、と思い立ったのでございました。……お父上様は、かなりためらっておいでのご様子でございましたが、てまえの嘆願に、とうとう、お負けになりました。……お嬢様も、おぼえておいでございましょう。てまえが、時おり、お屋敷から、姿を消して居りましたことを」

「はい、おぼえて居ります」

「お父上様のご用をはたして居ったのでございます」

嘉七は、話をつづけた。

「海外交易をしている豪族が、ほかに、もう一家ございました。それが、伊丹の平家館――神屋主膳だったのでございます。神屋主膳は、狡猾にも、徳川幕府にとり入って、おのが持船を、すべて朱印船にしたてて、その抜荷買いを公然の秘密として、堺の港に、支配権を張ろうといたしました。それが、お父上様との烈しい争いの原因でございました。そして、あの日の、むざんなお父上様のご最期、という結果をまねいたのでございます」

「……」

「お嬢様――。てまえは、もはや、ごらんの通りの老いぼれにて、下僕のご奉公さえも、いたしかねて居りまする。けれども、その気になれば、むかしの忍び仲間を呼んで、その力を

かりることは、できない相談ではありませぬ。てまえが、大坂城にあった頃、目をかけてやった伊賀出の小者に、佐兵衛と申す男が居ります。この姫路に移って参ってから程なく、その佐兵衛にめぐり会い、てまえは、のこらず、打明けて、その力をかりたい、とたのんだのでございます。佐兵衛は、大坂城から逃れ出て以来、盗賊となって、諸国をうろついて居りましたので、てまえは、その盗み集めた金で、この楠木家を再興できぬものかと考えたのでございます。こう申し上げれば、お嬢様は、そのような不浄の金は欲しくない、と仰せかもわかりませぬ。しかし、佐兵衛は、決して、善良な人々が、汗してたくわえた金は、盗んで居りませぬ。豊臣家にひとかたならぬ恩顧を蒙った大名や豪族や大町人が、てのひらをかえして、徳川家へなびいて、おのが身を安泰にしたばかりか、むかしにまさる富有になった——そうした家をねらって、盗んで居るのでございます」

「……」

静香は、だまって、息を詰めて、きいている。

「佐兵衛は、てまえのたのみを承知してくれ、三年待って欲しい、と申しました。……その三年が、過ぎて居ります。佐兵衛は、必ず、現われる、とてまえは、かたく信じて居ります。佐兵衛が持参してくれる金があれば、敵討の助太刀をしてくれる強者を、十人が二十人でも、やとうことはできまする」

嘉七が、そう云った時、それまで死んだように、意識をうしなっていた数馬が、不意に、

「ちきしょうっ！」

と、叫んで、はね起きた。

はね起きてから、意識をとりもどし、大きく、双眸をひらいた。

「数馬——、おやすみなさい」

静香が、寝かせようとすると、

「行くんだ！　あいつらに、負けてたまるか！」

と、全身の痛みをこらえて、立ち上ろうとした。

「いけませぬ！　無益な争いを、いくらくりかえしたとて、そなたが、強くなることにはなりませぬ」

静香は、叱った。

「姉上！　わしは、さむらいの子だぞ！　はずかしめを受けて、負けてはいられないんだ！」

「数馬！」

静香は、態度をあらためると、

「そなたは、父の敵を討たねばならぬ身なのです。そのことを、忘れてはなりませぬ！」

と、云いきかせた。

数馬は、ふるえるくちびるを噛んだ。

この姫路城下はずれで、姉弟が孤立しているのは、理由があった。

ここは、姉弟の母かたの故郷であった。

母の父——姉弟の祖父は、播州にかくれもない豪族であったが、豊臣秀吉が、中国征討の

軍を進めて来た時、これに味方して、秀吉の電光石火の働きに便宜をはかったのである。

当時、播州は、赤松氏の所領であった。守護職の赤松氏と、その執事の浦上氏とのあいだに確執が起り、その結果、播州にちらばる赤松氏の庶流別所・小寺など三十六家が、それぞれ割拠していた。

その三十六家中、策士は、姫路城主小寺識隆（もとたか）の子官兵衛孝高であった。のちの黒田官兵衛である。

官兵衛は、機を視（み）るに敏であった。

秀吉が攻め下って来るや、ただちに、策謀をめぐらして、これに姫路城を与えて本営とせしめたのであった。

その際――。

播州一円に割拠する別所・小寺三十六家から、ウムを云わせず人質を取る役目を、官兵衛から依頼されたのが、姉弟の祖父――鹿野重左衛門だったのである。

鹿野重左衛門は、別所・小寺三十六家を、朝廷からの至急のお召し、とだまして、その嫡子らを呼び集め、一網打尽的に人質にしたのであった。

そのおかげで、秀吉は、わずか七日間で、播州をわがものにすることができたのであった。

やがて、天下は豊臣家のものとなり、転じて、徳川家のものとなった。

しかし、姫路にあっては――。

鹿野重左衛門を、卑劣な裏切り者、と憎む気持は、すべての地下人（じげにん）たちに受け継がれて、

いまもなお、消えようとはしないのである。

そして、その憎悪心は、重左衛門の孫である姉弟に向って、投げつけられている。

裏切り者の孫を、石を以（もっ）て追おうとする地下人たちに、屈せず、けなげに、反抗しようとする十二歳の数馬を、姉は、いじらしさに胸を熱くしながら、叱らずにはいられなかった。

「若様！　がまんしなされ」

老僕も、口を添えた。

「うん――」

数馬も、ようやく、うなずいた。

ささやかな夕餉（ゆうげ）の膳に、姉弟がさしむかった時、人の訪れる声が、ひびいた。

嘉七が、玄関に出ると、夕顔のように白い美しい顔の女人が、宵闇の中に在った。

「さわと申します。佐兵衛殿のたのみにより、おうかがいつかまつりました」

そう告げられて、嘉七は、思わず、

「おお……それは！」

と、胸をおどらせた。

静香に、佐兵衛のことを打明けた直後に、その使いが現われたのである。嘉七は、老いの身がわきたつ思いであった。

さわは、座敷に上げられ、静香と挨拶を交した。

静香は、佐兵衛という男のことを、嘉七からきかされた旨を、告げた。

さわは、

「わたくしは、佐兵衛さんから、三年前、生命を救われた者でございます。それまでのわたくしは、京の島原で、いやしいつとめをしていた女でございます。そのつとめが死ぬほどいやで、逃げ出して追手に捕えられ、あやうく殺されようとしたところを、佐兵衛さんに、救われたのでございます」

と、語った。

さわが、いかに商家の内儀ふうによそおっても、仇な匂いを消せないのは、その前身のせいであった。

「佐兵衛は、金子をたくわえた、と申して居りましたかな？」

嘉七が問うた。

「はい。三万両という目標を、この春で達した、と申されて居りました」

「三万両！　佐兵衛の奴、一年で一万両ずつ、たくわえ居ったか」

嘉七は、感嘆した。

静香は、三万両、ときかされても、あまりの巨額なので、現実感がともなわなかった。普通の武家で、三百両のたくわえがある者など、まれな時代だったのである。

「三万両あれば――」

嘉七は、静香に向って、云った。

「お嬢様。一流兵法者を、二十人が三十人でも、やとうことは、易々たることにございます

ぞ」

「はい――」

静香は、そう云われても、なんとなく、気がすすまなかった。

十二歳の数馬を名目人として、それらのやとい浪人の群れが、平家館に攻め入る光景を想像すると、ただ、暗い重い気分に滅入るばかりであった。

「お嬢様――」

さわが、云った。

「その、助太刀の儀につきまして、佐兵衛さんが、知りあいのご浪人を一人、わたくしに、ご当家へ案内させました」

「え――？」

「織田重四郎と申される御仁でございます。その腕前のほどは、わたくしも、見とどけて居ります」

「どこに、待たせておいでか？」

嘉七が、たずねた。

「城を眺めて来る、と申されて、むこうの辻で別れました。もう、おっつけ、参られます」

「たしかに、手練者でしょうな？」

嘉七が、念を押した。

「十数人の公儀隠密衆に囲まれながら、これを斬りはらって、脱出なさいました」

「公儀隠密衆に？」
「申し上げなければなりませぬ。佐兵衛さんのたくわえた三万両は、公儀隠密衆の狙うところとなって居ります」
「それは、容易ならぬことだが……」
「三万両たくわえるからには、多勢の敵をつくるのは、いたしかたございますまい」
織田重四郎は、姫路城を大手門前まで近づいて、眺めてから、さわと別れた辻へひきかえして来ようとしていた。
姫路城は、播磨十五万石・譜代本多美濃守忠政のものとなっていた。
日本全土の城のうちでも、五指のうちにかぞえられる優美の姿容は、この地を通る者に、必ず足を停めさせる。
重四郎も、旅人の一人として、何気なく近づいてみたのであった。
ところが、さわと別れた辻をむこうに見る地点まで戻って来た時、五六騎の馬蹄の音を、うしろにきいた。
ふりかえった重四郎は、本能的に、
――おれを追って来ている！
と、直感した。
――べつに、あやしまれる筋合はないが……。
重四郎は、平然として、足をはこぶことにした。

騎馬の群れは、たちまち、重四郎に追いつくと、半数が前へ出て、行手をふさいだ。
指揮格の士が、重四郎の正面に立ちはだかると、
「本多家目付として、尋問いたす。お主の姓名と国は？」
「なんのご不審であろう？」
「尋問にこたえられい！」
「織田重四郎。生国は尾張」
「随身の経歴は？」
「ない」
「ない？　生れながらの浪人か？」
「そういうことに相成る」
「役所まで、同道ねがおう」
「理由をきかされずに、ひきたてられるのは、迷惑に存ずる」
「理由は、役所へ参れば、判る」
「おことわりする」
「こばむのであれば、手荒なまねをいたさねばならぬ」
「こちらも、好むところではないが、主取りをしたことのない野育ちの人間ゆえ、つむじはまがって居る。お対手つかまつろう」
重四郎は、わざと、高言を吐いた。

目付は、鋭く重四郎を見据えていたが、
「当藩城代家老美濃部将監殿を、お主、見知りではないか？」
と、問うた。
「存じて居る」
「将監殿が、お主の姿を、大手門前に、見かけた。それで、ともなうように、命じられた」
「おことわりする、と申したら、なお、腕ずくでも連れて行く、と云われるか？」
目付は、当惑の面持になった。
重四郎は、笑った。
「参ろう」
まさか、美濃部将監に見つけられた、とは夢にも思っていなかったことである。
見つけられた以上は、やむを得なかった。
目付が、
「馬を――」
と、すすめたが、重四郎は、ことわった。
――あのおやじに会うのは、幾年ぶりのことか。
姫路城の城代美濃部将監は、白書院で、扇子を膝に立てて、瞑目していた。
二十年前のことが、脳裡に、泛んでいた。
慶長十九年九月なかばのことであった。

大坂城の出頭人片桐且元は、主君豊臣秀頼と徳川家康の間に、いたばさみになり、ついに、その奉行職をすてて、摂州茨木の城へひきこもる決意をした。
その時のことである。
某日、片桐且元は、美濃部将監を、大坂の自邸へ呼んだ。
美濃部将監は、且元の推挙によって、本多家に随身したのである。
その当時は、将監はまだ、馬廻り役でしかなかった。
且元は、将監に、云った。
「わしの努力も、どうやら、水泡に帰した」
且元は、八月、駿府におもむき、家康に謁見を乞うたが、許されずに、帰って来たのであった。
家康の肚裡は、読みとれていた。
大坂城を攻めて、秀頼を滅ぼし、名実ともに、天下を徳川のものにする。その決意は、家康の肚裡で動かせぬものとなっていたのである。
家康は、すでに七十四歳であった。もはや、猶予はしていられなくなったのである。
且元が、いかに努力してみたところで、その方針が確立してしまっている上からは、全くの徒労であった。
且元は、また、大坂城に在っても、淀君はじめ、大野修理たちの憎悪を買っていた。
大坂城に於ける且元の位置は、きわめて重要であった。

且元は、賤ガ岳以来の功臣であり、一万二千石の小大名にあまんじていたのが、おかしいくらいであった。

ところが、家康が将軍になるや、且元に一万六千石を加増して、二万八千石にとりたて、大坂城の出頭人にしてくれたのである。

家康は、且元を、抱き込んで、大坂城の政務をとらせ、いざという場合には、寝がえらせる計略をたてたのであった。

且元としては、家康の知遇に応えなければならなかった。しかし、且元は、太閤秀吉の洪恩を忘れず、秀頼に忠節を誓っていた。

家康が、豊臣家をこの世から消す決意を為せば、最も苦境に立たされるのは、且元であった。

で——。

ついに、且元は、自らの地位をすてることにしたのであった。

ひとつには、淀君と大野修理のあいだに、片桐且元に切腹を申しつける密談がなされた、という噂が、且元の耳にもつたわって来ていたのである。

「大坂城をすてて、身の安全をはかるがごとく、世間にうけとられるのは、まことに、苦しい思いがいたすが、やむを得ぬ」

且元は、将監に、云った。

「心中お察しつかまつります」

将監は、心から、同情した。

「ついては、其許に、ひとつ、たのみがある」

将監が、いかなるおたのみでも、お引きうけつかまつります、とこたえると、片桐且元は、

「忝ない」とまず頭を下げておいて、

「わしが、これまで育てていた児童が一人いる。この子を、其許にたのみたい」

と、云った。

「承知つかまつりました」

将監は、即座にひきうけ、どのような素姓でありましょうか、と訊ねた。

「素姓は、問うてくれるな」

且元は、あきらかにすることをこばんだが、

「長じたならば、織田と名のらせてもらえまいか」

と、たのんだ。

将監は、およその想像がついた。

且元は、侍臣に、その児童をつれて来るように命じた。

将監の前に坐ったのは、八歳あまりの少年であった。

切長の双眸に、勇猛の武将の血を享けたと思われる光があった。

「重四郎と申す。挨拶を——」

且元にうながされて、少年は、作法正しく挨拶した。

その日のことが、いま、姫路城の城代家老となった将監の脳裡に、昨日のことのように、よみがえって来ていた。

将監は、少年を自分の手許には置かず、土佐に隠棲する某兵法者にあずけて、十五歳まで育てさせたのであった。還って来た重四郎は、逞しい若者に成長していたのであったが……。

――片桐殿の期待にそむいて、わしは、重四郎を、ただの流浪の浪人者にして、しもうた。

ゆくりなくも、十年ぶりで、大手門前に、重四郎の姿を見出した瞬間、将監は、思わず、と、叫んだものだった。

いつか、必ず、重四郎が、自分をたずねて来てくれる、という期待があったのである。

ところが――。

大手門前に立った重四郎は、ただ、城を眺めただけで、踵をまわして、去ろうとしたのであった。

将監は、あわてて、家中の士を呼んで、あとを追わせたのである。

「ご城代――。織田重四郎殿を、ともないました」

告げる声があった。

「これへ――」

将監は、われにもあらず、胸がはずんだ。

しかし――。

入って来た重四郎の態度は、将監にとって、かなりよそよそしいものに思われた。

すぐに、隔意なく、言葉を交すことのできない空気があった。

「十年ぶりだの」

将監が、云うと、重四郎は、

「ご壮健にて、よろこばしゅう存じます」

と、云った。

無表情であった。

「わしをたずねて、この姫路に来てくれたのではなかったかな？」

将監は、問うてみた。

「いえ、ちがいます。小父上にお会いする気持は、毛頭持ちませんでした」

重四郎の返辞は、冷やかであった。

「わしを、まだうらんで居るのか、重四郎？」

将監は、たずねた。

「べつに、もう、そのような気持は持ち合せません」

重四郎は、かぶりを振った。

将監としては、片桐且元にたのまれたことであったし、織田と名のらせる上からは、想像のつく名門の生れであることだし、いずれは、主君にたのんで、徳川家旗本にとりたててもらう心算であった。

ところが――。

将監の期待を裏切る所業を、二十歳の春に、ひき起してしまったのである。

主君美濃守忠政の息女八千代が、侍女数人をつれて、城外へ出て、野だての席を設けたところを、たまたま、通りかかった重四郎は、一服を所望した。

八千代は、勝気な気性であったし、まだ十五歳で、男子を好まぬ年頃であったので、一言のもとに拒否した。

あいにく、重四郎は、あいてが、城主の息女とは知らなかった。

八千代の高慢な態度が、気にさわり、いきなり、つかんで、小脇にかかえ込み、奔って、近くの川へ抛り込んだのであった。

当然、騒動になった。

藩主美濃守忠政は、江戸に在り、城代としての将監が、裁きをつけなければならなかった。

重四郎には、申しひらきの理由があった。

藩主の息女は、江戸屋敷にいなければならぬたてまえであった。武家法度にさだめられてある。

したがって、公儀に内密で、国許へ帰って来ていた息女を、息女と知らなかったとしても、むりはなかった。

しかし、将監としては、主君の息女を川へ抛り込んだ重四郎を、許すわけにはいかなかった。

将監は、重四郎に、切腹を命じた。

重四郎は、しかし、切腹する代りに、遁走したのである。

あれから十年の歳月が流れている。

しばらく対坐するうちに、将監は、正坐した重四郎に、放浪者の崩れた翳がすこしも刷かれていないことを、たしかめた。

――やはり、名門の血はあらそわれぬ。いかなる環境に置かれても、武士の誇りと面目をうしなっては居らぬようだ。

将監は、微笑した。

「この姫路には、どうして参ったかな？」

「城下はずれに、楠木という豪族の家がある由。二十歳の娘と十二歳の少年と、姉弟だけで、くらしている、ときました。その姉弟をたずねて参ったのです」

「おう――白河館の姉弟だの」

将監は、知っていた。

その先祖が、白河殿に仕えていたので、楠木家は、白河館とも称ばれていたのである。

名門の末裔（まつえい）

「白河館の姉弟に、何用があって、たずねて参ったのかな？」

将監は、問うた。

重四郎は、打明けるべきかどうか、ちょっとまよったが、べつにかくす必要もない、と思った。

自分を、土佐の老兵法者に預けて八年余修業させ、そして十五歳から二十歳までの青春期を養い、育ててくれたこの人物は、重四郎にとって信頼し得る唯一の存在であった。

城代家老としての立場から、主君息女に乱暴を働いた重四郎に切腹を命じたものの、おそらく、断腸の思いだったに相違ない。

実父にまさる愛情をそそいで、育ててくれた将監であった。

あの時――。

二十歳の重四郎は、切腹を命じられるや、それを将監の冷酷と受けとり、一途な反逆の激情にかられて、出奔してしまったのであったが、流浪十年を経た今日では、

――もし、あの時、養父の立場に自分が在ったならば、やはり、養父と同じ措置を決意したに相違ない。

と、考えるようになっていた。

そして――。

――あるいは、あの時、養父の肚裡には、おれが出奔する、という計算が成されていたのではなかろうか。

そうも思うようになっていた。

是が非でも、つめ腹を切らせて、城代家老の立場を守ろう、としたのではなかったのだ。

わざと、重四郎をかっとならせて、出奔させるように仕向けたに相違ない。

いずれにしても、重四郎は、この将監に対してだけは、心からの信頼と尊敬を抱いている。

ただ、それだけに、出奔後、永い歳月を経て、再会すると、かえって、重四郎の態度は、心の中を見せまいとするかたいものになってしまったのである。

重四郎が、この姫路城を眺めに、大手門前まで、足をはこんで来たのは、城代が将監であったことにほかならない。しかし、将監の前に出ることは、避けたかった。

なろうことならば、再会せずにすませたかった。

遠くにあって、将監の長生きを祈っていたかったのである。

「袖すり合った縁で、その姉弟の敵討の助太刀を約しました」

重四郎は、云った。

「敵討の助太刀を――？」

将監は、じっと、重四郎を見すえた。

「白河館の姉弟には、敵討のくわだてがあるのかな？」
「その姉弟の父母が、どのような非業の最期をとげたか、小父上は、ご存じでありましょうか？」
「うむ――。噂できいて居る」
「摂津伊丹に、神屋主膳という豪族が、蟠踞（ばんきょ）している由。どのような人物か、お教え下さいますまいか？」
重四郎は、問うた。
「神屋主膳か――」
将監は、遠くへ視線を投げて、何事かを思慮する面持になった。
「白河館の姉弟は、神屋主膳を、父母の敵と思って居るのか」
「そうではない、と云われますか？」
「い、いや……」
なぜか、将監は、すこしあわてて、かぶりを振った。
「噂を耳にしただけのことゆえ、わしの口からは、なんとも申せぬ。ただ、伏見の白河館は、伊丹の平家館と、堺の港で、なにか永年の争いをつづけていた模様だ。これは、事実と申せる。……それにしても、この敵討は、むつかしかろう」
「神屋主膳は、よほどの勢力をそなえた豪族ですか？」
「公儀から、一万石の隠し知行が与えられている、と申す。それほど、この近畿（きんき）では、無視できぬ名門だの」
将監は、視線を重四郎にもどすと、
「袖すり合っただけの縁で、助太刀するには、対手が強大にすぎる。思いなおした方がよくはないか？」
「小父上は、それがしの気象を、よくご存じのはずです」
「うむ、知っては居るが……」
将監は、微笑して、
「気象と申すものは、いかに境遇が変っても、別のものにはならぬが……、わしは、お前が、いずれは、何か大きな目的を持った歩みかたをいたすであろう、と想像していたのだ」
「……」
「ただの浪人者として、終ってしまう男ではない、と信じて居った。気象は激しくとも、思慮の深さもある、と思って居った」
「小父上は、それがしを、すこし買いかぶられたようです。それがしは、目下、その日の風まかせで、生きて居ります」
「おのが生涯の目的とするものに、いまだ、ぶっつからぬのであれば、それも、いたしかたがあるまいが……、神屋主膳を対手として、戦おうというのは、無謀にすぎる。これは、あきらめたがよい。義のため、という名目で、一戦をこころみる対手ではない」
「……」

「神屋主膳自身が、そこいらの大名などとは、くらべもならぬほどの大きな気宇の持主であるからだ。わしは、一度、会ったことがあるが、対坐しただけで、言葉も交さぬうちに、威圧された。あれほどの威容を示す人物は、ほかに知らぬ。これだけは、わしに、はっきりと申せることだ」

「……」

「重四郎、思いかえさぬか？」

「実は、それがしは、これから、白河館の姉弟に会いに行きます。会うた上で、どうなるか、それは、それがし自身にも、わかりませぬ。ただ今は、そうご返辞するよりほかはありませぬ」

「そうか――」

将監は、嘆息した。

「お前とわしは、すでに、他人に相成って居る。……やむを得ぬことだの」

重四郎は、姫路城を、出た。

将監の言葉は、のこらず、脳裡にのこっていた。

しかし、乗りかかった船である。乗るのを中止する気持は、みじんもなかった。

さわに教えられたその家に近づいた重四郎は、一瞬ふと、

――この家に入ったとたんから、おれの人生が変るかも知れぬ。

そんな予感をおぼえた。

その時であった。

喚声をあげて、七八人の少年が、うしろから駆けて来たかとみるや、その家に向って、口口に叫びはじめた。

「数馬！　出て来い！」

「裏切り者め！　勇気があったら、出て来い！」

「勇気がないだろ、数馬！　腰抜け！」

「出て来ないと、家を焼きはらってやるぞ！」

少年たちは、叫びながら、小石をひろって、投げ出した。

とたんに――。

ものすごい勢いで、家の中から、少年が一人、とび出して来た。

右手に、脇差を抜いて、つかんでいた。

「数馬、いけませぬ！」

若い女が、あとを追って出て来て、とどめようとしたが、もう数馬は、白刃をふりかざして、少年の群れめがけて、斬り込んでいた。

さすがに、対手がたは、白刃のひらめきにおそれて、どっと散った。

「そこの御方、弟を止めて下さいませ！」

静香が、重四郎に、叫んだ。

重四郎は、すばやく、数馬に寄って、脇差をつかんだ右手をおさえた。

「は、はなせっ！」
数馬は、必死にもがいた。
「おちつけ。姉者が、止めているのではないか」
「は、はなせっ！　み、みんな、斬りころしてくれるっ！」
数馬は、重四郎の腕へ、かみつこうとした。
やむなく、重四郎は、数馬へ当て身をくれた。
そうしておいて、遠巻いた少年たちへ、鋭い口調で、
「去れ！」
と、命じた。
ぐったりとなった数馬が、家の中へはこばれると、静香は、重四郎へ、礼をのべ、そっと、泪をぬぐった。
「それがしは、さわ女と申す女人の案内で、ご当家へ参った。織田重四郎と申すが……」
「あ――」
静香は、重四郎へ、あらためて、まなざしを当てると、
「貴方様が……」
と、呟いて、ほっと吐息した。
その様子には、重く沈んだ気色があった。
「さわ女は、ここで待っていると申していたが……？」

静香は、こたえて、
「半刻ばかりお待ちなされて居りましたが、一日をあらそう急用が、大坂にある、と申されて、てまえどもの下僕を供にして、出て行かれました。四日後に、もどられる由にございます」
「左様か――」
重四郎は、さわから、波乗り佐兵衛が、多額の金を、大坂の某所に送っている旨をきかされていた。
急いでおもむいたのは、その金にかかわることに相違ない。
「さわ女が、もどるまで、それがしは、どうなるのかな」
「どうぞ、むさくるしいところでございますが、お泊り下さいませ」
「泊めて頂くのは、有難いが、世間の取沙汰になっては、お気の毒だ」
「いえ……。わたくしどもに、挨拶を交してくれる人は、近隣に一人も居りませぬ」
「その事情は、他人のそれがしが、うかがってもはじまらぬ。……それよりも、湯漬けを一杯、所望いたそう」
「はい」
静香は、台所へ立った。
いそいで、仕度をしながら、静香は、見知らぬ浪人が、ふしぎな、さわやかな雰囲気をもって、入って来たのを、あらためて、思いかえしていた。

ただの浪人者ではないような気がした。
面貌にも、態度にも、言葉づかいにも、浪人者特有のくらさがなかった。凛としたものを持っている人物に見えた。
——どうして、あのような御仁が、助太刀を買って出て下されたのか？
さわ女の話では、佐兵衛という盗賊が、金でやとった、ということであったが、金でやとわれるような人物には、思われなかった。
静香は、食膳をはこんで来て、
「なにもありませぬが、お召しあがり下さいませ」
と、すすめた。
「忝ない。頂戴いたす」
重四郎は、三杯喰べた。
そして、微笑しながら、
「このような、家庭の味のする食事を摂ったのは、幾年ぶりであろうか。……お礼を申す」
と、頭を下げた。
「ずっと、お一人で、家もお持ちにならずに、おすごしなさいましたか？」
「左様——。十年、放浪をつづけて居り申す」
「……」
静香は、食膳を下げて、台所に入った時、なんとなく、ほのぼのとしたあたたかいものが、

胸にわきあがるのを覚えた。
つつましい食事を、見知らぬ浪人者に摂らせた。それだけのことであったが、それが、ふしぎに、うれしかった。
静香は、ひとり、微笑した。
「さあ、目をさますがよい」
数馬を起す重四郎の声が、きこえた。
数馬は、いったん目をさましたが、半刻経たぬうちに、高い熱を出して、再び、まぶたを閉じた。
重四郎と静香は、その寝顔をへだてて、春の夜を、対坐することになった。
壁によりかかって、腕を組み、目蓋をとじた重四郎は、そのまま、長いあいだ、沈黙をまもった。
静香は、弟の額をひやしてやりながら、これも、自分の方から話しかけることも思いうかばぬままに、しのびやかにふるまっていた。
ふと——。
重四郎は、庭に人の気配があるような気がして、目蓋をひらいた。
すると、静香の方も、なんとなく、はっとなって、重四郎を視た。
重四郎は、差料をとって、立った。
「あ、あの……」

静香が云いかけようとするのを、重四郎は、制しておいて、台所へ行き、音をたてないように裏口から出た。

外には、月明りがあった。

裏手は、雑木林になっていた。風が落ちて、枝葉はひっそりとしずまっている。

重四郎は、裏口を出たところで、しばらく、動かなかった。

妙なことだが、こういう夜を迎える予感が、かなり以前から、あったように思われる。

重四郎は、姉弟と自分とのあいだに、因縁が生じている、と感じた。

ゆっくりと、歩み出した時、重四郎の長身には、強い力が満ちた。

これまで、いくたの修羅場をふんだ男であったが、これほど、強い力をみなぎらせたのは、はじめてであった。

金のために、剣を抜いた経験は、かぞえきれぬし、勿論そのたびに、生命の危険にさらされたことだったが、心中のむなしさがともなっていた。

いまは、ちがう。

五百両でやとわれたことは事実でありながら、姉弟の身をまもってやることに、いっそ明るいものさえもおぼえている。

重四郎は、母屋と物置小屋のあいだを抜けて、庭の端へ立った。

庭といっても、菜園になっていて、樹木はない。

重四郎は、二個の黒影を、そこに視た。

「何か？」

重四郎は、鋭く声を投げた。

音を消して、そこへ現われて、不意を衝いたのである。忍び入って来た者たちは、狼狽するのが当然のはずであったが、二個の黒影は、そのような様子は、すこしも示さなかった。

「なんの用がある？」

重四郎は、かさねて、問うた。

すると、それにこたえるかわりに、一人が、

「お主は、この家に、どうして、身を寄せて居るのだ？」

と、逆にたずねかけてきた。

「こちらは、お主がたが、何者か、何の用か、と問うているのだ」

重四郎は、そう云って、足をふみ出した。

とたんに——。

二人の男から放たれて来る殺気を、重四郎は、あびた。

重四郎は、五歩の距離に近づくと、立ちどまって、

「こちらは、白河姉弟を守護するためにやとわれた。そちらは、どこから、やとわれて、この家をうかがいに来た？」

と、問うた。

返答の代りに為されたのは、二本の白刃が、抜きはなたれることだった。

それを視て、重四郎の五体に、闘志が燃え立った。
「やるのか」
にやりとして、敵二人の構えから、その腕前を、はかった。
できる者たちである。
重四郎は、鯉口だけ切っておいて、足場の利をえらぶために、位置を移した。
対手がたは、それに対して、左右へわかれた。
重四郎が、雨戸を後ろ楯にして、ぴたりと、位置をさだめた瞬間、一人が、無言の気合をほとばしらせて、斬りつけて来た。
刃金が鳴り、火花が散った。
ぱっと、跳び退った敵は、
「強いぞ、こやつ！」
と、仲間へ告げた。
重四郎は、にやりとして、
「人を斬ることには、なれて居る」
と、云った。
そのあと——。
双方、隙をうかがって、動かぬ状態を迎えた。
重四郎は、敵二人もまた、人を斬る経験を積んだ者たち、とさとった。

道場のみで修業した者と、死地をくぐって来た者とでは、構えは同じでも、その剣にこもった殺気が、おのずから異なっている。
後者には、一種無気味な静けさをともなっているものである。
それが、この二人の男の剣には、あった。
なまじの誘いには乗って来ぬ、と知った重四郎は、急に、横へ動いた。
母屋と物置小屋のあいだへ、身を入れようとあとずさる重四郎を、対手がたは、追うて、来た。
ここでは、一騎討ちになる。
一騎討ちの不利を知った対手がたは、重四郎が、そのせまい場所へ身を入れぬさきに、攻撃をしかけなければならなかった。
重四郎の誘いは、それであった。
「ええいっ！」
猛然と、まっ向から、躍って来た。
重四郎は、身を沈めざまに、刃風を肩すれすれに流しておいて、体当りをくれるような反撃に出た。
「う、むっ！」
呻きがあがった時には、重四郎は、もう、そこを駆け抜けていて、後ろに立つもう一人に向って、凄まじい勢いで、とびかかっていた。

敵は、斜め横へ跳んだ。
跳んだ地点で、よろめいた。
それにむかって、重四郎は、二の太刀を鳴らした。
一人は、即死であったが、一人は、物置小屋の羽目によりかかって、重傷のあえぎを示していた。
重四郎は、その前に寄って、
「お主ら、伊丹の平家館から、遣わされて来たのであろう」
と、云った。
「さ、さよう……」
重傷者は、みとめた。
「白河姉弟を、討ち果せ、との使命か？」
「うむ――」
「面妖しいぞ。神屋主膳は、なかなかの人物と、きいた。かよわい姉弟を殺す残忍な性情の持主である方が、まことの正体か？」
「……」
重四郎は、対手のあえぎがはげしくなるのを見てとって、手当をしてやることにした。
しかし、対手は、重四郎が手を貸して、起たせようとすると、かぶりを振った。
「恩は、う、う、受けぬ」

「このままでは、死ぬぞ」
「すてて、おいてもらおう」
拒否する者に、しいて、手当をしてやる必要はない、と思って、重四郎は、そばをはなれようとした。
その時、いつの間にか、静香が、近くに立っているのを、重四郎は、みとめた。
重四郎は、黙って、家の中に入った。
しばらくして、静香が、もどって来た。
「そなた、手当をしてやったのか？」
「はい――」
「……むすめ心か」
重四郎は、冷たく云いすてた。
「馬で参っていたので、そこまで、つれて行き、乗せました」
「ふん……。死体も一緒に？」
「はい」
「この家も、安全ではなくなって居る。どこかへ、移らねばなるまい」
「わたくしどもに、ほかに、行くあてとて、ありませぬ」
「さがせばよい」
そう云いすてると、重四郎は、急に強敵二人を斬った疲れを、おぼえて、その場へ、横に

なった。

「牀をのべてさしあげます」

静香は、すでに、弟を、次の間に移していた。

重四郎は、ふと、思いついて、

「裏の雑木林の中を、小川が流れていたようだが……？」

と、たずねた。

「はい。流れて居ります」

重四郎は、出て行き、雑木の枝へ、着物をひっかけておいて、その流れに入った。

流浪者は、風呂をつかうことはなかった。真冬であろうとも、行くささぎの川や池で、からだを洗うのであった。

桜花の季節であったが、夜はひえ込む。

冷たい水にひたった重四郎の全身は、ひくく呻くほど、ひきしまった。

――こうした流浪ぐらしが、いつまでつづくものか。

重四郎は、梢からもれる月光をあびながら、ふっと、寂寥感におそわれた。

重四郎が、部屋にもどってみると、牀がのべられ、枕屏風もまわされ、枕もとには、寝酒の用意もしてあった。

重四郎は、木椀に酒を盛って、ひと息にのみほし、牀に入った。

もし、その折、静香が、入って来なければ、なにごともなく、重四郎は、睡魔にひき込まれたに相違ない。

唐紙が、しずかにひらかれて、静香が入って来た。

「あの……、寝巻をお出しするのを忘れました。お召しなさいませ」

そっと、それを置いて、さがろうとする静香を、重四郎は、ちらと視やった。

燈心のほそいあかりを横顔に受けた容子が、哀しくはかないまでの美しい風情であった。

瞬間――。

重四郎の心中に、旋風のような烈しい激情がわきたった。

無言で、片手をのばすや、静香の手をつかんだ。

はっとなった静香は、非難の色をこめて、重四郎の顔を見かえした。

重四郎が、その手を強く引くや、静香は、抵抗しつつ、

「いけませぬ！」

と、小さく叫んだ。

次の間にねむる弟の数馬をはばかって、静香は、それきり、悲鳴は立てずに、必死に争った。

しかし――。

重四郎の力の下に、静香は、ついに、押しつけられ、目蓋を閉じた。

重四郎は、そうしたまま、しばらく、じっと、静香の顔を見下ろしていた。

静香は、あえぎつつ、

「けだものに、なる御仁では、ないと、存じて居りました」
と、云った。
その声音は、しかし、憤りのひびきを持ってはいなかった。むしろ、男の欲望を、さげすむ余裕を持っているようであった。
重四郎は、われにかえった。
「許されい。……一時の狂気であった」
重四郎は、わびて、静香をはなした。
静香は、いったん、牀を出て、身づくろいしたが、出て行こうとはしなかった。
しばらく、そこに坐って、俯向いていたが、
「わたくしが、欲しいとお思いでしたら、さしあげないこともありませぬ」
と、云った。
「……」
重四郎は、その言葉に打たれて、一層みじめな自己嫌悪にかられた。
「狂気は去った。……もう、もとめぬ。許して頂きたい」
「いいえ――」
意外にも、こんどは、静香の方が、強い態度をみせた。
「わたくし自身、このまま、おのが春を逝かせたくはございませぬ。……貴方様をお迎えしたのは、わたくしをさしあげる時を迎えたのかも知れませぬ」

重四郎は、それに応える言葉もなく、沈黙をまもった。
静香は、間を置いて、つづけた。
「ただ……、暴力に屈して、わたくしをさしあげるのは、永く悔いがのこります。……しぜんに、わたくしを求めて頂くならば、いつでも、さしあげたく存じます」
静香の態度には、すがすがしいものがたたえられていた。
重四郎は、長い沈黙を置いてから、
「ねむらせて頂こう」
と、云った。
「おやすみなさいませ」
静香は、しずかに、頭を下げておいて、弟の寝ている次の間へ、さがって行った。
仰臥した重四郎は、闇に、大きくまなこをひらいた。
おのれをあざわらう気持は、まだ心中の片隅にのこっていたが、それよりも、静香の態度の美しさが、大きな比重を占めていた。
重四郎は、静香に出会ったことで、自分の人生が変って行くような気さえした。
――無頼のおれにも、美しいものに打たれる純粋な心が、のこっていたのか。
重四郎は、目蓋を閉じた。
睡魔は、やがて、重四郎を、しずかに、奥深い世界にひき入れた。
どれくらい、ねむったか。

夢もみないで、ぐっすりとねむったようであった。
ふっと、重四郎は、枕もとに人が坐っているのを感じた。
それが、静香であることをさとるのに、時間はかからなかった。
重四郎は、目蓋をひらいた。
夜明けにちかいらしく、静香のすがたが、おぼろに浮きあがって、見わけられた。
「どうしたのだ？」
重四郎は、問うた。
「わたくしは、貴方様を、侮辱いたしました。それが、心苦しくて……、お詫びしとうございます」
ねむれぬままに、自分をとがめつづけていた静香は、ついに、決意して、入って来たものであろう。
「侮辱を加えたのは、それがしの方だ。そなたが、詫びる理由はない」
「いえ……、わたくしは……」
静香は、急に、はげしい感情が胸にあふれたか、掛具に身を伏せた。
重四郎は、起き上ると、静香に身を起させた。
「そなたの言葉は、それがしの胸にこたえた。そなたがこの世に在ることは、それがしにとって、最も大切な意味を持つことに相成った。このことだけを、おぼえておいて頂こう」
「うれしゅう存じます」

重四郎は、静香を力一杯抱きしめたい衝動を押えた。
「礼は、こちらが申さねばならぬ。……さあ、もう心がやすらかになったであろう。やすまれい」
「はい」
静香は、ちょっとためらったのち、去った。ほのかな香を、重四郎にのこして——。

平家館

およそ七八十畳はあろう大広間であった。その広さでも、なお狭い観があるのは、二十余人の面がまえや骨格のたくましさのせいであろうか。
いずれも、真剣をふりまわすことに生甲斐を持っているとおぼしい浪人者たちであった。
思い思い放埒な姿勢で、声高にしゃべりたて、豪放を気どる笑い声をたてていた。
「平家館」と称される、ここ伊丹の神屋主膳邸に、ころがり込んで来る浪人者は、おびただしい。
そして、長いのは、もう五年も居据っている。
出入はかなりはげしいのだが、とぐろをまく無為な日々にいや気がさして出て行く者はすくなかった。喧嘩沙汰で追放される者とか、反目したため寝首をかかれる危険をおぼえて逃

げ出す者とか、そして、悪事を働いたことが露見して、斬られる者とか——。

いずれにせよ、黙って居据っている限り、三度の食事の心配はなく、二十日に一度は、わずかだが、金子の支給もあるのであってみれば、尾羽打ち枯らした浪人者にとっては、まことに恰好のねぐらであった。

主人の神屋主膳は、めったに、かれらの前に姿を現わしたことはなかった。

ころがり込んで、一月も経ちながら、まだ一度も、あるじの顔を見ない者もいたくらいである。

堺に幾艘かの船と大きな倉を十棟も持って、唐物交易をやっている豪族であってみれば、二十人や三十人の居候をやしなっても、ビクともするものではあるまいが、それにしても、ふつうの大名でもちょっと真似のできぬ度量の広さであった。

浪人者たちの中から、希望する者があれば、交易船に乗せたが、あるじの方からは、しいて、すすめはしなかった。

あるじの得体の知れぬところが、魅力といえた。

あるじが、奥にいる、ということだけで、この大広間にも、おのずから秩序ができていた。

尤も——。

三日に一度は、その腕前の誇示から、刀を抜く者が出た。

しかし、それは、あくまで、個人と個人の対立であり、一同がそのために二派にわかれて争うようなことはなかった。

今も——。

なんとはない兵法話から、にわかに、

「ちがうっ！　二刀使いは邪道だ！」

と、一人が呶鳴り、

「ばかな！　両手があるからには、二刀を使うのが、なんで邪道だ！」

と、対手が呶鳴りかえし、

「よし！　では、その二刀ぶりを見せろ」

「おう——のぞむところだ」

と、同時に、ふッ立つ事態を起していた。

他の浪人者たちは、勝手にやれ、という態度であった。

甲と乙とは、庭へとび出した。

庭は、白砂を敷きつめた広い平庭であった。

庭の中央に出て、双方が抜きはなって身構えるや、大広間の連中も、ようやく、ぞろぞろと、広縁へ出て、見物をはじめた。

二刀を構えたのが、佐渡屋八郎、一刀を構えたのが、杉戸進五郎、という。

ともに、まだ三十前であったが、刀傷は幾箇所か、身に刻んでいる。

「佐渡屋は、道場で習ったおぼえはない、と云うとったが、あの構え、したたかなものだのう」

「野盗の群れにかつていた、というぞ。実戦を積んで居る」
「杉戸は、一刀流を、ちゃんと修業して居るのだろう」
「しかし、口ほどの腕ではないようだ。見ろ。腰に力がない」
さまざまな批判が、交された。
大広間は、がらんとなった。
一人だけ、その決闘に、そ知らぬふりで、寝そべっている者が、残っていた。
総髪で、京の都あたりの六法者がまとっている派手な小袖をつけていた。まだ、二十二三の若さであったが、容子に冷たいおちつきがあり、どこやら素姓のよさを匂わせていた。
美男といえたし、すらりとした長身に、さわやかな雰囲気をただよわせ、館の婦女子の人気を独占していた。
由比民部、と名のっていた。
「やあっ！」
「おーっ！」
凄まじい懸声がほとばしり、刃と刃が嚙み合う音がひびいた。
しかし、由比民部は、目蓋をひらこうともしなかった。
佐渡屋八郎と杉戸進五郎は、二合ばかり、撃ち合って、再び間合をとって、にらみ合うや、動かなくなった。
「お主――」

不意に、呼ばれて、由比民部は、目蓋をひらいた。
そして、そこに立っているのが、あるじの神屋主膳であるのを、みとめると、すっと身を起し、かるく頭を下げた。
「お主は、どうして、見物せぬのだ？」
神屋主膳は、微笑しながら、問うた。
「兵法自慢の果し合いなど、一向に、興味は持ち申さぬ」
民部は、こたえた。
「奥へ参らぬか」
神屋主膳は、さそった。
居候を、奥へ入れたことは、いまだ一度もなかった。
民部は、ちょっと、けげんの視線をかえしたが、黙って、あとにしたがった。
広縁で見物する者たちは、一人も、気がつかなかった。
民部は、六尺ゆたかな巨軀の主膳のあとに従って、奥の居室に入った。
珍しい南蛮の品々が置かれた部屋であった。
机上に据えられた大きな地球儀が、殊に、目立つ。
壁にも、世界地図が、いっぱいに貼られてあった。
神屋主膳は、対坐すると、すぐ、
「お主、酒をたしなむかな？」

と、たずねた。

「いささか――」

由比民部がこたえると、主膳は、かたわらの厨子から、ぎやまんの瓶と盃をとった。

その酒は、血潮のような色をしていた。

民部は、いささか薄気味わるく思いつつ、盃を口にはこんだ。

甘かった。口腔にひろがる味は、濁酒しか知らぬ民部にとって、異常なうまさであった。

「どうだな。ぶどう酒と申す酒だ」

主膳は、二杯目をすすめながら、

「幕府が国を閉ざすと、このような美酒を知らずに、人々は生涯をすごすことに相成る」

と、云った。

「お館は、海外交易をなされて居りますか？」

「うむ。やっては居るが、個人の力では、たかの知れたものだ。交易というものは、国を挙げてなさねばならぬ。なにゆえに、幕府が、国を閉ざしてしまったか、まことに、理解に苦しむ。そうは思わぬかな、お主？」

「まさしく、仰せの通りです」

幕府が、鎖国政策をとったのは、ひとえに、徳川家の安泰、という方針に基くものであった。

徳川幕府の開祖家康は、必ずしも、鎖国主義者ではなかった。

ただ、家康が作りあげた幕府の制度が、結果として、鎖国方針をとらざるを得なかったのである。

家康は、朝鮮と平和を復活させ、明国と交易し、治安にさしつかえのないかぎり、外国商船が、日本のどこへやって来ようと、すこしもいとわなかったのである。むしろ、歓迎したくらいであった。

関ガ原役後に、おらんだ船リーフデ号の水先案内人として日本へ来た三浦安針から、二十門の大砲をあがない、これの威力を、目のあたりにたしかめた家康は、外国との交易がいかに大切か、ということを、痛感していたのである。

だが――。

家康は、耶蘇教というものに対しては、大きな嫌悪の情を抱いていたのである。

耶蘇教が日本に入ることを阻止できるならば、家康は、交易の港を、日本の各処にひらくのに、やぶさかではなかった。げんに、家康は、浦賀をして、大きな交易港にする計画をすすめていた。

ところが、耶蘇教は、豊臣秀吉が禁教令を布いたにもかかわらず、非常な勢いで、日本全土にひろがろうとしていた。

同時に――。

スペインとポルトガルとオランダは、それぞれ、おのが利を得るために、宗教の派閥の争いまでを、日本へ持ち込んで来たのであった。

スペインは、オランダ人を海賊とののしり、オランダはスペイン人を国盗人とあざけり、互いに、家康に対して、対手がたを放逐するように、希望したのであった。

家康は、外国宣教師たちの反目、商船の敵対を逆に利用して、日本の富を増すことを、ふかく思慮した模様であった。

しかし、家康は、すでに、徳川家が天下を取るために、その生涯をついやし、老いていた。外国交易に、大きな計画をたて、これを実行するには、あまりに老齢であった。

そして、家康は、念願の豊臣家をあとかたもなく地上から抹殺することを成しとげておいて、逝った。

二代秀忠の世となって、まず、耶蘇教に対して、未だ曽て見ざる強硬な圧迫政策がとられた。

それにつれて、外国交易船の渡来に対する監視の目が、にわかに、きびしく光った。

交易が、おとろえるのは、当然であった。

寛永も数年を経た今日では、すでに、日本商人たちの海外交易は、極度に不自由なものになっていた。

神屋主膳は、遠くへ視線を置いて、云った。

「十年前までは、御朱印船は、二百艘に近い隆盛を誇って居った。外国の珍しい品は、つぎつぎともたらされて居った。……十年前までは、御朱印船は、毎年十艘ずつ、増加して居った。いまでは、毎年数艘ずつ、減って居る。なんというなさけなさであろう」

「……」

由比民部は、主膳の顔を、じっと、見つめて、まばたきもせぬ。

「日本全土には、主家を喪った浪士が、十数万もあふれて居る。なすすべもなく、明日のくらしの不安にさらされて居る。これらの浪士をして、外国へ出て行かせる政策を、どうして、公儀は、考えぬのか」

「お館が、公儀へ、願い出られることは、かないませんか？」

「去年、わしは、願い出た。しかし、老中がたから、にべもなく却下された」

主膳は、民部へ、視線をもどすと、

「公儀が、やろうとせぬ以上、われら個人で、やるよりほかはあるまい。どうだな？」

「……」

「わしは、二度、日本を出て行き、海の彼方の土地をまわって居る。日本人が、いかに、異邦で、活躍して居るか、この目で、見とどけて居る。随処に日本人の部落、市街ができて居る」

「……」

「お主が、もし、その目で、日本人の活躍ぶりを見とどければ、幕府の政策がいかに、ばかげたものであるか、よく判るであろう」

「お館――」

民部は、緊張した面持で、

「なぜ、それがしに対して、そのような話をされますか？」
「うむ――」
主膳は、微笑した。
「お主は、当家にごろごろして居る浪人衆の中で、一人だけ、きわだって、異質の出来と観た。お主自身も、おのれは、こやつらとはちがう、と思っているのであろう。どうだ？」
「……」
民部は、黙っていたが、まさしく、その通りであった。
遠く――大広間前の庭から、悲痛な絶鳴がひびいたのは、その時であった。
佐渡屋八郎と杉戸進五郎と――二刀流と一刀流の決闘で、どちらかの一人が、斬られて、結果が明らかになったのである。
しかし――。
この館の主人の眉宇には、なんの変化もあらわれなかった。
食客たちの行状については、全く関知しない模様であった。
由比民部も、そ知らぬふりをして、
「異邦で名を挙げている人々のお話をうかがえませぬか？」
と、所望していた。
「うむ。……きかせようか。お主の耳に入っている名では、どういう人物が居ろうか？」
「呂宋助左衛門などの名を、耳にして居ります」

「そうか。呂宋助左衛門などは、まず、一代の奇傑だな」
主膳は、語りはじめた。
豊臣秀吉が、天下を治めた頃、大名、大町人のあいだには、茶の湯が大流行であった。
しぜんに、諸家は、珍奇の茶器を所蔵するのが誇りになっていた。
人に自慢する品を手に入れるためには、千金をおしまず、中には、美女と交換する者まで現われていた。その茶器の中でも、最も珍奇、高価とされていたのは、高麗の茶碗と呂宋の壺であった。
たまたま――。
堺の納屋貸衆の筆頭である助左衛門が、呂宋へ渡航して、二年ぶりに帰国した時、この呂宋の壺を、十箇あまり、船底にころがしていたのであった。
堺の町は、特殊の民政を行い、市の自治機関を形成し、その権力をにぎっているのが、納屋貸衆であった。
納屋貸衆というのは、海岸に納屋を所有し、これを貸して取得とする町人たちを称し、これを会合衆三十六人とも呼んでいた。
戦乱に明け暮れる世であった。
堺商人たちは、会合衆三十六人を中心に、おびただしい金をたくわえて、主家を喪った浪人をやとい、外国から大砲、鉄砲を仕入れ、ここだけは、いかなる軍勢も寄せつけぬふしぎな一国をつくり上げていた。

その気概はなみなみならぬものがあり、織田信長が、近畿地方を平定した時も、堺商人は、三好氏の三人衆をたすけて、反抗をこころみている。

助左衛門は、その納屋貸衆の中から現われ、三十になった頃には、その筆頭の座についていた人物であった。

呂宋の壺を携えて帰国した助左衛門に対して、諸侯、豪商らが、これをゆずり受けようと、殺到して来たのは、いうまでもなかった。

助左衛門は、まず、秀吉に、そのうちの二箇をさし出し、その他ものこらず、大名衆及び京大坂の大町人たちに配った。

それから、二年を経て、再び呂宋に渡った助左衛門は、さらに、百箇の壺を持ちかえった。

しかし、こんどは、一箇千金でも、容易にゆずらなかった。

当然——。

呂宋の壺には、途方もない高値がついた。

助左衛門が、得た巨利は、想像をこえたもののようであった。

その金を使って、助左衛門は、衣食住にあらゆるぜいたくをしてみせた。秀吉が豪華を誇った聚楽第、桃山城にも比肩する建物を、堺の町はずれに築き、すべての部屋に七宝をちりばめ、秀吉の殊寵を受けていた狩野永徳をくどきおとして、襖絵を描かせ、百余人の美女を日本全土からあつめて、これを、毎夜交替で、伽をさせたものであった。

一商人が、太閤と豪奢をあらそったのである。僭上の沙汰として、憎まれないはずがなかった。

やがて、助左衛門は、秀吉の忌諱にふれ、断罪の命を下されるのは、時期の問題のみとなった。

秀吉を激昂させた直接の原因は、助左衛門の放言にある、といわれている。

ある時、大安寺住職と談合した助左衛門は、住職から、

「呂宋の壺を眺めるに、愚僧などは、さしたる品とも思え申さぬが、呂宋国では、どうであろうか？」

と、問われた。

すると、助左衛門は、破顔して、

「和上の申される通り、あれは、駄壺でござる。呂宋では、あの壺は、市の路上で、いくらでも売って居り、貧家では、女子や小児の小便の器にもして居ります。茶壺などにするしろものではござらぬ」

と、こたえた。

これが、秀吉の耳に、きこえたのである。

数千両の高値を呼んだ呂宋の壺が、実は、その国では、小便壺であった、ときかされては、激昂するのは、当然である。

助左衛門は秀吉の処断が近い、とさとるや、手を拱いて死を待つ愚をなすものではなかった。

豪奢をきわめた居宅を、その珍奇の調度もろとも、そっくり、大安寺に寄進してしまい、九つの倉にたくわえた金銀財宝を、ことごとく故旧に散じてしまうと、ただ一艘の船に乗って、海の彼方に消え去ったのであった。

「助左衛門のような商人こそ、まさしく、日本男児の面目を発揮したものと申せる」

主膳は、云った。

「助左衛門が、故国の山河をあとにしたのは、慶長十二年であったな。呂宋には、助左衛門がつくった日本人の町があったのだ。日本人は、およそ、三千人が住んでいた、と申す」

その言葉をきいて、若い浪人者の双眸が、かがやいた。

「そのような日本人の町は、異邦の各処に、ある、と申されますか？」

「うむ、ある。しゃむろにも、安南にも、いたるところにある」

「……！」

「どうだな、行ってみたくはないか？」

「行きたいと存じます」

「日本は狭すぎる。海の彼方は、途方もなくひろい。大志をとげるのは、異邦の地でなければならぬ」

「……」

「このたびの公儀の鎖国令のこと、お主も、ききおよんで居ろう」

主膳は、云った。

「はい」

民部は、うなずいた。

「公儀の許した奉書船以外には、日本人が、海外へ渡航することは、絶対禁止された。そのうち、奉書船さえも廃止されるであろうな」

「……」

民部は、主膳の面上にみなぎる憤りの色を、じっと、見つめた。

「おそらく、このままでは、異邦に在る者は、再び日本へは、帰れなくなるであろう。出向くことも禁止され、帰ることも禁じられるならば、呂宋、しゃむろ、安南などにつくられた日本町の人々は、どうなる？　交易の道がとだえてしまえば、それら日本人たちは、母国に見すてられたあわれな徒党にすぎなくなる。なんというむざんか！」

「……」

「と、憤ったところで、今更、公儀の方針を変えさせるすべもない。しかし、禁令を破って、日本を出て行く勇気ある者が、いなくなることは、いかにも、さびしい。わしは、わし個人の力で、次つぎに、異邦の日本町へ、あたらしい日本人を送りとどける道をひらいてやろう、と決意いたして居る。どうだな？」

「それがしも、その一人に、お加え下さいますか？」

「お主を見込んで、わしの片腕になってもらえるならば、と思う」

主膳は、そこで、ちょっと沈黙を置いてから、

「山田仁左衛門長政、という人物が居る」
と、云った。
「長政は、いまは、しゃむろに於て、日本人衆の頭領となり、十万石ばかりの領主となって居る」
主膳は、山田長政について、語りはじめた。
長政は、尾張の郷士の家の出であった。戦火にわが家が焼かれ、家族も滅びると、流浪の旅に出て、十年余を山野に起き伏して、やがて、駿府に現われ、そこで、長崎商人と知りあい、異邦の話を聞いて、志を遠く海の彼方の土地へ馳せた。
主膳が、知りあったのは、その頃であった。
六尺ゆたかの巨漢で、見るからに豪放の若者であった。
主膳は、長政の志をきくと、交易船で異邦へ送ることを約束した。
長政は、この平家館に食客として、半年ばかりすごしたのち、堺の港から交易船に乗って行った。
そして、再び、還っては来なかった。
長政の消息が、主膳にもたらされたのは、それから、十年後であった。
山田仁左衛門長政は、しゃむろに在って、王に封じられる立身ぶりをみせていたのである。
主膳の片腕である太田次郎右衛門が、それを見とどけて来た。
太田次郎右衛門は、大冤、しゃむろ、天竺をまわって、日本へ帰る予定であった。

たまたま、大冤の日本町へ立寄った時であった。
しゃむろから帰って来た大冤人に会うと、
「しゃむろのイビルの王が、もし、日本から交易船がやって来たならば、ぜひ、しゃむろに立寄るように、伝えて欲しい、と云われた」
と、行くことをすすめられたのであった。
太田次郎右衛門は、なぜ王がそのような伝言をしたのか、あやしみつつも、船をしゃむろへまわしてみることにした。
日本船が、しゃむろのイビルの港に入ると、役人が待ちかねていたように、次郎右衛門を、王城へ案内した。
王城までは、三日の道程であったが、その道中、次郎右衛門は、さながら、国賓の使者のように、厚遇された。
イビルの王城は、目もくらむような宏壮な構えで、営中いたるところに、警備の兵が、武器を立てて、ならんでいた。
次郎右衛門は、大広間にみちびかれた。
その豪奢なつくりは、生れてはじめて、こうした宮殿に入った次郎右衛門を、極度に緊張させた。
正面上座の、金色にかがやく椅子にゆったりと腰かけた王に対して、次郎右衛門は、まぶしくて、視線があげられなかった。

左右には、侍官が数十人も、佇立していた。

次郎右衛門が、うやうやしく拝礼すると、王は、

「次郎右衛門、なつかしいぞ」

と、云った。

はっとなって、顔をあげた次郎右衛門は、破顔した王が、まぎれもなく、平家館の食客であった山田仁左衛門長政であるのをみとめて、

「おお！」

と、声をあげたことだった。

「貴方がこのイビルの王?!」

「そうだ。……日本人山田長政が、王者だ」

長政は、声をたてて笑った。

次郎右衛門は、夢でも見ているような心地であった。

「次郎右衛門、この城には、日本人が七百人居るぞ。いずれも、一騎当千の武辺だ。わしは、日本浪士を率いて、しゃむろに武名をとどろかして、ついに、この城をわがものにした」

長政は、次郎右衛門を、別館へともなって、酒席をもうけ、饗応に善美をつくしながら、ここまで立身した経緯を語ってきかせた。

ここしゃむろには、天正・文禄年間から、すでに、日本人が多数在留して居り、いずれも、主家を喪って、日本をすてた浪士たちであった。

王室にやとわれて、陸に海に、外寇をふせぐ任務をはたし、日本人の武勇は、かくれもないものになっていた。

慶長年間には、さらに、彼我の交易船が往来して、日本人がぞくぞくと渡って来た。

当時――。

しゃむろの国王は、エーカー・トサロットであった。国王の親衛隊長を、スタッス親王、といい、親王の旗本は、すべて、日本人浪士であった、という。

国王の近習の一人に、オークヤー・ナイワイという邪知に富む者がいた。ナイワイは、かねてより、スタッス親王が親衛隊長であるのをねたんでいた。

ある時、ナイワイは、国王にむかい、

「スタッス親王は、王位をのぞむ謀叛心があります」

と、告げた。

その頃、国王は、神経を病み、常にイライラしていた。

ナイワイのたくみな讒言を信じた国王は、スタッス親王を捕縛し、その弁明もきかずに、極刑に処してしまった。

これが、内乱のきっかけになった。

やがて、国王は、発狂し、群臣は、相謀って、プラ・シーシン・ピモンタムという高僧を、招いて、僧籍より起して、王位に即かしめた。

ピモンタムは、アユチャの東北に当るプラパード山の岩山に、釈迦如来の足跡を発見した、

というので有名な僧侶であった。

僧籍を脱して、第二十二世の国王になるや、国民は、一人のこらず、渇仰随喜した。

ソンタム王と称し、アユチャの第二王朝の第一世となった。

ソンタム王は、王位に即くや、まずはじめに、スタッス親王を死にいたらしめた悪逆の徒ナイワイを刑戮した。

しかし、この時、ナイワイが味方にしていた日本人浪士二百八十人が、突如として、反旗をひるがえして、王宮内に押し入った。

スタッス親王は、親衛隊長として必ずしも立派な人物ではなかったので、日本人浪士らは、いつの間にか、独立隊のような立場をとっていたのである。

王宮に押し入った日本人浪士隊は、ソンタム王にせまって、さまざまの条件を提出し、承認させ、王の指を切って、血判せしめた。

日本人浪士隊の要求は——。

かねて、日本人に反感を抱いている四人の高官をひき渡すこと、日本人に住居や商業の特権を与えること、などであった。

日本人浪士隊は、その四人の高官の首をはねたのち、アユチャを包囲して、わがもの顔に横行した。

同時に——。

各地で、反乱が起った。

日本人浪士隊の傍若無人の振舞いをきっかけにして、さんたんたる状態に陥ったアユチャ王朝は、毒を制するには毒にしかず、と考え、あらたに、日本人浪士によって軍隊を組織することにした。

しゃむろとごあ国（六昆国）は多年、兵火を交えていたが、その国境の戦闘には、多くの日本人浪士がやとわれて、従軍していた。

その一人に、山田長政がいた。

ソンタム王は、山田長政を国境より呼びもどして、同胞である日本人浪士隊の横暴を、とりしずめてくれるようにたのんだ。

長政は、王命を受けるや、三十余の日本人浪士をひきつれて、アユチャに馳せつけて来た。

しかし、そこで、同胞相食む戦いは起らなかった。

長政の熱弁が、アユチャを包囲した二百八十人の日本人浪士を抑えたのである。

長政は、かれらをおのが麾下に加えると、近衛隊を組織し、王宮の守護にあたることになった。

ソンタム王は、長政を信頼した。僧侶の出である王は、兵略を用いる器量はなかったので、その全権を長政に与えたのであった。

近衛隊長となった長政の働きはめざましかった。しゃむろ東北地方のロアング・プラバーン王が、北オロッププリまで侵入して来るや、これを、三方から包囲して、全滅せしめ、さらに、転じて、ルアング・プラバング軍を国外へ追い出し、国内から、王に反逆する徒を一

人のこらず払ってしまった。

長政は、軍功によって、元和七年はオーク・クンに、その二年後にはオーク・ロアングに、そして、五年の後には、オーク・ヤー・セーナー・ビモックという地位にのぼっていた。

ソンタム王は、王弟シイシン親王を総督にしていたが、長政をさらに、その上に置いたのである。いかに信頼厚かったか、これで、判る。

いまや、山田長政は、しゃむろに於て、ソンタム王に次ぐ権勢者であった。

「主家をうしなって、浪々の身を送る者の中には、大きな器量をそなえた偉丈夫が、すくなくはない。それらの偉丈夫をして、異邦の土地へ渡らせんか、第二、第三の山田長政が、出現いたすに相違ない」

主膳は、云った。

前にかしこまった由比民部は、山田長政の話をきくうちに、心の中で、大きく夢が広がっていた。

駿河国由比宿の紺屋のせがれに生れた民部は、物心ついた頃から、大人をおどろかせる秀れた頭脳ぶりを示して来たのであった。

紺屋を継ぐ人間ではなかった。

十四歳の時、不意に、家を出た時、もう、その胸中は、大きな野望に燃えたっていた。

京都へ出た民部は、楠不伝という軍学者の門に入り、みるみる頭角をあらわしたのであった。

爾来、民部が現われるところ、すべての人が、その頭脳に舌を巻いたことだった。

いかなる考えが起ったか、民部は、飄然として、京都を去り、二年あまり諸国放浪の後、この伊丹の平家館に、食客となったのである。

「お館――」

「うむ」

「それがしに、ご期待を下さいますこと、厚くお礼を申し上げます。必ず、ご期待に添いますよう、ここに誓いまする」

そう云って、民部は、頭を下げた。

人それぞれ

街道は、今日も、春のほこりが、舞い立っていた。

陽ざしは、もうかなり暑いものになっている。

天堂寺辰馬は、かなりぶざまな恰好で、そのほこりの中を歩いていた。

尻からげして、毛脛をむき出している。のみならず、かなり片足をひいている。腰に受けた打撲傷が、まだなおりきってはいなかった。

大坂へ出れば、織田重四郎にめぐり会えるのではあるまいか。そんな甚だ漠然とした目的

しか前途にはなかった。

どうやら、独立独歩の生きかたは、この男には、できないようであった。

「遠いな、大坂までは――」

断崖をころがり落ちた時、重四郎からもらった金を、どこかへ失ってしまって、いまは全くの無一文であった。

空腹であった。

この空腹をかかえて、大坂まで歩いて行くのは、不可能であった。

「合力をするか」

そうつぶやいた時であった。

突如、彼方の路上で、数人がもつれ合う光景が起った。

辰馬は、その争いを仲裁すれば、路銀調達の方便になるかも知れぬ、と思い、足をはやめた。

近づいてみて、がっかりした。

自分と同様の浪人者が、土地の破落戸ていの男たち四五人に包囲され、あろうことか、地べたに坐って、両手をついていた。

「なんだ、野郎！　この腰抜け！　立て！　てめえだって、もとはれっきとしたさむれえだろうじゃねえか。立って、刀を抜きやがれ！」

喚きたてられても、浪人者は、べったりと、蛙のように地べたにはりついて、

「平に……ご容赦を――」

と、詫びるばかりであった。

「ちえっ！　くそっ！　世の中もおしめえだぞ。さむれえが、おれたちのような人間の屑に、頭を下げるたァ、もう、なんとも、話にならねえ」

一人が、いきなり、浪人者の腰の差料を、鞘ごと、抜きとった。

それでも、浪人者は、抵抗せずに、俯向いたままであった。

「なんだ、これァ――。竹光じゃねえか」

抜いてみて、あきれかえって、投げかえした。

破落戸たちが、ののしるのさえばからしくなったのであろう、立去ってしまうと、浪人者は、竹光を鞘に納めて、立ち上り、着物の土をはらった。

それから、二間むこうに立っている辰馬を、眺めて、なんとなく、にやっとした。

まだ二十代も半ばの、どこといって別に特徴もない男であった。

辰馬は、歩み寄ると、

「お主、そこまで零落しながら、なぜ、まだ武士のなりをして居るのだ？」

と、たずねた。

すると、浪人者は、意外なことを質問された、という表情で、

「身共は、武士ゆえ武士のなりをいたして居り申す。それがどうしていかんのでござるか？」

「お主は、もう、武士とは申せぬではないか。差料は竹光、破落戸どもに脅かされても、立

ち向う度胸もない。見栄も外聞もはばからずに、土下座して、彼奴らに詫びを入れるとは、面目を失った、というもおろかな振舞いではないか」

「それでは、破落戸どもと喧嘩沙汰を起すのが、武士の面目だ、と申されるか」

「すくなくとも、お主は、武士のなりをして居る資格はない」

辰馬は、いまいましく、吐き出した。

「武士も人間でござる。生きのびるためには、相なるべくは、無益ないさかいは避けるのが賢明と申すもの――」

「お主、差料を竹光にして、大きな口はたたけぬはずだぞ」

「いや、これは、わざと竹光にかえているのでござる」

「わざと？　お主、貧窮して、中身を売ったのではないのか？」

「ははは……」

浪人者は、笑い声をたてた。

「くらしに追いつめられて、刀を売ったのなら、もはや武士ではござるまい。無益のいさかいを起さぬために、わざと、竹光をおびているのでござるわい。竹光と知れば、喧嘩をふっかけて来る対手も、あの破落戸どもがそのいい例で、さっさと立去ってくれ申す。これも、身を守るひとつの方便と申せる」

「お主、腕に自信がないからだろう」

「それが、むかしは、一刀流を誇示したこともあるのでござる」

「まことか？」

とたん――。

辰馬があっと思った時には、浪人者は、辰馬の腰から一刀を抜きとって、一歩さがるや、ピタリと構えていた。

「うむ！」

辰馬は、その構えを眺めて、大きく目を見はった。

白刃を奪うすばやさもさることながら、その構えには、みじんの隙もなかった。

辰馬は、唖然となった。

「どういうのだ、これは？」

「べつに、どういうわけのものでもござらぬ。二人や三人は斬れる腕前を、お見せしたまでのこと――」

浪人者は、そう云って、刀を辰馬に返した。

辰馬は、首を振って、

「あきれたことだ。……おれは、天堂寺辰馬と申す。お主は？」

「金井半兵衛、と申す。下の浪人でござる」

浪人者は、上中下の三段階にわかれている。

上の浪人は、先祖は戦場で手柄をたて、系図も正しく、何の某と名を、人に知られた者で、主人からかなりの知行をもらっていたが、それを不服として自分からいとまをとった者を指

す。

中の浪人というのは、例えば近習役などつとめていたのが、何かの落度によって、致仕したのをいい、べつにとりたてていう程の前歴もなく、しだいに貧しくなっている者を指す。下の浪人とは、先祖代々の浪人で、生れてまだ一度も主取りをしたことのない者である。

「下の浪人というと、お主、おれと同様、無一文か？」

辰馬は、たずねた。

「いや――」

金井半兵衛と名のる浪人者は、にやりと笑って、ポンと腹をたたいてみせた。

「ここに、百両ばかり所持いたす」

「百両！」

辰馬は、目を剝いた。

「まことか？」

「百両ほどの金子で、なにを、そのようにおどろかれる？」

「おどろくのがあたりまえではないか。見かけたところ、尾羽打ち枯らし、刀も竹光、ときては、一両はおろか、小粒のひとつも持って居るまい、と思わざるを得ないではないか。それを、百両も懐中にして居るとは、あきれはてたことだ」

辰馬は、ふうっ、と吐息した。

「貴殿は、身共を、武士の面目を持たぬ、とさげすまれたが、貴殿の方こそ、百両ぐらいの金におどろくようでは、武士の面目など一向に、持ち合さぬと申せる」

「イヤなことを云ってくれるな。貧窮には、いい加減あきあきして居るのだ。ところで、少少あさましいことを訊くが、お主、どうして、そんな大金を持って居るのだ？」

「武士のたしなみでござる」

「それは、判って居る。どうやって、手に入れたか――それを、訊いて居るんだ」

「貯蓄いたした」

金井半兵衛は、あっさりとこたえた。

「どうやって？」

「商人どもに、あきない上の知恵をさずけてやったり、郷士の家の家相を観てやったり……、その礼金を、ため申した」

「ふうん」

「人間には、それぞれ、盲点というものがござる」

「盲点？」

「左様――、大名には大名の、商人には商人の、それぞれ、おのが立場を必死に守ろうとすればするほど、盲点を露呈つかまつる。……たとえば、おもしろい程あきないが繁昌いたして金を儲けた商人は、その金を他人に取られまいとして、周囲の者を猜疑の目で見まわすくらいあさましゅう相成るが、同時に一方では、何やら怪しげな邪神を信仰しはじめ、これには、せっせと、多額の寄進をする。これすなわち、盲点でござるな」

「ふむ――」
「この盲点を衝いてやれば、百両や二百両の金子を礼に取ることぐらい、なんの造作もないこと――」
「そう、あっさりと云うな」
辰馬は、首を振った。
「こっちは、一日見当一両か二両で、生命がけの用心棒をつとめたりいたして居る身だ。お主の話をきいて居ると、何やら、小ばかにされたような気分に相成る」
「人間の頭脳の出来、不出来の差でござろう」
金井半兵衛は、こともなげに云ってのけた。
なんとなく、天堂寺辰馬と金井半兵衛は、東へ向って、道中して行くことになった。
「お主は、下の浪人、と申して居ったが、先祖代々の浪人か？」
「いや、父は、どこやらの大大名らしゅうござる」
「大大名？」
辰馬は、また、ばかにされた不快な気持になった。
「大大名とは、どういうのだ？」
「ある時、その大大名が、馬責めに出て、とある百姓家へ、白湯を所望に立ち寄った、と思われい。給仕をしたのが、可愛らしい小娘であったので、つい、手をつけ申した」
「それで、生れたのが、お主だというのか」

「左様でござる」
「落胤ではないか。名のり出れば、一万石や二万石はもらえるではないか」
「証拠がござらぬ」
「ふうん――」
「たとえ証拠があっても、名のり出るのは、まっぴらでござる」
「どうしてだ？　お主の論旨でゆけば、名のり出て、落胤とみとめられたあかつきは、その大藩を、わがものにする知恵が働くのではないのか」
「身共は、立身出世をのぞんでは居り申さぬ」
「なんだと？」
辰馬は、いちいち、かるくはねつけられるので、いまいましくなった。
「立身出世をのぞまぬ人間が、どこに居る？　ごまかすな」
「他人はいざ知らず、身共は、すこしも、そんな野望は持ち申さぬ」
「わからん。その若さで、浮世のことが、すべて、判りきっているような面をするな」
「生涯を面白く愉しくすごすには、何ものにも束縛されぬことを第一義といたさねばならぬ、と心得申す」
「……」
辰馬は、半兵衛の顔を視た。
まだ二十五六歳に相違ないが、そのおちつきはらった表情には、悟りをひらいた蟬脱の僧

侶のようなおもむきがある。

「起きたい時に起き、寝たい時に寝、旅情を催せば、ぶらりと立ち出て、行先もきめずに歩いて行く。このような世すごしこそ、まことの人生ではござるまいか」

「知恵がありあまって、金をつくるのに不自由せぬという自信があればだな」

「そういうわけでござるな」

半兵衛の口調や言葉づかいは、どうも、辰馬にとって、気に食わなかった。

しかし、その云うことは、いちいち、もっともであり、反対する意見は、辰馬の頭には、思いうかんでは来なかった。

「ともかく！」

辰馬は、いささか、やけくそ気味に、大声をあげた。

「おれは、目下、一文無しだ。何分よろしく、たのむ」

「承知いたした」

半兵衛は、笑って、うなずいてみせた。

姫路より四里——加古川宿に昏れがた着くと、金井半兵衛は、

「ここに、三四日、逗留するかな」

と、つぶやいた。

「こんなところで、どうするのだ？」

辰馬は、けげんに、半兵衛を視た。

「身共の金もうけぶりを見たい、と云っていたな」

「うむ」

「とりあえず、この加古川宿で、ひとつ、見せよう」

半兵衛は、そう云ってから、しきりにあたりを物色していたが、

「あれがいい」

と、うなずいた。

古びた阿弥陀堂が、辻わきに建っているのに、目をつけたのである。

辰馬は、半兵衛が、阿弥陀堂に入り込んで、しばらく出て来ないので、所在なく、街道上に、腕ぐみして立っていた。

通行人は、いずれも、貧しい身なりをしている。

貧乏が、日本中を掩うているように思える。

戦乱の時代は、遠く去り、天下は全くの泰平になったが、さて、万民がその泰平を愉しむというわけにはゆかぬ。

徳川幕府の下にあって、わが世の春をうたっているのは、大町人ばかりである。

大大名といえども、参覲交代はじめ、江戸城やら東照宮やらの修築、街道普請、河川工事などの奉仕で、みるみる軍資金をつかいはたして、内証は苦しくなっている。

武士たるものが、目を金銭にそそぎ、利欲の念に耽るのは、最もいやしむべきこと、とされていた時代である。

辰馬は、江戸に在った頃、次のような例を見ている。

甲州浪人がいた。裏店に一人ずまいして、しきりに、大名に随身をもとめていたが、意を果さず、やがて、餓死同然の窮死をとげた。

死後、残された鎧櫃をひらいたところ、金子百両を封じて軍用金と記し、具足とともに入れてあった。

これが、武士の意気地であり、面目というものであったが、町人たちから見れば、甚だ、納得しがたい料簡というべきであった。

系図一巻、槍一筋を、最も貴重の品として、携えて、諸国を放浪して、良主を求める浪人たちも、ようやく、貧窮に疲れて来ていたが、なお、おのれは町人百姓とはちがう、と意地をたてている。

『可笑記』という記録本に――。

「一歳浪人払い、という御法度あり。国、ところ、小路、村、里までを、きびしくふれまわりて、一夜の宿をさえ借さず。されば諸浪人、ゆかりをただし、知音を頼りに、立寄らんとすれば、主人よりの法度をおそるるか、日頃のよしみを忘れて、事とう人もなし。侍が侍をたのむは、非常の事、時節相応の諸人の心中、行儀、是非に及ばず。さあれば、老いたる親、幼なき子、悩める妻、見苦しき荷物を肩にかけ、こなたかなたへと、まどいて、門にたたずみ、戸口にさまよい、嘆きかなしむさま、げに哀れなるかな……」。

ひとたび、主家を喪った武士の惨めさは、しかし、まだ貧しい百姓町人にくらべれば、な

お一縷の希望がなくはなかった。

どういうきっかけで、随身できるか知れなかった。

最下層にうごめく百姓町人らには、その希望はなかった。

民は国の宝、農業は立国の大本、と儒教は説く。

幕府は、たしかに、農業を尊んで、その階級の区分にも、士農工商と、農夫を、職人商人の上に置いていた。しかし、百姓を蔑視することに於ては、宛然動物扱いであった。

「百姓は愚かなるものに候えば」

とか、

「百姓は分別もなく先きの考えもなきものに候えば」

という言葉が、あらゆる書物や手紙に記されている。

百姓を人間として尊重する意志など、為政者には、毛頭みじんもなかったのである。

庄屋・名主ならびにその家族だけが、絹、紬をまとうのをゆるされ、脇百姓は布木綿にかぎられていた。襟や帯まで、絹ものを用うのを禁じられていた。染色も、紫・紅梅の二色は禁じられていた。袖も裄も、長いのは、布帛をむだに費やすという意味で、止められていた。

男女ともに、布子という袖も裾もみじかいきものをつけ、縄の帯をしめ、藁で髪をたばねる。それが、実際の百姓のすがたであった。

食物は、みだりに米飯を摂るのは、許されなかった。麦、粟、稗、菜、大根が常食であった。

百姓は、市に出て来ても、酒を買ってもどることは、禁じられていた。奴隷というほかはなかった。

いま――。

辰馬の目の前を通りすぎて行く百姓たちの、乞食同様のすがたは、天下泰平とは、なんのかかわりもない。

尤も――。

辰馬自身は、かれらを眺めても、べつに、この世の矛盾した仕組みに、義憤をおぼえる次第ではない。

ただ、

――こんな貧乏な宿場町で、なんの金もうけか？

と、金井半兵衛の肚の中でどんな思案が成っているのか、見当もつかぬままに、小首をかしげている。

やがて――。

阿弥陀堂を出て来た半兵衛が、

「これで、よし――」

と、にやりとしてみせた。

「どうするというのだ？」

「まあ、見ていてもらおう」

とある旅籠をえらんで、二人は、あがった。

夕餉の際、半兵衛は、下女に命じて、板きれを持って来させた。

そして、それに、筆太に、左のごとく記した。

『よろず悩みごとある者は、来れ。即座に、悩みをとりのぞくべし。

天下救世主　金井半兵衛』

辰馬は、その板きれの文章をのぞき込んで、あきれた。

「大層もなく、ほらをふくものではないか。よろず悩みごとを、ぜんぶ、片づけてやる、とは！　いやはや、おそれ入ったものだ」

「世をすごす上に、最も必要なのは、自信というものではあるまいか」

金井半兵衛は、そう云って、明るい笑い声をたてた。

番頭を呼んで、その木札を、檐下にぶら下げておいてくれ、とたのむと、番頭もまた、辰馬と同様の表情をした。

「てまえどもでは、一向にかまいませぬが、貴方様ご自身が、当惑なさる場合が起るのでは……？」

「懸念に及ばぬ。孫子を学んで、臨機応変の妙策を身につけて居る。ともかく、人目につくように、ぶらさげておいてもらおう」

番頭は、承知して、木札を持って、出て行った。

「本当に自信があるのか？　よろず悩みごと、と申せば、病いもあるし、借金で首がまわら

ぬことや、親子夫婦の不和や、家に亡霊が出るとか……いろいろあるが――」

辰馬は、半兵衛を、見まもった。

「左様、浮世に生きている上からは、上は天子から下は乞食にいたるまで、悩みを持たぬ人間は居らぬな」

「相談にやって来るのは、自身でどうにも解決がつかずに、弱りはてている手輩だろう。それらの苦悩を、いちいち、さばくことが、いったい、可能かのう」

「可能だな」

半兵衛は、平然としてこたえた。

半刻も経った頃あいであった。

番頭が姿をみせて、

「あるじが、ちょっと、お目にかかり度いと申して居りますが――」

と、云った。

「来てもらおう」

「いえ、あるじは、ここ二年ばかり、病み臥しておりますので、おそれ入りますが、居間の方まで、おいでねがえませぬか？」

それをきくと、半兵衛は、辰馬をかえりみて、にやりとした。

「悩みごとを訴える第一番目の人間は、この家のあるじであったな」

半兵衛が、番頭に案内させて、出て行くと、辰馬は、

――やれやれ。

と、首を振った。

金井半兵衛という男は、途方もない大山師のような気がした。

――あのような大山師と行を倶にしていると、そのうち、こっちもまきぞえをくらって、とんだ災難に遭うのかも知れぬ。

そんな不安もおぼえた。

いまのうちに、別れた方がいい、と思えるのだが、あいにく、辰馬は、懐中無一文であった。

おいそれと、路銀をつくる才覚もあてもないからには、やむを得ず、半兵衛について道中するよりほかに、すべはなかった。

半兵衛がもどって来たのは、一刻も過ぎてからであった。

寝そべっていた辰馬は、はね起きて、

「どうした？」

と、興味をもって、問うた。

「うむ――」

半兵衛は、あぐらをかくと、宙へ眼眸を置いて、にやにやと笑い出した。

「なんだ？　どうしたというのだ？」

「この旅籠の親爺は、べつに寝ていなければならぬほどの病いではないのだ。わざと、寝て

居るのだ」
「にせ病いをつくらねばならぬ理由があるのか？」
「尋問しているうちに、その理由が、判った。金のためだ」
「金？」
「しこたま、ため込んで居るらしい。もしかすれば、四五千両もため込んで居るのであろう。もとより、旅籠などで、ため込める金高ではない。前身は、相当の悪党であったろう。いまは、ひからびて、皺だらけだが、顔や手に、刀傷ものこって居るし、目つきだけは、なごりをとどめて鋭く光っている。七十を越えて、妻子もなく、孤独なくらしだ。こういう爺さんは、どういうものか、おそるべき守銭奴に相成る。いわば、一種のきちがいに相成る。まわりの者がすべて、自分の金をねらっているのではなかろうか、という猜疑心を起し、不安がつきまとう」
「……」
辰馬は、固唾をのんで、半兵衛を見まもった。
「そこで、爺さんは、金を守るために、わざと、病人になって、居間に寝ついている、という次第だな。おそらく、金は、床の下にでも、かくしてあるのだろう」
「爺さんは、いったい、お主に、何を相談しかけて来たのだ？」
「寝たままで、長生きしたいが、そのすべを教えてくれ、と申したな」
「で、お主は、なんと、こたえたのだ？」

「爺さんに、いろいろ尋問しているうちに、ため込んだ金のことが、判ったので、爺さんは、心中に四六時中、ある不安を抱いて居るであろう、と指摘してやった」
「ふむ、それで？」
「爺さんは、狼狽した。わしは、それが、おもしろうて、さんざ、からかってやった。爺さんめ、とうとう、悩り出した。しかし、その不安を抱いて居るかぎり、あと三年と生命は保つまい、と云ってやると、がっくりし居ったな」
「お主、爺さんは、たしかに、四五千両も持っている、とにらんだか？」
「あるいは、一万両以上かも知れぬ」
半兵衛に云われて、辰馬は、ごくりと、生唾をのみ込んだ。
「お主、目の色が変って居るぞ」
半兵衛にからかわれて、辰馬は、あわてて、首を振った。
「な、なんの……」
「邪心を起すのは、いかん。悪銭は、身につかぬ」
半兵衛は、何気ない口調で、たしなめた。
たった一枚の板片が、翌朝から、その旅籠の前に、行列をなすほどの人を呼んだ。
世の中には、いかに悩みごとを持っている人間が多いか、という事実が、明らかとなった。
娘に背負われた婆さんもいたし、小ずるそうな小商人、ともに暗い顔つきの若い夫婦者、地まわり体の目つきの悪い奴、幼い子を四人もつれた貧しい百姓女など……。

金井半兵衛は、それらの訴え人を、前にして、いささか誇張していえば、快刀乱麻を断つがごとき明快な解答をしてみせた。

かたわらで眺める辰馬は、しばしば、心中で、感嘆のうなりをあげた。

訴え人たちは、それぞれ満足して、帰って行った。謝礼は、ほんのひとにぎりの米であったり、菜園ものであったり、草鞋であったり、古煙管であったりした。半兵衛の方からは、いくら出せとは請求しなかった。

病いのこと、おのが人相のこと、家の方位のこと、何やらに祟られていること、博奕に勝つ方法、商いのコツなど、質問は千差万別であったにも拘らず、半兵衛は、森羅万象ことごとく通じているようなおちつきはらった態度で、解答を呉れてみせたのであった。

夕餉の時刻にいたって、なお数人が詰めかけているのを明日にことわってから、半兵衛は、辰馬に、

「どうだ。これだけの貢ぎものがあれば、十日は寝てくらせるだろう」

と、笑った。

「感服いたした。お主は、まさしく天才という奴だ」

辰馬は、正直に、云った。

番頭が入って来て、

「あるじが、明日からは、奥の座敷へお移り下さるように、と申して居ります」

と、告げた。

奥の座敷は、本陣や脇本陣が満員の際、名の通った武士を泊めるために、つねに空けてあったのである。

「旗本大身の扱いだな」

半兵衛は、それが、当然のような顔をして、

「眉目良い娘を二人ばかり、近所からえらんで、手伝わせてもらえぬか」

と、所望した。

「かしこまりました」

番頭は、承知して、ひきさがって行った。

「お主、当分、ここへ腰をおちつけて、看板をかかげたらどうだ？」

「いや、衆生済度の慈悲心があるのではないし、これで金子を集める料簡でもない。ただのひまつぶしにすぎぬ。三日もやれば、いい加減うんざりする」

半兵衛は、こたえた。

その夜——。

牀に就いてから、辰馬は、なんとなく、ねむりそびれて、闇にまなこをひらいているうちに、この旅籠の親爺が、床の下にかくしているであろう莫大な金子のことが、脳裡に、ひっかかって来た。

——いったい、どれくらい、ため込んだのであろう？

次の日もまた、早朝から、悩みごとを訴える人が、続々と、旅籠へつめかけて来た。

さらに、午後になると、駕籠をもって迎えに来る家もあった。

半兵衛は、出向くことは断わっていたが、この加古川きっての旧家である大名主の家から、鄭重な態度で、迎えが来ると、ようやく、腰を上げた。

「千両箱を駕籠にのせて、もどって来るのではないか」

辰馬が、云うと、半兵衛は、笑って、

「この地方には、賓客をもてなすに、美しい村娘を夜伽に出すならわしがある。今夜は、たぶんもどらぬだろう」

と、云いのこした。

その言葉通り、夜に入っても、半兵衛は、戻って来なかった。

亥刻（午後十時）近くになった頃あいであった。

上等の座敷に仰臥していた辰馬は、むっくりと起き上った。

形相が変っていた。

差料をつかんで、つッ立った時、ちょっとためらいの色を示したが、

――ええい！　くそ、やっつけろ！

と、おのれをけしかけて、廊下へ出た。

この旅籠のあるじが寝ている居間は、別棟になって居り、渡廊下でつないである。

あたりに全神経をくばりつつ、足音をしのばせて、その渡廊下を渡って行く辰馬は、流石に、心臓を早鐘のように打たせていた。

無頼の行状をつみかさねて来た男であったが、まだ、押込み強盗はやったことはなかった。

半兵衛の推測によれば、この旅籠のあるじは、床下に、一万両もの大金をかくして、守銭奴になっている、という。のみならず、その金は、律義なあきないによって蓄えたものではなく、前身は相当の悪党と思われるゆえ、掠奪盗取によるに相違ない。

それならば、これを、こっちの手に移したところで、さまで、良心のとがめにもなるまい。

辰馬は、ずっと、考えつづけていて、ついに、ほぞをかためたのである。

渡廊下のつきあたりは、頑丈な板戸になって居り、錠前で、閉じられていた。

番頭が、あるじの命令で、暮六つになると、閉めて、誰も入れぬようにしておくのである。

辰馬は、あたりを見まわしてから、小柄を抜いた。

押込み強盗を働いたことはないが、他人の屋敷に侵入した経験は、二三度ある。刺客としてやとわれたのである。

錠前のおろされた板戸を破ることぐらいは、さしたる仕事ではない。

辰馬は、やがて、音をたてずに、別棟に忍び入った。

障子から、薄明りがもれている。

要心のために、一夜中、行燈をつけているのであろう。

辰馬は、居間の前へ、すべり寄って、中から、いびきがきこえて来るや、にやりとした。

辰馬は、ふみ込みざまに、刺し殺すことを考えていた。

しかし、その凶悪な考えを、居間の前に立った瞬間に、変えた。

——おれも、武士だ。卑怯な振舞いはすまい。

妙なところで、二刀をたばさむ者の矜持を湧かせた。

障子をひらいて、一歩入った辰馬は、抜刀すると、しばらく、そこに、動かずに、牀の中でいびきをかく者を、じっと、凝視した。

かなりの老人である。

半兵衛にきかされた通り、面貌は、ただの町人ではない。

辰馬は、ゆっくりと迫った。

そして、切先を、咽喉もとに擬すと、

「起きろ！」

と、声をかけた。

目ざめた老人は、一瞬大きく瞠目したが、声はたてなかった。

「お前のたくわえ金の中から、携げられるだけの金をもらうぞ」

辰馬は、云った。

「と、泊り客の、一人じゃな」

あるじは、睨みあげた。

「そんなことは、どうでもいい。……早くせい！」

「……」

「金は、床下にかくして居るのだろう。判って居るのだぞ。牀をどけて、畳を上げろ」

あるじは、やむなく、のろのろと身を起した。

辰馬は、一歩退った。

とたんに——。

敷布団の下から、あるじがつかみ出して、辰馬にさし向けたのは、南蛮短筒であった。

「こやつ！」

辰馬は、驚愕と恐怖と憤怒で、われを忘れて、躍りかかって、刀を振りおろした。

銃声がほとばしり、辰馬は、左腕上膊に、こん棒でなぐりつけられるような衝撃をくらった。

同時に、刀に充分の手ごたえもおぼえていた。

あるじは、顔面を割りつけられて、両手で掩うと、崩れ込んだ。

辰馬は、手負うた痛みよりも、銃声が母屋までひびいてしまったことに、狼狽した。

牀を蹴とばし、畳を持ちあげ、血眼で、床板が蓋になっていないか、とさがした。

蓋になっている箇所は、見当らなかった。

「なんだ？　どうしたことだ？」

辰馬は、焦燥した。

その時、渡廊下を、どやどやと渡って来る足音がきこえた。

「しまった！」

辰馬は、もはや金をさがしているいとまもなく、居間をとび出し、雨戸を蹴破って、庭へ

のがれた。
「曲者じゃ！」
屋内から、叫びがあがった。
辰馬は、おのれのぶざまな失敗に、絶望的になりながら、庭を奔った。

月影人

「小父様――」
階段をのぼって来た千本強兵衛は、そこの縁側に立って、往来を見下ろしていた春奈から、きつい視線を当てられて、
「どうしたな？」
と、眉宇をひそめた。
伏見の、人の往来のあわただしい街道に面した旅籠に、この二人は、数日前から逗留していた。
二階が二間きりの小さな宿で、その二間を借りきっていた。
「いま、戻っておいでの小父様を、ここから、眺め下ろしていました。まるで、遊山の戻りのように、のんびりした歩きかたでした」

「それが、いかんかな」
強兵衛は、部屋に入ると、茶道具へ手をのばした。
春奈は、それを奪うようにして、自分の前に引き寄せると、点前をはじめた。
黒茶碗を、強兵衛の前へ置き、一服を待ってから、
「小父様に、おたずねしなければなりませぬ」
と、問うた。
あらたまったきびしい態度であった。
「なんだな？」
「小父様の心の中で、志が、崩れて居るのではありませぬか？　それを、はっきりと、おきかせ頂きとう存じます」
「……」
強兵衛は、春奈の鋭いまなざしを、黙って受けとめたが、
「もう一服、所望しよう」
と、云った。
春奈は、一瞬、苛立った気色を示したが、所望されるままに、茶をたてた。
それを喫みおわってから、強兵衛は、
「志が、崩れた、と云えば云える。しかし、崩れて居らぬ、とも云える」
と、こたえた。

「どういう意味ですか？　わたくしには、解りかねます」
「この四日間、京の都を、幾年ぶりかで、歩いてみて、時世の変ったのを、知った。それを眺めているうちに、わしの胸の中に、むなしさが生じた、と云える」
「それでは、あきらかに、志が崩れたのではありませぬか？」
烈しい気象の娘は、語気をつよめて、なじった。
「たしかに、むなしさは生じた。しかし、計画を放棄する気持に及んだのではない。計画を放棄して、わしに、ほかに、生甲斐はない。遁世の風雅心など、わしは持合せて居らぬ」
「でも、むなしさなど……」
「まあ、きくがよい。そなたも、京の都の泰平無事のすがたを眺めたはずだ。百年——いや、それ以上の永い歳月の間、都は、兵火に襲われつづけた。徳川の天下になっても、その災害の痛手から立ちなおるには、今日までの月日を必要とした。街の人々の顔には、もう、あのおそろしい兵乱は起らぬ、という安堵の色がある」
「……」
春奈は、口をひきむすんで、強兵衛を、まばたきもせず、見つめている。
「わしたちは、平和に還った都を、ふたたび、戦火の巷にしようと、企てて居る。この計画を、庶民たちは知ったならば、天を仰いで、のろうであろう」
「そんなことは、計画を樹てた時、わかっていたはずではありませぬか」
「左様、わかっていた。しかし、大義の前に、武辺の名聞の前には、やむを得ぬ犠牲と切りすてることにした。永い歳月の間、絶え間なく、兵火を蒙って来た庶民たちは、またいくさが起っても、これに処する知恵をそなえて居るし、それが去れば、再び黙々として蟻のように働きつづけるであろう、と考えていた。しかし、いま、都の春の、のどかな景色を眺めると、あのいくたびとない政権争奪のたたかいが、遠く消え去って、いかにむなしいものか——それを、ひしひしと感じる」
「小父様！」
春奈の柳眉が、きりりとつりあがった。
「小父様の心気は、衰えたのです！　もはや、頭領の座に就く資格は、ありませぬ！」
「そうかも知れぬ。しかし、ことわって置くが、これは、あくまで、わし一個のひそかな感慨であって、そなたに問われたから、述べてみたまでのこと。……わしを措いて、ほかに、指揮をとる者が、いるか？」
「……」
「この四日間、わしの為したのは、どの街道をいかにしてふさぐか、御所を占拠するにはどれくらいの手勢を要するか、伏見城攻略に何日を費やせば足りるか——つぶさに、実地に計ることであった」
「……」
「その自信も成った、と申せる。その上での、むなしさだ」
「……」

「そなたは、三十余人の腕におぼえのある浪人を集めた、と云っていたな？」
「はい」
「わしに云わせるならば、それらの浪人は、所詮烏合の衆だ。どれだけの働きをするか、期待はできぬ」
「小父様！」
春奈は、きっとなった。
「そなたを、あざけっているのではない。事実を申して居る。京の都をわが手におさめるには、一万騎を必要とするのだ。……そなたには打明けなかったが、この計画には、大大名の決起がなければならぬ。それも、すでに遠隔の地に追われた外様大名では、どうすべくもない。徳川将軍を裏切るのは、徳川一家でなければならぬ」
「……」
春奈は、息をのんだ。
強兵衛は、つづけた。
「と申せば、そなたも、すぐに、思い及ぶだろう。……紀州徳川家、これだな」
「紀州大納言を、説く、と申されるのですか？」
「うむ！」
強兵衛は、うなずいた。
紀州徳川家のあるじは、頼宣であった。

頼宣は、家康の血を最も濃く受け継いだ人物とみられていた。
家康の十番目の子で、二代将軍秀忠より二十三も若い弟であった。
家康は、頼宣を愛し、駿河国百万石を与える心算であった。駿府城を頼宣に明け渡しておいて、自身は、三島の近くの泉頭という古城の址に、隠居所をつくり、その縄張りまでつくったが、それをはたさずに、亡くなった。
その器量に於て、将軍秀忠をはるかに越えていたので、幕閣の面々からは、かなりけむたがられていたのである。
紀州に入って、その藩主になったのは、わずか十六歳であったが、すでに、堂々たる偉丈夫で、重臣たちを威圧した。
頼宣は、決して、幕府をおそれなかった。
名ある兵法者ときけば、その武技を看て即座に召抱えたし、江戸城内で、おのが意見をのべる際、それが将軍家に対して遠慮しなければならぬ内容であっても、堂々と口にして、いささかも、はばからなかった。
鄭成功が、日本に援軍をもとめた時も、まっさきに明と開戦をとなえたのは、頼宣であった。
平常から、幕府が忌みきらっている大坂城の浪人たちも、才能のある者は、どしどし、紀州家に随身することができた。
付家老の安藤帯刀が、しきりに、新規召抱えを制止したが、頼宣は、すこしもきき入れな

かった。

先年とりつぶしになった福島正則の遺臣である広島浪人村上彦右衛門義清は、いまは、紀州家に仕えて、一躍武者奉行になっている。

頼宣は、あきらかに、泰平無事をきらっていた。

千本強兵衛が、紀州大納言を奉戴して、京の都を占拠する、という構想をたてたのも、あながち、狂気の妄想ではなかった。

千本強兵衛は、数年前、頼宣から、

「予に仕えぬか。三千石をつかわそう」

と、懇望されたことがあったのである。

説きかたによっては、頼宣が、その気になる可能性は充分あった。

「小父上――」

春奈は、強兵衛を見つめて、

「早急に、紀州大納言にお会いなさいませ」

「うむ。その肚では、いる。しかし、会うためには、土産が必要だな」

「土産といいますと？」

「軍資金じゃな」

「どれくらい？」

「そうだな」

強兵衛は、ちょっと考えていたが、

「十万両――であろうかな」

「十万両！」

春奈は、目を見はった。

「そのような巨額の金子が、どうして調達できましょうか」

「できぬことはない」

「できるのですか？」

「その目的もあって、京の都へ来たのだ」

「どこにあるのですか、十万両も――？」

春奈は、興味をもって、たずねた。

「どこかに、ある」

「どこかに？」

春奈は、眉宇をひそめた。

「小父様、それは、どういうのですか？」

「つまり、どこかに、十万両――いや、二十万両もの金銀が、隠匿されている事実がある、ということだな」

「まことなのですね？」

「疑いない」

「けれど、所有者はいるのでしょう？」
「いる。しかし、もしかすれば、そのような大金が、自分のものだ、ということを、当人は、知って居らぬのではないか、と思えるふしがある」
「……？」
「幾年か前まで、伏見に白河館という家があった。楠木正成の末裔と称される豪族であった。わしが知って居る当主は、豪放豁達な、堂々たる偉丈夫であった。戦国の世であれば、一国一城のあるじになれた人物であったが、青年になった頃は、すでに天下は治まっていた。しかし、その気象は、ただの豪族としてあまんじていることには、あきたらず、千石船をつくって、自らそれに乗り込んで、遠い異邦へ向って、帆をあげて往った。……南蛮の海賊どもと斬りむすんだことも、一度や二度ではなかったろう。持ちかえった南蛮金と珍奇の品は、おびただしいものであった、という。当然、公儀では、それを召し上げることを、評定にかけた。それを知って、館主は、何処かへ隠匿してしまった」
「白河館というのは、まだ、伏見にあるのですか？」
「もはや、あとかたもない。異変が起って、館主は、暗殺された。世間の噂では、伊丹の豪族神屋主膳のしわざ、ということになって居るが、はたしてそうか、疑問は、ある。神屋主膳もまた、当代まれにみる傑物ゆえ、永年、白河館と、堺の港に於て、争っていたとはいえ、暗殺というがごとき卑劣な手段を弄する人物とは思われぬ。……ともあれ、一夜、暴風雨のごとく、百人以上の徒党に襲撃されて、館主は暗殺され、屋敷は焼きはらわれた」

「……」
春奈は、固唾をのんで、きいている。
「さいわいに、幼い子が、暗殺をまぬがれることができた。姉と弟の二人がいたのだな。……この姉弟は、いまは、母方の故郷である姫路に在る、ときいた。わしは、思うに、姉弟の手もとに、亡父が財宝を隠匿した場所を示す絵図がある！」
「……」
「大切な絵図、とのみ知らされて、所持しているが、はたしてそれが、いかなる価値を持っているか、姉弟は、知らぬのではあるまいか――」
「……」
「と、わしの推理は、働いて居る。はたして、わしの推理が正しければ、その絵図を手に入れるならば、巨富はこちらのものと相成るのだな」
「小父様！」
強兵衛の顔を見つめる春奈の眸子が、にわかに、鋭く、きらきらと光った。
「白河館の姉弟から、絵図面を奪う役目は、わたくしに、おまかせ頂きましょう」
「そなたに？　さあ、それは、どうであろうかな」
「小父様は、この春奈を信用なさらぬのですか？」
「いや、そうではない。姉弟が、絵図面を所持している、というのは、あくまで、わしの推理だ。あるいは、所持していないかも知れぬ。まず、それを、たしかめねばならぬ。若い女

子のそなたには、さぐり出す策を弄するのは、不得手であろうか、と思う」

「わたくしは、西国に在って、三十余人の腕の立つ浪人衆を集めることさえも、やってのけて居ります。そのことから比べれば、この仕事は、なんの造作もありますまい」

春奈は、昂然として、云った。

「そこだな、問題はな」

弦兵衛は、笑って、云った。

「それは、どういう意味ですか？」

「つまりだな。そなたには、強い者を説き伏せることは、まかせられる。しかし、弱い者を対手にした場合、その男まさりの烈しい気象を、懸念せねばならぬ」

弦兵衛は、春奈が、天堂寺辰馬という浪人者を、足手まといになる、と思うや、いきなり討ちすてようとした光景を、目撃していた。

尋常の気丈夫さではなかった。

かよわい姉弟から、絵図面を奪う目的を遂げようとする場合、こうした強く烈しい性格が、残忍な行為を生むおそれなしとはせぬ。

弦兵衛は、それをおそれたのである。

ところで――。

二人の会話は、もし同じ部屋に第三者がいたとしても、ほとんど、ききとれないくらいのひくい声音で、交されたのであった。

にもかかわらず――。

壁をへだてた隣室で、それを、のこらず、耳にした者があった。

ただの耳の持主ではなかった。

盗賊波乗り佐兵衛が、そこにいたのである。

公儀隠密に追われていた佐兵衛は、丹波の裏街道を通って、この伏見へ出ていたのである。

大坂へ行くのが目的であったが、まっすぐに摂津を往くことが危険であると知って、遠まわりしたのである。

そして、ここで、しばらく、様子をうかがうことにしていた。

隣室の男女の客とは、同じ日から泊り合せていた。

――曰くありげな一組だな。

と、思い、それとなく、注意していたのである。

はたして――。

佐兵衛を、おどろかせる会話が、交されたのである。

――天下を、ひっくりかえそうと企てているとは、大それた料簡だ。

佐兵衛は、あきれた。

それにしても、その会話の中に、佐兵衛は、ききずてならぬことを、きいた。

白河館の姉弟から、絵図面を、奪取する、という。

その白河館の姉弟とは、佐兵衛は、間接ながら、縁がある。

すなわち――。

白河館の姉弟を世話している郎党の嘉七は、佐兵衛が深い恩義を蒙った男なのであった。

嘉七は甲賀、佐兵衛は伊賀、とその出身はちがっていたが、ともに忍者であった。

そして、大坂城にやとわれた時、嘉七が、甲賀者、伊賀者二十七人衆の頭領の位置に就いたのであった。

大坂城が焼け落ち、豊臣家が滅び去るまでの数年間に、佐兵衛は、嘉七から、三度生命を救われている。

嘉七は、当時、幻夢十郎次と称した、忍び仲間では、誰知らぬ者もない稀代の術者だったのである。

大坂城が烏有に帰すや、やとわれた忍者たちは、四方へ散って行き、佐兵衛もまた、幻夢十郎次と、はなればなれになってしまった。

燃えあがる大坂城を、はるかな遠方にのぞむ海辺で、二人は、西と東へ別れたのであったが、

「これから、どうされるぞ？」

佐兵衛が、問うと、幻夢十郎次は、さみしく笑って、

「わしの、忍びとしての働きは、今日をもって終ったゆえ、あとは、ごく平凡な下郎として、生きようと思う」

と、こたえたことだった。

その言葉に、嘘はなかった。

三年前――。

佐兵衛が、偶然、姫路の城下はずれの路上でめぐり会った時、幻夢十郎次という忍者のおもかげは、みじんもなく、嘉七というつつましい中間が、目の前に立っていたのである。

嘉七と名を変えた幻夢十郎次は、自分はいまは、あわれな孤児となった姉弟の世話をしている下僕である、と語った。

佐兵衛は、何か役に立つことがあれば、と申し出た。

嘉七は、しばらく沈黙を置いてから、

「では――たのみがある！」

と、云った。

その顔に、はじめて、むかしの幻夢十郎次の鋭い気色が、一瞬、うかびあがったことだった。

「金が欲しい！」

嘉七は、云った。

「どれくらい？」

「五千両もあれば、足りるかと思う」

これをきいて、佐兵衛は、即座に、承知し、三年の猶予を乞うた。

「たのむ！」

嘉七に頭を下げられて、佐兵衛は、
「なんの……。幻夢殿には、口にも筆にもつくせぬご恩を蒙った佐兵衛でございます。五千両の調達ぐらい、お安いご用です。ただ、目下、その金がないのが、ざんねんと申すもの」
と、笑ったものだった。
——白河館の姉弟が、十万両あるいは二十万両にも相当する南蛮財宝が隠匿された場所の絵図面を持っている！
それを姉弟自身は、まだ知らぬ、という。
——幻夢殿は、どうなのだ？
佐兵衛は、首をひねった。
——わしに、金子の調達をたのんだからには、そのことを知って居らぬのだ。
佐兵衛は、ぐずぐずしては居れぬ、と立ち上った。
嘉七に渡す五千両は、すでに、大坂の某処へはこんである。
これを渡す前に、姉弟が所持する絵図面を狙う者があることを、至急に、告げなければならぬ。
佐兵衛は、すばやく、身仕度をした。
その時、心がせくままに、不覚にも、佐兵衛は、小さな物音をたててしまった。
それを、隣室の強兵衛と春奈が、ききとがめた。
この二階は、二間しかなく、その二間を、借りきっていたはずである。

隣の部屋に、人がいるとは、夢にも思っていなかった二人である。
実は、階下にある四部屋が満員になり、佐兵衛は、相宿をきらって、こっそり、二階に移っていたのである。
「……」
「……」
強兵衛と春奈は、黙って、顔を見合せた。
次の瞬間——。
強兵衛が、すっくと、立った。
それから、春奈に、
「そなたは、おもてへ出て、待ち伏せて居るがよい」
と、ささやいた。
討ち損じて、遁す場合を考慮したのである。
強兵衛は、廊下へ忍び出た。
足音を消して、隣の部屋の前へすべり寄り、気配をうかがった。
ひそ、として、しずまっている。
強兵衛は、さっと障子を開けた。
出窓の際に、見知らぬ男が、立っていた。すでに、こちらの忍び寄るのを察知した態度であった。

強兵衛は、鋭く見据えて、
「只者ではないようだな、お主――」
「……」
「われわれの話を耳にされた以上、生かしてはおけぬ」
「……」
「あるいは、われわれをさぐるために、この部屋に忍んで居ったか。むしろ、そうであった方が、討ち甲斐があるが……」
じりじり、と迫りつつ、強兵衛は、
――こやつ、忍びの者か？
と、直感した。
凄まじい一撃が、そこに、発しられた。
次の刹那――。
佐兵衛の姿は、そこにはなかった。
――しまった！
強兵衛は、廂から路上へ、鳥のように飛ぶ速影をみとめて、ほぞをかんだ。
往還上に、降り立つがはやいか、佐兵衛は、風の早さで、走り出した。
伏見の町は、細く長い。そして、一筋道である。
駆け抜けて行きながら、佐兵衛は、追われている恐怖をおぼえていた。

――わしも、もう、老いぼれたな。
自ら進んで、危険へ身を投ずることを、なるべく、避けようとしている。
忍者としては、あるまじき臆病も、五十の坂を越えてみると、やむを得ない、というものであった。
人家がきれて、ひろびろとした川と野の中を、街道はのびていた。
佐兵衛の足が、そこで、停った。
路上に、ひとつの影が在って、それが、自分を待ち伏せている者、と佐兵衛は、直感した。
――そうか。隣室に泊っている娘だ、これは！
月が昇っていて、明るさが増していた。
佐兵衛は、背すじに、微かな戦慄をおぼえた。
この地点で待ち伏せていたのは、こっちが、京の都へ奔らずに、西をえらぶ、と看てとったからである。この自信は、頭脳がよほど冴えていなければ、生れない。
忍者であるだけに、佐兵衛は、対手が、よほど修練を積んだ娘であることが、判るのであった。
「……」
佐兵衛は、黙って、まなこを光らせた。
「……」
春奈も、黙って、じっと見すえている。

――どうする？

佐兵衛は、ぐずぐずしていると、旅籠で一太刀をあびせて来た浪人者が、追いついて来るような焦燥にかられた。

佐兵衛は、一歩出ると、

「通して頂こう」

と、云った。

すると、春奈は、

「通れるものなら――」

と、こたえた。

その口もとには、氷のように冷たい微笑が刷かれていた。

――娘だてらに！

佐兵衛は、憤りをおぼえた。

――通ってみせるぞ！

佐兵衛は、覚悟すると、春奈に向って、歩み寄ろうとした。

とたんに――、

「老人、あぶない！」

堤の斜面から、声がかかった。

「その娘、武芸の奥義に達して居るぞ」

その忠告のおわらぬうちに、春奈が、地を蹴って、佐兵衛を襲った。

佐兵衛は、斜め横に――堤下へ跳んだ。

春奈の右手には、杖に仕込んだ白刃が、抜き持たれていた。

二転、三転して、堤の下へ落ちた佐兵衛めがけて、春奈は、なお、執拗に、馳せ降りようとした。

「止せっ！」

佐兵衛に忠告した人物が、烈しい語気でさえぎった。

春奈は、月かげに濡れて、斜面の中途に立つ人物を、にらみつけた。

「よけいな邪魔だて、無用ぞっ！」

「なるほど、たしかに、よけいな邪魔だてだ。しかし、こういう場合に、年寄りに味方するのは、人情と申すもの。むしろ、黙って、傍観している方が、おかしいのではないかな」

夜目にも、はっきりと明るい笑顔をみせた。

年齢は、もうかなり食っているようであった。身なりも貧しかった。

二間柄の槍をかつぎ、鎧櫃を背負うている。

随身を欲して、諸方を彷徨している浪人者とみえた。

「邪魔だてすると申すなら、容赦はせぬ！」

春奈は、浪人者に向って、白刃を構えた。

「身共を斬る、と申すのか。斬れるかな？」

「斬るっ！」

春奈は、叫びざま、斜面を馳せ下った。

鳥がはばたくに似た跳躍とともに、春奈が、浪人者めがけて突き出した一撃は、電光の迅さであったが……。

次の瞬間——。

春奈の白刃は、高く飛んで、磧へ落ちていた。

のみならず、槍の石突きで、鳩尾をひと突きされて、春奈は、からだをふたつに折ると、くずれ込んだ。

浪人者は、ゆっくりと、磧へ倒れた佐兵衛のそばへ寄ると、

「老人——。傷は、どうだ？」

と、かがみかかって、問うた。

佐兵衛は、喘ぎをみせまいとしていたが、老いの身には堪えきれぬ重傷であった。

「不覚でござった」

身を起しかけて、にわかに、めまいにおそわれ、浪人者に支えられなければならなかった。

「お手前が、不覚であった、というよりも、対手が、手練者であった、と申さねばならぬ。……お手前、その重傷が、どの程度か、自身でお判りであろう」

「一刻は、保ち申すまい」

「一刻も——？」

佐兵衛は、浪人者に、仰臥させてくれるように、たのんだ。

しばらく、その姿勢で、夜空を仰いでいた佐兵衛は、ひくく、

「……月が、このように、美しいのを、生れて、はじめて、知り申した」

と、つぶやくように、述懐した。

「せわしい生涯であったとみえる」

「左様——、月にも、花にも、無縁の一生でござった」

「身共に、なにか、たのみがおありか？」

「見知らぬ御仁に、おねがい、するのは、申しわけありませぬが……、何卒——」

「うかがおう」

佐兵衛は、言葉をつづけるために、気息をととのえた。

浪人者は、月の光に照らされながら、しだいに、死相を呈する顔を、じっと見まもった。

「てまえは、盗賊でござる」

佐兵衛は、まず、そう告げた。

千本強兵衛が、そこへ現われたのは、それから四半刻過ぎてからであった。

そして、強兵衛が、そこに見出したのは、意識をうしなって倒れている春奈ただ一人であった。

「春奈！　春奈——しっかりせぬか」

強兵衛に、背活を入れられるや、春奈は、ひくいうめきを発して、まぶたをひらいた。

とたん――。

「おのれっ！」

いかにも気丈夫な娘らしく、はねあがって、つッ立った。

「敵は、どこにも居らぬぞ」

強兵衛に云われて、春奈は、あたりを見まわし、

「ああ！」

と、絶望の吐息をした。

強兵衛は、ふと、積の一箇処に、こんもりと、石が積まれているのをみとめた。

その頂きに、大きな石がのせてある。

強兵衛は、近づいて、その石へ視線を近づけてみた。

「霊」

その一字が読めた。

「春奈、あの男を斬ったか？」

「はい、斬りました」

「相果てたようだな」

春奈は、強兵衛のそばへ寄って来た。

「これが――？」

「そなたを悶絶させた者が、この墓をつくったのであろう。どのような男であったな？」

「浪人者でした。鎧櫃を背負い、槍を携えた、むさい風体の……」

「そなたを悶絶させたところをみると、相当の腕前であろう」

「あやつ！　この死者から、遺言をきいたに相違ない」

「たぶん、な」

「小父様――。春奈は、あの浪人者を追いまする！」

「無駄であろうと思うが……」

「いえ、むざと遁すわけには参りませぬ。討ち果さねばなりませぬ！」

いったん、云い出したら、止めても、肯き入れぬ娘であった。

「では、わしは、まっすぐに姫路へ参ろう」

「上首尾をお待ちします」

春奈は、堤の斜面を馳せあがると、たちまち、街道を、月の闇の中へ消えて行った。

強兵衛は、しばらく、墓とも見えぬ墓を、じっと見まもっていた。

――忍びの者のようであったが……。

いずれは、このような死を迎える覚悟をして生きて来た男であったろう。

強兵衛は、同じ運命が、自分にも、やがておとずれるような気がした。

「南無！」

合掌したのち、強兵衛は、街道上へ上った。

なぜか、西へ向ってはこび出した足が重かった。

「年のせいであろうかな」
強兵衛は、自分につぶやいた。
一年毎に、心が弱くなってゆくような気がしていたのである。

探索

四日間が、過ぎていた。
さわと嘉七は、大坂から、帰っては来なかった。その代り、早飛脚によって、手紙がもたらされた。
さわが、波乗り佐兵衛と約束した場所へ行ってみると、まだ佐兵衛の姿は、現われず、また、佐兵衛が、山陰道から送ったはずの金子も、とどいていなかった。
『あるいは、金子は、途中にて、公儀庭番衆に奪われたるかとも、懸念これあり候』
そう記されてあった。
その金子が手に入らなければ、神屋主膳を襲撃するために、屈強の浪人者をそろえることは、絶望である。
静香は、手紙を、重四郎に、渡した。
重四郎は、披見して、だまって、静香にかえした。

静香は、目を伏せたままで、
「貴方様へのお礼は、おぼつかなくなりましたゆえ、お気の向くままに、なされませ」
と、云った。
重四郎は、静香を見まもっていたが、
「たしかに、それがしは、金でやとわれた男だが……、金がすぐに、もらえぬから、と申して、立ち退くのは、どうであろうか」
「貴方様は、わたくしどもと、なんの縁故もない御仁でございます。お礼のあてを失うて、あつかましゅう、助太刀などお願いできた次第ではございませぬ」
「それがしは、これまで、金にならぬ仕事に、生命を投げ出したことはないが……、この家に来て、そなたら姉弟と四日間起き臥ししているうちに、いささか、気持が変って来た」
「……」
「助太刀に、生甲斐をおぼえた、と申せば、誇張になるし、おもはゆい。しかし、昨日までのそれがしには、なんの生きる目的もなかったことは、事実であるし、この家を出て、また再び、そのような状態にもどるのは、ご免だと思っていることも、否定しがたい」
「……」
「そなたが、この世に在ることが、それがしにとって、最も大切な意味を持つことに相成った、と先夜申したのを、おぼえてもらっているはずだが……」
「忘れるはずがありませぬ」

「それがしのような浮浪の男が、一人の女人のために、生命を投げ出してみよう、と思い立つのは、わるいことではないようだ」

「……」

静香は、まなざしを、重四郎に当てた。

にわかに、胸が痛んだ。

――わたくしが、身も心もささげるのは、この御仁であろうか？

静香は、わざと自分に問うてみた。

とたんに、静香は、泪ぐみ、あわててうつ向いた。

「姉上」

庭で、数馬が、呼んだ。

「はい――」

静香は、すくわれたように、視線を向けた。

「藩士たちが、来る」

数馬が、告げた。

やがて、この家の玄関に立ったのは、藩士三名であった。

年配者が、

「城代の使者として、参った」

と告げ、

「申しがたい事ながら、当地より退去の儀、おすすめいたす。その仔細は、申しのべるに及ばぬ、と存ずる。退去の仕度金として、些少ながら、城代より持参せよ、と命じられて、これに――」

と、包み金を、静香の前に置いた。

静香は、返辞にまよった。

この土地と家は、祖父がのこしてくれたものであった。

たとえ、藩主の命令であろうとも、拒否する権利はあった。

しかし、祖父鹿野重左衛門は、世にも卑劣な裏切り者として、いまもなお、地下の人々から、憎まれつづけている。その子孫であるがゆえに、自分たち姉弟は、挨拶ひとつ受けない惨めな境遇に置かれているのである。

石を以て追おうとする周囲の家は、しかし、曽ては、祖父の支配の下にあったからこそ安泰であったことを思えば、この境遇に屈せず、生きぬこうと決意を燃やして来たのである。

静香は、くちびるを噛みしめて、沈黙を守った。

藩士たちも、静香の心中を察して、重い気分であった。

「これは、命令ではなく、あくまで、城代のすすめと、受けとって頂こう。お手前がたが、この家に在ることは、いたずらに、憎悪を呼ぶばかりでござるゆえ……」

と――その時、庭から、

「いやだっ！」

数馬の絶叫がひびいた。
「わしらは、どこへも行かぬぞ！　いやだっ！　いやだっ！」
数馬は、藩士たちに迫って、小さな肩をそびやかした。
「帰れっ！」
「数馬、無礼はなりませぬ」
静香が、あわててなだめたが、数馬は、いっぱい泪をためた眸子に、憎悪の色をあふらせて、
「たとえ、城主の命令であろうとも、肯くものか！」
と、叫んだ。
口上役の藩士は、数馬にはとりあわず、静香に向って、
「十日の猶予をお与えいたす」
と告げておいて、他の二人をうながすと、立ち去った。
屋内へかけ込んだ数馬は、
「姉上！　いやだぞ！　わしは、死んでも、立ち退かんぞ！」
と、双のこぶしをわななかせた。
静香は、重四郎へ、すくいをもとめるように、視線を向けた。
重四郎は、その瞬間、決意をかためた。
「十日か。十日あれば……」

「……？」
姉弟の視線を受けて、重四郎は、やおら、立ち上った。
「伊丹へ行って、探索して、もどって来られることだな」
姉弟は、重四郎の言葉に、目を見はった。
重四郎は、微笑して、
「そなたたちの目的は、伊丹の神屋主膳を討つことにある。とすれば、いずれ、この家から出て行かねばなるまい。それが、早いか、おそいか、だけの話ではあるまいか」
「それは、その通りです。しかし、城主から追いはらわれるのは、いやだ！　城主にだって、わしらを追いはらう権利はないんだ！」
数馬は、叫んだ。
「もとより、藩主にその権利はあるまい。だからと申して、そなたら姉弟に、藩主に対して反抗する力はない。……それがしに、このことは、まかせてもらえぬか。実は、城代は、それがしが知っている人物なのだ」
重四郎は、美濃部将監と自分との関係を、打明けることにした。
静香と数馬は、意外な話に、耳をかたむけた。
語りおわって、重四郎は、
「……小父は、決して、そなたら姉弟を、冷酷に、追いはらおうとしているのではない、と思う。退去の通達をすれば、いずれ、この重四郎が、代理としておもむいて来るであろう、

と考えているに相違ない。それがしを、代理にしてもらえまいか？」

姉弟は、顔を見合せた。

静香は、数馬に、「よろしいですね？」と目で納得させておいて、重四郎に視線を移すと、

と、こたえた。

「では――」

重四郎は、立ち上った。

「これから、伊丹へ参る。十日のうちには、戻って参る」

「一人で、行かれますか？」

数馬が、不安の色をみせた。

「一人の方が、気楽だな」

重四郎は、笑った。

「平家館は、食いつめ浪人を、食客として置いてくれるそうだから、三四日泊めてもらってみよう。神屋主膳が、いかなる人物か、まず、それを、この目で、見とどける。そして、はたして、そなたら姉弟の父上を闇討ちにしたかどうか、それをたしかめる」

「父は、神屋主膳に討たれたことは、まちがいありませぬ」

静香は、云った。

「世の中には、そうだ、と信じ込んでいても、さぐってみれば、事実が全くちがっていた、

ということが、しばしばある。これまでのそれがしの経験が、そう教える」

重四郎は、そう云いのこして、玄関へ出て行こうとした。

「ちょっと、お待ち下さいませ」

静香が、いそいで、奥へ入った。

やがて、重四郎にさし出されたのは、一振りの太刀であった。

「これは、下僕の嘉七が、館の焼けおちる際、持ち出した父の差料でございます。名刀ときおよびます。どうぞ、お腰に――」

「忝ない。お借りして行こう」

重四郎は、べつに、抜いてもみずに、おのが差料と代えた。

姉弟に見送られて、その家を出た重四郎は、辻に来て、

――会おうか？

と、まよった。

城代美濃部将監に会って、姉弟のことをたのみたい、と思ったのである。

しかし――。

将監が、はたして、姉弟に対して、いかなる気持を持っているか、判らなかった。

将監は、おのれが城代の立場にあることを決して忘れぬ人物であった。本多家にとって、邪魔であるとみなせば、私情をころして、冷然と処置することのできる人物であった。

――小父上は、おれの気持をひるがえさせようとしている。ただ、それだけのことだ。

将監は、おそらく、姉弟に就いては、追いはらうことだけしか考えていないのではあるまいか。

――たのんでも、無駄であろう。

十年の歳月は、やはり長かった。

養い親との距離は、もはや歩み寄れぬ遠いものとなってしまっている。

重四郎は、東への道をとった。

どこかで、じっと見張られているような気もしたが、べつに、神経も配らなかった。

およそ、一刻半も、街道をひろいつづけたろうか。

重四郎は、行手に、午後の陽ざしに光るものを見た。

――行列か。

かすみの中におぼろに浮きあがる人の群れは、大名行列にしては、すくないようであったが、槍や荷物の光るのは、庶民のものでない証拠であった。

やがて、近づいて行き、やはり、行列と知った。

大名行列は、定められた格式通りの供ぞろいをするが、目の前に寄って来たそれは、すこしちがっていた。

小人数であったし、槍や馬や荷物の数も足りなかった。

脇によけた重四郎は、視線を移して、乗物を視た。

――なるほど、咎め行列か。

網代の乗物には、縄がかけられてあった。

これは、咎めを蒙った大名やその家族が、配所へ送られていることを示していた。

縄をかける、といっても、勿論、形式だけで、べつに、囚徒の押送りのように、がんじがらめにされているわけではなかった。自由に、出入りはできる。

重四郎は、乗物の紋が、姫路の本多家のものであるのをみとめて、

――本多家に咎めを受けた者がいるのか？

と、いぶかった。

しかし、自分には、なんのかかわりもないことなので、黙って、行きすぎるのを待つことにした。

乗物が、しずしずと重四郎の前に、来た。

とたん――。

「停めて欲し――」

中から、声がかかった。

きれいな女性の声であった。

重四郎は、目の前で乗物が停められたので、迷惑に思い、自分の方から行き過ぎようとした。

すると、

「そこな、浪人――」

と、呼ばれた。
乗物の扉が、開かれた。
重四郎は、視線を投げた。
白磁のように冷たいなめらかな貌が、その中に在った。
重四郎は、ふと、
——もしや？
と、思い、十年前の記憶をいそいで、よみがえらせようとした。
しかし、思い出すことは、叶わなかった。
女性の方は、じっと、重四郎を見つめて、
「織田重四郎であろう」
と、云いあてた。
——やはり、そうであったか。
重四郎は、女性が、本多美濃守忠政の息女八千代であることを知った。
十年前——。
重四郎は、まだ十五歳であったこの姫君を、川へ拋り込んでいる。
そのために、養父将監から切腹を命じられ、遁走したのであった。
この姫君に会わなければ、あるいは、本多家に仕えて、五六百石の知行取りになっていたかもわからない。

「織田重四郎であろう」
八千代は、もう一度、云った。
「左様です」
重四郎は、やむなく、こたえた。
「わたくしを、お忘れか？」
「……」
「わたくしは、忘れて居りませぬぞえ。花井川の水は、大層なつめたさでありました」
「あの節は、姫君とは知らず、失礼つかまつりました」
重四郎は、詫びて、頭を下げた。
八千代は、微笑した。
十年経って、いまは、二十五歳になっているはずであったが、二十一二にしか見えなかった。
切長の大きな眸子の光が、あの日のものであることを、ようやく、重四郎は、みとめた。
ただ、その肌が、いかにも冷たく沈んでいるのが、はつらつとした乙女の頃とは、ちがっていた。
「あのつめたい水に濡れたために、わたくしは、こうして、いまだ、どこへも嫁いで居りませぬぞ、織田重四郎——」
「……」

「それればかりか、大名のむすめにあるまじき、奇妙の振舞いを重ねて、乱心とみなされ、このように縄目にかけられて、国許へ送り還されて来ました」

「……」

――べつに、おれとは、なんのかかわりもないことだが……。

重四郎は、内心、云いがかりをつけられている迷惑をおぼえた。

家臣たちは、かなりの距離を置いて控えて居り、八千代の声音は、きこえぬようであった。

「因縁でありましょうぞ。こうして、咎めを蒙って、送り還されて来た途中、その方に、めぐり会うとは……」

八千代は、云った。

「いまだ、おうらみでありましょうか？」

重四郎は、やむなく、問うた。

「いえ、すこしも……」

八千代は、微笑した。

「時折、なつかしく、思い出して居りました」

「……」

「そちさえよろしければ、一夜、語り合いたいと存じます」

「せっかくのお言葉ながら、先に急ぎの用事を持って居ります」

「では、これきり、別れて、もう二度と会えぬ、と云うのであろうか」

「ご縁がありますれば……」

重四郎は、頭を下げておいて、乗物の前から、はなれようとした。

「待ってたも――」

八千代は、必死の声音で、呼びとめた。

「わたくしは、そちを、思い出していたのは、時折ではありませぬ」

「……？」

「毎日、そちの俤を、この胸に、うかべて居りました」

「……」

「嘘ではありませぬ。それゆえに、すべての縁談をことわって参ったのです」

「姫君――、路上ですれちがった浪人者に、そのような言葉をおきかせなさるのは、乱心とみなされても、いたしかたありますまい」

「なにを申す！」

「それがしに、おきかせなされても、どうなる、というものではありませぬ。……お忘れになることです」

重四郎は、足早に歩き出した。

「重四郎！　重四郎！」

八千代は、われを忘れて、乗物から出ようとした。

家臣が二人、あわてて走って来て、とどめた。

「重四郎を、呼び停めて欲し！　おねがいじゃ！」
悲痛な叫びが、重四郎の耳朶を打った。
――おれが、そばにいて、どうなるというのだ。
重四郎は、八千代がやはり尋常の精神状態ではないように思えた。
それにしても、すれちがいだけの浪人者を、一瞥しただけで、十年前に乱暴を働いた若者と、みとめるとは、よほど、鋭い神経の持主といえた。
――尋常の精神状態ではないからこそ、おれのことを、毎日思い出していたのかも知れぬ。
おそらく、思い出しつづけているうちに、勝手に、男性の理想像として、つくりあげたものに相違ない。
――こちらにとっては、迷惑な話だ。
そう思いすてようとしたが、足をいそがせるにもかかわらず、妙に、うしろ髪が引かれるようであった。
二日後――。
重四郎の姿は、伊丹の里に現われていた。
昨日一日荒れた風雨が去って、空に一斑の雲影もなく、もう陽ざしは、初夏のものであった。
野道をひろっているうちに、深編笠をかぶった浪人者に行き会うた。
「卒爾ながら――」

重四郎は、呼びとめた。
対手が、笠をあげた。まだ、二十歳あまりの若者であった。
「失礼なことをおうかがいいたすが、平家館に食客をされて居る御仁とお見受けいたしたが……」
平家館は、この野道を三町ばかり辿ったところに、大きな森にかこまれていたのである。
一筋道であり、通っている者は、平家館に出入りしている者以外にはないはずであった。
「左様、食客をいたして居る者です」
「平家館は、誰人の紹介状もなく、不意に、参っても、食客にして頂けるか、どうか、おうかがいしたい」
「お館は、来る者はこばまず、去る者は追わず、という方針をたてて居られます」
「それは、忝ない。ついでに、おうかがいいたすが、神屋主膳という御仁は、どういうお人柄でござろうか？」
「戦国の世であれば、百万石の太守になられたお方であろうか、と存ずる」
「それほど気宇の大きな御仁ですか？」
「それがしは、確信つかまつる」
若者は、こたえた。
若者自身、ただの素浪人とは受けとれぬ、隙のない、ひきしまった容子をそなえていた。
――来る者はこばまぬ、というが、このような、一瞥して、只者ではない、と判る秀れた

若者を擁するのは、たしかに、神屋主膳が、傑物であることを証明しているようだ。

重四郎は、そう感じた。

重四郎は、礼をのべて、行き交うた。

十歩ばかり遠ざかってから、若者――由比民部は、そっと、ふりかえって、見知らぬ浪人者の後ろ姿へ、視線を投げた。

館内にごろごろしている浪人者たちとは、どこやらちがっている男であることを、民部もまた、直感していた。

――何者であろう？

ただ、食いつめて、ころがり込んで来る浪人者とは、思われなかった。

民部は、館の主人から、ひそかに、たのまれていた。

「この館に対して、近頃、公儀の目が光りはじめたようだ。隠密が、入り込んで来て、探索いたすおそれがある。お主に、たのみたい。疑わしい者が入って来たら、わしに告げてもらおう」

主膳は、民部を腹心の座に就けたのである。

民部は、主膳から信頼されたことが、うれしく、その役を引き受けたのであった。

――あの浪人者は、もしかすれば、公儀隠密かも知れぬ。

――成程、これは、ただの屋敷ではない。

その森に入って、しばらく辿った重四郎は、不意に、眼前にひらけた平家館の構えを、一瞥して、大きく、目を見はった。

深い濠がめぐらされ、石垣は、さながら城の規模であった。石垣の上は、築地になり、老松がさし出ている。

すべてが、この館の歴史の古さを示しているのであった。

門に入るには、濠に架けられた吊り橋を渡ることになる。

これは、いつでも、鉄鎖をまきあげて、橋を門扉の前に立ててしまえる仕掛けであった。

戦国時代、野盗の襲撃にそなえて、豪族は、このように要心ぶかい構えを工夫していたのである。それにしても、濠の幅、深さは、重四郎が眺めて来た多くの城のそれに、劣るものではない。

――五人や十人の浪人者の群れが、攻め入ることなど、とうていおぼつかぬ。

外構えがこれほどの規模ならば、内構えはさらに厳重をきわめているに相違ない。

重四郎は、絶望感におそわれた。

吊り橋を渡って、棟門前に達すると、こちらが案内を乞わぬさきに、頭上の武者窓から、

「くぐりをお入りなされ」

と、声がかかった。

正門わきに、潜り戸がついていた。

戸はすぐに開かれた。

内部は、想像たがわず、城廓の造りであった。
倉のならぶ多門塀が仕切り、空地は枡形に曲げられている。
初老の下男が姿を見せて、
「ご用は？」
と、訊ねた。
「食客を希望つかまつる」
「では、あの木戸を通って、まっすぐにお行きなされ」
下男の態度は、いかにも、この館が、見知らぬ浪人者たちに開放されていると、教えてくれる。
それが、むしろ、薄気味わるく感じられるのは、こちらが肚裡に一物をひそめているせいであろうか。
重四郎が、やがて、立ったのは、脇玄関であった。
表玄関とは、植込みによってへだてられていた。
案内を乞うと、食客の一人に相違ない浪人者が出て来て、うなずき、
「この机の上の浪人帳に、姓名と生国を記されい。それだけでよい」
と、云った。
あまりに簡単すぎる受け入れである。
寺院といえども、素姓の知れぬ浪人者を泊めるのは、ためらう時世になっていた。

あるじが、よほど豪放な人物か、それとも、将来に何か期するところがあって、わざと屋敷内を開放しているのか？
いずれにしても、これは、奇怪なくらいの寛容さといえた。
食客が多勢いる以上は、その溜り部屋があるはずであった。
しかし、そこへ、案内してくれる者も居らず、重四郎は、勝手に、廊下を歩いて、奥へ入らねばならなかった。
尤も、それは、重四郎にとって、都合のいいことではあったが……。
廊下は、ふつうの大名屋敷などとちがって、長くまっすぐには、通っていなかった。
まるで迷路のように、折れ曲っていて、しばしば、つき当って、ひきかえさなければならなかった。
どこか、かなり遠くの部屋から、談笑する声が、きこえていたが、そこに入るには、どの廊下をえらべばよいか、迷うようにつくられている。
——途方もなく要心ぶかい構造にしたものだ。
重四郎は、いっそ感服した。
やがて——。
浪人者たちがごろごろしている広間がそこにある、と見当をつけた重四郎は、しかし、わざと、別の廊下をえらんで、奥へ進んだ。
そして、中庭へ出た。

京都の古刹の茶庭でも模したような、一木一石に吟味のゆきとどいたながめであった。きれいな水が光っている細流れが、縁さきの置石を巡っていて、その置石のひとつに、若い女が、うずくまっていた。

細流れには、鯉がいて、それに、餌を与えているのであった。

よく馴れているとみえて、鯉は、はねあがって、若い女の指をくわえようとしている。

重四郎は、縁側に佇んで、しばらく、その後ろ姿へ、目を当てていた。

と——。

こちらの気配に気づいたとみえて、若い女は、立ち上って、振りかえった。

「……」

「……」

視線が、合った。

重四郎は、はっとなった。それは、異邦の貌であった。美しかった。しかし、それよりも、彫りのふかい面立ちに刷かれているさびしい翳に、重四郎は惹かれた。

幼い時から孤独に堪えて、ひっそりと生きていると、このように、見知らぬ他人にも、胸が痛くなるほど、はっきりと、そのさびしさを判らせるものであろうか。

異邦の女は、鄭重に会釈をのこしておいて、歩み去って行った。

重四郎は、静香とくらべていた。

静香も、不運な境遇に堪えている娘であった。しかし、このように、さびしい翳を、すがたに刷いてはいない。

対坐していると、心の底に持っているしっかりとした気象を、こちらに感じさせる。

それに、ひきかえて、中庭を去って行く異邦の女は、ただ、孤独のさびしさのみを、その後ろ姿にたたえている。

——あのように、はかなさを滲ませながら、よく生きつづけていられるものだ。

重四郎は、いぶからずには、いられなかった。

「ご浪人——」

不意に、縁側の端から、声がかかった。

重四郎が、その声にわれにかえって、視線を向けると、そこに、一人の伴天連が、立っていた。

異邦人としては、小柄な、頭髪も黒い、さして目立たない風貌であった。

すでに禁教政策は、徹底したきびしさで、日本全土にゆきわたっている時世であった。

伴天連が、その司教の姿のままで、九州あたりならいざ知らず、この近畿にとどまっているというのは、想像できないことだった。

この館が、世間の目から完全に遮断されている証拠であったし、また館のあるじが、いかに不敵な度胸の持主であるかを示してもいる。

伴天連をかくまえば、一家一族が処刑をまぬがれないのであった。

重四郎は、おどろきを顔からかくせなかった。

伴天連は、微笑して、近づいて来ると、
「ご浪人は、西のお人ですか？　それとも、東から参られましたか？」
すこしのよどみもない日本語で、問うた。
「西から参りましたが……」
「九州ですか？」
「九州にも、しばらく、居りましたが――」
「長崎をご存じですか？」
「知って居ります」
「長崎では、きびしい踏絵が、行われているそうですね」
「それがしは、寺院に食客となって居ったゆえ、踏絵などは、強請されませんでしたが……」
どうやら、この伴天連は、九州を通らずに、堺の港から、この館に入ったものであろう。
九州一円に於ける耶蘇教弾圧は、想像を絶する凄まじさであった。
にもかかわらず、殉教者の数は、増している、という。
「わたし、去年、馬尼剌から来ました。シモンといいます」
伴天連は、云った。
「わたし、日本人の船長を二人知っていました。一人は、浜田弥兵衛、もう一人は、平山常陳といいました。二人とも、立派な人でした。……貴方、九州に、いたのなら、お話あります。わたしの部屋に来ませんか」

「参りましょう」
重四郎が、案内された部屋は、畳敷きであったが、調度すべては、外国から持って来た品であった。
卓子も椅子も、置時計も花瓶も書物も、壁に貼られた地図も、すべてが、重四郎が生れてはじめて接する珍しいものであった。
シモンと名のる伴天連は、重四郎に椅子に就くようにすすめて、
「ぶどう酒、飲みますか」
と云って、ぎやまんの盃に、血のように赤い酒を注いで、すすめた。
重四郎は、ひと口飲んでみて、甘い味に、
――さして、うまくもないが……。
と、感じた。
シモンは、自分は、オランダの宣教師だ、と云ってから、
「わたしの仲間、五人も日本へ来て、みな殺されました」

禁教の国

曽て――。

フランシスコ・ザビエルが、天文十八年、鹿児島に上陸して以来、徳川幕府が狂気に近い弾圧を加えるまでの五十年間に、洗礼をさずけられた日本人は、百万人に近かった、という。

そして、それらのうちの大半は、信仰に殉じたのである。

慶長年間、異邦の神を信仰することが、自由であった時代でも、それぞれの国で、殉教者は、出た。

たとえば——。

加藤清正は、熱烈な法華経信者であった。家臣の中に、耶蘇教を信仰する者があることは、許せなかった。

関ガ原の役がおわった頃、清正は、江戸へおもむくのに先立って、家中一同に対して、

「耶蘇教を信ずる者は、今日限り、放棄せよ」

と、命じた。

そして、名簿に、血判をもとめた。

耶蘇教信徒たちも、主君の命令には抗しがたく、大半が、黙って、血判した。

しかし、実際には、信仰をすてようとはしなかった。

清正は、帰国すると、あらためて、日蓮宗の寺僧を、八代奉行三宅覚左衛門の許へつかわして、なお耶蘇教を信仰していると思われる家臣たちを列坐せしめ、その頭上へ、法華経をいただかせしめた。

ほとんどの家臣たちは、やむなく、法華経を、頭上にいただいた。

しかし、これを断乎として、拒否した者があった。

南五郎左衛門は、旗奉行をつとめる豪放な武士であったが、いつの頃からか、熱烈な耶蘇教徒になっていた。

「それがしは、この身は、主君にささげ、馬前に於て討死いたすことは武辺のほまれと存ずるが、おのが心の安慰に関する、信奉いたす教えをすてよ、との命には服従いたしかね申す」

断乎として、法華経を頭上にいただくことを拒否した。

やむなく——。

八代奉行は、南五郎左衛門を逮捕し、日蓮宗の寺僧の面前へ、ひきすえた。

五郎左衛門は、寺僧の手で、法華経が、頭上へかざされるや、顔をあげて、それに、かあっ、と唾を吐きかけようとした。左右の士が、すばやく、その口をふさいだので、唾は法華経には、かからず、五郎左衛門は、その場で討たれずに済んだ。

八代奉行は、このことをきいて、思案したが、かくしておいて、後日、主君の耳に入っては、わが身の落度になると考え、やむなく、清正に、このおもむきを報告した。

清正は、憤怒して、ただちに、五郎左衛門を牢につなげ、と命を下した。

八代奉行は、しかし、五郎左衛門ほどの勇武の士を囚徒にするにしのびず、切腹させよう、と思いきめ、五郎左衛門を屋敷にまねいた。

しかし、五郎左衛門は、いかに説かれても、泰然として、頭を横に振るばかりであった。

南五郎左衛門は、八代奉行三宅覚左衛門に向って、云ったことである。

「わが君が、それがしの財産を没収し、この素頭を刎ねる、という思召ならば、つつしんでお受け申す。しかし、それがしが信仰いたす教えを放棄せよ、とのご命令には、とうてい服しかねる。信仰と申すものは、人の心の裡にあるもの。これを冒すことは、主君といえども、不可能でござる。もし、それがしが耶蘇教を信じたために、家臣としてのつとめを怠り、卑怯未練のふるまいをいたした、というのであれば、これは、許すべからざる罪と申せるが、それがしは、いまだ一度も、加藤家の家臣として、はずべき振舞いはつかまつらず、主君に対する忠誠心も失っては居り申さぬ。しかもなお、わが君が、それがしを憎まれるならば、やむを得申さぬ。死をお与え頂こう。但し、耶蘇教に於ては、自ら生命を断つことは禁じられて居り申すゆえ、処刑の儀をお願いつかまつる」

これをきいて、八代奉行は、

「其許が、あくまで我意を張るならば、其許一人に死をたまわるばかりか、其許の妻子にも、及ぶことになるが、それでも、よろしいか？」

と、迫った。

五郎左衛門は、にっこりして、

「妻も子も、みな、耶蘇教徒でござれば、教えのためには、よろこんで、天国へ参り申す」

と、こたえた。

清正は、八代奉行から、南五郎左衛門の志をひるがえさせることは叶わぬ、と報告される

や、

「やむを得ぬ。みせしめのために、斬れ」

と、命じた。

五郎左衛門は、藩庁へ出頭を命じられ、一室へみちびかれた。

三人の屈強の士が待ち設けていて、

「上意！」

と、声をかけて、一斉に刀を抜いた。

五郎左衛門は、抵抗するかわりに、悠然と座に就き、イエズス・キリストと聖母マリアの名を唱えて、首をさしのべた。

一閃の白刃下に、その首は、落ちた。

享年三十五であった、という。

このような壮烈な殉教者は、いたるところに、現われた。

時代が移り、天下が徳川家のものになるや、その政策は、幕府中心主義によって、おしすすめられることになった。

当然——。

幕府は、大名も旗本も庶民も、これを去勢して、絶対の権力者たる将軍の下に服従せしめなければならなかった。

そのためには、まず、国を鎖さなければならなかった。

外様大名たちが、外国と自由に交易しているうちに、外国の武力と結びつくおそれがあった。それを拒否しなければならなかった。

鎖国令を布くにあたって、外国の宗教を排除したのは、当然の方針であった。

そして、幕府は、その厲行に、凄まじい力をふるったのである。

三代将軍家光が、耶蘇教徒に対して、徹底した厳刑酷罰の命を下したのは、次のような事件がきっかけであった。

いまだ、比律賓と日本との交易が許されていた頃であった。

その通商船には、宣教師がつぎつぎと乗り込んで、日本潜入をくわだてた。

平山常陳というオランダ人と日本人との混血の人物が船長をしている呂宋船が、二人の伴天連をともなって、日本へ還って来た。

不運にして、平戸の沖あいで、英国の海賊に襲われた。

海賊船は、呂宋船から、貨物を奪っただけではなく、幕府に、伴天連が潜入した旨を、密告した。

平山常陳と二人の伴天連は、平戸で捕えられ、獄舎につながれた。

馬尼剌に、この悲報がつたわるや、一人の勇猛なスペイン人が、伴天連を救出すべく、平戸に潜入した。

番士のねむった隙をうかがって、獄舎の戸を破って、平山常陳と二人の伴天連のみならず、他の囚人をも、救出することに成功した。

しかし、遠くへ遁走することは、かなわず、一人のこらず、再び捕えられた。

このことが、将軍家光の耳に達した。

癇癖の家光は、異邦人に、獄舎を破られたことに、我慢がならなかった。

長崎奉行長谷川権六に対して、

「平戸に碇泊する外国船を焼きはらい、船長から水夫にいたるまで、みな殺しにせよ。容赦するな！」

と、厳命した。

長崎奉行は、その命令を実行するとともに、他の獄につないでいる内外の宣教師はじめ、信徒をのこらず、死刑に処したのであった。

ただの処刑ではなく、火あぶりであった。

それをきっかけとして、家光は、日本全土にひそむ信徒を、狩り出して、ことごとく処刑したのであった。

将軍家の膝元である江戸にも、多くの耶蘇教徒はいたのである。旗本の中にさえ、いた。

これらの人々は、品川の刑場で、火あぶりに処せられた。

信徒の中には、五歳、七歳の小児も交っていた、という。

ともあれ——。

弾圧が、日本全土に及んでいる今日、この伊丹に、一人の伴天連が、ひそんでいるのは、奇蹟ともいえることだった。

重四郎は、これをかくまう神屋主膳の度胸に、舌をまかざるを得なかった。

「貴方は、なお、このきびしい詮議の網の目をくぐって、布教をされようというのか？」

重四郎は、問うた。

シモンと名のる伴天連は、微笑して、

「この一年間に、洗礼を受けた日本人は、千百六十人にものぼった、と馬尼剌の教会に報告が来て居ります。どのような迫害があろうとも、神の教えは、正しい善良な人々のあいだに、しみ渡ります。どうぞ、貴方が、ごらんになったり、お聞きになった迫害の様子を、わたしに、知らせて下さい」

と重四郎にたのんだ。

「それがしは、耶蘇教については、なんの興味も抱かぬ男ゆえ、教徒に対して、どのような迫害がなされたか、なされて居るか——すこしも、存じ申さぬ」

重四郎は、こたえた。

「おかくしにならずに……」

シモン司祭は、信じない、という顔つきであった。

「かくしては居り申さぬ」

重四郎は、かぶりを振ってみせた。

シモン司祭は、ちょっと、沈黙を置いてから、

「貴方は、日本の宗教を、信じていますか？」

と、たずねた。

「神も仏も、この世に在るとは、考えて居り申さぬ」

重四郎は、冷やかにこたえた。

「おお！　それは、いけません。この世には、神があります。神があるからこそ、人間は、生きられるのです」

「失礼だが……」

重四郎は、さえぎった。

「それがしは、貴方に、説法をうかがうために、ここに参ったのではない」

「説法？」

シモン司祭は、ちょっと、その意味が判りかねて、小首をかしげたが、すぐにこにこして、

「貴方のような人と、わたしは、語りたいのです」

と、云った。

そこへ——。

先程、庭から去った異邦の女が、現われた。

「司祭様。お手紙です」

厚い封書をさし出した。

それをしおに、重四郎は、立ち上った。

「失礼つかまつる」
「ご浪人、また、この部屋へ来て下さい」
シモン司祭は、赤毛のはえた手をさし出した。
それから、
「アンナ、送りなさい」
と、命じた。
アンナと呼ばれた女は、さきに立って、縁側へ出た。
「どうぞ、庭から――」
うながされて、重四郎は、沓石の草履をはいた。
アンナは、細流れの巡る飛び石をつたって行きながら、
「日本の庭、きれいですね」
と、云った。
「そなたは、この国の言葉がお上手だが、来られて、幾年におなりになるのだろうか？」
重四郎は、問うてみた。
「三年になります。でも、江戸、知りません。京都だけ、すこし、知っています」
そうこたえて、アンナは、ふりかえると、にっこりしてみせた。
皓い歯が、美しく光った。
「なにが目的で、参られたのであろうか？」

重四郎は、アンナに、たずねた。
アンナは、すぐには、こたえなかった。
置石のひとつに、しゃがむと、細流れを泳いで来る鯉へ、視線を落した。
重四郎は、そのうしろ姿に刷かれているさびしい翳を、じっと見まもった。
――このさびしい翳は、どうして、うまれたものなのか？
ふっと、その興味がわいた。
「わたし、父をさがしています」
アンナは、こたえた。
「父上が、この日本に住んでおいでか？」
「はい。母は、日本人です」
「……」
「父は、オランダ人です。……父と母は、七年前、日本へ来ました」
アンナは、鯉へ視線をおとしながら、たどたどしい日本語で、語りはじめた。
アンナの父は、ファン・サンテンといい、台湾に於けるオランダ商館の長であった。
当時――。
オランダは、南洋から東洋にかけて、もっとも活躍した海洋国であった。
オランダは、しかし、支那との通商だけは、ポルトガルにさきを越されていた。
そのために、支那との通商を企てて、広東、福建などで交易しようとしたが、そのたびに、

ポルトガル人にさまたげられて、目的を達しなかった。

オランダとしては、日本と貿易している上からは、日本がもとめる生糸を、支那から仕入れなければならなかった。

そのために、オランダは、支那との貿易をするべく、元和八年には、艦隊をもって、ポルトガル人の根拠地であるマカオを攻撃した。しかし、失敗して、撃退された。

やむなく、オランダは、台湾にしりぞいて、支那との貿易の根拠地とした。

ところが——。

支那との国交を絶った日本の商船もまた、台湾に寄って、日支交易の中継所とした。

当然——日本とオランダとの間に、争いが生じた。

日本の商船の台湾交通は、オランダよりもさきであった。ところが、オランダは、台湾の安平（あんぴん）において、外国商船に対して、関税を取ろうとした。日本の商船は、この課税を、断乎として、拒否した。

これが、衝突の原因になった。

やむなく——。

オランダの台湾総督ピーテル・ノイツは、日本へやって来て、日本商船が台湾に渡航するのを、幕府に禁じせしめようとした。

ノイツは、しかし、日本に渡って来たが、長崎代官末次平蔵によって、江戸へ行くことを制せられ、滞在一カ月に及んだが、ついに、将軍家に謁見することは、ゆるされず、むなしく、台湾にひきかえした。

ノイツが、日本に対して、極度の反感を抱いたのは、当然であった。

そのために、やがて、日本の商船の船長浜田弥兵衛と、凄まじい決闘を行うことになった。

浜田弥兵衛は、元武士であり、豪放勇猛の傑物であった。

長崎代官末次平蔵の命を受けて、船団を組んで、台湾に向った。

従えたのは、実弟小左衛門、嫡男新蔵、それに、生命（いのち）知らずの猛者（もさ）四百七十人であった。

完全武装の、いわば、軍勢ともいえた。

台湾総督ノイツは、この日本船の到着を、手ぐすねひいて待ちかまえていたごとく、その上陸を拒否した。

弥兵衛は、かまわず、数人の部下をひきつれて、城中に入った。

ノイツの方には、それを予測して、弥兵衛生捕りの一隊を備えていた。

弥兵衛と部下は、二百余の兵士に包囲されて、反抗のすべなく、投獄された。

ノイツは、これを奇貨として、弥兵衛の船の武装解除を行い、刀槍銃砲をとりあげて、保管することになった。

ノイツは、将軍家に謁見を許されなかった怒りを、日本商船に対する報復に向けたのであった。

実弟小左衛門と嫡男新蔵は、総督邸へ罷（まか）り出て、弥兵衛の釈放を乞うた。

その時、ノイツは、上段の椅子に就いて、その足を、かたわらの椅子の上にのせて、小左

衛門たちの頭上にかざす姿勢をとった。
故意に、日本人たちを激昂させる態度をとったのである。
小左衛門たちは、歯をくいしばって、屈辱に堪えた。
弥兵衛と部下が、獄舎から解放されたのは、それから、十日後であった。
弥兵衛は、ただちに、船にかえると、二十人の屈強の若者をえらび、まっすぐに、総督邸におもむいた。
ノイツに面会をもとめた弥兵衛は、
「日本帰航の許可を頂きたい」
と、願い出た。
ノイツは、しかし、言を左右にして、じらすばかりであった。
そのうち、弥兵衛のうしろにひかえていた若者の一人が、ついに堪忍袋の緒を切った。
「オランダ狸め！　もう、我慢ならねえ！」
呶号しざま、抜刀して、ノイツに突進した。
弥兵衛が、とどめるいとまもなかった。
つづいて、二三人が抜刀して、突進するや、ノイツを守ろうとする護衛兵へ、峰撃ちをくらわせ、その場へ、昏倒させた。
弥兵衛は、こうなる上はやむを得ぬ、と覚悟をきめて、
「もし、許可せぬと申されるならば、やむを得ぬ。生命を頂戴する！」

と、云いはなった。
その時、廊下に、呶声が起った。
ノイツの次男で、粗暴短気な十九歳の青年であった。
罵詈を喚きたてながら、剣を抜いて、部屋へとび込んで来た。
しかし、日本の若者に、一瞬にして、斬り伏せられてしまった。
通訳カロンはしばられ、居合せた館員たちは、窓から遁走した。
たちまち——。
総督邸は、呶号と悲鳴と物音が渦巻く修羅場と化した。
庭から銃声が起るや、弥兵衛に随行した二十人の若者のうち半数が、
「来やがれ！」
と、窓から躍り出て、オランダ兵に向って殺到して行った。
日本刀と洋剣との闘いがくりひろげられ、あっという間に、七人のオランダ兵が死傷した。
弥兵衛は、切先をノイツの咽喉に擬し、
「承知か、否か——即答しろ！」
と、迫った。
ノイツは、しかし、総督たる面目上、即座に、許可を与えるわけにはいかなかった。
ノイツは縛られ、日本人は総督邸を占領したまま、三日間が過ぎた。
城中に於ては、副総督はじめオランダ政府派遣の将校や商館員が集まって、緊急秘密会議

を開いて、善後策を協議した。

そこへ、ノイツの一書がもたらされた。

「予が帰航を拒んだことが、日本人をして、激昂させ、殺戮の念を起さしめた。日本人たちは、いまや、予を斬って、全員切腹の覚悟をきめた模様である。予は、かれらを、無事に帰航の途につかしめぬ限り、この難をまぬがれるすべはなし、と知った」

それから、さらに、談判は三日間もつづけられ、ついに、和議は成立した。

日本人とオランダ側は、五人の人質を交換した。

オランダ側は、総督の長男ローレンツ・ノイツのほか四人の商館員を出し、日本人側からも、弥兵衛の嫡男新蔵はじめ重だった者が五人出た。

弥兵衛は、なお、これまでオランダ総督が、日本商船から没収した貨物を返還するように要求した。

まさしく、日本人の勝利であった。

弥兵衛は、絹と金子と人質をのせて、日本へ帰って来た。

このために、日本とオランダの交易は、まさに、断絶せんとした。

オランダ本国に於ては、このことを憂慮し、バタビヤに在ったオランダ東洋総督スペッキスに、日本へ使者を送り、幕府と交渉するように命じた。

スペッキスが、全権委員に命じたのは、ヤンスゾーンという人物であった。ヤンスゾーンは、台湾を越えて、九州平戸に到着するや、長崎奉行に会い、願書を幕府に呈し、自ら江戸へおもむき、交易談判を開きたい旨を願い出た。

その時、ヤンスゾーンがともなったのは、通訳として、ファン・サンテンという、日本人の女性を妻に持つ人物であった。

ヤンスゾーンとファン・サンテンは、しかし、大坂までのぼって来て、そこで、江戸へおもむくことを禁じられた。

ヤンスゾーンは、大坂に於て、幕府の意嚮をうかがった挙句、日本人の憤りを解いて、国交を回復するには、喧嘩の張本人であるノイツをして、日本へ送って来る以外にすべはない、と結論した。

ヤンスゾーンは、ファン・サンテンを日本にのこして、バタビヤに帰った。

そこまで語って、アンナは、口をつぐんだ。

重四郎は、無言で見まもっている。

長い沈黙を置いてから、アンナは、云った。

「それから、三年後に、ノイツ殿は、日本へ参られ、公儀との話しあいをなされ、交易のことをぶじに通されてから、島原の獄にいたわが子ローレンツ殿はじめ五人のオランダの若者たちを、つれて、帰って行かれました」

「その時、父上は、日本へとどまった、といわれるのか？」

「はい。……父は、行方知れずになりました」

「行方知れず？」

「なぜ、父が、行方知れずになったのか、だれも、知りません。知っていても、教えて、くれないのかもわかりません」

アンナは、立ち上って、重四郎に向きなおり、

「わたし、父を、さがしに来ました。……でも、父は、もう、死んだのかもわかりません。……生きていたら、かならず、会います。神様が、おみちびき下さいます」

と、云った。

必死な面持であった。

その折、シモン司祭が、縁側にあらわれて、

「アンナ、いつまでも、そこに、いるのは、よくない」

と、たしなめた。

アンナは、ちょっと狼狽してから、重四郎を、表庭へ抜ける木戸へみちびいた。

重四郎は、木戸を出てから、ふりかえった。

ひきかえして行くアンナの後ろ姿に、重四郎は、またしても、つよく惹かれるものをおぼえた。

——父の行方をさがしもとめている。それだけで、このようにも、人の心を打つさびしい翳を刷くものか？

いぶからずには、いられなかった。

と——不意に、植込みの陰から、人影が現われた。

「お主！」

鋭い声をかけて来た。

三十前後の、大兵の浪人者であった。

「誰にことわって、この奥にふみ入った？」

「建物が大きいので、迷い申した」

「弁解は、通らぬぞ！」

殺気を、あふらせて、睨みつけた。

——まずい！　ここで、争うのは、いかん！

重四郎は、とっさに、

「アンナという女性に会う用件がござった」

と、こたえた。

「アンナと知己だと云われるのか？」

「左様——」

浪人者は、なお、猜疑の色のつよい視線を、重四郎に当てていたが、

「こちらへ、参られい」

と、先に立って歩き出した。

——どうなるか？

重四郎は、度胸をきめた。

——いざとなれば、血路をひらいて、のがれるまでだ。

重四郎が、入れられたのは、ごくありふれた部屋に見えた。

三方が壁で、一方が板戸になっていた。

しかし、板戸が、ぴしっと音たてて閉められた瞬間、重四郎の直感が、はたらいた。

——これは、ただの部屋ではない！

こころみに、板戸を開いてみようとしたが、ビクともしなかった。

——どうやら、とじこめられたらしい。

館の中を、浪人者たちに開放しているように見せかけているが、実は、目に見えぬ網を張りめぐらした厳重な警戒をしているのだ。

怪しい、とにらんだ者は、こうしてとじこめておいて、吟味をし、容赦なく処断するに相違ない。

おそらく、この館から再び出られなかった浪人者は、かなりの数にのぼるであろう。

その中には、公儀の隠密も、ふくまれていたのではないか。

——やむを得ぬ！　こちらは、死地を覚悟して、入って来たのだ。

重四郎は、あわてぬことにした。

対手がたの出様次第で、どう動くか、きめるまでである。それまでは、おちついているに限ることだった。

重四郎は、あのアンナという娘のことを、考えた。

——あのさびしい翳には、なにかが、秘められている。ただ、父の行方をさがしもとめている孤独が生んださびしさではなく、人には語れぬ何かのために、あのように、眺めているだけでやりきれなくなるような翳を滲ませているのではないか？

重四郎は、仄暗い宙に、アンナの貌を、姿を、思いうかべた。

と——。

ふっと、重四郎は、自嘲した。

——おれとは、なんのかかわりもないことだ。

自分は、白河館姉弟のために、この館にふみ込んで来た者である。その目的を達して、脱出しなければならない。

決死の仕事を背負っている身が、異国の娘の苦悩にまで、首を突っ込む余裕など、ありはしないのだ。

——あの娘が、どうなろうと、おれの知ったことではない。

重四郎は、アンナの俤をふりはらうと、一方の壁に、身を凭せかけた。

静かであった。

物音ひとつきこえぬ。

もうそろそろ、黄昏であろう。このまま、夜を迎えることになるかも知れぬ。

——辰馬の奴は、どうしたかな？

重四郎は、見かけは大層強そうで、実は小心で臆病な仲間のことを、思い出した。

連れ立っていると、時折その性格が堪えがたく嫌悪されるが、はなれてみると、妙になつかしさをおぼえる——そんな男であった、天堂寺辰馬は。

——あいつのことだ。よもや、殺されては居るまい。ぶじに遁れて、どこかを、うろついているであろう。

槍ひとすじ

「暑くなりそうだな、今日は——」

朝陽がさしそめた街道を、大股に歩きながら、つぶやいたのは、鎧櫃を背負い、二間柄の槍をたずさえた浪人者であった。

伏見街道で、波乗り佐兵衛の最期を看とった人物にまぎれもない。

もう五十を越えた年配で、額や口の両脇の皺がふかい。

流浪のくらしは、永いに相違ない。旅の塵埃が、その顔にも衣服にも、しみ込んでいて、いくら洗っても、取れそうもないとみえる。

この風体では、どの大名屋敷の門をたたいても、すげなく追いかえされるだけであろう。

ただ、尾羽打ち枯らしたという形容そのままの、貧窮を全身に滲ませながら、その表情が、意外にあかるく、足どりもまた飄々としているのは、珍しいことと、云わねばなるまい。

おそらく、旅籠などに泊ったのではなく、野宿したに相違ない。肩や袖に、木の葉や草をくっつけていた。

路傍に建っている、阿弥陀堂の前に来て、

「さて、朝飯にするか」

と、云って、格子の前に腰を下ろした。

太い竹筒ふたつを、腰からはずした。

ひとつには糒、もうひとつには湯ざめの水が入っていた。

糒を口にほうり込み、水を飲んで、音たてて嚙みはじめた時、うしろの格子が開かれた。

「卒爾ながら……」

呼びかけたのは、天堂寺辰馬であった。

これまた、食いつめた惨めさを、その風体にむき出していた。

加古川宿で、守銭奴の旅籠のあるじを襲い、南蛮短筒で、肩を撃ちぬかれ、一文も取らずに遁走して、どこをどう、うろついていたものか、飢えきって、この阿弥陀堂に寝ていたとみえる。

自業自得とはいえ、幸運から完全に見はなされている男であった。

「なんだな？」

浪人者は、ふりかえった。

「それがし、ここ、三日ばかり、水腹でござる。その糒を、少々合力つかまつる」

辰馬は、頭を下げた。
「お安い御用だ」
浪人者は、辰馬がさし出すてのひらへ、竹筒をかたむけてやった。
辰馬は、夢中で、頬ばった。
とたんに、のどにつかえて、はげしく、むせた。
浪人者は、笑いながら、水を与えた。
「か、かたじけない」
もう一度、てのひらいっぱい、めぐんでもらって、噛み下した辰馬は、ようやく、人心地のついた顔つきになった。
「お手前、病んで居るのかな？」
浪人者は、問うた。
「さ、さよう……、少々手負うて居り申す」
「ほう――」
「いや、なに、ほんの、かすり傷でござる」
辰馬が、名乗ると、浪人者も、
「地引無限斎と申す」
と、告げた。
「いずれかの大名に随身を希望して、諸国を巡って居られるか？」

「いや――」
地引無限斎は、かぶりを振った。
「そのような希望は、十年前に、すて申したな」
「しかし、こうして鎧櫃を背負って居られるところを拝見いたすと、槍一筋の存念をすてられたとは思え申さんが……」
「ははは……、この鎧櫃の中に、具足など入っては居り申さん。とっくのむかし、売りはらい申した」
「……」
「櫃の中には、妻の骨が入って居るばかりでござるよ」
「ほう……それは――」
「それがしの妻は、よく出来た女子でござった。貧困に堪え、良人を信頼し、二十年の間、よく仕えてくれ申した。六千石の徳川家旗本の娘に生れながら、赤貧洗うがごとき状態をつづけても、愚痴ひとつ、こぼさず、さらに、けなげであったのは、良人の立身出世をのぞみさえも、いたさなんだ。その日が、平穏に送れるならば、それで幸せだ、と申して、笑顔を絶やさずに、それがしの心をなごませてくれ申した」
「……」
亡妻を追憶しながら、その横顔がいかにも明るいのを、辰馬は、いぶかしいものに、眺めた。

「で――つまり、貴殿は、どこへ参られるのか、あてがござるのか？」
「あてはござらぬ。いや、あてがない、と申せば、嘘に相成る。……つまり、それがしは、日本中で、最も景色の美しい場所を、さがして、歩いて居る、と申せる」
「どうして――？」
「その場所に、妻の骨を、埋めてやりたく存ずる」
地引無限斎は、こたえた。
辰馬は、いささかあきれて、その横顔を見なおした。
たったそれだけの目的で、漂泊の旅をつづけているのか。
辰馬には、なんとも、ばかくさいことに思えた。
と――無限斎は、
「お手前は、それがしの行為をばかげて居る、と感じられたであろう」
「い、いや……」
辰馬は、狼狽した。
無限斎は、笑いながら、
「たしかに、他人には、ばかげたことに、思われよう。しかし、それがしにとっては、最も重大な目的となって居り申す。……お手前は、妻帯されたことがおありか？」
「いや、いまだ一度も――」
「妻というものは、まことに、いいものでござるよ。心こまやかな、情を知る女子を妻にすると、はじめて、人生の愉しさというものが、判って参る」

「それほど、妻とは、いいものでござるか？」
辰馬は、一向に気乗りのせぬ調子で、たずねた。
「左様――、立身の、出世の、と世の武士どもは、血眼になって、人を押しのけて、匍い上ろうといたして居るが、男子の本懐は、必ずしも、一国一城のあるじになることではござらぬな。眉目うるわしく、心優しい女子を妻にして、むつまじく、平穏な日々をすごすこともまた、良き生涯と申せる」
「ははあ……」
辰馬は、間のびした相槌を打った。
「男子が膂力が強いこと、城を取り、国を奪い、富貴の身になることも、畢竟は、妻や子を幸せにしてやるためではないか、と存ずるが、いかがであろう」
辰馬は、なんとも、返答のしようがなかった。
こういう言葉は、生れてはじめて、きかされたのである。
辰馬の認識では、男子の本懐、面目は、戦いに勝ち、一国一城のあるじになること――それまでであった。
一国一城のあるじになってさきからのことは、考えたこともなかった。第一なれるはずもなかったから、考えが及ばなかったのは、当然である。
それにしても、城主となることが、妻子を幸せにしてやる目的による、とはなんとも、気

はずかしい話ではないか。

「ははは……、どうやら、天堂寺氏は、それがしの申すことは、笑止千万と思われるらしい」

「い、いや、べつに、そうは、思い申さんが……」

「よろしい、よろしい。若いお手前が、笑止千万と思われるのは、きわめて、あたりまえのことであろう。しかし、いずれの日か、お手前が、良き妻をめとられたら、それがしの申したことに、合点されるであろう」

そう云いのこして、無限斎は、立ち上った。

「あ、もし――」

辰馬は、あわてて、

「まことに、失礼ながら、それがしを、連れにして、頂けますまいか？」

と、たのんだ。

「お手前は、行くあてがおありにならぬか？」

「ござらぬ。ごらんのごとく、いささか病みつかれて、飢えているばかりでござる」

辰馬は、加古川宿を遁げ出して、夢中になっていそいでいるうちに、逆にまた、姫路の方角へ、ひきかえしてしまっていたのである。

もはや、一人で、再び加古川宿を通り抜ける勇気はなかった。

また西国へ行くことになろうが、そんなことは、どうでもよくなっていた。

ともかく――。

地引無限斎の腰の竹筒の中の食糧が、目下の辰馬にとって、最大の魅力であった。

「ついて来たければ、ついて参られるがよい」

無限斎は、承知した。

同じ日――。

姫路の城下はずれで、ひとつの異変が起っていた。

この朝、数馬は、姉の静香に、

「姉上、釣りに行って来る」

と、告げた。

あの日以来、数馬は、ずっと、家にとじこもっていた。

遊び友達は、ただ一人もなく、常に孤独ですごさなければならぬ数馬の唯ひとつの愉しみは、釣りであった。

「行っておいでなさい」

静香は、ゆるした。

数馬が、たった一人で、外出することには、不安がなくもなかったが、終日家にとじこもっているのを見るのは、静香もつらかった。

すでに、城代家老の命令によって、期限を切って退去を迫られている姉弟であった。

立ち退けば、再び、この土地へ還って来ることはあるまい。

静香は、数馬に、名残りの釣りをさせてやることにした。
釣竿と魚籠をさげて出て行く弟を見送ってから、静香は、家の中を片づけはじめた。毎日すこしずつ、立ち退きの用意をすすめていたのである。
期限は、十日と切られていた。そして、もう四日が、過ぎていた。
大坂からさわと嘉七が、伊丹から重四郎が、この六日間のうちに、戻って来てくれることが、いまの静香の願いであった。
数馬が出て行って四半刻ばかりして、人の訪れる声がした。
静香が出てみると、先日、退去命令をつたえに来た藩士の一人であった。
「城代よりの代理で参った」
「はい――」
「織田重四郎殿は、ご在宅か。もしご在宅ならば、城代が会いたいと申されて居るが……」
「お手前様がたがおみえになった日に、出て行かれました」
「何処へ？」
「存じませぬ」
静香は、目を伏せて、重四郎の行先をかくした。
「城代は、是非とも会いたい、と申されて居る。戻られたら、お伝えねがおう」
「承知いたしました」
「それから、先日申した通り、退去の儀、十日の猶予をお与えしてあることを、お忘れないよう――」
「心得て居ります」
藩士は、去った。
ふたたび、片づけをはじめた静香は、しかし、手もとから心がはなれてしまい、暗い気分に沈んだ。
――十日経って、重四郎様も嘉七も、戻って来なかったら、どうすればよいのであろう？
姉弟二人、行くべきあては、全くないのであった。
途方にくれるよりほかはないのである。
行先もさだめず、この家をすてて、出て行かねばならぬとは、なんという惨めなことであろうか。

かなりの幅の川であった。磧もひろく、流れも水嵩がある。
数馬は、磧に立って、釣糸を流れに投げ、下へゆっくりと引かせてはひきあげ、また、投げていた。
水につけた魚籠の中では、小鮒が三尾ばかり、泳いでいた。
数馬は、じっと水面を見つめて、無心でいるこの時が、いちばん好きであった。
流れは、ほとんど動いていないくらいのゆるやかさであった。陽ざしを映して、眩しく光を散らしている。もう泳いでもいいくらいであった。夏になると、数馬は、釣りのあと、泳

ぐこともある。

うしろで、足音が起ったが、数馬は、べつに気にもかけずに、水面へあてた視線を動かさなかった。

不意に――。

「裏切り者にくれてやる魚は、居らんぞ！」

烈しい語気の罵声が、あびせられた。

ふりかえった数馬は、そこに二人の武家の少年を見出した。

どちらも、数馬より、二つ三つ年かさであった。

その一人の顔には、見おぼえがあった。先頃、数馬を襲って、打擲した群れの中にいた。

「わしは、裏切り者ではない！」

数馬は、叫びかえした。

二人とも、せせらわらった。

「貴様の祖父が国を売った罪は、まだ、消えていないんだぞ！　貴様は、その罪ほろぼしをしなければならないんだ！　魚など釣る資格があるか！」

「坊主になれ、坊主に！」

――我慢しよう！

数馬は、いったんは、くちびるを噛みしめて、屈辱に堪えようとした。

しかし――。

「坊主になるより、乞食になって、城下の辻で、土下座すればいいんだ！」

そうののしられた瞬間、数馬は、われを忘れた。

「もう一度、云ってみろ！」

「おう、なんどでも云ってやるぞ！　乞食になれ、乞食になって、城下の辻で……」

対手がくりかえしかけるや、数馬は、夢中で、釣竿を、振った。

ぴしっ、と小気味のいい音たてた対手の頬が、みるみる、みみずばれになった。

すると、もう一人が、

「やったな、裏切り者めっ！」

と、わめいて、抜刀した。

「討ちとってくれるぞ！」

白刃がふりかぶられるのを見て、数馬も、脇差を抜いた。

「来いっ！」

あとは、滅茶滅茶なたたかいであった。

ちょうど、その時、堤を馬を走らせて来た三騎あまりが、

「なんだあれは！」

「子供ではないか！」

と、おどろいて、一斉に、馬からとび降りると、斜面を馳せ降りて来た。

三人の藩士が、積を奔って、二間の距離まで迫った。

その時、数馬が、無我夢中で突き出した切先が、敵の胴を、ふかぶかと突き刺した。
「ああっ！」
絶鳴をあげて、少年は、のけぞった。
数馬自身、もはや、動物に近い状態にあり、切先を二寸も突き刺しつつも、なお、力をふりしぼって、深く突き入れようとしていた。
「いかん！」
「こらっ、止さんか！」
藩士たちは、とびかかると、数馬をひきはなし、脇差をもぎ取った。
一人が、刺された少年をかかえてみて、
「これは、駄目だ！」
と、叫んだ。
少年の瞳孔は、すでにひらいてしまっていた。
数馬の片腕をねじあげた藩士が、
「これは、どこのせがれだ？」
と、もう一人の少年にたずねた。
少年は、興奮で、容易に口のきけない状態になっていた。
ようやく、あえぎつつ、
「裏切り者の、孫めだ！」

と、告げた。
「裏切り者？　裏切り者とは？」
と、小首をかしげる藩士へ、もう一人が、
「鹿野だ。鹿野重左衛門の孫だ」
と、云った。
「おう、白河館の――」
合点した藩士は、
「たわけが！　対手もあろうに、旗大将の子息を殺し居った」
と、数馬を、にらみつけた。
数馬は、もう抵抗はしなかった。ほとんど、虚脱状態であった。
それから、半刻後――。
数馬は、奉行所の揚り屋に入れられていた。
奉行所内に、あわただしい騒ぎの音が起っていたが、それが、自分の為した罪のためのものであるという判断もつかず、数馬は、じっと、宙を見つめていた。
数馬は、姉を恋うていた。姉に会いたかった。
――姉上！
心のうちで、呼んだ。
すると、悲しいまなざしが、じっと、自分を見まもってくれた。

――姉上！　わしが、わるいのではないんだ！　あんなはずかしめを受けて、がまんならなかったのだ。だれだって、武家の子なら、がまんはしなかった。

そう弁解してみた。

しかし、姉は、ただ、黙って、悲しげに、自分を見まもっているばかりであった。

――わしは、わるくない！　わしは、武家の子だ！

数馬は、泪をにじませた。

にわかに、悲しみが、胸にあふれた。

「姉上！」

思わず、声を出して、姉を呼んだ。

「わしは、わるくないんだ！」

不意に――。

数馬は、こうして、じっと坐っていることに、堪えがたくなった。

――殺される！

そう直感した。

――殺されて、たまるか！

なんとしてでも、生きなければならぬ、という反抗の意識が、つきあげて来た。

しかし、ここからにげ出すのは不可能であることも、数馬には、わかっていた。

ただ、

――生きたい！

という願いだけが、数馬の全身にあふれた。

「姉上！　わしは、生きたい！」

泪にぬれた顔をあげて、数馬は、口走った。

その折――。

廊下に足音がひびき、

「ここか！」

激しい語気の声音とともに、板戸がひき開けられた。

一人息子を殺された旗奉行河合治郎左衛門は、憤怒で顔面を朱にそめていた。

「こやつ！」

睨みつけて、

「蹴殺してもあきたらぬぞ！」

と、あびせた。

その呶号が、数馬を、きっとならせた。

「わしは、さむらいだ！　さむらいの面目をたてるために、たたかったのだ！」

頭をあげて、叫ぶ数馬に、旗奉行は、

「なにっ！」

と、呶鳴りざま、足をあげて、肩を蹴った。

鞠のようにころんだ数馬は、はね起きて、
「無礼な！　さむらいが、面目をたてるために、尋常の、勝負して、ど、どこが、わるい！」
と、絶叫した。
「小面憎う、ほざくか！」
旗奉行は、もう一度、足蹴にしようとした。
瞬間——。
数馬は、その足下をかいくぐって、むしゃぶりついた。
「こやつが！」
旗奉行も、われをわすれて、数馬の髷をひっつかんで、ねじ伏せようとした。
数馬は、死にもの狂いに反抗した。
その時——。
「河合、見ぐるしい！」
叱咤が、背後から、とんだ。
旗奉行は、はっとなって、ふり向き、そこに、城代家老の姿を見出して、
「これは！」
と、狼狽して、数馬を、つきはなした。
「子供の喧嘩に、親が出るとは、大人気ないではないか。この子供をさいなんだところで、お主のせがれは、生きかえりはせぬ」

美濃部将監は、冷やかに、云った。
旗奉行は、鼻白んで、顔を伏せた。
「この将監が、吟味してみよう」
将監は、旗奉行を去らせると、数馬の前に坐った。
「姓名をきこうかの」
「楠木数馬」
数馬は、怯じずに、見つめかえして、こたえた。
「楠木、と名のるところをみると、楠木正成の後胤かの？　左様なことを、きかされて居らぬか？」
「父は、教えてくれる前に、みまかり申した」
「おう、そうであったな。白河館は、そなたがようやく物心ついた時に、滅びたのであったな」
「ほろびては居り申さぬ。わたくしが、あとを継ぎます」
「ふむ。面だましいがあるの」
将監は、笑った。
それから、
「河合治郎左衛門のせがれを、殺めたいきさつを、きこうか。くわしく、話してみせい」
と、うながした。

数馬は、一人で釣りをしているところへ、二人の少年がやって来て、裏切り者の孫には、魚を獲る資格がない、とはずかしめられ、さむらいの子として、堪えがたく、云いかえしたところ、むこうが、脇差を抜いたので、やむなく、自分も抜き合せて、たたかった旨を、述べた。

将監は、じっと、見まもりながら、

――わずか十二歳あまりの小童としては、よくできて居る。

と、感心していた。

重四郎の少年時代のことが、思いあわされた。

重四郎も、きかぬ気象の、喧嘩ばやい少年であった。しかし、正邪の理はよくわきまえていた。

「すると、対手は、二人であった、と申すのだな？」

「はい」

「それは、はじめてきいた。河合のせがれは、たしか、十四歳であったな。そなたより、年かさであったわけだが、あえなく討たれ居ったの」

「……」

「そなたは、いま、悔いて居るかな？」

そう問われて、数馬は、うつ向いた。

「どうじゃ、悔いて居るか？」

「いいえ！」

ふたたび、顔をあげた数馬は、かぶりを振った。

「悔いては居りませぬ！」

「人一人を、あやめたのだぞ？」

「むこうが、わたくしを、はずかしめなければ……、脇差を抜かなければ……、わたくしも、脇差を抜いては居りませぬ」

「ふむ。理屈は成り立つの。……武辺の面目、ということを、誰に教えられたな？」

「姉から、教えられました」

「そうか。そなたには、姉がいたな」

将監は、ちょっと考えていたが、

「ともあれ、そなたは、当藩旗奉行のせがれを、あやめた。その罪は、まぬがれぬぞ」

と、申し渡した。

将監は、揚り屋を出ると、町奉行のいる座敷にもどった。

町奉行は、旗奉行と対坐していた。

両名は、将監が座に就いて、口をひらくのを、待った。

息子を殺された河合治郎左衛門は、町奉行に対して、自分の手で、白河館のせがれの首を刎ねたい、と申し出ていた。

町奉行は、しかし、温和の人物であったので、

「御城代の思案をうかがった上での裁きにいたそう」
と、にげていた。
将監は、町奉行を視ると、
「二対一の喧嘩であったそうな」
と、云った。
「いや、杉早十郎次のせがれは、ただ、傍観していただけであった、ときき申した」
河合治郎左衛門は、云った。
将監は、冷やかな視線を、旗奉行に向けると、
「すると、杉早のせがれは、友が討たれるのを、だまって目撃していただけ、ということに相成る。これが事実といたせば、杉早は、せがれの腰抜けを許すまい。いやしくも、杉早は、槍術師範だ」
と、云った。
治郎左衛門は、狼狽して、目を伏せた。
「わしは、おそらく、二人して、かかったに相違あるまい、と想像する。たぶん、杉早のせがれは、白河館のせがれに、釣竿で打ちのめされたのであろうな。顔面にでも、その証拠がのこって居るのではないか」
その通りであった。
杉早十郎次の息子の顔には、みみずばれができていたのである。

「それに……、お主のせがれは、白河館のせがれよりも、二つ三つ、年かさではなかったか」
「……」
「不覚であったと、申すよりほかはない」
「御城代！」
治郎左衛門は、憤然となった。
「世間が許さぬ白河館の遺児に、慈悲をかけられるようなお口ぶりでござるが、許してやるご存念でござろうか？」
「許すとは、申して居らぬ。喧嘩両成敗は、武家法度ではある」
「処刑されるのであれば、この父親に、首討たせて頂きとう存ずる」
「そこだの――」
「そこだとは？」
「十二歳の小童といえども、武家のせがれならば、切腹の作法を心得ていよう」
「しかし――」
「まあ、待たっしゃい」
将監は、治郎左衛門を制して、
「裁きを正しくつけるのが、政道と申すもの。私怨をふりかざして、逆縁の仇討ちなど、十二歳の小童対手に、いささか、みっともない。この将監に、まかせてもらおう」
「……」

「不服か？」
「い、いや――」
治郎左衛門は、やむなく、かぶりを振った。

忠僕譜

――数馬は、また、喧嘩をして、重傷でも、負うているのではあるまいか？
静香は、夕餉の膳を前にして、不安にかられていた。
いくら釣りに夢中になっていても、もう夕闇がおりている。
釣糸を川面に垂らしていられる時刻ではなかった。
友達が一人もいるわけではないし、おそくまで、外に遊んでいて、姉に心配かけてはならぬ、という心づかいもする数馬であった。
この前の例もあり、静香には、どこかの草むらに倒れて、気を失っている弟の姿が、想像されるのであった。
――もし、倒れているのならば、すててはおけない。
嘉七がいれば、さがしに行かせることができるが、いまは、静香一人では、不安にかられつつ、待っているよりほかはなかった。

暮六つ刻からは、武家の女人は、外出してはならぬ、というならわしがあったのである。
しかし――。
静香は、じっと、坐って待っていることに、堪えがたくなった。
想像しているうちに、弟は、本当に、瀕死のていで、どこかに倒れているに相違ない、と考えられて来た。
すてておけば、息をひきとってしまうような気がして来た。
――さがしに行こう。
ついに、静香が、立ち上った――その折であった。
せわしく駆けて来た馬蹄の音が、家の前で、停った。
静香は、はっとなった。
「たのもう！」
激しい語気で、案内を乞われるや、静香は、自分で自分の顔色が、変るのが、わかった。
玄関に立ったのは、見知らぬ武士であった。
「町奉行所与力芦田吉三郎」
強面で、名のり、
「弟御の身について、報せ申す」
と、云った。
「数馬が、また、誰かと、いさかいをつかまつりましたか？」

「左様――。弟御は、旗奉行河合治郎左衛門殿の子息を殺め、いま、奉行所揚り屋に据えられて居り申す」

「……」

静香は、息をのみ、一瞬、思考力をうしなった。

しばし、与力の顔を、呆然と、見あげていた。

「城代家老殿には、じきじきに吟味なされたのち、特別のご慈悲をもって、姉なるおん身に、会わせてみしょう、と申され、それがしを、遣わされたのでござる。……奉行所まで、同道いたす」

与力に、そう云われたが、静香は、とっさに、返辞をしかねた。

「会いたくない、と云われるならば、それがし、立ちかえって、その旨、報告いたす」

与力芦田吉三郎に、そう云われて、静香は、はっと自分をとりもどし、

「いえ、参りまする。仕度いたしますれば、暫時、ご猶予を――」

ことわって、立ち上った。

静香は、奥へ入った。

とたんに――。

「まあ！」

と、目をみはった。

そこに、いつの間にか、嘉七がもどって来ていて、坐っていたのである。

「奉行所からの使者の口上、ぬすみぎきいたしました」

嘉七は、緊張した面持で、静香を見つめた。

静香は、唯一の味方がもどって来てくれたよろこびで、泪があふれた。

「嘉七！　ど、どうしたら、よいのでしょう？」

崩れるように、その場へ坐って、静香は、肩を喘がせた。

「お嬢様！　往って、お会いなさいまし。若様に、そっと、必ず救い出すから、安心して待つように、とお告げ下さいますよう、お願いいたします」

「救い出す――といって、いったい、だれが……？」

「この嘉七が、身をすてても、救い出してごらんに入れます」

「お前が！　で、できるのですか？」

「忍びの術をすてて、久しゅうはございますが、忘れたわけではございませぬ。この年齢では、骨もかたくなって、むかしのように、自在な働きはのぞめませぬが、若様をお救いすることぐらい、やって、できぬわざではございませぬ。おまかせ下さいまし」

「嘉七！　この恩は……」

手を合わせかける静香を、嘉七は、いそいで、抑えて、

「さ、お仕度を――」

と、せかした。

静香が、衣裳をきかえて、与力にしたがって、家を出た時、嘉七はいつの間にか、姿を消

していた。

「そなたら姉弟は、数日うちに、当地を退去するはず、ときいて居ったが……」

芦田吉三郎は、同情をこめた口調で、云った。

「不運であった、と申すほかはない」

「あの……」

静香は、ふと、一縷の希望にすがりたい気持で、

「旗奉行殿のご子息は、生命のほどは――？」

「その場で、相果てた」

「……」

静香は、絶望した。

この上は、嘉七の働きを、祈るよりほかはなかった。

しかし、たとえ、嘉七が救出に成功しても、数馬をつれて、遠くへ遁れることが、できるものであろうか？

とても不可能に思われる。

「楠木数馬、出ませい！」

揚り屋の板戸が開けられ、声がかかった。

瞬間――。

――殺されるのだ！

数馬の全身に、戦慄が走った。

――死にたくない！

数馬は、心で絶叫した。

「楠木数馬！　出ませい！」

かさねて、うながされて、数馬は、よろよろと立ちあがった。

恐怖にかられるままに、隙をうかがって、脱兎となるには、体力も気力も乏しくなっていた。

十代になったばかりの少年にとって、この一日の激変は、あまりにも、辛いものであった。

数馬は、うなだれて、番士のあとにしたがった。

長い廊下を通って、

「ここへ、入れ」

と、押しやられた数馬は、そこの板敷きに、姉を見出すや、悲しみが一時に、胸にあふれ、意味をなさぬ叫びをあげて、走った。

静香は、あわれな弟を、ひしと、かかえた。

城代家老の特別のはからいで、半刻の面会が、ゆるされたのである。

板戸は閉められ、監視の目はなかった。

姉弟二人きりで、この悲運をなげき合うことが、ゆるされた。

静香は、弟のせなかを、なでながら、
「どうして、こうなったのでしょう？　……どうして、そなたは、がまんが、できなかったのでしょう？」
と、つぶやくように、云った。
数馬は、哭きむせぶばかりであった。
やがて——。
静香は、数馬をはなして、
「数馬——勇気を出すのです」
と、はげました。
「姉上！　わ、わしは、殺されるのは、いやだ！」
「数馬、ききなさい！」
静香は、声をおとすと、
「嘉七が、もどって来ました」
と、ささやいた。
「……？」
数馬は、姉を、見つめかえした。
「嘉七は、そなたを、救い出す、と申して居ります」
「ほ、ほんとか？」

「しずかに！」
静香は、板戸のむこうに耳があることをおそれつつ、
「嘉七は、むかし、忍びの者でした。ですから、救い出すてだてを心得ています。……待っていなさい」
「う、うん！」
「でも、失敗した時は、そなたは、覚悟をきめて、決して、見ぐるしいふるまいをしてはなりませぬ！　武家の子として、いさぎよく、生命をすてるのです！　わかりましたか？」
「わかった！」
数馬は、うなずいた。
数馬が、揚り屋へ連れ去られたのち、静香は、奥へみちびかれた。
その座敷に、恰幅のいい老人がいた。
「わしは、城代の美濃部将監じゃ」
そう名のられて、静香は、平伏した。
「そなたの弟は、気の毒じゃが、法度にしたがって、処刑いたさねばならぬ。喧嘩両成敗だ」
「……」
静香は、その宣告には、返辞をしなかった。
「そなたの云い分は、あるかな？」

問われて、静香は、頭をあげた。

「わたくしども姉弟は、当地へ戻って以来、近隣の衆より、つねに、白い目で視られて参りました」

「うむ――」

「祖父が、どのような罪を犯したか存じませぬが、その孫までが、このように、はげしく憎まれなければならないとは、わたくしも弟も、合点のいかぬことでございました」

「そうであろうな」

「弟は、いつも、武家町家を問わず、同じ年頃の子供衆から、あざけられ、ののしられ……、そのため、遊び友達もなく、たった一人で、毎日をすごして参りました。釣りが、ただひとつの愉しみでございました。おそらく、そこへ、旗奉行のご子息たちが、寄って来て、あざけり、ののしられたので、ついに、かっとなったのだと存じます」

「その通りであったようだな」

「先様を殺めた上は、喧嘩両成敗のお仕置は、やむを得ませぬが、非がいずれにあったか、これを明らかになさるのが、ご政道かと存じます」

「うむ――」

将監は、うなずいた。

――よくできたむすめだ。

「お慈悲をお願いはいたしませぬが、せめて、高札をもって、弟に理のあったところを、お示し下さいますれば、この上の幸甚はございませぬ」

「よし、わかった。きいておこう。……ところで――」

将監は、じっと見すえて、

「織田重四郎は、いかが、いたしたな？」

と、問うた。

静香は、城代家老を、見かえした。

「重四郎という男、実は、むかし、わしが手塩にかけた」

「え?!」

「わしにさからって、出奔し、行方知れずになって居ったが、ゆくりなくも、当地へ参ったので、めぐり会うた」

「……」

「そなたら姉弟を助けて、伊丹の神屋主膳を討つ、と申して居ったが……」

「織田様は、伊丹へ、探索におもむかれました」

「やはり、そうであったか。あの平家館へ、入ったならば、生きては、もどれまいの」

「……」

「尤も、あやつは、生命冥加な男ゆえ、あるいは、にげもどるかも知れぬ」

将監は、微笑して、

「さて、重四郎め、にげもどった時には、闘志をうしなって居るであろうな」

と、云った。

「……？」

静香は、見つめかえしているばかりである。

「そなたは、神屋主膳が、いかなる人物か、知っては居るまい」

「父母の敵ということだけを知って居ります」

「そのことだが……、そなたらの父母を、神屋主膳が暗殺した証拠があるか？」

「……」

静香は、そう問われて、返辞ができなかった。証拠はなかった。

しかし、神屋主膳以外に、父を暗殺しなければならない理由を持つ者が、いたであろうか。堺の港に於ける、白河館と平家館の争いは、年久しきにわたっていた。両家の使傭人たちは、しばしば、血で血を洗う乱闘を演じていた。

誰人が仲に立っても、和解の余地はなかったのである。

そのことを、静香は、きかされていた。

静香は将監を視かえすと、

「証拠は、ございませぬ。けれど、父母の敵は、平家館のあるじと、わたくしは、信じます。……先般も、神屋より遣わされた、と申す浪人二人が、わたくしども姉弟を、討ちに参りました。さいわいに、織田様のお働きにて、事なきを得ましたが、これをもってしても、神屋主膳が、白河館をどのように深く憎んでいるか、おわかりと存じます」

「ふむ——。どうも、妙だな。わしの看ている神屋主膳とは、ちがって居るな。神屋は、そのような狭い度量の持主とは、思えぬが……」

「おいとまつかまつります」

静香は、頭を下げた。

もう一度、弟の生命乞いをしたい衝動を、必死にこらえている様子が、将監には、よくわかった。

——ふびんな！

そう思う。

しかし、城代家老として、法度をまげるわけにはいかなかった。

「明朝、遺髪を取りに参るがよい」

「はい」

「そなたは、どこへ参る所存かな？」

「あてはございませぬ」

「京へもどる希望があれば、しかるべき公家を紹介してもよいぞ」

「ご厚意は有難う存じますが、この身ひとつの扱いは、心得て居ります」

静香が、将監の同情など受けつけるはずもなかった。

静香は、去った。

——どうなるのであろう、あの娘の行末は？

将監は、目蓋をとじて、つぶやいた。

――重四郎に、たよって生きて行ってくれれば良いが……。

そう想像してみたものの、重四郎という男が、はたして、女一人を幸せにできるか、どうか、疑問に思われる。

乙夜（午後十時）を告げる拍子木の音が、遠くでひびいた。

数馬は、揚り屋の板敷きに延べられた夜具に、横たわって、闇に大きく眸子をひらいていた。

泪は、もう涸れていた。

――父上と母上のそばへ行くのだ。

けなげにも、自分にそう云いきかせ、心をおちつけていた。

そして、

――首を斬られる時は、武士らしく、立派な態度でいよう！

と、心に誓ったのである。

おそらく、明朝、処刑されるのだ。

心をおちつけたいま、数馬は、ずっと、姉のことを想いつづけていた。

――一人ぼっちになって、姉上は、どうされるのだろう？

雛が身をすり寄せるようにして、くらして来た姉弟であった。

姉は弟がいなくては生きられないし、弟は姉がいなくては生きられなかったのだ。

一人ぼっちになって、姉がどうやって、生きて行くのか――数馬は、死んで行く自分のことよりも、いまは、そのことが、案じられた。

これは、もはや、少年の気持ではなく、人生というものを知った大人に近い心境であった。

人間というものは、たとえ生れて十年余しか経っていない少年でも、死を覚悟すれば、その澄んだ心は、悟りをひらいた善知識のそれにもおとらぬものになるのであろうか。

「姉上！」

数馬は、そっと、呼びかけた。

「幸せになって、下され」

そのつぶやきがおわらぬうちに、どこからともなく、

「坊っちゃま！」

と、呼ぶ声が、ひびいて来た。

数馬は、はっと、わが耳をうたがった。

「坊っちゃま！」

こんどは、はっきりと、きこえた。

「あ――」

数馬は、はね起きた。

「坊っちゃま！　嘉七でございます。いま、お救い申します」

「嘉七！」

数馬は、天井を見あげた。

闇に馴れた目は、天井の一隅に、穴があき、そこから一本の綱が、するするとおろされるのを、見わけた。

その綱をつたって、黒影が、すばやく降りて来た。

「嘉七！」

数馬は、しがみついた。

「おつらかったでございましょう。もう大丈夫でございますぞ。さ、力を出して、この綱をおのぼりになるのです」

「にげられるか？」

数馬は、姉が告げたことがまちがいなかった、と知った。

姉から告げられても、数馬は、どうやってこの揚り屋から嘉七が救い出してくれることができよう、と信じられなかったのである。

嘉七は、救いに来てくれたのだ。

嘉七は、数馬を、綱をよじのぼらせて、天井裏へもぐらせておくと、夜具を人が寝ているかたちに工夫した。

綱をつたって、天井裏へもどる嘉七の身軽さは、とうてい、老人の動作とは思えなかった。

綱をひきあげ、天井板をはめると、

「これでよし！」

と、うなずき、

「さ、坊っちゃま、参りましょう」

と、手をにぎった。

「ありがとう、じいや！」

「なんの、これが、てまえのつとめと申すもの——。梁をつたって行きますのじゃ。すべって、音をたててはなりませぬぞ」

注意しておいて、そろそろと、闇の中を、進みはじめた。

やがて、嘉七が、ふたたび、綱をおろしたのは、さまざまの武器や拷問道具を置いた部屋であった。

降り立つと、そっと、板戸をほそめに開けてみて、人影のないのをたしかめ、

「よし——」

嘉七は、数馬の手をひいて、忍び出た。

庭へ抜け出るまでは、人影に出会わずに、すんだ。

二人にとって、不運は、その庭に、旗奉行とその組士がいたことである。

河合治郎左衛門は、城代家老を疑っていた。

——もしや、白河館のせがれを、こっそりのがすのではあるまいか？

ひとたび、疑惑の念を起すと、それをはらいのけるわけにいかなくなったのである。

そこで、自分の屋敷へ帰るのを止めて、この奉行所へとどまり、監視することにしたので

あった。

ひそかに、旗奉行の組に属する下士を十人も呼び寄せていた。

――もし、城代が、あの小せがれを遁そうとしたならば、容赦はせぬ！

河合治郎左衛門は、先祖代々、この本多家に仕えている。

城代家老美濃部将監は、一代の家臣でしかない。異数の出世をした人物であるが、当然、父祖の代から仕えている者たちからは、ねたみを抱かれている。

場合によっては、これを契機にして、城代家老の席からひきずり落してやろう、という考えも、河合治郎左衛門の心には、わいていた。

そして、失脚せしめれば、快哉を叫ぶ者もすくなくないはずであった。

奉行所の庭には、幾箇所かに、番士の見張りの小屋が、もうけられてあった。

河合治郎左衛門は、そのひとつに、いた。

突然――。

「誰か？」

鋭い誰何の声が、ひびいた。

治郎左衛門が、庭へはなっている組士の一人の声であった。

治郎左衛門は、

――さては！

と、躍りあがった。

――発見された！

歯をくいしばった嘉七は、地面へ、数馬を伏せさせ、自分も、伏しながら、

――この生命をすてる時が来た！

と、覚悟をきめた。

「坊っちゃま！　にげなければなりませぬ。どんなことがあっても、ぶじに、おにげになるのですぞ！」

嘉七は、数馬に勇気を与えるために、その手を、力いっぱいにぎりしめた。

「あそこの植込みまで、まっしぐらに、走られませい！」

「じいやは、どうするのじゃ？」

「わしのことは、気にかけてはなりませぬ。ご自分のことだけを、お考えなさるのじゃ。……よろしいかな。あの植込みのむこうの塀に、縄梯子をかけてありまする。それを、のぼって、塀を越えれば、裏手は、林になります。その林の中に、馬がつないであります。それで、西へ、まっすぐに、おにげになるのですぞ」

数馬は、嘉七のすすめで、馬を責める稽古をしていたのである。

「よろしいかな。じいやは、反対側の植込みへ向って、走りますぞ。その隙に、あの植込みへにげ込まれませい」

「じいや！」

「坊っちゃま！　男なら、やってのけられませい！」

嘉七は、数馬の小さな肩を、ぎゅっと抱きしめておいて、次の瞬間、伏せた姿勢で、奔り出した。

「あそこだ！」

叫びが、あがった。

少年を見せかける嘉七の疾駆は、すばやかった。

――じいや！

数馬は、胸のうちで、絶叫した。

嘉七が云いのこした言葉は、数馬の脳裡に刻まれていた。

数馬は、老僕の必死の忠節を、むだにしてはならなかった。

庭を見張る者たちすべてが、疾駆する嘉七を追いはじめるのを、見はからって、数馬は、教えられた植込みへむかって、脱兎となった。

嘉七が、反対側の植込みにとび込もうとした時、見張りの一人が、

「こやつ！」

と、行手をふさいだ。

嘉七は、まっしぐらに、突進して、手刀で倒した。

そこへ殺到した群れが、

「なんだ？」

「曲者は、子供ではないぞ」

「そんなはずはない！」

「救い出しに来居った奴だろう」

と、口々に云いつつ、油断なく、植込みを包囲する陣形をとった。

嘉七は、木下闇にひそみながら、

――南無！

と、両手を胸で組んでいた。

――若に、お加護を！

神に、仏に、姉弟の亡き父母に、祈った。

「どうした？　まだ、捕えぬのか。頭数をそろえながら、小せがれいっぴきとらえることが、できぬとは、なんたる腑甲斐なさじゃ！」

急ぎ足に近づいて来た旗奉行が、呶鳴りつけた。

「お奉行――。逃げ込んだ曲者は……」

子供ではないように思われると、云おうとした一人が、

「たわけ！」

と、あびせかけられた。

「ぐずぐずいたすな！　踏ん込め！」

一同は、どっと、馳せ入った。

嘉七は、迫って来る敵勢を、ひきつけておいて、わざと、ぱっと走り出した。

「そこだっ！」
「包めっ！」
躍起になって追いすがって来る群れを、巧みに、ふりきって、右へ奔り、左へ逃げる敏捷な動きは、さすが、むかしとった杵柄であった。
しかも、翻弄するのではなく、必死に、逃げようとみせて、時をかせぐのであった。
しかし——。
やはり、五十なかばの老齢には、嘉七も、勝てなかった。
追手の中から、投げられた突く棒に、したたか背中を打たれて、
「うっ！」
と、うめいて、地べたに匐った瞬間から、嘉七の動きは、にぶいものになった。
そして、ついに、塀ぎわへ追いつめられて、嘉七は、
——これまで！
と、観念した。
十数人に肉薄されて、嘉七は、わるびれず、
「手向いは、つかまつらぬ」
と、云った。
「おのれは、何者だ？」
「白河館の下僕でござる」

「救い出しに参った、と申すか」
「さ、さようでござる」
たちまち、高手小手にしばりあげられて、嘉七は、河合治郎左衛門の前へ、ひき立てられた。
「白河館の下僕と申したな？」
治郎左衛門は、睨みつけた。
「いかにも——」
「老いぼれのぶんざいで、奉行所へ忍び込んで参るとは、よほどの根性持ちとみえる。……覚悟は、よいであろうな？」
「てまえの生命など、どうなってもかまいませぬ。……幼いあるじに、お慈悲を——」
嘉七は、頭を下げつつ、
——若は、もう、馬で、奔られたか？
と、そのことのみを念じていた。
幸運であった。
数馬は、見とがめられずに、塀をのりこえると、林の中へ、駆け入っていた。
嘉七が云った通り、そこに、馬が一頭、つないであった。

地引無限斎

「冬が去れば、春が来る。春が逝けば、夏がめぐって来る。夏がすぎると、秋がやって来る。秋は、すぐに、冬になる」

あたりまえのことを、のんびりとした声音で云う、鎧櫃を背負った浪人者を、天堂寺辰馬は、とまどったように、横目で見やった。

この姫路まで、なんとなく、くっついて来た辰馬であったが、飄々としてとらまえどころのないこの浪人者に、いつの間にやら、辰馬は、惹かれてしまっていた。

辰馬という男は、どうやら、誰かにくっついていなければ、生きていけないように、生れついているらしい。

はじめは、織田重四郎の弟分のようなかたちで、西国を放浪し、次いで、金井半兵衛という人物の連れになり、いまはまた、この地引無限斎という初老の浪人者のあとに順っている。

無限斎が口にする言葉は、せちがらい浮世とはひどくかけはなれた内容が多かった。

それをきくたびに、辰馬は、ばかくさい、と思うのだが、さて、妙に、心にのこるのは、どうしたことであったろう。

いまも、無限斎は、わかりきったあたりまえのことを、口にしている。

たしかに、ばかくさい。

辰馬は、この言葉を、もし、他の者が口にすれば、すぐに、

「きまっているではないか。くそ面白くもない」

と云いかえすに相違ないであろう。

無限斎が云うと、なにか、辰馬の胸にこたえるひびきがある。

どういうのか、辰馬には、わからない。

「無限斎殿は、いかに貧窮のくらしにいても、四季の景色を愛でる余裕が、おありか？」

辰馬は、たずねた。

「四季のうつりかわる景色は、どんな人間に対しても、公平に、美しさをわかち与えてくれ申すゆえ――」

無限斎は、笑ってみせた。

「桜花は、殿上人だけに咲いてくれるのではなく、乞食にも、美しいと見とれさせてくれ申すの」

「それは、そうだが……」

「貧しさにへこたれて、身を跼めて、地面ばかり見て歩いても、小銭も落ちては居り申さぬ。顔をあげて、四方の景色でも眺めていた方が、心が明るくなる道理ではあるまいか」

「しかし、空腹で、花を愛でてもはじまらぬ、と思うのだが……」

「人間は、おのれを忘れる一瞬がなくてはならぬ。……それがしは、むかし、戦場で、手負

うて、山中に倒れていた時、山つつじのきれいに咲いたのに、見とれたおぼえがあり申す」

そう云ってから、無限斎は、

「さて――ひとつ、用事をはたして参らねばならぬ。お手前には、そこの旅籠ででも、待っていて頂こうか」

と、云った。

「用事とは？」

「いや、なに、ある人の遺言を、つたえに参るだけのことだ」

無限斎が、辰馬にわかれて、姫路の城下へ入って来た時、すでに、日は暮れていた。

すなわち――。

静香が、町奉行所与力にともなわれて、弟に会いに出かけて行った時刻であった。

無限斎が、奇妙に感じたのは、白河館と呼ばれている家はどこであろう、と尋ねると、すべての人が、うさんくさげな表情をして、じろじろと見たことであった。

はじめは、こちらの風体のうすぎたなさが、そういう表情をさせるのか、と思ったが、そうではなく、どうやら、白河館と称される家に、なにか、人々を嫌悪させるいわくがありそうであった。

ようやく、その家をたずね当てたが、無人であった。

「遠慮せずに、上らせてもらおう」

変り者らしく、無限斎は、座敷に坐った。

たたずまいを一瞥しただけで、由緒ある家柄と判った。

半刻も経った頃あい、玄関の戸が開いた。

「あ――織田様がおもどりになった！」

土間に履物を見つけて、静香は、生きかえったようにはずんだ声をあげた。

そして、いそいで、座敷へ入って来た静香は、見知らぬ無断の侵入者に、はっと、立ちすくんだ。

「おゆるし下され。遠方より参った者で、少々つかれ申したゆえ、ことわりもなく、あがり込み申した。べつに怪しい者ではござらぬ」

そう弁解して、無限斎は、頭を下げた。

弟の不運に、身心をうちひしがれて、もどって来た静香にとって、この無作法な客は、迷惑であった。

「ご用がおすみになれば、おひきとり下さいますよう」

「いや、申しわけない。すぐに、辞去つかまつる」

――この娘は、何か思案にあまった気色だが……。

と、視てとりつつ、

「波乗り佐兵衛という男を、ご存じでござろうか？」

「いえ――」

かぶりを振りかけて、静香は、いつぞや、嘉七が、その名を口にしたのを思い出した。

「会うたことはありませぬが……」
「御当家の家僕の親しい者と、当人は申して居りましたぞ」
「はい」
「先日、伏見の磧で、亡くなり申した」
「え？」
「その遺言を、つたえることをたのまれ申した」
「……」
「大切な絵図面を所持されている由、それを奪いに参る者があるゆえ、くれぐれも用心なさるよう……、それが、遺言でござった」
「……」
無限斎は、娘のまなざしが、うつろになり、こちらの伝言をきいていないのに、気がついた。
「どうかなされたか？」
問われても、静香は、返辞をしなかった。
「どうか、なされたか？」
再び、無限斎は、たずねた。
と――。
静香の双眸から、泪があふれた。

「なんと、なされた？」
「い、いえ――」
静香は、見知らぬ客の前で、泪を流したことに、うろたえて、いそいで、泪をぬぐい、
「少々とりこみごとが、ありまして、……失礼をいたしました。……もう一度、遺言とやらをおきかせ下さいませ」
無限斎は、佐兵衛の云いのこした言葉を、くりかえしてから、
「とりこみごととは、なんでござるな？　他人のそれがしに、おきかせ下さるのを、はばかられるのならば、申されずともよろしいが……」
静香は、わざわざ、親切に、佐兵衛の遺言をつたえに来てくれた見知らぬ浪人者に、打明ける気になった。
藁にでもすがりたい気持のさなかにあった静香である。
「弟が、明朝、奉行所で、打首に相成ります」
「なんと申された？」
無限斎は、大きく瞠目した。
静香は、包まず、自分たち姉弟の身に起った不運を語った。
そして、むかし忍びの者であった老僕が、救い出しに行ったが、おそらく、十中の八九は、希望はあるまい、とつけ加えた。
ききおわった時、無限斎の顔は、別人のように、鋭くひきしまったものになっていた。

「奉行所の場所を教えて頂こうかな」
無限斎は、云った。
「え？」
「この老骨が、役に立つかどうか、ものはためしに、出かけてみることにいたそう」
「いえ、見も知らぬ御仁に、生命の危険のある御援助をお願いいたすわけには参りませぬ」
「ははは……、三十年の知己でも、ウマが合わぬと、一合の米の貸借りもせぬし、半刻前に知りあっただけでも、ふと、生命を投げ出してみよう、という気になる。浮世の人間関係は、こういうところが、面白い。そうでござろう」
無限斎は、笑って、出て行った。
ひとり、のこった静香は、心をおちつけて、いつでもこの家を発てる用意をはじめた。
嘉七が行き、地引無限斎というみるからに気骨を持った武辺も、おもむいてくれたのである。
弟は、きっと、救われる気がして来た。
静香は、わずかの身のまわりの品だけを包みにした時、ふと、無限斎がつたえてくれた波乗り佐兵衛の遺言を思い出した。
――大切な絵図面？
静香は、この家にある品の中で、そうしたものがあるか、考えた。
じっと、小首をかしげていた静香は、

「あ――あれは！」
と、記憶をよみがえらせると、いそいで、自分の居間に入った。
この家にのこして置く品の中に、鏡があった。
荷にすれば重くなる、と思って、包みに入れなかったのである。
鏡は、オランダ製の玻璃でつくられた美しい逸品であった。
「美しゅうなれ」
父が、そう云って、与えてくれたのである。静香が十二歳になった正月であった。
「よいか、静香――。女子は、自分の顔をうつす鏡は、大切にいたさねばならぬぞ。左様、この玻璃のうしろには、宝をかくしておいてやったぞ。失くしてはならぬ。生涯持ちつづけるのだ。お前が、もし、貧窮のどん底に落ちるような時が来たら、玻璃をはずして、宝をとり出せ。お前を、途方もない大金持にしてくれるぞ」
父は、笑いながら、そう云ったものであった。
「何が入れてあるのでございますか？　いま、玻璃をはずしてみても、よろしゅうございますか？」
静香が、せがむと、父は、
「いかん、いかん。いまは、見ては、ならぬ。お前が、貧乏して、その日のくらしにも困ることに相成ったら、とり出せい」
と、云ったことだった。

静香が、あとで母に告げると、父上は、そなたに美しい鏡を大切にさせるために、そう仰せられているのですよ、と云われた。

それで、それきり、静香は、鏡を大切にはしたが、玻璃のうしろに何か、貴重な宝がかくされていようなどとは、夢にも思わずに、忘れて来ていたのである。

——もしや？

と思いついて、静香は、鏡を手にとった。

玻璃は、苦もなく、台からはずれた。

はたして——。

油紙に包んだ薄いものが、そこにかくされてあった。

油紙をひろげてみると、たしかに、それは、絵図面であった。

——なんの絵図面なのであろう？

静香は、どうやら、京の郊外らしい絵図面を眺めて、いぶかった。

——嘉七に、きけば、判るにちがいない。

静香は、絵図面を、油紙につつんで、鏡の中にかくした。

それが、どんな宝を生むものであったにせよ、いまの静香には、すこしも大切な品ではなかった。

それよりも、弟の命がたすからなければ、静香は、明日に希望をうしなってしまうのだ。

もし、かわってやれるならば、静香は、自分が処刑されたかった。

弟は、白河館を継ぐ唯一の男子なのだ。

弟が死ねば、白河館の嫡流は、絶滅するのだ。

名家に生れた静香は、やはり、その誇りに生きる娘であった。

白河館が絶滅することは、堪えがたかったのである。

——救われて、はやく、もどって来て欲しい！

地引無限斎は、辛抱づよい性格であった。

奉行所横手の林の中に入ったのは、初更（午後八時）であったが、それから一刻あまり、じっと、そこを動かなかった。

——夜は長い。明朝までは、たっぷりある。ゆっくり構えていることにいたそう。

無限斎が、そこに場所をきめたのは、近くに、一頭の馬が、人目からかくすようにしてつながれていたためである。

無限斎の直感が働いた。

——この馬は、嘉七とやらいう家僕が、つれて来て、つないでいるのではあるまいか？

まさに、その通りであった。

突如——。

奉行所内から、騒擾の音が、潮騒のようにつたわって来た時、黒い小さな影が、高塀をおどりこえて、路上をかすめ、この林の中へ、かけ込んで来るのを、無限斎は、みとめたので

ある。

「馬は、ここだ！」

無限斎は、告げた。

数馬は、たちまち、そこへ走って来たが、見知らぬ人間に対して、警戒の様子を見せて、立ちどまった。

「おぬしの味方だ。……この馬で、遁げるのであろう？」

「はい――」

「姉上が待っている。行くがよい」

「お手前様は？」

「わしか。わしは、行きずりの浪人者だ。下僕は、どうしたな？　まだ、奉行所の内にいるのか？」

「居ります」

「おぬしをたすけるために、わざと、とらえられたのかも知れぬ。……さ、家へもどるがよい。姉上と一緒に、できるだけ遠くへ、遁れられるだけ、遁れてみるのだな」

数馬が、馬上の人となった時、奉行所の門から、どっと、多勢の者が、なだれ出て来た。

「ここは、わしが、くいとめる」

無限斎は、いきなり、馬の臀部を、槍でひっぱたいた。

馬は、狂ったように、疾駆しはじめた。

「おっ！　あそこだ！」

「馬で、にげるぞ！」

叫びたてて、路面いっぱいに、殺到して来る追手方の前へ、無限斎は、ゆっくりと歩み出た。

「なんだ？」

「こやつは――？」

「手引きした曲者だな」

叫びたてて、肉薄して来る追手方を、じっと見すえた無限斎は、突如、

「十二歳の少年一人を捕えるのに、なんと大仰な――。姫路藩の恥をさらすようなものぞ！」

とどろきわたる、という形容がふさわしい鍛えあげた高声をはなった。

「おのれが！」

先頭の一人が、躍りかかるや、無限斎は、これを、案山子のように、槍のひと振りで、ふっとばした。

「それがし、地引無限斎と申す天下の浪人者。戦場槍を披露つかまつろう！」

そこへ殺到して来た奉行所ならびに旗奉行組の面々は、いずれも、二十代の若ざむらいばかりで、戦場槍の便法というものを、知らなかった。

槍とは、常識から考えて、突くものであるが、地引無限斎の槍のかまえかたは、その常識から、全くはずれたものであった。

穂先を、後方へ流し、逆に、石突きを前面へ突き出しているのであった。

若い連中は、いつの世も、年配者のむかし自慢を嫌悪する。

――戦場槍が、何ぞや！

追手方は、尾羽打ち枯らしたおいぼれ浪人の、自己流儀の槍法など、たかの知れたものだ、となかばあなどる気持があった。

多勢をたのむ心理もあって、一挙に、討ちすてようと、気負い立った。

ところが――。

躍りかかる者が、一人の例外もなく、その槍のひと振りをくらって、地べたへころがったのである。

あっけないくらい、なすすべもない惨敗ぶりであった。

無限斎の方は、さして、殺気旺盛な勢いを示しているのでもなかった。

槍を振るのに、懸声さえも、発してはいなかったのである。

にも拘らず、追手方は、無限斎が立つ地点を、突破することは、全く不可能であった。

「やあっ！」

「くそっ！」

二人が同時に、襲いかかったが、次の瞬間には、二人とも、左右の路傍へ、もんどりうってしまっていた。

戦場に於ては、単身で、敵勢をくいとめなければならぬ場合が、しばしばある。無限斎は、その生命がけの経験が、豊富とみえた。

「お主ら、ここらあたりで、妥協してはいかがであろうな」

無限斎は、またたく間に、七人ばかりを、地べたへうずくまらせておいて、そう云った。

旗奉行河合治郎左衛門が、門内から、馬をとばして現われたのは、その時であった。

「何をいたして居る？　遁がしたか？」

呶号して、馬を馳せ寄せて来る治郎左衛門は、往還をふさいだ浪人者を視て、

「何奴だ？」

「地引無限斎と申す」

「おのれが、手引きして、遁がしたか？」

「左様――」

「白河館の一族だな？」

「いや、全く縁もゆかりもない通りすがりの他人とお思い頂く」

「ほざくなっ！　……お主ら、何をぐずぐずいたして居るっ！　小倅を追わぬかっ！」

「あいにくだが、この若い人々は、それがしの戦場槍に、いささか手こずって居られる」

「なんだと？」

「お手前は、町奉行殿か？」

「ちがう！　旗奉行河合治郎左衛門だ」

「なるほど、子息を殺されて、逆上されて居られる」

旗奉行は、いら立った。

「ええい、痩浪人一人を、ふみつぶせぬのか！」
抜刀するや、猛然と、無限斎めがけて、馬を躍らせた。
次の瞬間――。
河合治郎左衛門のからだは、棹立ちの馬上で、大きくはねあがった。
地ひびきたてて地上にころがった治郎左衛門が、はね起きようとした時には、もう、無限斎の長槍の穂先が、その頸根に擬されていた。
「旗奉行殿、敗れたり！」
高らかに、云いはなたれて、
「うぬが！」
と、起とうとしたが、穂先に、頸皮を破られていては、どうにも、抵抗するすべはなかった。
「旗奉行殿、敗北はいさぎよくみとめられることだ」
「ど、どうせい、と申すのだ？」
「奉行所内に、ひきかえして頂きたい」
「ひきかえして、なんとする」
「白河館の家僕を、お手前は、捕えておいでであろう」
「……む！」
「そうでござろう」
「捕えて居る」

「旗奉行殿は、目下、それがしの捕虜でござる。捕虜と捕虜を交換いたしたい」
「な、なんだと！」
「おっと！　旗奉行は、戦場に於て、旗色わるしとみてとった時は、まず兵の無駄死を避けるを肝要とする、と戦略にもござる。……無駄死は、よろしゅうござらぬ」
治郎左衛門は、うめいた。
しかし、まさに、まちがいなく、目下のおのれは、捕虜であった。
「武士ならば、おのが立場を勘考して、正しく振舞われるがよろしかろう。この路上で犬死は、主家奉公をけがすことにも相成る」
「や、やむを得ぬ！」
ついに、治郎左衛門は、妥協した。
無限斎は、まず、追手の若ざむらいたちを先に行かせ、治郎左衛門の背後から、悠々と歩いて行った。
奉行所内では、町奉行はじめ与力、同心らが、部署についていたが、ふしぎに、ものしずかな態度を保っていた。
町奉行は、どうやら城代美濃部将監から、云い含められていた模様である。
少年一人の遁走に、躍起になったのは、どうやら、旗奉行とその配下だけのようであった。
無限斎は、白州に立つと、
「白河館の家僕を、ここへつれて来て頂きたい」

と、所望した。
高手小手にしばられた嘉七が、曳き出されて来ると、無限斎は、
「お主の働きで、幼い主人は、ぶじに、遁げ申したぞ」
と、告げた。
「貴方様は、どなた様でございましょう」
「波乗り佐兵衛の最期を見とどけた行きずりの者と思うてもらう」
無限斎は、嘉七が縄を解かれるのを待って、
「旗奉行殿。これで、勝負なしと相成り申した。それがしらは、引きあげ申すが、もとより、追跡勝手でござれば、あらためて、争うことに相成り申そうぞ」
と、云った。
「一時の勝ちに酔うて、うそぶくな！　必ず、そのそっ首を刎ねてくれる！」
治郎左衛門は、叫んだ。
これほどの屈辱は、生涯はじめてであった。
町奉行が非協力であるのも、腹立たしかった。
治郎左衛門は、旗奉行の職をなげ打っても、この浪人者を討ち、数馬をとらえて打首にしてやりたかった。
その憤怒のさまを、しり目にかけて、無限斎は、嘉七をともなって、奉行所を出た。
「ご厚志、かたじけのう存じました。手前は、若の身を案じますれば、これにて――」

「いそぐがよろしかろう！」
嘉七は、夜道を、風の迅さで、走り去った。
無限斎は、往還上に立つと、奉行所から、旗奉行以下が、なだれ出て来るのを待った。
しかし、なぜか、しーんとしずまっている。
――はてな？
無限斎の直感が働いた。
鋭く視線をまわした無限斎は、
――そうか！
と、合点して、ぱっと走り出した。
たちまち、奉行所裏手に達した無限斎は、おのが直感が、的中したのを知った。
そこに、処刑した罪人の屍骸をはこび出す不浄門が設けられていたが、そこから、黒い一団が、忍び出ていたのである。
――どっこい！　そうは参らぬ！
一気に、突進した無限斎は、ものも云わずに、槍をうちふるいはじめた。
「こんどこそ、討ちはたせい！」
旗奉行の叫びがひびいた。
無限斎としては、姉弟を遠くへ遁がすのが目的であった。殺生は好まなかった。
ただ一度も、穂先を使わず、突きは石突きを用い、すべて、追手方をなぐり倒すことに終

始した。
「うっ！」
「あっ！」
短い悲鳴や呻きがあがるたびに、路上へころがる頭数が増した。
「おのれっ！　一騎討ちだっ！　来い！」
逆上した治郎左衛門は、二刀を抜きはなって、無限斎の面前へ、とび出した。
「恥は、二度も、かくものではござらぬぞ」
無限斎は、あびせた。
「なにおっ！」
治郎左衛門は、無我夢中で斬りかかった。
とたんに、大刀の方が、宙たかくはねとばされた。
その時、
「河合っ！　見苦しい！」
その一喝が、とんで来た。城代家老の声であった。
それから、しばらくのち——。
地引無限斎は、城代家老の屋敷の書院に、在った。
「久闊（きゅうかつ）——」
将監は、そう云って、笑った。

この二人は、旧知であった。
二十年ぶりの再会であった。
地引無限斎は、当時、又七郎といい、片桐且元の旗本中、随一の勇猛をうたわれた若武者であった。
片桐且元が、大坂城の出頭人の地位をすてて、自領にひきこもるにあたり、地引又七郎は、特に、秀頼の声がかりで、大坂城にのこった。
そして——。
夏の陣には、後藤又兵衛の麾下（きか）に入って、めざましい働きをしたのである。
大坂城炎上の後は、行方をくらまして、ついに、将監の耳には、その消息は絶えてとどかなかった。
将監は、地引又七郎ほどの武辺を、野に流浪させておくのを惜しんで、心にかけて、その行方を知ろうとしたのであったが、ついに、判らずじまいであった。
ゆくりなくも、町奉行所に騒動を起した曲者の一人として、めぐり会って、将監は、感慨を口にすることもできぬ気持であった。
「お互いに、年を寄せたのう」
「うむ。一方は城代家老、一方は尾羽打ち枯らした浪人者——ははは、差がつきすぎた」
「お主、わしが城代と知っていて、わざとあの騒ぎを起したかな？」
「知らなんだ、と云えば、嘘になるが、べつにお主を念頭に入れておいて、あばれたわけで

はない。……白河館の姉弟を、見のがしてもらえまいか」
「城代としては、諾と云うわけには参らぬ」
「しかし、見て見ぬふりをする、という寛容は、とってもらえるであろう」
「……」
将監は、微笑したまま、こたえなかった。
「忝ない」
無限斎は、勝手に、きめて、頭を下げた。
「では、これで、退去つかまつる」
「おいおい、まだ、いいではないか」
「いや、永年の浪々ぐらしをして居ると、このような立派なお屋敷に坐っているのは、窮屈でならぬ」
「皮肉か――」
「さにあらず。むかしはむかし、今は今。城代家老が、城下をさわがせた曲者を、歓待したとあっては、後日のそしりを受け申そう。……では、これにて」
無限斎は、さっさと、座を立った。
将監としても、そう云われると、ひきとどめるわけにいかなかった。
門を出た無限斎は、歩き出して、
「おお、そうだ。一人すてておいた者が居る」
と、独語した。
勝手に遁れになって、くっついて来た天堂寺辰馬のことであった。
「よいわ。ここらあたりでわかれるのが、潮どきであろうて――」

異端者

伊丹の平家館に探索に入った織田重四郎は、密室にとじこめられ、五日間を、むだにすごした。
その気になれば、脱出できぬこともない、と思われたが、そうすれば、再び、この館に入ることはかなわぬ、と考えて、重四郎は、おとなしく、坐りつづけた。
六日目の夜が明けると、さすがに、重四郎は、焦燥をおぼえずにはいられなかった。
――このまま、あと数日も、とじこめられていては、あの姉弟の身の上は、どうなる？
姉弟は、城代家老の命令によって、姫路を立ち退くように、迫られている。その期限は十日である。
それまでには、帰って行ってやらねばならなかった。
重四郎は、今日一日、坐っていて、なんの沙汰もなければ、やむを得ず、脱出を計らねばならぬ、とほぞをかためた。

食膳をはこんで来るのは、屈強の浪人者二人で、これは、何も知らぬ様子であった。
午後になった。
重四郎の肚を見通したごとく、一人の若い浪人者が入って来た。
「由比民部と申す」
と、名乗って、
「お手前が、当館へ入られた存念をうかがいたい」
と、云った。
派手な小袖をまとった、総髪の若者を眺めて、重四郎は、
——ただ者ではないようだな。
と、感じた。
——神屋主膳の腹心であろう。
「館の御主人にお会いできぬものか」
重四郎は、申し出た。
「目的は？」
「お会いした上で、申し上げたい」
「それがしが、代って、うけたまわる」
「おことわりする。館の御主人にお会いいたしたいために、こうして、五日間も、この室で辛抱いたして居った」

毅然とした重四郎の態度を視て、民部は、これ以上の問答は、むだと知った。
『……では』
民部は、出て行った。
四半刻も過ぎた頃あい、再び、入って来た民部は、
「こちらへ——」
と、うながした。
民部が、重四郎をみちびいたのは、珍奇の南蛮調度がそろっている主人の居室であった。
主膳は、卓上へ大地図をひろげて、天眼鏡をあてていた。
「織田重四郎殿を、ともないました」
民部に告げられて、顔をあげた主膳は、じっと、重四郎へ、視線を当てた。
瞬間——。
重四郎は、
——これは、卑劣な闇討ちなどをする人物ではない。
と、直感した。
「織田、と名のられるところをみると、信長公に縁故をお持ちか？」
神屋主膳は、まず、その質問を発した。
「当人の知らぬところです」
「……？」

「天涯孤独にて、それがしを育ててくれた養父も、苗字について、一言の説明も加えてくれなかったゆえ、何も存じ申さぬ」
「左様か――」
主膳は、うなずいてから、
「信長公は、天下の美男で、大耳の所有者と、うかがって居ったが、貴公の耳も、まことに、見惚れる大耳だな」
「……」
「ま、そのようなことは、どうでもよろしかろう。氏素姓などは、人の本質とはなんのかかわりもない、くだらぬもの。貴公自身が、そう考えているのであれば、これは、見上げた心構えと申せる」
「……」
「わしに、談合したいことがある由。うかがおうかな」
「おうかがいいたす。当館は、伏見の白河館とは、犬猿の間柄であった、とききましたが、事実でしたか？」
「左様だな。白河館のあるじとは、ついに、和解の機会は、なかった」
「七年前、一夜、白河館を、百人余の曲者の群れが襲い、主人夫婦はじめ、一族郎党をみな殺しにする事件が起って居ります。このしわざを、世間では、お手前様と噂いたして居ります。左様でありましょうか？」

「貴公は、白河館にゆかりのある御仁か？」
「いや――。なんのゆかりもある者ではありませぬ」
「世間の取沙汰を、貴公は、信じたかな？」
「これを否定する証拠もない上は、お手前に直接お目にかかって、たしかめるべく、参上いたした次第です」
主膳は、しかし、おのがしわざとも、そうでないとも、こたえず、
「白河館には、たしか、遺児がいたはずだが……」
と、云った。
「二十歳になる娘と十二歳になる少年が、祖父の郷里姫路に、在ります」
「ふむ。すると、貴公は、その姉弟の助太刀を買うた御仁か――」
「偶然のことから、姉弟の家に泊ったところ、平家館の命令を受けたと称する浪人者二人が、姉弟を討ち果しに、忍び入って参りました。それがしが、一人を斬り、一人を追いはらいましたが……、もしその者が、当館へもどって居るならば、それは、お手前様が、白河館を全滅させた証拠になりますぞ」
「……」
主膳は、ちょっと沈黙して、腕を組んでいたが、二人組が襲って来たのは、いつ頃であったか、と問い、重四郎がこたえると、かたわらの民部に、
「手負うた者が、帰って来たかどうか、調べて参るがよい」

と、命じた。

民部は、出て行った。

主膳は、重四郎と二人きりになると、

「わしは、貴公を、公儀隠密と思い、一室に監禁いたした。お詫びする」

と、頭を下げた。

「それがしはまた、かくまわれて居る切支丹と会ったため、口外をおそれて、とじこめられたか、と疑って居りました」

「あの伴天連に勝手に会うたのは、食客の中では、貴公ただ一人じゃ。べつに、禁教政策にさからって、かくまって居るわけではない。行きがかり上、やむなく、かくまって居る。もとより、露見すれば、当館は、とりつぶされよう」

平然として、云った。

――この不敵な度胸の持主が、暗殺などするわけはない。

重四郎は、自分に云いきかせざるを得なかった。

そこへ、由比民部が、もどって来た。

「その頃、手負うて戻って参った者は、ありませぬ」

「うむ」

主膳は、うなずいてから、重四郎を視た。

「何者かが、白河館一族を一人のこらず、この世から払おうといたして居る。……実は、白河館が襲われ、惨殺され、焼きはらわれた七年前から、わしは、何者のしわざであろうか、と疑いつづけて来た。調べもした。しかし、いまだ、判らぬ。……こう申したところで、貴公は、おいそれとは、信じる気にはなれまいが――」

「……」

「この神屋主膳のしわざでないことは、天地神明に誓うことができる。しかし、わしの知っている者のしわざであることだけは、たしか、と申せる」

「なにを目的として、惨殺したか――推測が立ちましょうか？」

「それが、判れば、おのずから、何者であるか、知れようが……」

そうこたえてから、主膳は、ふと思いついた気色で、民部に、

「道満は、まだ、裏の草庵にいるか？」

と、たずねた。

「今朝、姿を見かけて居ります」

「呼んでもらおう」

民部は、再び、出て行った。

主膳は、重四郎に、説明した。

「杉山道満、という男が、当館裏の草庵に、住みついて居る。大坂城の残党だ。真田幸村のふところ刀であった、という噂もある。老いては居るが、頭脳はまだ切れる。この男に、推理させてみよう」

やがて、民部のあとから、のっそりと入って来たのは、なんとも異様な老人であった。
顔中が、刀槍の傷だらけであり、おまけに、火傷したとみえて、頭の皮がなかばただれて、一瞥化物であった。
さらに、ひどく足が不自由であった。
杉山道満は、座に就くと、
「何か、ご用かな？」
と、問うた。声だけは、明るく大きかった。
重四郎は、この杉山道満という化物じみた老人と、どこかで、出会ったような気がした。
しかし、すぐには、思い出せそうもなかった。
「お主に、判断してもらうことが、ひとつある」
主膳は、云った。
「なんでござろうかな？」
「伏見に白河館というのがあった。存じ寄りか？」
「お許とは、堺の港で、覇をきそうた対手じゃて」
「七年前に、その館が襲われて、主人以下一族郎党ことごとく全滅した。わしのしわざと、世間は見て居る。……白河館の主人は、楠木正成の後裔といわれ、人望厚く、うらみを買うような人物ではなかった。それが、突如として、襲われた」
「ふむ――」

「みな殺しにする残忍をあえてしなければならなかった理由を知りたい。遺児が二人残って、姫路に在るが、これへも、最近にいたって、刺客がさし向けられた。執拗きわまる話じゃ。……お主の判断は、どうかな？　怨恨と思うか？」
「さあて……」
道満は、首をかしげていたが、
「怨恨ではあるまいな」
と、云った。
「なぜ、怨恨ではない、と思う？」
「怨恨ならば、館を襲って、主人を斃せば、それで、すむであろう。遺児まで殺そうとするのは、ほかに仔細があるからであろう」
「成程――。その仔細は、どのような性質のものか、推測できるかな？」
「たぶん……、欲であろう」
「欲？」
「白河館は、金銀のたくわえは、おびただしいものではなかったかな？」
「まず――」
「その金銀を、屋敷内に――倉へ置いてあるはずはあるまい。お許自身のたくわえかたから考えても、公儀の目をくらますためには、人知れぬ場所に、かくしておく――そうではあるまいかな」

明快な判断であった。

「すると、お主は、あれは、盗賊団のしわざであった、とみるか？」

「それも、ただの盗賊ではあるまい」

「大坂城の残党、などとは考えられぬか？」

「さてな、そこまでは、想像が及ばぬが……、いずれにしても、よほど大きな徒党と思われる。……遺児を襲うて参ったのは、どんな男どもであったろう？」

そう問われて、重四郎は、はっとなった。

「それがしが、一人を斬り、一人を追いはらい申したが……、野盗とは見え申さず、れっきとした武士と受けとれ申した」

「れっきとした――？」

道満は、大きく、目をむいた。

「すると……？」

急に、なにか、せわしく、頭脳を働かせる様子を示した。

それから、

「あるいは――、そうかも知れぬぞ」

と、呟いた。

「道満、なんと判断する？」

主膳が、問うた。

重四郎も、緊張した。

「盗賊は、そこいらの野に在る徒党ではないかも知れぬ、という想像は、いかがであろうな」

「なんという?!」

「盗賊もいろいろとある。野伏、鼠賊のほかに、国を取る盗賊もある。その盗賊が、天下をわがものにすれば、当然、日本全土にちらばる金銀を、かきあつめたくなるのは、人情であろうて」

「公儀が、白河館を襲ったか？」

「かるがるしゅうは、きめられぬが、疑えば疑う余地はある」

道満は、はっきりと、こたえた。

「ふむ。下手人は、公儀――と推測するか！」

主膳は、腕を拱ねいて、うなるように云った。

「白河館を襲ったのが、公儀隠密団であったとすると、これは、対手がわるい」

「そうさの。しかし、これは、あくまで、この道満の推測にすぎぬ。あるいは、野に在る盗賊団のしわざであって、こちらの考えすぎかも知れぬ」

「いや、お主の考えが正しかろう」

主膳は、重四郎へ、視線を向けた。

「いかがだな？」

「それがしも、この御仁の考えられた通り、公儀の横暴であったような気がいたします。しかし、なぜ、遺児たちの生命までも奪おうとしたか――それが、合点が参らぬが……」

「それは、たぶん――」

道満は、こたえた。

「白河館を全滅させた際、思いのほかに、館内にたくわえられた金銀がすくなかったのではあるまいか。南蛮財宝は、他の場所にかくされてある、と想像できた。しかし、その在処が、どうしても判明せなんだ。今日に及んで、遺児二人が、生きのびていることがわかり、あるいは、かれらが、その在処を教えられているのではあるまいか、と思い、隠密をさし向けた。そうではなかろうかな」

「たしかに、その通りであろう」

主膳が、うなずき、重四郎も、合点した。

重四郎が、この平家館に探索に入ったのは、むだではなかった。

神屋主膳は、姉弟の敵ではなかった。意外にも、敵は、徳川幕府であった。

重四郎は、早々に帰って、この旨を姉弟に申しつたえます、と主膳に告げて、座を立とうとした。

「お主は、敵が公儀と判明いたしたならば、なんとする存念だな？」

主膳が、問うた。

「白河館を隠密に襲わせた者が、要職の中にいると存ずる。その者を、姉弟に討たせてやりたいと思います」

重四郎は、こたえた。

「あっぱれな志だが……、さて、それは、なまじのことでは、可能ではあるまいが――」

重四郎は、そう云われたが、黙って、頭を下げて、座を立った。

重四郎が、平家館を出て、野の中の一筋道をものの三丁も辿り、東と西へ岐れる辻へ出た時であった。

辻わきの阿弥陀堂の縁に、腰を下ろしていたのは、いつの間に先まわりしたのか、杉山道満であった。

「姫路へ、おもどりかな？」

「左様――」

「身共を、供にして頂こうか」

「……？」

「ははは……、化物とならんで歩くのは、ごめんだと申されるか」

「いや、そのようなことは、申さぬが……、何か姫路にご用がおありであろうか？」

「白河館の遺児にな」

道満は、こたえた。

「……」

重四郎の視線が鋭くなると、道満は、手をふった。

「なに、他意はござらぬよ。貴公一人が、公儀要人をむこうにまわして、遺児の敵討を企てるときいて、なんとなく、身共も、からだが、むずむずして参ってな。……永年、もぐらのようなくらしをつづけていて、もう、頭脳はぼけ、からだはなまってしまった、と当人自身愛想をつかして居ったところ、貴公が持ち込まれた話をきいているうちに、なにやら、気分が爽快になって来たのでござるよ。……老骨を若がえらせるために、ひと働きをいたしとうなった、という次第でござる。連れにして頂けぬか」

「おのぞみとあれば、よろこんで……」

重四郎は、承知した。

「やれやれ……、断わられたら、いかがいたそうか、と思って居った」

道満は、重四郎と肩をならべて、歩き出した。

一歩毎に、上半身が、大きく傾く。いたいたしいほどであるが、これは、もう永い間のことで、馴れて居るのであろう。

大股に歩く重四郎に、すこしもおくれなかった。

「貴公は、袖すりあった、それだけの縁で、助太刀をされようとして居られるのか？」

「左様――。気まぐれに引き受けたのが、いまとなっては、退くに退けぬ状態に相成った、と申すよりほかはないのです。人生とは、とかく、こういうものでござろうか」

「ははは……、まさにな」

道満は、大きく、うなずいた。

「身共が、大坂城で、真田幸村殿を援けたのも、その気まぐれ――と申せる。心意気、というやつかな。後日の悔いにならぬのであれば、心意気こそ、男子の生甲斐であろうて」

「大坂方の残党として、きびしい詮議を受けられましたか？」

「にげかくれは、上手でな。この化物姿を、ヒョイヒョイと、日本全土に出没させ申したわ。公儀も、そのうち、あきらめて、すてておいてくれ申した」

――もしかすれば、この人物は、途方もない軍師かも知れぬ。

重四郎は、そう思った。

重四郎が、杉山道満をともなって、姫路にもどったのは、約束の十日を二日あましていた。

夜に入って、姉弟の家の前に立つと、灯は消えて、しん、としずまっていた。

ふっと、不吉な予感にかられて、庭へまわり、閉じられた雨戸一枚はずして、ふみ込んだ。

闇に目をならして、行燈をさぐり、それにあかりを入れてみると――。

行燈に、貼紙がしてあった。

美しい筆蹟で、

『よぎなきこと、ひき起り申しそろて、弟とともに、当地を立ちのき申しそろ、ご厚情あつくあつくおん礼申し上げそろ　かしく　しずか』

と、記されてあった。

「余儀なきこと？」

重四郎は、首をかしげた。

そこへ、道満が、のっそり入って来て、
「いかがしたかな？」
と、問うた。
「姉弟は立ち退いたとみえ申す。……ただ、それがしがもどるのを、あれほど、ひたすら待っていた姉弟が、これだけの書きおきで、立ち退いたのは、合点が参らぬ」
重四郎は、ちょっと考えていたが、道満に、しばらく待っていてくれるようにたのんで、出て行った。
一人とりのこされた道満は、見まわして、
「住み心地は、わるくなさそうだの。しばらく、ここで腰をおっつけてみたい心地がする——」
独語して、その場に、ごろりと仰臥すると、すぐ、いびきをかきはじめた。
この世に、もはや、なんの野望もなく、我欲など、とっくに、どこかへすてて来たこの人物は、どこでも、小児のごとく、すぐねむることができるようであった。
どれくらい経ったろう。
道満のいびきが、急に、ピタリととまった。
この家の周囲を、幾人かが包囲した——その気配が、道満を目ざめさせたのである。
ねむるのもはやいが、目ざめるのもはやかった。
——はてな？

目蓋を閉じたまま、道満は、ひしひしと迫る気配をはかった。
——ただ者の群れでは、なさそうだわい。
これまで、無数の死地をくぐって来た者のみが備えている独特の神経が、働いた。
——但し！
道満は、おのれに、云った。
——公儀隠密衆ならば、このように、殺気をむき出しては来ぬものだが……。
一瞬——。
道満は、むっくりと起き上った。
ひさしぶりに、この戦場生きのこりの武者が、全身に血のさわぐのをおぼえたのである。
——十年抜いたことのない村正が、血潮をもとめて、鳴きはじめたぞ。
すっと、縁側に出た道満は、そこで、数秒間か、外の様子をはかっていてから、一枚はずした雨戸から、ひょい、と首を出した。
瞬間——。
びゅっ、と矢が飛来した。
首を縮めて、頭上へ流してから、
「あぶない。生命あっての物種じゃ」
と、云った。のんびりした口調であった。べつに、襲撃者たちをからかうつもりはないのだが、生と死の境目をくぐっているうちに、いつとなく、そうした瞬間を、愉しむように、

おのれをつくってしまっていたのである。

「お主ら――」

道満は、雨戸の蔭から、大声で云った。

「挨拶は、受けた。……が、あいにく、こちらは、当家に縁故の者ではない。いわば、留守居。何を目的で寄せて来たのか知らぬが、こちらは、挨拶の返し様もない」

「黙れっ！　貴様は、われわれの来るのに備えて、やとわれた奴であろう」

一人が、闇の中から、呶鳴った。

「闇討ちに参るような御仁は、疑いぶかいものよのう。……何が、目的じゃ？」

「白河館の姉弟のすみかと知って参ったのだ。それで、問答は充分であろう」

「おっと――そうは、かんたんに、参らぬて。当方は、何も存ぜぬ留守居の身だ。曲者が寄せて参るなどとは、夢にも知らなかったのでな。……お主ら、どうやら浪人衆らしいが、姉弟の生命を奪いに参ったか、それとも、ほかに、目的があってのことかな？」

「問答は、無用だ」

「さっさと、斬ってくれ、とせがむのかな。生命は、ひとつしかないもの。もうすこし大切にしては、どうじゃ？」

「えいっ！」

いきなり、躍り上るようにして、斬りつけてきたのを、道満は、

「はやるなっ！」

一喝しざま、地面へ蹴倒した。

強い、とみて、襲撃者の群れは、一斉に、動いた。

細い月の明りに、抜きつれた敵勢を、見わたして、道満は、

「多いの――。十人は越えて居るか」

と、呟いた。

二人ばかりが、切先をそろえてじりじりと迫って来た。

それを正視して、

「ちゃんと、修業はして居るの。いずれ、主家のために、ひと働きせんとして、習ったものであろうが……、あわれや、犬死するための太刀使いになり果てた」

からかっておいて、道満は、すっと、庭へ降りようとした。

誘いと知りつつ、敵二人は、雄叫びして、襲って来た。

それに応じて、道満は、腰の村正を鞘走らせた。

鞘走らせた刹那には、一閃のうちに、二人を斬っていた。

一人は、片腕を、一人は、胸を斬られて、その場へ、崩れた。

依然として、道満は、縁側へ立ったままであった。

「さあ――次じゃ」

こっちから、悠々として、うながしていた。

さらに、二人が、正面へ進んで来たが、味方のあっけない敗北がきもに銘じたか、容易に、

間合をつめて来なかった。

「お主らに、もう一度、申しておく。わしは、何も知らぬ留守居じゃ。……犬死になるのだぞ。それで、よいのかな」

それに、応えて、庭の一隅から、

「斬れ！　容赦すな！」

その鋭い声が、とんで来た。

「はての――？」

道満は、ちらと、そちらを、すかし見た。

「その声は、女子のものだ。しかも、若いぞ。……なんと、指揮の大将は、娘かよ」

笑いを含んだ声に、敵勢は、面目をつぶされたごとく、突如、たけり立った。

矢が、飛来した。

これを、二つにして、足もとへ落した瞬間、隙を視て、正面の二人が、地を蹴って来た。

「おっと！」

道満は、一人の刀を、宙へはじきとばしておいて、一人を、まっ向から、斬り下げた。

敵勢は、しかし、ひるまなかった。

どっと、そこへ殺到して来た。

道満は、一歩退った。

すると、二枚ばかりへだてて、雨戸が破られ、そこから、三人ばかりが、躍り込んで来た。

道満は、ぴょんととびあがる恰好で、柱を後ろ楯にすると、

「こう多数を対手に斬り合うのは、幾年ぶりかのう」

と、云った。

その時、庭に、

「加勢が来たぞ！」

叫びがあがった。

道満は、にやりとした。

もどって来た織田重四郎が、どれだけの働きをするか、興味があった。

重四郎は、思いがけぬ修羅場を視て、庭へふみこんで来ると、

「なんだ、おのれら！」

と、睨めまわした。

無言で――黒影のひとつが、斬りつけて来るや、これを、かわしざまに、地へはわせておいて、

「道満殿！」

と、呼んだ。

「ここじゃわい」

道満は、こたえた。

「これは……、いったい、どうしたことか！」

「わしにも、とんと、判らぬの。察するところ、黄金亡者の群れではあるまいかの」
「そうか」
重四郎は、包囲の陣を布いた黒影の群れへ向って、平然と、歩み寄りながら、
「姉弟は、さまざまの敵を持ったことに相成る」
と、云った。
重四郎は、城代屋敷へ入って、将監から、姉弟退去のいきさつを、きいて来たのである。
ついでに、姉弟の敵が、神屋主膳ではないことも、報せて来た。
ともあれ、至急に、姉弟のあとを追って、まことの父の敵をさがし当てねばならぬことを告げようと思って、ひきかえして来てみると、この修羅場であった。
「織田氏――。この連中の指揮をとるのは、若い女子のようじゃ。その庭のどこかに居るぞ」
屋内から、凄まじい剣戟の音のあと、道満が、云った。
「左様か――」
重四郎は、月あかりに、すかし視た。
「えいっ！」
「やあっ！」
懸声もろとも、左右から、襲って来たのを、一歩退きざまに、水際立った刃さばきで、斬っておいて、重四郎は、さっと、突進した。

「ひとまず、引けっ！」
こちらを、強いと看てとって、その声が発しられた。
すでに、庭でも、屋内でも、浪人者たちは、浮足立っていた。
さっと、遁げようとした――その隙に、重四郎は、一隅へ向って、猛然と奔った。
そこに立っていた者が、白刃をひらめかして、反撃しようとしたが、重四郎の凄まじい一撃の前に、敵ではなかった。
白刃は、二つに折れて、はねとんだ。
重四郎は、その者へ、峰撃ちをくらわせた。
「どうしたの？」
縁側から、道満が、顔をのぞかせた時、生きのこった浪人者は、一人のこらず、遁げ散っていた。
重四郎は、悶絶させた者の顔をのぞき込んで、
「たしかに、女だ」
と、云った。
やがて、主謀者は、座敷の行燈ぎわに、両手をしばられて、横たえられていた。
覆面は、ぬがされていた。
「ほう――美女だの。気品もある」
道満が、首を振った。

それは、読者にとっては、すでになじみの顔であった。
春奈にまぎれもなかった。
いったんは、千本強兵衛が、姫路へおもむくことを承知した春奈は、鎧櫃を背負った浪人者を追跡して、ついに発見することが出来ないと知るや、大坂に集まった一味の浪人者たちをひきつれて、趨って来たのであった。
重四郎は、春奈に意識を、とりもどさせた。
とたんに——。
春奈は、はね起きて、捕虜となったことを知るや、烈しく、二人を睨みつけて、
「斬れっ！」
と、絶叫した。
「そう逆上するものではない。話せばわかることであろうな」
道満は、笑った。

生きる道

夜が、しらじらと明けそめていた。
静香は、ふっと、目がさめた。そしてすぐ、自分によりかかってねむっている弟のからだ

が、異様に熱いのに、気がついた。
ここが、なんという山なのか、知るべくもない松と灌木に掩われた山腹の、とある老松の根かたに、姉と弟は、寄り添うて、一夜を明かしたのである。
姫路城下を遁れて、表街道をさけて、北へ向って、野道を奔り、二つばかり、山を越えていた。
さまで険しい山ではなかったので、馬をすてなかった。
幹をへだてて、馬は、そこに、つないである。
「数馬——」
静香は、弟をゆさぶり起した。
「数馬——、どうしたのです？　加減がわるいのですか？　……え？」
掌を、その額にあててみると、火のような熱さであった。
「姉上……、さ、さむい！」
数馬は、急に、全身を、顫わせた。
「こまりましたね。……どうすれば、よいのか？」
静香は、数馬を、そっと横たえておいて、立ち上ると、樹間をすかし見た。
視界は、さえぎられ、人家のある里はどのあたりか、見当のつけようもなかった。
しかし、このまま、ここに、数馬を寝かせているよりも、里をさがして進む方が賢明のようであった。

「数馬、馬の背に、俯伏していられますか？」
「あ、ああ――」
数馬は、うつろなまなざしで、姉を見あげた。
「里へ降りるまでの辛抱です」
「里は……、ちかいのか、姉上？」
「近い――と思います」
静香は、数馬を、馬へ乗せ、
「楽にして……、俯伏しているのですよ」
と、云いきかせた。
「う――うん」
数馬は、ぐったりとなった。
――こういう時、嘉七が、そばにいてくれたら……。
そう思わずには、いられなかった。
忍びの者であった嘉七は、発熱した時、山中に、それに効くどのような薬草があるか、知っているに相違なかった。
どちらの方角へ遁げるように、と嘉七から、指示されていたわけではない。
自分たちが、この方角へ遁れた、とどうして嘉七が知ることができるものであろう。
いまは、静香一人で、弟をまもらなければならなかった。

山径は、さいわい、下りであった。
ここをつたって行けば、里へ出るに相違ない、と思われる。
静香は、馬の口をとりつつ、ゆっくりと、下って行った。
やがて――。
「あ――水の音がきこえる！」
静香は、よろこびの叫びをあげた。
さらに、半丁あまり下ってから、静香は、まばらな松の木立ごしに、渓流をみとめた。
「数馬――、あたまをひやしてあげますよ。待っていなさい」
たづなを、松の枝へむすんでおいて、静香は、いそいで、斜面を下った。
小さな渓谷を、澄んだ流れは、さらさらと、岩を縫っていた。
いまの静香には、その冷たい水が、神の与え給うたもののように、有難かった。
木の間をもれる朝陽に光る水は、指さきから全身にしみ渡るほど冷たかった。
白い布をぬらして、起とうとしたとたんであった。
水面に、ひとつの影が映った。
はっとなって、顔をあげた静香は、流れをへだてて、岩の上に、ぬっと立った男を見出した。
――山賊！
とっさに、そう思った。

そういう風体であったし、髯だらけの顔も、尋常ではなかった。殊に、その眼光は、刺すように鋭いものだった。

静香は、思わず、

「水をもらいます」

と、云った。

すると、山賤は、

「ただは、呉れられぬ！」

と、こたえた。

静香は、微かな戦慄をおぼえた。

「弟が、病んで居りますゆえ、ひやしてやらねばなりませぬ」

「理由はなんであれ、水を、ただではやれぬ！」

「この水が、お前様のものとは、思いませぬが……」

「おのれのものよ！　この山の支配者は、おれだ！」

静香は、かまわず、濡れ布を持って、斜面をのぼって行こうとした。

瞬間——。

山賤は、流れの上を跳び越えた。

静香は、きっとなって、向きなおると、

「無礼は、許しませぬぞ！」

と、叫んだ。

右手は、懐剣にかけた。

山賤は、にやにやして、

「美しいむすめよのう。生れてはじめて見る天女じゃて」

と、云った。

静香は、じりじりと、あとへ退った。

山賤は、こうして追いつめることに、残忍な快感をおぼえるのか、すこしも、いそがなかった。

「わたくしは、武家のむすめです。無礼に対しては、死をもっても、抗いますぞ！」

「ふふふ……、こっちは、大猿や山犬や熊を対手にくらして居る。若い美しい女子に歯向われるのは、愉しいわい」

山賤は、急に、足早に、追った。

静香は、反射的に、懐剣を抜きはなった。

「そんなものは、熊の爪や山犬の牙にくらべりゃ、ものの数ではないて——」

次の瞬間——。

山賤は、躍りかかるとみせて、静香に懐剣をふりあげさせておいて、すばやく、手にした六尺あまりの角棒で、打ち落した。

そして、薄気味わるいにたにた笑いをうかべながら、

「おれのかかになって、山ぐらしもええものぞ」
と、うそぶいた。
静香は、身をひるがえして、斜面をかけあがろうとした。
「おっと――」
山賤は、うしろから、むずと羽掻いじめにすると、
「やわらかいのう。ひさしぶりの馳走じゃわい」
と、死にもの狂いに反抗されるのを、いっそ、たのしんでいる様子であった。
静香は、自分一人ならば、舌を嚙みきってでも、この屈辱からのがれたに相違ない。
重病の弟をつれていては、死ぬにも死ねなかった。
もうだめだ、と絶望すると、この身をけがされるのに堪えても、弟の生命を救うのが、姉としてのつとめだ、という考えが、ちらと脳裡をかすめた。
山賤の方は、静香が急に、からだから力を抜くと、得たりとばかり、猿臂をのばして、胸をさぐって来た。
処女の本能が、再び、静香に、烈しく反抗させた。
その折であった。
「なんだっ！」
この光景を目撃した者の叫びが、木立の中から、とんで来た。
と思うや、灌木をざざっと鳴らして、降りて来た。

「邪魔さらすな！」
山賤は、それが、若いさむらいとみとめるや、静香を突きとばしておいて、六角棒を構えた。
目撃者は、織田重四郎とさわが、間道を姫路へ抜ける途中で立寄った夕映えの里の、千羽鶴家の左門という若者であった。
左門は、一気に、そこへ駆け降りるや、山賤が、もの凄いわめきとともに、振り込んで来た六角棒を、抜きつけの太刀で、両断した。
とみた次のせつなには――。
山賤は、脳天から血煙りあげて、のけぞっていた。
「ふん――」
左門は、冷然と、山賤のむくろを見下ろし、おのが迅業に満足した様子を示した。
それから、静香を見やった。
静香は、いそいで、みだれた前をつくろって、
「忝のう存じました」
と、礼をのべた。
「道で、馬上に俯伏しているのは、そなたの連れか？」
「はい。弟でございます」
「わずらっているようだな？」

「はい。熱を出して居りますので、水をもとめて来たところを……」

左門は、数馬を馬からおろし、静香をつき添わさせておいて、渓流から、腰に携げた竹筒へ、水を汲んで来た。

そして、その水へ、印籠の黒い散薬をまぜて、数馬にのませた。

「近くに、あの山賤の住んでいた小屋があるはずだ。そこで、二日ばかり、やすませなければならん」

左門は、そう云って、静香に手つだわせて、おのが背中へ、数馬を、のせた。

「そなたは、馬を曳け」

「はい」

左門は、物心ついた頃から、山中を馳せまわるくらしをして来た若者であった。

斬り殺した山賤が、どのあたりに小屋をつくっているか、地形を眺めただけで、すぐ見当をつけたのである。

まるで、そこへは幾度も訪れたことがあるような足どりで、斜面を降りはじめた。

馬は、急勾配の、しかも灌木のしげった斜面を降りるのを、いやがって、口をとる静香を、苦労させた。

左門は、静香にかまわず、どんどん降りて行き、渓流のそばへ立って、はじめて、首をまわした。

「なにをして居る？」

「は、はい――」

静香は、立往生したまま、どうしても動かぬ馬に、困りはてていた。

「はやくせぬか」

「はい」

やっと、水ぎわまで、馬をひきおろした時、左門の方は、すでに、むこう側に移っていた。

「馬へ乗って、渡って来い」

左門は、命じたが、静香は、当惑して、立ちすくんだ。

左門は、舌打ちすると、そこへ、数馬をおろしておいて、こちら側へ、跳びもどった。

「そなた、武家の娘のくせに、馬の扱いかたも知らんのか」

「申しわけございませぬ」

「見て居れ」

左門は、ヒラリととび乗るや、両脚で馬腹を締めあげておいて、一気に、流れの上を躍り越えた。

やがて、左門が見当をつけた通り、ものの二丁も辿らぬうちに、小屋を発見することができた。

左門は、入口の板戸をひき開けて、一歩入ると、

「これは、住み心地がよさそうだ」

と、笑った。

板敷きには、けものの毛皮が一杯に敷かれてあったし、食物を蓄えた大瓶やら櫃やらが、たくさんならべてあったし、板壁には、いずれ盗んだものらしい鉄砲やら槍やらが、架けてあった。

左門は、毛皮の上へ、数馬を寝かせると、

「腹が空いたな」

と、云って、大瓶の蓋をとってみて、

「ふむ、あるぞ」

と、なにかの乾し肉を、つまみ出して、口にした。

「そなたも、食わぬか」

数馬のかたわらに坐った静香の膝へ、その乾し肉が、投げられた。

静香は、うすきみわるくて、口にする気がしなかった。

左門は、囲炉裏の前へ、あぐらをかくと、

「わずらった弟をつれて、あの間道を辿っていたのは、何かの事情があるのか？」

と、たずねた。

「はい――」

静香は、うなずいたものの、見知らぬ男に、仔細を打明けるのは、はばかられた。

「きいてもよいか？」

「は、はい……」

静香は、顔を伏せて、ためらった。

その様子を眺めて、左門は、

「話したくなければ、こちらは、敢えて問わぬが……」

と、云った。

静香は、その語気が、かなり険しいのに、びくっとなった。

生命の恩人に、こちらの事情をかくすのは、非礼にあたると思われた。

「弟が、あやまって、姫路の御家中のご子息を殺めましたため……」

「ふむ？」

静香は、いったん口にした上から、かくしていられなかった。

自分たち姉弟の母かたの祖父に、むかし、土地の人々の怨みと憎しみを買う振舞いがあり、それが今日まで、あとをひいて、自分たち姉弟までが、白眼視されていたこと。

そのために、弟は、近隣の少年たちから、ののしられたり、石を投げつけられたりして、虐めぬかれたこと。

ついに、それが理由となって、弟は、藩士の子息を殺すはめにたちいたり、捕えられたこと。

さいわいに、救ってくれる者があって、遁れて来たが、行くあてもない身であること。

静香が、ひくい声音で、事情を語るのを、大きく目を据えて、じっときいていた左門は、

「そなたの弟は、あっぱれではないか。侮辱を堪えしのんでいて、ついに、憤りを爆発させ

た振舞いは、天地に慙じぬ！」

「……」

「ほめられてよい振舞いだ。……そなた、弟を、ほめたか？」

「い、いえ――」

「ほめてやれい！　……わしならば、このような勇気のある弟を持つことを、誇りに思う。そうだ、家門のほまれともいえる！」

左門は、あきらかに、興奮を示した。

静香は、俯向いたままであった。

心中では、

――織田重四郎様ならば、なんと申されるであろうか？

と、思っていた。

――この御仁と同じ言葉を、口になさるであろうか？

静香は、重四郎ならば、そうは云わないような気がした。

左門は、立って、屋内をあちらこちら調べていたが、やがて、瓶のひとつに、濁酒がたくわえられているのを発見すると、木椀に一杯すくって、炉端へもどって来た。

「おれは、長曽我部左門という」

そう名のっておいて、濁酒を一息にのみほした。

「長曽我部と申されますと、四国の――？」

「うむ。宮内少輔元親は、おれの祖父だ」

「まあ！」

静香は、おどろいて、左門の顔を見なおした。

左門は、たしかに名門の末裔にふさわしい風貌を持っていた。祖父元親、父盛親の武勇をしのばせる凛々しさを、目もとにも口もとにも湛えていた。

また事実、享け継いだ武辺の血は、左門をして、物心ついた頃から、木太刀を把らせたのである。

短気で、粗暴な振舞いは、しばしば、母親をはじめ、周囲の者たちを当惑させたが、武辺の気魄を、幼児にして発揮するもの、と思えば、これを押えることはできなかった。

左門は、わがまま一杯に育ち、おそれというものを知らぬ若者になっていた。

夕映えの里に於ては、左門と立ち合って、敵う者はいなかった。

住人たちはのこらず、長曽我部家の一族郎党であり、左門を主人の座に就けていたが、主人に対する礼儀として、勝ちをゆずったわけではなかった。左門は、強かったのである。

その祖父元親の武勇を知る老人たちは、

「祖父様の生れかわりとも思える」

と、話しあったくらいであった。

その強い左門が、はじめて、敗れたのであった。

若い女をともなった何処の何者とも知れぬ浪人者が、飄然として、夕映えの里へ降りて来

たので、左門は、公儀隠密と疑って、勝負を挑んだ。
ところが、振り込んだ木太刀を、浪人者は、苦もなくかわしたばかりか、左門を地に匍わせたのである。
左門は、座敷から大身の槍をひっつかんで来て、真剣勝負を、と狂い立ったところを、母に制された。
このことが、左門をして、夕映えの里を出る決意をさせたのであった。
いかに、無敵を誇っていても、所詮は井の中の蛙でしかない、と考えたのである。
世間へ出てみれば、そこには、無数の豪勇の士がいるに相違なかった。
左門は、そう思うと、もはや、じっとしてはいられなかった。
山間の小部落で、長曽我部という名門を守って、唯我独尊の誇りを抱いていたところで、いったい、何になろう。
世間へ出て行って、腕をみがき、心をきたえてこそ、父祖の栄誉をになう資格を得るのではないか。
左門は、一夜、母にもことわらず、一通の書置きをのこして、出奔して来たのである。
左門の脳裡には、あの不敵な浪人者の姿が焼きついていた。
――いつの日か、めぐり会って、やぶってくれる！
どたり、と音をたてて、左門は、仰臥すると、目蓋を閉じた。
濁酒が、全身にまわり、酔いが発したのである。

左門は、まだ、酒の修業だけは、していなかったのである。
「ふうっ！」
と、熱い息をひとつ、吐き出してから、左門は、なかば意識をうしなった。
そのさまを、そっと見やった静香は、自分も横になりたい、と思ったが、武家の娘のたしなみとして、いかに疲労していても、寝姿を、良人以外の男に見せるのをはばかり、身をずらして、壁によりかかった。
うなだれて、ねむることにした。
どれくらい、うとうとしたろう。
「姉上……」
数馬の呼ぶ声で、はっと、目がさめた。
「あ――数馬、加減は？」
いそいで、濡れ布をあてた額の熱を、しらべてみた。
さいわい、熱は下ったようである。
「大丈夫だ、姉上。……この御仁は？」
「わたくしたちを、たすけて下さったのです」
「ここは、どこ？」
「姫路から、十里も入ったところ、と思われます」
「山賊の小屋みたいだ」

「そうかも知れません」
「いやだ！　はやく、出よう」
「夜が明けたら、すぐに、出ましょう。……さ、もうしばらくねむるのですよ」
「うん――」
数馬は、すなおに、目蓋を閉じた。
左門は、炉をへだてて、むこう向きに、寝ていた。
静香は、壁によりかかった姿勢を、なるべく楽なものにして、ねむることにした。
しかし、どうしたのか、こんどは、睡魔はすぐにおそっては来なかった。
姫路にすてて来たわが家のたたずまいや、嘉七の俤や、重四郎の姿などが、浮んだり消えたりした。
――これから、どこへ行けば、よいのであろう？
この広い世界に、自分たち姉弟を住まわせてくれるところは、全くないのだ。
嘉七をはじめ、救いの手をさしのべてくれる人は、次つぎと現われてくれはするものの、なぜか、はなればなれになってしまう宿運にある。
いま、そこにねむっている若い旅人も、危難を救ってくれたが、明日は別れ去るのであろう。
静香は、弟を守って生きて行くのは、やはり、自分ひとりのような気がした。
その前途に、あかるい平和な世界が待っているようには、とうてい考えられなかった。

しかし、人間として生れたからには、あくまで、生きる努力をしなければならない。
幸せを得るのは、人間が神から与えられた権利ではなかろうか。
――生きなければならない。生きぬいて、幸せを！
突然――。
左門が、我破っと、はね起きた。
すでに、夜が明けそめていて、白い明りが、屋内にさし込んでいた。
左門は、鋭い表情になって、突っ立った。
その音に、静香が、目ざめて、はっと、顔をあげた。
左門は、そっと、戸口わきの無双窓に寄って、隙間から、外をのぞいてみた。
「やはり、いたな！」
眉間を、微かに痙攣させた左門は、静香をふりかえり、
「この小屋の山賤は、おれが斬りすてた奴だけではなかった。仲間がいた。……いま、おもてに、三人の影が見える」
と、云った。
静香は、息をのんだ。
「彼奴らは、死体を発見して、かついでもどって来たのだ」
左門は、山賤たちの足音が、遠くからひびくのを、敏感に、意識にききとって、目をさましたのであった。山中に育って、けもの対手にかけずりまわった者独特の神経の鋭さであっ

た。

「おれが、あの三人を、斬る。しかし、まだ、ほかに、いるかも知れぬ。覚悟は、していてもらおう」

「はい」

静香は、いそいで数馬を起した。

この小屋に、自分たちがいることは、山賤たちに知られてしまっている。馬を、外につないでいるからであった。

「よいか。もし、危険が迫ったら、弟を馬へのせて、遁げるのだぞ」

「はい」

静香は、数馬が立って歩けるまでに回復しているのを知って、ほっとした。

左門は、土間へ降りて、板戸の破れから、じっと、山賤たちの動きを、窺った。

山賤たちは、担いで来た仲間の死体を、地べたへ横たえておいて、ゆっくりと、小屋へ近づいて来る。

左門は、刀の鯉口を切ってから、一歩退った。

山賤の一人が、戸口に迫ると、

「おい！　中にいるのは、誰だ？」

と、叫んだ。

それから、板戸を、突き開けた。

瞬間——。

左門は、奔り出ざま、そいつを、まっ向から、斬り下げた。

あわあわとした夜明けの冷たい空中に、血飛沫が、散った。

「なんだっ！」

「おっ！」

のこった二人は、二間あまり跳んでにげて、抜刀した。

左門には、そこで、対手がたの出様を待つ余裕はなかった。

一気に片づけるべく、地を蹴った。

山賤たちの身の動きは、敏捷であった。まともに、闘うのは不利と知るや、跳んだり、奔ったり、樹木を楯にしたりして、にげまわりはじめた。

左門が、ようやく、また一人を斬った時、もう一人の方は、どこかへ、姿をくらましていた。

「仲間を呼びに行ったかも知れぬ！」

左門は、このあたりの山賤は、あちらこちらに二三人ずつ、小屋をつくってくらしているが、いざとなれば、呼応して、数十人の徒党をつくることを知っていた。

左門は、小屋に入ると、

「ここを、早々に立退かねばならぬ」

と、云った。

姉弟は、すでに、遁れる身仕度をしていた。
「一人をとりにがしたため、事態が変った。馬をすてなければならぬ。馬を曳いていては、目立つ」
「はい」
左門は、数馬に、「歩けるか？」ときいた。
「歩けます」
数馬は、けなげに、こたえた。
「よし――」
左門は、さきに出て行った。
と――。
馬のあわれな絶鳴が、ひびいた。
左門が、刺し殺したのである。
静香と数馬は、顔を見合せた。
――殺さないでもよいものを！
姉弟は、ともに、そう感じたのである。
「急ぐぞ！」
外から、左門の声が、かかった。
姉弟が、出ると、左門は、山の一角を指さした。

「あそこを抜けて行くのが、安全であろう。勾配はけわしいし、灌木が密生して居る。必死の力を出せ！」
そう云いおくと、さきに立って、歩き出した。
三人が、その密林の中へ消えて、ほどなく、遁走した山賤が、七八人の仲間を、つれて、そこへ、駆けもどって来た。
「遁げ居ったぞ！」
「おい、藤太――」
「なんだ？」
「娘は、とびきりの別嬪とぬかし居ったが、うそではあるまいな」
「ふん。生涯、二度とはお目にかかれぬ天女だわい」
「よし、それなら、草の根を掘りわけても、見つけて、抱いてこまそ」
一人が、法螺貝を、ぼうぼうと吹きならした。
さらに、多勢の仲間を呼び集めるためであった。
これらの山賤は、ただの浮浪者ではなかった。元をただせば、何藩の何某といわれた武士もいたし、いちどは兵法者として名を挙げる志を持ったが、試合に敗れて、片目や片腕になった者も交っていたのである。
徒党を組めば、一隊と成って、強力な働きを発揮することもできたのである。
かれらが、飢えているのは、女であった。若い女を拉致して、欲情をみたすことは、山奥

に巣食うかれらにとって、絶対に必要ないとなみであったのである。

――はてな？

山賤が、ぼうぼうと吹き鳴らす法螺貝の音に、ふと耳をすました者が、この山中に、いた。地引無限斎であった。

姫路城下を立去った無限斎は、山陰へ抜けて行くべく、この間道をえらんだのである。

そのむかし、無限斎は、大坂城の密使として、豊臣家恩顧の大名を説くべく、山陽、山陰、四国、九州を、経巡ったことがある。

その時は、表街道は一切避けて、間道をえらんだものであった。

この間道が、山陰へ抜けることを、無限斎は、知っていた。

背負うた鎧櫃の中に納めた妻の遺骨を、何処に埋めてやるか。

山陰のどこかに、景勝の場所があるような気がしたのである。

――あの法螺貝の吹きかたは、軍法にある。一長三短――伏兵をして一斉に起たしめるやつだ。

無限斎は、にわかに、緊張をおぼえた。

初夏の朝陽のさしそめた静かな山中に、時ならぬ合戦の法螺貝をきいたのである。

まさか、合戦が起ったとは、思えぬ。

――どうしたというのだ？

無限斎は、長槍を、松の高い梢へ、突き刺すと、その柄を利用して、若者のような身軽さで、幹をのぼった。

高処に立って、見まわした。

すると、下方の斜面を、七八つの黒い影が、奔るのをみとめた。

次に、別の方角から、二三の人影も現われた。

いずれも、一瞥して、この山奥に巣食っている山賤である。

――山賤と山賤の戦いかな？

そう疑ったが、敵にまわった群れの気配は、さらになかった。

そのうちに――。

この間道をも、山賤数人がいそぎ足でやって来た。

さいわいに、松の上の無限斎には、気づかずに、行き過ぎた。

「娘は、途方もない別嬪というぞ」

「どうだかのう。捕えてみたら人三化七かも知れん」

「いや、藤太は、でたらめは云わんぞ。……ただ、おそろしく強い奴が、ついて居るらしい」

その会話を、上から、きいた無限斎は、

――もしや？

と、直感が働いた。

――白河館の姉弟が、この間道を抜けて行こうとして、こやつらに襲われたのではない

か？　強い奴というのは、あの忠僕のことか？

もし、そうだとすれば、すてては置けぬことであった。

無限斎は、もう一段高い枝にのぼってみた。

はるか下方の渓谷を、目で追っているうちに、山賤の群れが、集結しているところに、小屋が、見わけられた。

そこから、かれらは、また四方へ散って行く。

――ひとつ、降りて行くか。

不敵にも――。

渓流ぎわへ、降り立った無限斎は、そこで、山賤七八人の組に、出会うた。

「なんだ、貴様？」

見とがめられると、無限斎は、平然として、

「お主らの仲間に、黒田松六、という者は居らんか？」

と、でたらめな名を云って、尋ねた。

「黒田松六？　そんな者は、居らん」

「いや、本名は、かくして居るかも知れん。六尺ちかい、長い顔の男だ。左様、わしぐらいの年齢だな」

「知らん！　……おい、年寄り、こんなところを、うろうろして居ると、その鎧櫃も槍も、奪りあげてしまうぞ」

「わしは、お主らとは、仲間のようなものではないかな」

「うるさいっ！　早く行け！」

呶鳴りたてられたが、もとより、ひきかえす無限斎ではなかった。

一組が、去るのを見送ってから、流れを渡ると、小屋へ向った。

小屋は、ひっそりとしていた。

板戸が開いていたので、覗くと炉端に、一人、胡坐をかいている男がいた。

一瞥したとたん、無限斎は、

――こやつが、頭領らしい。

と、直感した。

他の山賤とは、服装もちがっていたし、総髪の下の面貌は、風格をそなえていたのである。

「ごめん――」

ことわると、男は、じろりと、無限斎を見やった。

「むかしなつかしい戦場の法螺貝を、耳につかまつり、つい、ふらふらと降りて来申した。……よもや、この泰平の御世に、また合戦が起ったわけでもござるまいが――」

「……」

男は、無言で、無限斎を、じろじろと、眺めた。

次の一瞬――。

男は、大きく躍りあがりざま、無限斎に、抜きつけの太刀を、あびせて来た。

無限斎は、その一撃を、槍の穂先に、ピタリと受けとめて、
「ためされる年齢ではござらぬよ」
と、笑ってみせた。
男は、刀をひくと、
「上れ」
と、促した。
無限斎が、炉をへだてて、坐ると、男は、さもばかばかしそうに、
「法螺貝もけがれたものよ。若い女子をひっとらえて、もてあそぶために、吹きならされるのだ」
と、云った。
「貴公が、この山の頭領でござるかな」
「なんとなく、そういうかたちになって居るが、統率の権は持たぬ。旅人を襲い、里を襲い、女子を拉致して来ても、こっちは、黙って、眺めているばかりだ」
男は、吐きすてるように、云った。
「お主――」
山賤の頭領は、黙って見つめる無限斎の眼眸に、わずらわしさをおぼえたように、じろりと、鋭い視線をかえした。
「法螺貝をきいて、降りて来た、と云うたが、そうではあるまい」

「と申されると？」
「われら山者一党を退治するために派遣されて来た姫路藩の士ではないのか？」
「ははは……」
無限斎は、笑った。
「それがしが、随身人に見え申すかな」
「若い頃、隠密修業を積んで居れば、いか様にも、変身することはできる」
「無骨な武辺と見て下さらぬかな」
無限斎は、そう云って、あごをなでた。
頭領は、ふっと、自嘲するように、口辺をゆがめた。
「もしかすれば、お主とは、大坂城で出会うて居るかも知れぬ」
「貴公は、どの大将の組でござったろう？」
「真田幸村殿の組であった」
「左様か。それがしは、片桐且元殿の旗本であった。城が落ちる際は、後藤又兵衛殿の麾下に入って居ったが……」
「お互いに、時世からは見はなされた、むだな余生を送っている大坂城の生き残りか」
頭領は、無限斎に、木椀を渡し、濁酒を注いだ。
それから、四半刻過ぎた頃あいであった。
不意に、おもてが、さわがしくなった。

無限斎は、緊張した。

予想は、的中していた。

高小手に縛りあげられて、三人の捕虜が、土間へ、ひきたてられて来たが、その二人は、白河館の姉弟にまぎれもなかった。

もう一人は、見知らぬ若者であった。

静香と数馬は、そこに、無限斎が坐っているのを見出して、はっとなった。

さいわい、山賤一党は、それに、気がつかないようであった。

「頭領――。これだけの美女は、京の都をさがしても、滅多に見つからぬぞ」

山賤の一人が、大声で云った。

「お主らの贄にする娘ではないようだ」

頭領は、にがにがしげに云った。

「なにが、もったいないものか。飛んで火に入って来た蝶よ」

「罰があたるぞ」

「へへへ……、これだけの美女が抱けるのであれば、片目がつぶれるぐらいの罰は、よろこんで、受けようわい」

そのとたん――。

土間へひき据えられていた左門が、はねあがりざま、一人に体当りをくれ、もう一人を、蹴とばした。

「こやつ！」

戸口に立っていた一人が、抜刀して、左門に、躍りかかった。

左門は、その振り下ろされた白刃を逆に、利用した。

双手をくくった縄目を、切らせたのである。

その一瞬の争いを、無限斎もまた、のがさなかった。

無限斎は、槍をつかみざま、穂先を、頭領ののどへ、ピタッと擬した。

「この姉弟の身柄は、わしが、もろうた！」

凛乎として、云いはなった。

左門は、もうその時、自由になった双手に、山賤の一人から奪った白刃をつかんでいた。

山賤たちは、喚声をあげて、どっと、土間へ、なだれ込んで来た。

頭領は、槍の穂先をつきつけられながら、自若としていたが、やおら、太刀を把った。

「むだに生きのびた生命のすて時が、参ったようだ」

そう云って、無限斎に、にやりとしてみせた。

無限斎は、その意中を汲みとった。

「忝ない」

無限斎が、長槍を引くや、頭領は、ゆっくりと立ち上り、部下一同に向って、

「さわぐなっ！　おのれらを、冥土の道連れにする時が来たぞ！」

と、叱咤した。

「頭領！　裏切るか！」
「くそっ！　おいぼれめ、少々知恵がまわるので、頭領にしてやって居たが、思い上りやがって！」
「くたばりやがれっ、畜生っ！」
一人が、板敷きへ、とびあがって来た。
頭領は、あざやかな抜き討ちで、それに、血煙りをあげさせると、
「ここは、狭い！　おもてへ出い！　大坂城生き残りの武辺が、どれだけの働きをするか、見せてくれる！」
と、云いはなった。
無限斎は、頭領が、おもてへ出ると、
「若い衆――」
と、左門を呼んだ。
「姉弟をたのむ。わしら老骨が、山賤どもを退治する」
「いや、それがしも――」
左門も、ともに、闘う気色を示した。
「この姉弟を、救うことが、われわれの目的ではないか」
無限斎は、云いのこして、さっと、小屋を出た。
包囲陣をつくった山賤の頭数は、およそ三十人あまりであった。

――死場所としては、わるくない。
無限斎は、そう思った。
頭領とならんで立った無限斎は、
「二十年は、永いようで、短うござったな」
と、云った。
「まさに……。武辺は、所詮、遁世はゆるされぬことと、相判った」
頭領は、笑いかえした。
次の瞬間から、老いたる戦場武者二人の、阿修羅の奮戦が、開始された。
さすがは――。
闘うために生きて来たような武辺であった。
無限斎の槍と頭領の太刀は、凄まじい威力を発揮した。
左門は、戸口をふさいで、ふみ込んで来る山賤を、斬りはらっていたが、二人の老武者の奮戦ぶりに、舌をまかざるを得なかった。
その長槍とその太刀の閃くところ、必ず、悲鳴があがり、屍がころがったのである。
道場稽古できたえた刀槍の働きとは、それは、全く、別のものであった。
戦場を疾駆して会得した業は、凄まじいの一語につきた。
――これだ！
左門は、思った。

――これが、武士というものの、真剣の働きなのだ！

左門は、おのが目の前が、豁然とひらけるような気がした。

山賤の群れは、たった二人の働きに、いたずらに、右往左往するような光景を呈しているのであった。

そして、みるみる、仲間の屍の数を増していった。

しかし、人間の群衆心理というものは、まことに奇怪であった。仲間がつぎつぎと殺され、手負うにつれて、かれらは、血のにおいに酔ったように、けだもの化して来たのである。

無限斎も頭領も、かれらがそうなって来るのを、充分に心得ていた。

所詮は、多勢に無勢の闘いであり、ここに死に果てる覚悟の上であった。

左門は、けだもの化した山賤が、老武者二人を、すこしずつ、傷つかせるのを眺めて、焦燥した。

しかし、戸口を守る役目を負うたおのれは、老武者たちを助けるわけには、いかなかった。

思い出したように、山賤が、一人二人と、戸口を襲って来たのである。

そのたびに、左門は、老武者たちに負けじと、敵を斬り伏せた。

やがて――。

山賤の頭数が、およそ三分の一に減じた。

その頃には、すでに、無限斎も頭領も、血まみれになり、その働きは、いちじるしく、にぶっていた。

「あぶないっ！」

左門は、しばしば、叫ばなければならなかった。

ついに――。

まず、頭領が、手槍をわき腹に受けてよろめいた。

その手槍の柄を両断したものの、さらに、背後から一太刀あびせられて、がくっと、膝を折った。

無限斎の方は、なおも、長槍をふりまわしていたが、額から流れ落ちる血潮に、盲目同様になっていた。

左門は、もはや、じっとしていることができなくなり、戸口から、猛然と、奔った。

「こやつがっ！」

叫びざま、頭領の首をねらった者を、まっ二つに、斬り下げた。

そして、血ぶるいするや、無限斎にかかっている数人に向って、躍り立って、撃ち込んだ。

山賤どもは、地上に立ちのこっているのが、わずか六人、と気がつくや、はじめて、人間の感覚をとりもどしたように、遁げかかった。

「遁がすかっ！」

左門は、追いざま、またたく間に、三人を斬り仆した。

それから、さらに、残りの三人を追って、かなり遠くまで奔ってから、ひきかえして来た。

左門は、静香と数馬に看とられながら、この世と別れを告げようとしている老武者を、小屋

の戸口に、見出した。
それは、無限斎の方であった。
頭領の方は、すでに、事切れていた。
左門は、無限斎の前に、ひざまずくと、
「壮烈なる武者ぶりを拝見つかまつり、この長曽我部左門、はじめて、目がひらけ申した」
と、云った。
「長曽我部、といわれるか？」
「はい。長曽我部盛親が、それがしの父でござる」
「おお……」
無限斎は、視力のうすれゆくまなざしを、左門の顔に据えた。
大坂城に在った時、無限斎は、長曽我部盛親と親しく膝をまじえて語ったおぼえがある。
しかし、いま、それを語る余裕も時間もなかった。
無限斎は、死神が、背後に、迎えにやって来ているのを、さとっていたのである。
無限斎は、わななく手を、数馬の肩にかけた。
「人が、一人、生きて行くためには……、多くの人の、たすけが要る。……生命は、尊いものだ。この世で、一番、尊いものだ。……その生命を、ひとつ、生かしつづけるためには、多くの人々が、これを、たすけなければ、ならぬ。……よいかな。このことを、おぼえて、おくがよい。……そなたが、将来、立派な、さむらいとなった時……過ぎて来た歳月を、ふ

りかえって、みることだ。そうすれば、……どれだけの人が、自分を、生かすために、援助の手をさしのべてくれたか……、よくわかる」
「は、はい！」
数馬は、うなずいた。泪があふれていた。
静香も、泣いていた。
無限斎は、静香へ、視線を移した。
「けなげな娘御よのう……、弟のために、わが身を犠牲にして……。しかし、そなたも、また、自分の幸せを、もとめねばならぬ」
「はい」
「どうぞ、姉弟とも……幸せにな」
静香と数馬は、泣きむせんだ。
無限斎は、宙を仰いだ。
「思いがけず……、よい死場所を得たぞ。……長曽我部殿」
と、左門を呼んで、
「この姉弟を、おたのみ申す」
と、たのんだ。
「引き受け申した」
左門は、老武者のみごとな最期を看まもりつつ、粛然として、襟を正す思いだった。

化物道人

「……つまり、いうならば、そなたは、欲心はなはだ旺盛という次第か」

突如として、あげられた大声であった。

なんとも、奇怪な人物といわねばならぬ。

柱にくくりつけられた春奈は、この不可思議な人物を、にらみつけながら、内心では、一向に、憎悪をおぼえてはいなかった。

ここ――姫路の白河館の姉弟の家に、残っているのは、杉山道満と、捕虜になった春奈の二人だけであった。

織田重四郎は、姉弟の行方を求めて、去っていた。

道満が、この勝気な娘を、引き受けたのである。

あれから、一昼夜が、過ぎていて、二人のあいだには、かなりの問答が、交されていた。

道満は、春奈に、

「なぜ、姉弟を襲撃して来たのか？」

と、問いつめ、ある程度まで、白状させていた。

道満は、捕虜の口を割らせる経験も、積んでいるようであった。

一切、拷問などはやらず、何気ない会話をやりながら、ヒョイヒョイと対手の急所を衝いて、喋らせてしまう巧妙な方法を使ったのである。

尤も、道満の方では、すでに、その襲撃目的に、およその推測がついていたのである。

「さて――」

道満は、春奈を視て、

「そなたは、大層美しい。将軍家ご息女といっても、天下に通用しそうな美しさだ。気品もある。いや、将軍家のご息女、必ずしも、美女とは限っては居らぬ。しかし、賤しい貧家に、そなたのような絶世の美女が、生れるということは、チト考えられぬことだの」

「なぜだ？　貧家にだって、美しいむすめは、生れる！」

春奈は、叫んだ。

「いいや、さにあらず。人間の相貌というものは、手造りの花と同じでな。品種の改良によって、だんだん、美しさが増すものだて。貧家は、美しい女子を妻に迎えるのは、むつかしかろう。貴族、大尽ともなれば、いくらでも、美女を、選り取りされる。そうやって代々の面を改良して行けば、造作は立派になろうし、気品もそなわる」

「わたしは、貴族のむすめなどではない」

「しかし、そなたの父御が、野伏あがりの大名というわけでもなかろう」

「いいや！　わたしの父は、軽輩あがりの大名であった！」

春奈は、そう云いはなって、はっと、気がついた。

また、この化物の巧妙な誘導尋問にひっかかって、素姓の一端を、口をすべらしてしまったのである。

春奈は、苛立ち、舌打ちした。

「ははは……、申したの。そなたは、やはり、さる大名の落胤であったわい」

春奈は、顔をそ向けた。

すると、道満が、妙なことをきいた。

「そなた、小用を催したのではないか？」

さすがに、春奈は、羞恥で、かっとなった。

なんという無礼な男であろう。

自分はまだ、娘である。厠に用がないか、などとあからさまに問われて、死ぬほどの羞恥にかられるのは、当然である。

「無礼な！」

「たしかに、無礼な質問じゃが、糞意尿意を催して、これを悩えているのは、甚だつらいことだ。そなたは、昨日から、その柱に、くくられて居る。もう、そろそろ、厠へ行きたくなっても、当然ではないか」

そう云われて、春奈は、くちびるを噛んだ。

実は、一刻ばかり前は、堪えがたいまでに、尿意を催していたのである。しかし、必死に、悩えているうちに、どうやら、おさまっていた。

厠へ行かせてもらえれば、蘇生の思いをすることは、事実である。

「ははは……、我慢することはない。ドレ、厠へ送ろうか」

道満は、立って来て、柱へしばった綱を解いた。

しかし、春奈は、両手は、背中で縛られたままである。

「厠は、あそこじゃ。行って来るがよい」

指さされて、春奈は、羞恥を押しふせると、いそいで、そこへ歩いた。

……春奈は、活きかえった心地で、厠の中で立ちあがった瞬間、当然のことながら、

——ここを破って、脱出できぬものか？

と、高窓を仰ぎつつ、手くびに食いこんだ綱を、解こうと、もがいた。

とたんに、

「無駄だの、脱出することは」

大声が、座敷から、ひびいて来た。

——畜生！

春奈は、心の中で、無念の叫びをあげた。

しかし、その大声をくらうと、春奈は、遁走の意志が、煙のように、消えてしまった。

あきらめて、座敷へもどって来た春奈は、

「さ——柱へ、くくりつけるがよい」

と、云った。

「もう、よかろう。横になってひとねむりしては、どうかな？」
「昨夜は、充分、ねむっている」
「はあ、そうかな？　終始うとうとしていた、と思うて居ったがな」
それにまちがいなかった。
春奈は、この化物に近い老人を警戒して、ほとんど、ねむってはいなかったのである。
「痩我慢をはらずに、ぐっすりとねむってみてはどうじゃ。快便快眠は、人生の最高の愉しみじゃて」
「……」
春奈は、ひとにらみしたのち、ごろりと横臥しになった。
すると、急速に、睡魔がおそって来た。
道満の方は、微笑して、その様子を見まもっていたが、春奈が正体もなく睡り入ったのをたしかめてから、
「どりゃ――」
と、腰をあげて、どこかへ出て行った。
どれくらい、ねむったろう。
春奈は、意識が返ると同時に、ぱっと、とび起きた。
ふしぎなことに、両手のいましめは、解かれて、完全に自由の身になっていた。
のみならず――。

目の前には、膳部が置かれ、ひとつの椀にはあたたかい御飯が盛られ、もうひとつの木椀からは、汁が湯気を立てていた。
春奈の腹の虫が、鳴った。
膳部のむこうに、道満のにやにや顔があった。
「ねむりが足りると、空腹をおぼえる。人間の本能じゃな。ちょうど、目をさます頃であろうと思って、つくったのよ。摂るがよい」
春奈は、もはや、反抗すべくもなかった。
一昼夜、飲まず食わずだったのである。
道満は、春奈が、食べおわるのを待って、
「どうじゃな。いまのそなたには、白河館の姉弟が亡父からのこされた莫大な金銀よりも、その一椀の飯の方が、有難かったであろう」
「……」
「人間というものは、いかに巨大な城や館に住んでも、所詮、起きて半畳、寝て一畳あれば足りる。百匹の荷駄の黄金を持って居っても、三日飢えれば、ひとにぎりの干飯の方が貴重となる」
「……」
「欲望などというものは、ご都合次第のものでな。考えかた次第で、雲散霧消できるものよ」

「わたしに、訓戒を呉れて、志をひき曲げようとしても、無駄だ！」
春奈は、叫んだ。
道満は、じっと、春奈を見かえした。
「どうしても、徒党を組んで、将軍家を討ち滅ぼしたいか！」
「そうじゃ！　わたしは、将軍家に、復讐してやるのだ！」
春奈は、叫んだ。
叫んだとたん、
——しまった！
と、狼狽した。
またしても、道満の巧みな誘導尋問の網にひっかかって、心の奥に秘めていた壮志を、口にしてしまったのである。
「その志や良し。然れど、その実践は成らず——かな」
「……」
春奈は、血が出るほど、くちびるをかたく噛んだ。
「そなたの父御は、徳川将軍家によって、滅亡させられた大名であった。たまたま、気丈夫に生れたそなたは、女の身ながら、復讐の志を樹てた。後ろ楯は何者か知らぬが、大層な企てを為したものだ。徒党を組むには、軍資金が要る。そこで、この白河館の姉弟にのこされた莫大な遺産をねらった。というわけかな」

「……」
「そなたの亡父は、はたして、泉下で、そなたのことを、けなげな娘よ、と思うて居られるであろうかな」
「う、うるさいっ！」
春奈は、絶叫すると、つッ立った。
「わたしは、わたしのしたいことをするのじゃ！　赤の他人が、よけいな指図をすまいぞ！」
「止めては居らぬぞ。将軍家討滅の大志や、良し、と申して居るわさ。但し、実践は不可能、と予言もいたして居る！」
「討てるか討てぬか、やってみなければ、判るものか！」
「やらない前に判るのが、軍師というものでな。口はばったいが、この杉山道満、天下一の軍師の資格をそなえて居る」
「大層な高言を、うそぶくものよ！」
春奈は、冷笑した。
冷笑しつつ、遁げる隙をうかがった。
すると——。
「ねむりも足りた。腹も満ちた。さて、こんどは、逃げ出すことかな」
道満は、春奈の胸中を、云いあてた。
春奈は、いら立った。

「いったい、お手前は、わたしを捕えておいて、どうしようと云うのだ？」
「久しく、美しい娘と一緒にすごしたことがないのでな。ひとつ、仲よく、連れになっては、如何であろうか、と考えている。それまでの話だの」
「嘘だ！　なにか、こんたんがあるにちがいない」
「娘というものは、もうすこし、素直になってもよかろう」
「素直にならせるような対手か、お手前が！」
「ははは……。面は斯くのごとく、化物じゃが、これで、心は優しい。げんに、そなたに喰べさせた飯のたきかたも、味噌汁のつくりかたも、心がこもって居ったろうがな」
それは、事実であった。
「どれ――」
道満は、腰を上げた。
「出かけるといたそうかの」
「どこへ――？」
春奈は、問うた。
「西にするか、東にするか」
道満は、ふところから、一枚の銅銭をとり出すと、
「おもてが出たら、東じゃ」
と云って、ポンと抛った。

畳に落ちた銅銭は、おもてであった。
「では、東へ参ろうか」
「東の、何処を目指すのじゃ？」
「大坂、京――それとも、もっと、足をのばして、江戸にするか。江戸城を眺めたことがあるかな？」
「……」
「もし、そなたが、江戸城を眺めたことがありながら、その攻略を考えているのだ、とすれば、これは、きちがいということに相成る」
「それほど、江戸城は、大きいのであろうか？」
「一度、眺めるがよかろうな」
道満は、大きなあくびをひとつしてから、おもてへ出た。
春奈は、従った。
街道へ落ちる陽ざしは、まぶしかった。
春奈は、道満の二歩あとを、歩いていた。
一歩毎に大きく上半身を傾ける道満の後ろ姿を、じっと、見すえつつ、春奈は、自分にとまどっている。
こんな奇妙な化物に、どうして、屈服してしまったのか。自分で自分が、わからなくなっていた。

西国を経巡って、腕の立つ浪士を説いて、三十余人も、同志に加えた春奈であった。自分が、女に生れたのがくやしいくらいであった。千本強兵衛も、しばしば、

「そなたは、生れそこなった」

と、云っていたのである。

いかなる強い男子に相対しても、一歩もひけをとらぬ自信があったし、事実、それだけの強さをそなえていた。

春奈は、このたび、はじめて敗れたのであった。

織田重四郎という浪人者も、おそるべき強さであったし、この杉山道満という老人も、これまで出会ったことのない大型の人物であった。すくなくとも、春奈をして、反抗できない、と意識させたのは、この人物が、はじめてであった。

げんに、こうして、自由の身になりながら、逃げようともせず、なんとなく、あとに従っているのである。

春奈は、一瞬、烈しいくやしさをおぼえた。

――負けてなるものか！

くちびるをかみしめた。

「老人！」

春奈は、呼んだ。

「老人はいかん」

道満は、ふり向きもせずに、云いかえした。

「これで、まだ、若いつもりでいるのじゃ。小父御とでも呼んでもらおうか」

春奈は、憎らしさに、その背中をにらみつけながら、

「わたしは、隙があれば、逃げてもよいのか？」

と、問うた。

「逃げたければ、逃げてもよい。しかし、逃げられるかな？」

「逃げられるとも！」

春奈は、叫ぶように、こたえた。

「では、勝手に、隙をうかがうがよい」

春奈は、しかし、遁走できなかった。

目に見えぬ綱でくくられ、曳かれているように、道満に従って、歩きつづけた。

加古川宿へ、昏れがた、着いた。

町へ入った折であった。

突然、行手に、騒ぎが起った。

呶号と悲鳴が、駆けまわる群衆の中から噴いたかとみるや、白刃が、ひらめき出た。

「抜いたぞっ！」

「やっつけろ！」

「かたりめっ！　にがすなっ！」

宿の人々は、喚きたてつつ、それぞれ得物をかざして、あばれ狂う者を、追いまわしていた。

白刃をふりかざして、悪鬼の形相になっているのは、天堂寺辰馬であった。

地引無限斎に置きざりにされた辰馬は、しかたなく、また街道をひきかえし、布で顔をかくして、足早に、この加古川宿を通りすぎようとしたのであったが……。

「おや！　こやつだぞ！　金井半兵衛の一味は！」

立場茶屋にいた馬子の一人に、叫びたてられて、ついに、あばれまわることになったのである。

金井半兵衛の付人のかたちになって、播州屋という旅籠に泊った辰馬は、そこの親爺がかなりの金をかくし持っているに相違ない、と半兵衛からきかされて、ふっと、悪心を起し、忍んで行って、盗もうとして、果さず、親爺を斬って、遁走したのであった。

そのあと、金井半兵衛が、どうなったか、辰馬は、もとより、知らなかった。

ともあれ——。

金井半兵衛の一味が、舞い戻って来た、と馬子が叫びたてるや、宿中の人々が、得物を持って、殺到して来たのである。

辰馬は、必死で、白刃をふりまわして、血路をひらこうとしたが、みるみる、数十人に包囲されて、

——だめだ！

と、絶望せざるを得なかった。

その時、

「ご一同！」

雷のような大声が、群衆のうしろから、発しられた。

「そやつを捕えるのは、この化物おやじに、まかせてもらおう」

人々は、視線をまわして、自ら化物と名のる凄まじい面相の老人を、そこに見出して、息をのんだ。

道満は、ゆっくりと、群衆の中へ入って来ると、

「対手は、尾羽打ち枯らして居っても、さむらいじゃ。町かたの衆に捕えられては、面目が立つまい。そうであろうがな、浪士？」

と、辰馬に、云いかけた。

辰馬は、眉も目も口も、痙攣させながら、

「勝負なら……こやつらに見物させぬ場所で、や、やろう」

と、叫んだ。

「ずるいぞ、浪士。そう、卑怯未練に、遁げることばかり、考えてはいかん」

道満は、笑った。

辰馬は、逆上して、

「こなくそっ！」

呶号しざま、道満に、斬りつけた。

道満は、苦もなく、かわして、手刀で、辰馬の利腕を、搏った。

白刃は、ポロリと、地面へころがり落ちた。

辰馬は、「斬れっ！」と喚いた。

「まあ、そう、狂い立たんでもよい。……さて、皆の衆、この浪士が、いったい、何をしでかしたのかな？」

道満は、群衆を見まわした。

「そ、そやつは、金井半兵衛という大かたり者の一味でございます」

年配の一人が、進み出て来て、云った。

「金井半兵衛は、加古川大尽の土蔵から、千両盗みとったのでございます」

辰馬は、

――なんだ？

と、啞然となった。

金井半兵衛は、盗賊を働いた、というのか。

自分が播州屋の親爺を手負わせた、ということだけでは、宿の人々は、こんなにも躍起になって、捕えようとはしなかったのだ、とはじめて、判った。

「まず、ゆるゆると、話をきこうではないか。浪士も、わしに負けた上は、わるびれずに、ついて来さっしゃい」

道満は、そう云って、すぐ目の前の旅籠へ足を向けた。

この時。

春奈は、かなり遠くはなれた地点に立っていた。

充分に遁走することは、できた。しかし、春奈の足は、動かなかった。

あばれていた浪人者は、春奈が、備前の山中で、断崖から落下させた男だったのである。

死んだ、とばかり思っていた天堂寺辰馬が、生きのこって、何やら悪事を働いたらしい。

春奈は、因縁をおぼえた。

道満が、どんな裁きをつけるか、春奈には、興味があった。

さて――。

旅籠の一室に陣どった道満は、下座に辰馬を据えておいて、宿の年寄りたちがこもごも語るのを、きいた。

金井半兵衛という男が、この浪人者を供にして、播州屋に泊ると、早速に、

『よろず悩みごとある者は、来れ。即座に、悩みをとりのぞくべし。

天下救世主　金井半兵衛』

と記した木札を、店さきにかかげた。

悩みごとを持たぬ人間は、世の中には、いない。

文字通り、門前市をなす盛況を呈した。

「ふむ。それで、金井半兵衛という者は、お主たちの悩みをきいて、即座に、解答してみせ

たのじゃな？」

道満は、つめかけた一同を見わたした。

「はい――」

「その解答ぶりは、あざやかであった、というわけじゃな？」

「はい、まあ……」

どの顔も、しぶしぶながら、そのことをみとめた。

「つまり、お主たちは、金井半兵衛の解答をきいた時は、大変有難がった。これは大層偉いお方だ、と思った。そうであろうな？」

「はい。それは、まあ、その時は、よもや、大泥棒などとは、存じませず……」

「待たっしゃい。金井半兵衛の解答のおかげで、悩みごとが、解決した者は、一人や二人ではなかろう。どうじゃな？」

たしかに、それは、その通りであった。

しぶしぶみとめる一同を眺めて、道満は、微笑した。

「と、いたせば、金井半兵衛は、かたり者ではなかった」

「したれど、加古川大尽から、千両を盗んで居ります」

「さあ、そこじゃな」

道満は、云った。

「加古川大尽は、何かの悩みごとがあって、金井半兵衛を、屋敷に招いたのであろう。どうじゃな？」

「はい、その通りでございます」

「半兵衛は、その悩みごとを解決してやり、大尽をよろこばせたのではなかったか？」

「そうでございます」

「ところが、加古川大尽は、ケチであった。日本一の大ケチであった。そうではないか？」

人々は、顔を見合せた。道満は、自分の指摘が、当ったのに、にやりとした。

「金井半兵衛は、謝礼のすくなさに、憤ったのではあるまいかな。……ところで、半兵衛が、土蔵を破るのを、誰か目撃した者は、いるか？」

一同は、黙った。

「大尽の方で、土蔵から、千両箱が失せた、と云い出したのではないか？　そうであろう？」

道満の言葉に、一同は、動揺を示した。

「わしが、想像するに、加古川大尽は、他人に知られてはならぬ秘密の大事を、金井半兵衛に打ち明けたに相違ない。それで、とにもかくにも、その悩みごとを解決してもらったが……、生来ケチで小ずるい奴だから、秘密の大事を打明けてしまったことが、ひどく心配になって来た。そこで、金井半兵衛は、盗賊であった、と云いふらして、二度と再び、わが家へ近づけまい、と猿知恵を働かせた。たぶん、そうであろうな」

道満の推理は、明快であった。

宿の人々は、加古川大尽が、無類の悋嗇漢であり、狡猾で、傲慢な人物であることを、イ

ヤというほど知っていた。ただ、この加古川一円に絶対の権力をそなえているので、さからう者は一人もいなかっただけである。

「さて、こんどは、播州屋のあるじが、何者かに、斬られた一件じゃが――」

道満は、辰馬を、じっと見据えた。

「お主のしわざかな？」

「い、いや……、それがしでは、ござらん」

辰馬は、しどろな口調で、否定した。

「御一同にうかがうが、播州屋のあるじは、これまた、加古川大尽に負けずおとらずに、大のケチではなかったかな？」

人々は、その通りであった、とうなずいてみせた。

「斬られても、仕方がないような強欲な、いやらしいじじいであったというわけじゃな？」

「はい、まあ……」

「かねて、このあるじを憎む者が、生命を狙っていた、と考えられる。お主たちの中にも、あるじを殺して、かくしためた金を奪ってやりたい、と思うて居った者が、いるであろう」

道満の鋭い視線をあびて、あわてて、顔を伏せた者は一人や二人ではなかった。

「その夜、そうした恨みを持った者が忍び込んで、あるじを斬った。……その時、お主はどうしていたな？」

道満は、辰馬に、問うた。

辰馬は、とっさに、返答しかねた。

「ははは……、かくさずともよい。お主は、その光景を、ものかげから、目撃して居ったのであろう。そして、その忍者が、金を奪ってにげ出すのを、追いかけたのではないかな？」

「さ、さようでござる」

辰馬は、ほっとして、額の冷汗を手の甲でぬぐった。

「お主は、つまり、曲者を捕えようとして、追ったのではなく、曲者が奪った金が欲しくて、追いかけた、という次第じゃ」

「面目次第もござらぬ」

辰馬は、頭を下げながら、

――この爺さん、途方もなく嘘を吐くのがうまいが、いったい、前身はなんだろう？

と、思った。

「宿の衆――」

道満は、声音をあらためて、云った。

「これで、どうやら、お主たちが、加古川大尽に踊らされていたことが、明らかとなったであろう。……わかったな？」

一同は、完全に、道満に云いくるめられてしまい、一人として、云いかえす者もなかった。

道満は、皆を去らせると、「やれやれ――」と、大きく背のびした。

「腹が空いたのう」

辰馬が、両手をつかえて、
「ご厚志忝（かたじけ）のうござった。このご恩は……」
と云いかけると、
「お主を救ったわけではない。わしは、加古川大尽という奴を、かねて、知って居るので、ある計画を思いついたまでじゃ」
道満は、云った。
「計画と申すと？」
「あとで、話す。まず、飯にしよう。……ところで、お主は、播州屋のあるじを斬ったであろうな？」
「……」
「かくすな。わしにかくしてもはじまるまい。お主は、わしに、借りができた。そうであろう」
「いたしかたござらぬ。恩を売られ申した」
辰馬は、みとめざるを得なかった。
その時、春奈が、部屋へ入って来た。
一瞥（いちべつ）した辰馬は、仰天した。
「ほう……、二人は、知りあいか」
道満は、見くらべた。

「この御仁（おひと）は、わたしに、恨みを持って居ります」
春奈は、云った。
「い、いや……」
辰馬は、あわてて、手を振った。
道満は、春奈から、いきさつをきくと、
「武士として、娘から、断崖へまっさかさまに落されるとは、チトだらしないの」
と、笑った。
「こんな腰抜け浪人を助けて、どうなさるのです？」
春奈は、たずねた。
「なにかの役には立つ。ひとつ、計画を思いついたのでな」
「なんの計画です？」
「加古川大尽の屋敷から、千両箱を五つ六つ、盗み出す」
大それた計画を、平然として、云ってのける道満を、春奈と辰馬は、唖然（あぜん）として、見まもった。
「まことですか？」
「こんなことを、座興では申さん。加古川大尽の土蔵には、千両箱が、五十か六十、積みかさねてあるはずだ」
「老人は、盗賊を稼業（かぎょう）にして居られるのか？」

春奈は、さげすみのまなざしをくれた。

道満は、けろりとして、

「左様――興がのれば、盗賊になるし、面倒くさくなれば、乞食にもなる。融通無碍の生きかたをして居る」

と、こたえた。

「わたしは、泥棒などは、働けませぬ！」

春奈は、きっぱりと拒絶した。

「ははは……、人の物を盗む、と考えるから、怯じるのじゃな。右のものを左へ移す、と考えればよい」

「でも、加古川大尽の土蔵の中にある千両箱は、その屋敷のあるじのものではありませぬか」

「では、問うが、大坂城は、はじめから、徳川家のものであったかな？」

「豊太閤が、築かれたお城です」

「それを、徳川家康が、奪い取った。つまり、家康殿は大泥棒――」

「……」

「城を取っても、誰も、この大名を盗賊とは云わぬ。金を盗めば、泥棒とののしる。同じことをしても、大きなことをやってのければ、かえって、うやまわれる。世の中のしくみなど、斯くのごとく、都合よく、勝手なものにできて居る」

「……」

春奈は、くちびるを噛んだ。

口では、とうてい、この老人に太刀打ちできないのである。

「ところで、天堂寺辰馬氏、お主は、この娘御に、腰抜けとののしられるほど、まことの臆病者かな？」

「い、いや……」

辰馬は、しかめ面になって、もぞもぞと肩をうごかした。

「立派な偉丈夫でありながら、なさけないのう」

「ただいまより、性根を、あらため申す」

「膂力は、あるであろう」

「それは……」

「十人力といかぬまでも、二三人をはねとばすぐらいの力はあろう。足らぬ度胸を、その力で、おぎなってはどうじゃな」

「承知つかまつった」

「これでよい。春奈殿、合点じゃな」

「やむを得ませぬ」

「はっはっはっ……、そなたは、男まさりが、玉に疵じゃが、これも、使いかたによって、大いに役に立つ」

「……」

「美貌のそなたが、加古川大尽を、まず色仕掛けで、たらし込む。そして、いざとなったら、夜叉の本性を発揮して、人質にして、土蔵へ案内させて、扉を開けさせる。盗みなどというものは、かんたんな仕事さ」

東への道

「駄目だ！」

織田重四郎が、ついに、絶望の声を、吐いたのは、兵庫の浜辺で、疾駆させて来た馬から降りた時であった。

この二日間、重四郎は、静香、数馬の姉弟を、血眼になって、さがしもとめ、馬脚を折らんばかりに、本街道のみならず、いたるところを駆けめぐってみたのである。

白砂に、どさっと腰を下ろした重四郎は、

「このおれが、生れてはじめて、女子に惚れた」

と、自嘲した。

すると——。

「結構なことでござる」

うてばひびく声音が、かえって来た。

——なんだ？

重四郎は、小松を三四本へだてたむこうに、男が一人、寝そべっているのに、気がついた。

「女子に惚れるのが、結構なことか？」

「惚れたくとも、惚れることのできぬ男も、居り申す」

「ふむ？　男に生れたからには、一度や二度は、女子に惚れるのではないか。機会がなければ、話が別だが……」

「いや、機会があっても、絶対に、女子に惚れぬ男も、ござるな」

男は、むっくり起き上って、こたえた。

重四郎は、男の顔を、正視した。

まだ二十五六の若さだが、一種の風格をそなえている。

人生のすべてを看通したようなおちついた表情である。

それが、重四郎には、小面憎く感じられた。

「お主が、そうなのか」

「左様でござる。女子に惚れれば、他事一切に対して盲目と相成る。物欲が強くなれば、守銭奴となって、金にとらわれ申す。栄誉のとりことなれば、四方八方によけいな神経を配らねばなり申さぬ。おのれを束縛することに、人間が夢中になるとは、いかがなものか、と考え申すが、さて、当人自身は、それで結構でござろう」

「お主、ただの浪人か？」
「金井半兵衛と申す、生れながらの素浪人でござる」
半兵衛は、ゆっくりと近づいて来て、
「失礼だが、お手前は、剣を使えば異数の腕前でござろう」
「……」
「しかし、その剣が、これまでのお手前の人生に、何か、役に立ち申したか？」
「いや、一向に、何の役にも立たなかった」
重四郎は、正直にこたえた。
「ま――そういうものでござろうな」
半兵衛の言葉は、ことごとく、対手のカンにさわるひびきを持っていた。
重四郎は、しかし、べつに腹も立てず、
「そういうお主は、ここに寝そべって、何を考えていたのだ？」
と、問うた。
「雲を眺めていただけでござる」
「なにが、面白くて？」
「雲の変化など、べつに面白くもないゆえ、だから、眺めて居り申した」
――この男、若いくせに、かなり変って居るな。
重四郎は、あらためて、半兵衛の顔を眺めた。

「面白いものを見れば、それに心をとらわれるから、いやだ、というのか？」
「そういうわけでござるな」
「何を目的として生きて居るのだ？」
「べつに、目的など、何もござらぬ」
「……」
「そういうお手前も、女子に惚れるまでは、何を目的として生きて来られたのでもござるまい」
「おのが剣を、ためして来た」
「しかし、それは、なんの役にも立たなんだ」
「ことわっておく！」
重四郎は、語気をあらためた。
「おれは、剣を何かの役に立てようとして、学んだのではない。ほかにすることがないから、学んだにすぎぬ。剣を学んだことは、あるいは、無駄であったかも知れぬ。また、女子に惚れたことも、お主から見れば、無駄なことかも知れぬ。……しかし、人間の生きて行く上で、無駄をことごとくはぶいたら、一体、何がのこるのだ。そこいらの犬猫と同じではないか」
この言葉をきいて、半兵衛は、微笑した。
「お手前は、最も人間らしい人間とお見受けいたす。左様――、この世のいとなみから、無駄をはぶいたら、何ものこり申さぬ。ただ、無駄というものについて、お互いに、見解の相

違がござる。……お手前は、身共が、雲を眺めながら寝そべっているのを、無駄とみられた。身共の方は、お手前が女子に惚れて必死になって居るのを、無駄とみた。ははは……見解の相違でござるな」

「お互いに、別べつの道を歩いて居るわけか。しかし、もしかすると、行き着くところは、同じかも知れぬ」

云いすてて、重四郎は、砂をはらって立ち上った。

その時であった。

街道を来ていた一梃の駕籠が、そこで、おろされた。

駕籠の中から、立ちあらわれた女性を、一瞥して、重四郎は、眉宇をひそめた。

それは、本多美濃守忠政の息女八千代にまぎれもなかったからである。

八千代は、ふつうの武家娘のよそおいになっていた。

他の一切のものは目に入らぬ必死の面持で、重四郎の前に、歩み寄って来ると、

「会えました！」

と、喘ぐように、云った。

「とうとう、会えました！　きっと会えると思うて、わたくしは、姫路の城をぬけ出て来たのです」

「……」

重四郎は、当惑した。

十年前に、川へ投げ込んだ大名の息女から、あとを慕われて来るとは、夢にも考えてはいなかったのである。

「重四郎！」

八千代は、いきなり、身を投げかけて来た。

「重四郎！　おねがいです！　わたくしを、どこか、遠くへ……、どこへでも、つれて行ってたもれ。……おねがいです！」

八千代は、逞しい男の胸に、顔をうずめながら、かきくどいた。

重四郎は、この時、近くに立つ金井半兵衛の存在を、つよく意識せざるを得なかった。

――この男は、こうした男と女のもつれ合う姿を、無駄と看るのか。

「おちついて、考えなおして頂きとう存ずる」

重四郎は、八千代を、胸からはなすと、冷たい語気で、云った。

「それがしと、貴女様は、別の世界に住んで居り申す。同じ世界に住むことは、叶い申さぬ」

「いえ、いえ……、わたくしは、家をすて、城をすてました。もう、行きどころはありませぬ。そなたに連れて行ってもらうよりほかに、生きて行くすべを知りませぬ！　おねがいです！」

八千代は、再び、必死になって、すがりつこうとした。

八千代には、近くに立つ浪人者の姿など、目に入っていなかった。

「おちつかれることだ！」

重四郎は、声を高いものにした。

「大名のご息女が、家もない素浪人者の妻となって、幸せなど、得られようはずがない。……貴女様は、途方もない思いちがいの恋慕をされて居るのです。……正気に、かえって頂こう」

「わたくしは、女です。女の幸せが何か、わたくし自身が、いちばんよく知って居りまする。姫路の城の中に、わたくしの幸せは、ありませぬ！」

重四郎は、なんと云いきかせても、徒労だ、とさとると、半兵衛へ、視線を向けた。

——この場合、お主なら、なんと処置する？

まなざしで、問うてみた。

半兵衛は、微笑した。

それから、指のしぐさで、

——その姫君を、それがしにまかせて、お手前は、馬で走り去られるがよろしかろう。

と、応えてみせた。

「うむ——」

重四郎は、たのむ、と目顔で云うと、次の瞬間、こぶしを、八千代の鳩尾（みぞおち）へくれて、当て落した。

「おっと——」

半兵衛が、崩れる八千代のからだを、支えた。

「念のために、きいておくが、お主は、この姫を、城へもどす自信があるか？」

「さあ、都合によっては、女郎に売って、金にかえるかも知れ申さぬ」

その言葉は、かえって、重四郎を、安心させた。

「たのむ。……申し忘れた。それがしは、織田重四郎」

「おぼえておき申す。……行かれい」

たったいま、知りあった仲でありながら、二人は、旧知の友のように、うなずき合った。

八千代は、われにかえった時、部屋の中に寝かされているのを知って、はっと、身を起した。

——どうしたのであろう？

うすよごれた部屋のさまに、眉宇をひそめた。

旅籠のようであった。

本陣にしか泊ったことのない八千代は、こんなうすよごれた部屋に入れられたのは、生れてはじめてであった。

——どうしたのであろう？

わけがわからなかった。

浜辺で、織田重四郎にすがりついたところで、記憶の糸は切れている。

——重四郎が、当て落して、ここへ、はこんで来たのであろうか？

八千代は、首をかしげた。

と——。

妙に、顔が、こわばるのを感じた。

てのひらを、肌にあててみると、ざらざらと荒れているのみか、凸凹までができている。

愕然となった八千代は、いそいで、片隅に置かれた鏡台へ、いざり寄った。

鏡に、おのが顔をうつした瞬間、八千代は、おそろしい悲鳴をあげた。

自分のものではない貌が、そこにあった。

幽鬼そのものといえた。溶岩がかたまったように、みにくく皮膚は崩れ、しかも、死人のそれのように蒼ざめはてていた。

ほんのひとときのあいだに、このようにむざんに変りはてるものであろうか。

八千代は、呼吸も止る衝撃で、鏡からのがれた。

茫然と——長いあいだ、自失のていで、その場に、坐りつづけていた。

階段をのぼって来る足音が、みしみしとひびいて来た。

八千代は、それが、重四郎ならば、二度と、この貌を見せられぬと、狼狽した。

障子が、開けられるや、八千代は、うしろ向きになった。

織田重四郎のものではない声が、かけられた。

「湯殿へ、行かれるがよい」

きいたこともない声が、そうすすめた。

「そちは、何者じゃ？」

八千代は、背を向けたまま、たずねた。

「浜で、織田重四郎殿と一緒にいた浪人者でござる。金井半兵衛と申す」

「織田重四郎は、どうしたのじゃ？」

「所用あって、東へ去り申した」

「わたくしの、この顔は、どうしたのじゃ？」

「だから、湯殿へ行って、洗って来られるように、おすすめいたして居る」

「……？」

「それがしが、ちょっと、細工をほどこしてみたまでです。姫路城から、御家中が、追って参ったので、貴女様を渡さぬために、変えてみたまでのこと。湯で洗えば、すぐに、落ち申す」

これをきいて、八千代は、ほっとした。

「そちは、重四郎から、たのまれたのか？」

「左様——。引きうけ申した」

湯殿からもどった八千代は、もとの美しい顔に、かえっていた。

八千代は、部屋で待っていた金井半兵衛という浪人者が、人品いやしくない容姿を持っているのに、安堵した。

「貴女様は、本多美濃守殿のご息女であらせられる？」
半兵衛は、あらためて、たずねた。
「はい」
「織田重四郎を慕うて、城を抜け出て、あとを追って参られたとは、当節珍しい勇気をお持ちの姫君でござるな」
半兵衛は、微笑した。
八千代は、対手が、ばかげたふるまいをしたもので、内心あざけっているのではないか、とうたがった。
「いけませぬか？」
「いやいや――、なかなか、どうして、並の娘御には、できぬことでござる」
「女子の幸せは、想い慕う男子に添うことだと存じます」
「その通りでござる」
「戦国の女子たちは、隣国とのかけひきの手段に、いけにえとして供されたそうなが、わたくしは、そのような犠牲になるのは、死んでもいやなのです。いやな男子には、嫁ぎませぬ。この十年、父や重役たちのすすめを、みな、こばんで来ました」
「ご立派と申し上げられる」
「わたくしの生涯の良人は、ただ一人、織田重四郎と思いきめて参りました」
「……」

「そちは、わらいますか？」
「わらいはつかまつらぬ。……ただ、浮世のしくみは、おのが欲するままには参らぬようでござる」
「わたくしが、重四郎の妻には、なれまい、と云うのですか？」
「まず――」
半兵衛は、微笑した。
「なぜです？　どうして、そのような断定ができるのです？」
「いささかの情を持っていれば、当て落して、立ち去るようなことは、いたしますまい」
半兵衛の言葉は、ひややかであった。
「いまは、すげなく扱われても、わたくしの心が、重四郎に判らぬはずはありませぬ。あわれと思うてくれるうちには、きっと……」
「はたして、そうなり申そうか」
「そちは、わたくしを、さげすむのですね？」
八千代は、きっと、態度をかえた。
「いや、ただ、お気の毒に存じて居るまでござる」
「気の毒に？　それは、どういう意味じゃ？」
「もし……、もしも、織田重四郎が、別の女子の俤を、胸に抱いていたならば、貴女様は、いかがなされる？」

「……」

八千代は、いったん、息をのみ、それから、はげしい気色で、

「ちがう！　そんなはずはない！」

と、否定した。

胸が、つよく動悸をうっていた。

八千代が、はげしい気色を示せば示すほど、半兵衛の態度は、冷たいものになった。

「織田氏は、一人の女性を救おうとして、必死になっていた様子でござる」

「ちがう！」

八千代は、必死で、かぶりを振った。

「重四郎は、剣ひとすじに生きて居る男じゃ。女に、心をうばわれるような男ではない。だからこそ、わたくしは、十年ものあいだ、ひたすらに、慕うて参ったのじゃ」

「それがしは、あの浜で、織田氏と、いささかの問答をいたした。その時、一人の女性のために、生命をなげ出そうとしている模様が、うかがわれ申した」

「ちがう！　ちがう！　ちがう！」

八千代は、狂ったように、叫んだ。

もし、重四郎が、他の女性に心を奪われているのであれば、いったい、城から抜け出して来た自分は、どうなるのであろう。大名の息女が、家出したのである。そこいらの町家の娘のふるまいとは、事の重大さが比べもならぬのだ。

死ぬよりほかに、すべがないではないか。

八千代は、全身で、叫ばないではいられなかった。

その狂おしい様子を、半兵衛は、ひややかに眺めながら、

「失礼なことをおたずねつかまつるが、貴女様は、すでに、織田氏と、契られましたか？」

「……」

八千代は、くちびるをわななかせた。

「まだ、契られては居られぬ？」

「あ、あたりまえではないか！　操は、妻となってから、与えるものじゃ」

「ではまだ、織田氏とは、他人であられる？　……これは、お気の毒に存ずる」

「愚弄は、許しませぬぞ！」

「ご同情申し上げて居ることです。……一途に、想いつめて居られる貴女様に、いまは、何を申しても、お耳には入りますまい。ま、夕餉でも摂り申そう」

「わたくしは、これから、重四郎を追いまする！」

「街道には、御家中一統が、血眼になって、貴女様を、さがしまわって居り申す」

「そちは、また、わたくしの顔を変えてくれればよい」

「あれは、非常の手段。世人をおどろかせつつ、道中するのは、いかがなものでござろう」

半兵衛は、とりあわず、障子をあけて、階下に、

「夕食をたのむぞ」

と、声をかけた。

膳部が、はこばれたが、八千代は、箸をとる気にもなれなかった。

半兵衛は、地酒を、ゆっくりと、時間をかけて、飲んだ。

夕餉がすむと、八千代は、立ち上ろうとした。

半兵衛は、笑いながら、

「今夜は、この旅籠に、泊られることに相成る」

と、告げた。

八千代は、半兵衛が立とうとしない以上、一人で、とび出すわけにはいかなかった。

一人で、道など歩いたこともない身であった。

城から抜け出る時には、無我夢中であったし、必死になれば、不可能事も可能にできる、と知ったものの、こうして、見知らぬ宿場の旅籠に置かれてみると、無謀なふるまいは、つとめてさけねばならぬ、と理性もはたらいた。

すくなくとも、ここに一人の助力者がいるからには、一人でとび出すことは止めた方がよさそうであった。

八千代は、黙って、坐った。

しかし——。

半兵衛が、下婢を呼んで、同じ部屋に、寝牀をならべてのべさせるのを眺めて、さすがに、からだが小きざみに、ふるえた。

男子と、枕をならべてやすむ、などということは、想像もできなかったことである。

八千代は、別の部屋はないのか、と下婢にたずねた。

下婢は、にやにやして、返辞をしなかった。

「屏風があれば——」

そう云ってみたが、無視された。

下婢が、寝牀をのべるあいだ、半兵衛の方は、湯に行っていた。

もどって来た半兵衛は、

「さ——ゆっくりと、やすまれい」

と、すすめた。

「屏風が所望じゃ」

八千代は、腹立たしく、云った。

「それがしに、恥をかかされるものではござらぬ」

半兵衛は、うけつけなかった。

八千代は、あきらめなければならなかった。

半兵衛が、日誌らしいものをつけはじめるのを、しばらく見まもっていてから、八千代は、しかたなく、片隅で、そっと、帯を解いた。

上着だけ脱いで、むこう向きに、牀に就いた時、八千代は、不覚にも、双眸に泪がにじむのを、おぼえた。

そして、その時、はじめて、織田重四郎が憎いと感じた。
重四郎が、当て落して遁走しなければ、このようなみじめな夜をすごさないでもよかったのだ。
——重四郎は、何処へ行ったのであろう？
この浪人者の云った通り、別の女性をその腕に抱くために、姿をくらましたのであろうか？
八千代の胸に、嫉妬の焔が、むらむらっと燃えあがった。
あらたな泪が、あふれた。
——会いたい！
その願いが、全身をかけめぐった。
——きっと、また会える！　会わずにはおかぬ！
心の中で、叫んだ。
半兵衛の方は、まだ、筆を走らせつづけていた。
やはり、疲れていたとみえる。
八千代は、かなりねむったけだるさの中で、ふっと、目をさました。
部屋は、しんの闇になっていた。
なぜか、四肢が、しびれていた。ただの疲れでは、こんなにしびれるものではない。
——どうしたのであろう？

八千代は、起き上りかけて、急に、不安におそわれた。
手の指も、足の指も、動かないのだ。
——どうしてこうなったのであろう？
もう、このまま、永久に、動かないままに、廃人になってしまうような恐怖が、わきあがって来た。
「も、もし——」
八千代は、となりの寝牀へ、声をかけた。
「もし——金井半兵衛どの！」
半兵衛は、寝がえりを打って、ひくく「……む」とうなってから、目をさました。
「おねがいじゃ。手足が、しびれて居りまする！」
「あぁ——」
半兵衛は、起きあがると、灯をともした。
「どうしたのか、よくわかりませぬが、手も足も、うごきませぬ」
「左様か。では、すこし、摩擦してさし上げますか」
八千代は、びくっとなった。
処女の身で、他人の男に、肌にふれられるのは、いとわしかった。
摩擦されるよりも、なにか、効目のある薬が欲しい、と思った。
しかし、いまは、この男に、すべてをまかせるよりほかに、すべはなかった。

半兵衛は、八千代のそばへ寄ると、掛具をはねた。
「ごめん――」
ことわっておいて、まず、手くびをにぎった。
「ほう――、氷のように冷えて居る」
「そなた、医術の心得が、おありか？」
「漂泊の浪人者は、わが身を守るためには、武術のほかに、医術も知っておく必要がござる」
そうこたえておいて、半兵衛は、その白い細い指を、もみはじめた。
八千代は、自分の指ではないように、遠い触覚しか、感じなかった。
「ふむ――」
ちょっと、考える様子をみせた半兵衛は、こんどは、猿臂をのばして、下着の裾をめくって、足くびを握った。
八千代は、ひしと目蓋を閉じた。羞恥と嫌悪が、背すじを走った。
半兵衛は、しばらく、脛から足くびまで、ゆっくりと摩擦しつづけた。
やがて、
「これは、いかんな」
と、独語した。
「いかぬ、とは？」
「左様――、すぐに癒そうとするのは、むつかしいように存ずる」

半兵衛は、ひややかに、こたえた。
八千代は、慄然となった。
「ほ、ほんとうに、癒らぬ、と診るのですか？」
八千代は、息せわしく問うた。
羞恥も嫌悪も、どこかへ、吹きとんだ。
「いや、癒らぬ、とは申して居りませんが、日数がかかろうか、と……」
「いやです！」
八千代は、叫んだ。
「こんな旅籠で、いつまでも寝ているのは、いやです！　はよう、癒して欲し！」
「そう無理を申されても――」
半兵衛は、かぶりを振った。
「いやです！　いや！　いや！　わたくしは、重四郎のあとを慕う身です。明朝、駕籠にのせて、送ってもらいます」
「わがままを申されるものではない」
「そなたは、この病いが、どのようなものか、しかと判らぬのであろう？」
「いや、はっきりと、判って居り申す」
「それならば、すぐに癒せるてだてがあるはずじゃ。知って居ろう」
「たしかに、知って居り申すが……」

「それならば、すぐに、その治療を、ほどこして欲しい。おねがいじゃ」
「こまり申したな」
「なにが、こまるのです？」
「姫君に対して、いささか、乱暴な処置をいたさねば相成らぬゆえ……」
「かまいませぬ。それで、この病いが、癒えるものなら、わたくしは、我慢いたしまする。……ほどこして下され」
「では――」
半兵衛は、冷たい視線を、じっと据えて、
「はじらいの気持を、おすてなさるか？」
「すてましょう」
八千代は、承知した。
半兵衛は、猿臂をのばすと、その下着をも、脱がせようとした。
八千代は、目蓋を閉じて、必死に、堪えた。
と――。
不意に、男が、上に掩いかぶさって来たので、八千代は、思わず、
「あっ！」
と、声をたてた。
「我慢する、と申されたぞ」

半兵衛は、鋭く云った。
四肢の自由が、うしなわれている以上、八千代は、抵抗する力はなかった。
なすがままに、まかせるよりほかはなく、あきらめて、この屈辱に堪えねばならなかった。
全裸にひきむかれた肌は、男に抱きしめられた。
――これは、本当の治療なのであろうか？
疑惑が脳裡を横切った。
しかし、だまされているのであっても、どうなるというのであろう。
――重四郎！　ゆるして！
胸のうちで、八千代は、叫んだ。
半兵衛は、両腕に、徐々に、力をこめながら、内心、
――こういう具合に、女というものは、犯さねばならぬ。
と、にやりとしていた。
八千代の四肢をしびれさせ、動けないようにしたのは、実は、金井半兵衛のしわざであった。
夕餉の膳の汁に、ひそかにその毒薬を、まぜて、八千代に飲ませたのである。
明日の昼になれば、しぜんに、毒は消えて、四肢は、自由をとりもどすはずであった。
……一刻が、過ぎた。
半兵衛は、すっと身を起して、八千代の寝牀から、はなれた。

八千代の顔は、死人のように蒼ざめていた。
閉じた目蓋のかげから、睫毛を押しあげるようにして、泪があふれ出ていた。
無抵抗のままに、八千代は、操をうばわれたのである。
半兵衛は、しばらく、沈黙を置いてから、
「男子の精気をもって、貴女様の手足を活きかえらせぬかぎり、生命もあやういゆえ、やむを得ぬ仕儀でござった。おゆるし下され」
と、云った。
あくまで、これは、治療である、と押し通す心算であった。
そう云われると、八千代は、だまされたのだ、と叫びかえすわけにいかなかった。
半兵衛は、灯を消すと、おのが寝牀へ横たわり、
「午までには、お元気におなりと存ずる」
と、云いすてておいて、悠々とねむりに入ってしまった。
この若い浪人者の悪知恵にひっかかっては、たいていの人間が、まんまと、してやられてしまう。
陽ざしが、雨戸の節穴を通って、部屋にそそぎ入って来た頃、八千代は、両手の指をそっと組みあわせたり、また、ほどいてみたりしていた。
ようやく、四肢は、自由をとりもどしかけていた。
――起き上ることができる！

そう思った八千代は、そっと、隣りの寝牀を、うかがった。
――このまま、この浪人者を、生かしておくわけには、いかぬ！
流石は、大名の息女であり、勝気な娘であった。
たとえ、これがまことの治療法であっても、操をけがされた恥辱が、永久に消えぬ上からには、恩は別として、その恥辱を雪がなければならない、と決意したのである。
八千代は、そろそろと、片手をのばして、枕の下に置いた懐剣をさぐった。
半兵衛は、やすらかな寝息をたてている。
懐剣が、手にふれた。
それを、そっと、胸もとへ抱き寄せ、鞘をはらった八千代は、力をこめて、にぎりしめようとした。しかし、五指は、まだ、なえていて、しっかと、握りしめることは、できなかった。
こんな弱い力では、とうてい、刺し通すことはできぬ、と思われた。
しかし、ぐずぐずしていれば、半兵衛は、目をさましてしまうであろう。
刺すのは、いまなのだ！
八千代は、そーっと、音しのばせて、身を起した。
とたんに、半兵衛は、くるりと、寝がえった。
はっと、八千代は、固唾をのんだ。
さいわい、半兵衛は、八千代に、背中を向けた。

八千代は、懐剣の柄を、両手で、握りしめた。

つい、一刻前、自分を抱きすくめて、むざんに、犯しておいて、悠々と睡り込んでいる男に対して、いま、ようやく、八千代は、憎悪を燃えたたせた。

――この男が、生きていては、わたくしは、幸せは得られないのだ！

八千代は、心の中で、叫びつつ、じりじりと、迫った。

一瞬――。

全身からの気力を、その白刃にこめて、男の背中めがけて、切先を、突きくれた。

とたんに、半兵衛のからだは、するりと、寝牀を抜けて、畳へすべり出ていた。

懐剣は、むなしく、掛具を刺していた。

八千代は、あわてて、抜きとろうとしたが、その力がなかった。

半兵衛は、やおら、起きあがると、薄闇の中で、にやりとした。

「恩を仇でかえそうとされるとは、不埒と存ずる。そうやって、懐剣が持てるまでに、からだが恢復して来たのは、一体、誰のおかげでござろうか」

「……」

八千代は、くちびるを噛んで、喘いだ。

「たしかに、それがしは、貴女様の操を奪い申した。この点は、重々おわびつかまつる。しかし、そうしなければ、貴女様は、いま頃は、あの世への道を歩まれていたのだ」

「……」

八千代は、嘘だ、と叫びたかった。

しかし、嘘だと云いはる証拠がなかった。

「おちつかれることです。……姫君、この金井半兵衛を、信頼して頂きたい。それがしは、今夜のことは、生涯、決して、口外つかまつらぬ。これは、かたくお約束つかまつる」

「……」

八千代は、返辞のしようもなかった。

八千代にとって、半兵衛が、他人にしゃべらぬ、と約束してくれることで、安堵はできなかった。

純粋な感情を抱いた処女にとって、自分の操を奪った男が、この世に存在していることが、堪えがたいのであった。

生きていることが、許せなかったのである。

「死んでたもれ！　わたくしも、死にまする」

辛うじて、八千代は、そう云った。

「なにを、ばかげたことを申される。人間は、生きつづける、ということが、何よりも大切なのでござる。……死なせて、よろしければ、それがしは、なにも、貴女様の操など、奪いはつかまつらぬ」

ぬけぬけと、半兵衛は、そう云った。

一髪の重さ

織田重四郎は、その夜を、どこですごしたか、夜が明けそめた頃あい、尼崎の神崎川の畔にいた。

ゆるやかな流れの水面へ、視線を落して、なかば、放心のていであった。

「お主――」

声をかけられてから、重四郎は、振りかえった。

見知らぬ浪人者が、微笑をうかべて、立っていた。

無精髭をはやし、衣服も色あせ、埃にまみれていて、いかにも、むさくるしく、臭気もひどかった。

「お主を、さがしていた。ちょっと、そこまで、つきあってくれぬか？」

「……？」

重四郎は、対手の顔に全く記憶がなかった。

「ははは……、唐突に、そうさそわれても、けげんに思うのは、むりもない。……実は、お主とは、平家館で会って居る」

「あそこの食客か」

「左様――三月あまり、ごろごろして居った。一昨日、追い出された。由比民部という小ざかしげな若者が居ったのを、おぼえているか。あやつ、あるじの腹心になり居ったらしく、われわれ食客に、監視の目を光らせはじめた。……つまり、それがしが、追放第一号と相成った」

「どういう理由で？」

「うすぎたなさすぎる、という理由であった。というのは、嘘でな。公儀隠密ではないか、という疑いによる」

「……」

「まあ、そこまで、つきあってもらえぬか」

堤を二丁ばかりさかのぼると、古びた観音堂があった。西国巡礼が、宿泊する御堂があった。

げんに、重四郎とその浪人者が、その庭に入ると、年老いた夫婦者が、出て来て、鈴を鳴らしながら、こちらへ鄭重に頭を下げつつ、すれちがって行った。

堂内のひろい畳敷きの片隅には、夜具がうず高く積んであった。

浪人者は、重四郎と対坐すると、

「黒金又八郎と申す」

と、名のって、あらためて頭を下げた。

「織田重四郎」

重四郎も、名のった。

「いや、尊名は、すでに、承知いたして居る。……ところで、お主が、平家館を訪れた目的は、何であったろう？」

黒金又八郎と名のる浪人者は、単刀直入の質問を発した。

重四郎は、いささか、むっとなった。

――この男は、礼儀を失している！

「おれが、どうして、そんな質問に答えなければならぬのだ？」

「いかぬか？」

「他人同士が、いきなり、それぞれの心中を割ってみせることが、どうしてできる？」

「お主を、仲間とみたからだ」

「仲間？」

「左様――。お主は、神屋主膳の生命を狙って、入ったのではなかったか？」

「……」

重四郎は、とっさに、返辞をためらって、黒金又八郎を、じっと、見かえした。

黒金又八郎は、にやりとした。

その不敵な表情に接して、重四郎は、確信を持った。

――やはり、そうだ。この男、公儀隠密に、まちがいない。

「それがしの推察、いかがだ？」

黒金又八郎の方も、自信をもって、返辞をうながした。

「あいにくであった。おれは、神屋主膳の生命を狙ったのではない」

「しかし、ただの食客として、舞い込んだのではなかろう？」

「神屋主膳が、過去に於て、為したことの真否をたしかめたくて、入ったまでだ」

「神屋の、過去の行状を調べに――？　海外交易のことか？」

「いや――」

「では、なんであろう？」

黒金又八郎は、首をかしげた。

重四郎は、少々面倒くさくなり、

「ことわっておく。おれと、お主とは、どうやら、仲間ではないらしい」

「……」

「おれは、ただの素浪人にすぎぬ。お主は、公儀の禄を食む隠密衆――かくさんでもよい。神屋主膳という人物は、当然、公儀から目をつけられる。食客の中に、公儀隠密がまじっていることは、神屋自身も気がついているようであった」

「……」

「お主、すでに、証拠をにぎっているのであろう。おれに、わざわざ、訊ねるまでもあるまい、と思うが――」

「それが――ある！」

「何が、ある？」
「お主は、あの館の奥に入ったはずだ。あそこには、切支丹の伴天連と若い異国の娘が、かくまわれて居る。お主は、かれらと話を交して居る」
「……」
「どんな話を交したか、それを、ききたい」
「べつに打明けねばならぬ義務は持たぬ」
「いや、打明けてもらわねばならぬ。それが、身のためだ」
「身のため？」
重四郎は、その時、はっとなった。
外に、気配がある。ただの気配ではなかった。
当然——。
重四郎は、三石宿で、公儀隠密団の夜襲を受けた時のことを、脳裡によみがえらせた。
——おれは、この男の罠にかかったのか？
疑惑の色が、重四郎の顔に刷かれるのを、黒金又八郎は、冷やかに、見まもった。
「織田重四郎氏。お主を、切支丹信徒と、断定はせぬ。……これは、お主自身の態度によって、決定する」
「……」
「どうだろう、こちらの味方になってもらえまいか。そうすれば、お主の身の自由は、保証

する」
重四郎は、返辞をする代りに、外に迫った者の頭数をはかった。
六七人——いや、十人はいるかもしれぬ。
ただの武士ではないのだ。暗殺を稼業とする為に生れて来たような面々に相違ないのだ。
闘うとすれば、死を覚悟しなければならない。
重四郎は、度胸を据えた。
「おれは、先程、お互い、どうやら仲間ではないらしい、とことわった」
「うむ——」
「生来のつむじまがりだ。どうも、お主の態度は、こちらを、下に見下して居る。それが、気に食わぬ」
「味方になるのを、ことわる、と申すのか」
「お主は、対手をすこしばかり見そこなったらしい」
「やむを得ぬ。織田重四郎を、平家館にひそむ伴天連の一味とみなす」
「勝手に解釈するがよい」
重四郎は、平然として、云いかえした。
黒金又八郎は、いったん、立ち上った。
それから、
「もう一度、念を押す。どうしても、味方になるのは、いやか？」

「いやだ！」

重四郎がこたえるのと、抜きつけの一撃が、頭上へ来るのが、同時であった。

重四郎に、油断はなかった。

脇差を抜いて、これを受けるとともに、大刀を片手薙ぎに、黒金又八郎の胴に送った。

と——一瞬。

又八郎は、床板を蹴って、天井へ飛びあがっていた。

その隙に、重四郎は、土間へ跳んだ。

戸口には、すでに、青眼にかまえた一人が、待ちかまえていた。

実戦の場数を踏んでいる重四郎は、その青眼に対して、なんのためらうこともなく、突進した。

刃と刃が嚙みあって、火花が散った。次の刹那には、重四郎は、よろめく対手に体当りをくれておいて、おもてへ躍り出た。

——八人か！

一瞥して、頭数を見てとった重四郎は、一間を奔って、土壁を後ろ楯にした。

黒金又八郎は、姿を現わすと、

「斬るよりほかはない。……遁してはならぬ！」

と、云った。

——かんたんに、斬られるような織田重四郎ではないぞ！

重四郎は、胸中で、叫んだ。

三石宿で襲われた時と同じく、敵陣は、あきらかに、柳生流虎乱の構えであった。

あの時は、月闇が、こちらに味方してくれた。

いまは、朝陽がさしそめた時刻だ。

身をかくすものは、あたりに何ひとつない。

虎乱の攻撃の中から、脱出できるというのは、鬼神の技をそなえていなければならぬ。

重四郎は、鬼神ではなかった。

黒金又八郎以下八人の切先が、半円を描いて、じりじりと、迫って来る。

重四郎は、太刀を、下段にとって、微動もせぬ。というより、うしろの土壁に背を貼りつけられたように、動けぬのだ。

——ここで、犬死することになるのか。

脳裡を、チラと、絶望感が横切った。

絶望せざるを得ぬほどの強敵が、党を組んでいるのだ。

三石宿で襲って来た隠密陣とは、別の組であり、その腕前に格段の差があることが、一瞥瞭然としていた。

その殺戮陣形は、完全に個をすてて、いわば、それぞれが十指のうちの一本と化している、といってよい。

これまでの、一人して多勢を対手として闘った修羅場とは、様相がちがっている。

不動しばりに遭ったように、じりとも動けないのであった。
動くと同時に、八本の白刃が、一斉に襲って来る。その凄まじさが判るのである。
重四郎の気象としては、これは、堪えがたいことであった。
動けぬことに、憤りがわいた。
――動く！
重四郎は、おのれを叱咤した。
動くためには、敵陣を視てはならぬ。
目蓋をふさぐと同時に、下段の剣を、中段に移した。
刹那――。
八本の敵刃が、一斉に、動いた。
「えいっ！」
凄まじい懸声が、右方から発しられた。
同時に、刃風が、左方から唸って来た。
重四郎は、しかし、猛然と、正面の敵へ向って、五体をぶちつけるように、突進した。
文字通り、捨身の攻撃であった。
充分の手ごたえがあった――次の瞬間、重四郎は、自ら軀を大地にころがした。
これは、本能のなせるふせぎのわざと云ってよかった。
二回転しざまに、重四郎が薙いだ一閃の中に、敵の胴があった。

頭上に、血煙りが散り、陽光が紅にそまった。
はね起きざまに、重四郎は、さらに、一人を斬っておいて、野獣のごとく、二間を跳躍して、庭さきの松を背に負うた。
そして――。
剣を下段にして、ピタリと静止した。
この間、今日の時間にして、十秒にも足らなかった。
黒金又八郎が、正面に、迫って、
「見事！」
と、冷やかに、讃辞をなげて来た。
またたくうちに、三人を斬ってすてた重四郎の迅業は、これまで、この公儀隠密が接したいかなる強敵も、発揮しなかったものである。
しかし――。
黒金側には、なお、又八郎を含めて、五人が、残っていた。
重四郎を討ちとる充分の成算があったのである。
重四郎は、黒金又八郎の視線を、受けとめた。その視線には、毒蛇のような凄い光があった。
一度狙った敵は、断じて殺す、執拗きわまる意志をみなぎらせた光であった。
――尋常の人物ではない！

重四郎は、感じた。

あとの四人は、左右に二人ずつ、わかれて、肉薄して来る。

こんどは、こちらに、盲目剣を許さぬ陣形であった。

左右から、同時に、おのが身をすてて、襲って来るであろう。おのが身を、味方にあやまって斬らせることも、いとわぬのだ。

重四郎は、全き死地に置かれて、かえって、無念無想の、虚空の内におのれを置くことになった。

五本の白刃が、さらに、切先を一尺、詰めて来た。

その折であった。

「引けい！」

鋭い声が、かかった。

敵五人は、ピタリと停止した。しかし、すぐには、引かなかった。

「引かぬか！」

二度目の命令で、さっと、一間を跳びさがった。

重四郎の前へ、ゆっくりと、歩み寄って来たのは、頭巾で顔を包んだ人物であった。

大兵の、恰幅のいい、熨斗目の紋服に威風を示す武士であった。

重四郎は、初老だな、と見てとった。

「あっぱれなたたかいぶりであった。……その兵法を、誰にならったか？」

「べつに、何人にも、ならい申さぬ」

「独学か？」

「まず、そんなところ――」

「その剣を、当方で、買おうか」

「……」

「千両で、どうだ？」

「おことわりいたす」

「千両では、不服か？」

「対手によっては、一両でも、売り申す。げんにこれまで、各地で、二両、三両と、きり売りいたして参った」

「わしが、気に食わぬ、と申すか？」

「左様――」

「お主は、まだ、わしを、何者か知って居らぬぞ」

「公儀の、いずれ、蔭で大きな力を与えられている御仁であろう」

「公儀の者では、気に食わぬのか？」

「権力の座に在る人間が、放っている臭気は、それがしの最も好まぬところ。それがしは、剣を使う機械ではない。血のかよっている人間でござる。御辺は、人間というものには、赤い血がかよっていることを、無視される立場にある御仁らしい。依って、買われるのをご辞

退いたす」

きっぱりと、云いはなった。

すると、対手は、頭巾のかげで、笑った。

「わしが、止めなければ、お主は、いまごろ、三途の川を渡って居ったぞ」

「さあ、どうであったか――」

重四郎は、不敵に、笑いかえした。

――この人物、幕府大目付かも知れぬ。

重四郎は、考えた。

「行け。いずれ、また会うことになろう」

覆面の武士は、云った。

重四郎は、かるく頭を下げると、歩き出した。

黒金又八郎が、苛立たしげに、

「なぜ、遁される？」

と、なじった。

返辞は、なかった。

やがて――。

観音堂の中に入ったその人物は、又八郎ら五人が、味方の死骸をどこかに埋めて来るまで、黙然として、待った。

五人が、面前に坐ると、

「神屋主膳を、捕えるのは、いそぐことはあるまい」

と、云った。

「なぜでござろう？」

黒金又八郎は、眉宇をひそめて、問うた。

「別の組にさぐらせたところ、神屋主膳は、大きな企てをめぐらしている様子はない。ここしばらく動く気配をみせて居らぬところをみると、まだ、時節を待っている、と推測するのが正しかろう」

「しかし、神屋主膳は、よほどの曲者でござる。いったん動き出したならば、すでに、公儀の追求の網からすり抜けるだけのてだてを為して居るのでござるまいか。それがしは、彼奴を生捕るのは、一日も早いがよい、と考えて居り申す」

「黒金！」

「は――？」

「お主らに命令を下すのは、この隠密奉行だぞ！」

昂然として、云った。

又八郎も、他の四人も、おもてを伏せた。

隠密奉行、という職務は、公には知られていない。大名・旗本も、幕府の中に、そのような奉行職があると、知っている者はいないはずであった。

尤も、隠密奉行が、公にされぬ重職であることは、当然であろう。
いずれにせよ——。
公儀隠密の支配者ともなれば、これは、重四郎が、想像した以上の陰然たる権力者に相違ない。
「あの織田重四郎という浪人者を、泳がせておかれる目的は？」
黒金又八郎は、問うた。
公儀隠密は、幾班にもわかれて居り、黒金又八郎は、大坂組と称される一班の長であったので、かなり発言権を与えられていた。
「あの男は、目的を持って居る」
「目的とは？」
「お主らに、きかせるのは早かろう。その目的のために、神屋主膳の館にも入ったと思われる」
「……」
「しばらく、泳がせておけば、あの男自身が、何かをさぐり出すであろう。その時、あの男を片づける。よいな、こんど出会っても、あの男を襲ってはならぬ」
「かしこまりました」
「お主らが、次に為すことは……」
隠密奉行は、五人を近くへ寄せた。

重四郎は、ものの三丁も辿ってから、背後を歩いて来る者が、急に気にかかった。
——年寄りらしいが、まさか、あの隠密の徒党ではあるまい。
重四郎は、さらに一丁を歩いてから、それが、あきらかに尾行者であることに、確信を持った。
足を停めた。
当然、尾行者も、足を停めるもの、と思ったが、平気で、近づいて来た。
重四郎は、振りかえった。
「なんぞ、御用か？」
冷たく、見据えると、相手は、にやっとして、
「お手前の見事な腕前、感服いたした」
と、云った。
さきほどの修羅場を、どこか、物蔭から、見まもっていたのである。
「それで——？」
重四郎は、対手が尾けて来た理由を問うた。
「ああ、わしが、あとを慕うて参ったことか。お手前の腕前を、千両で買おうか、と思い立ち申してな」
「……」
「それがしは、千本強兵衛と申す、大坂役で死におくれた老いぼれでござるよ」

「それがしの剣を、千両で買って、何に役立てようと、云われる？」
「はは……、それは、買うた上で、指示いたす。いまは、あの公儀隠密の集団と敵対して居る者、とだけ申し上げておく」
「それがしの剣など、千両のねうちはない」
重四郎は、さきほどの隠密の頭領と自分との会話を、この老武士は、ぬすみぎきしていたに相違ない、と思った。
そうでなければ、同じ言葉を口にするはずがない。
「いやいや、千両どころか、五千両のねうちがござる」
「あいにくだが、それがしの剣は、売りものではない。あきらめて頂こう」
「なかなかもって、一度こうときめたら、あきらめぬたちでござるよ」
千本強兵衛は、重四郎と肩をならべて、歩く。
重四郎は、いささか面倒になり、
「強い浪人者をもとめて居られるなら、伊丹に、平家館という豪族の屋敷がある。そこをたずねて行かれるがよろしかろう」
「お手前は、そこから出て参られたか？」
「……」
「神屋主膳は、それがしの旧知でござるよ」
「……」

「あの館に、ごろごろして居る浪人衆は、ろくな者は居り申さぬ」
「……」
「はは……、どうやら、お手前は、わしが、つきまとうのを、わずらわしい、と思われている様子だ。……打明け申そう。わしは、これから、百万両の財宝の在処を記した絵図面を、取りに行こうといたして居る。と申しても、信じては、頂けまいな？」
強兵衛は、たんたんとした口調で、云った。
もちろん、重四郎は、そんな途方もない話は、信じられなかった。
しかし、この老武士が、まんざら、狂人とは思えなかった。
「その絵図面が、どこにある、と云われる？」
「左様――、姫路にござるな」
「姫路?!」
瞬間――重四郎の脳裡に、直感がひらめいた。
化物道人の杉山道満の言葉が、思い出されたのである。
杉山道満は、白河館を襲撃したのは、公儀隠密ではなかろうか、と推理し、次のように云ったものであった。
「白河館を全滅させた際、思いのほかに、館内にたくわえられた金銀がすくなかったのではあるまいか。南蛮財宝は、他の場所にかくされてある、と想像できた。しかし、その在処が、どうしても判明せなんだ。今日に及んで、遺児二人が生きのびていることがわかり、あるい

は、かれらが、その在処を教えられているのではあるまいか、と思った」

――そうか！

重四郎は、かくされていたものが、黒い紙をめくるように、あきらかになって来た、という気持であった。

白河館の姉弟に、莫大な南蛮金が、遺産としてのこされているのは、おそらく、事実であろう。

それを狙っているのは、まず第一に、幕府自身なのだ。隠密を放って、これを獲ようと躍起になっているのだ。

次いで、野に在る者たちが、このことをかぎつけて、食指を動かしているのだ。

とすれば、先夜、姉弟の家を襲って来た春奈という娘と、この老武士は、なにかのつながりを持っているのではないか。

重四郎は、この老武士に対して、先手を打ってみることにした。

「その絵図面を所持しているのは、白河館の姉弟と云われるか？」

ずばりと、云った。

果して――。

千本強兵衛は、鋭い眼光を、重四郎の横顔へ、当てた。

重四郎は、その眼光を、冷やかな視線で受けとめると、

「どうやら、まちがいはなさそうだ。貴公は、盗人であったか」

「……」

強兵衛は、一瞬、沈黙をまもったが、ふいに、にやりとした。

「まさしく、泥棒――みとめ申す。……ところで、そういうお手前自身はいかがだ？」

「盗心を持って居らぬことは、たしかだ。こちらは、白河館の姉弟を守護する立場にある」

「ふむ！」

「先夜、姉弟に、夜襲をしかけて来た曲者の一団があった。うら若い娘が首領となっていたが、これは、生捕った。……貴公は、その娘をご存じではないか？　貴公が、その娘をあやつっていた、とすれば、話がわかることだが――」

――春奈が、この浪人者に生捕られたか。

強兵衛は、愕然となった。

しかし、顔色には出さず、

「途方もない絵図面を所持して居れば、これを狙う曲者は、一人や二人ではござるまい」

と、云った。

その時、二人は、本街道へ出ていた。

重四郎は、立ち停ると、

「姫路へ行かれるなら、右だが、無駄であろう」

「無駄でござるかな？」

「貴公は、見かけたところ、盗賊とは思えぬゆえ、申し上げておこう。姉弟は、もはや、姫

路には、在り申さぬ」
「まことか？」
「かくしてもはじまらぬ。姉弟は、行方不明に相成った。それがし自身が、その行方をさがしもとめて、こうして、うろついて居る」
「お手前！」
強兵衛は、皮肉な薄ら笑いをうかべて、
「お手前もまた、黄金亡者ではござらぬのか？」
と、云った。
この言葉が、重四郎を、むかっとさせた。
「百万両の金の重さが、どれだけか、それがしは、知らぬ。しかし、それがしにとっては、白河館の姉娘の一髪の方が、百万両よりも、重いのだ。貴公には、それがしの、この気持など、わかるまい！」
たたきつけるように云いすてて、重四郎は、強兵衛から、はなれた。
「待たれい！」
強兵衛は、あわてて、呼びとめた。
「なんだ？」
「春奈と申す娘を、生捕りにした、と云われたが、その身柄をどうされた？」
「それがしの仲間が、預かった」

「仲間とは？」
「杉山道満という化物面の片足の不自由な老人だ。生かしたか、殺したか――知らぬ」
重四郎は、そのまま、大股に、歩き出した。
「おーい！」
強兵衛は、もう一度、呼びとめたが、重四郎は、返辞もせず、ふりかえりもしなかった。
――春奈は、斬られたかも知れぬ！
強兵衛は、暗然となった。
重四郎の方は、歩きつづけながら、
――百万両の重さがなんだ！
と、胸中で、叫んでいた。
――おれには、静香のひとすじの髪の毛の方が、大切なのだ。百万両が、人間を幸せにするとは、きまって居らぬ！　いや、すでに、姉弟が絵図面を所持している、という推測のために、どれだけの人命が落されたか。黄金の重さは、岩石の重さよりも、悪ではないか！
重四郎は、静香と数馬が、何処へ遁れ去ったのか、さがす目当もない状態に追い込まれているおのれ自身に、再び、焼けつくような焦燥をおぼえずにはいられなかった。
――おれは、さがし出すぞ！　きっと、めぐり会ってみせるぞ！

輪廻

恰度、同じ日――。

静香・数馬姉弟は、長曽我部左門と名乗る青年にともなわれて、伊丹の里の野道を歩いていた。

尤も、姉弟は、このあたりが、なんという里か、知らなかった。

左門は、

「そなたの身が安全な場所へ、つれて行く」

と告げただけで、土地の名も、どういうところかも、一切説明しようとはしなかったのである。

幾日か、彼処此処に、泊りをかさねていたが、姉弟にとっては、依然として、左門は、親しめぬ青年であった。

左門は、必要以外の口を、絶対に、きこうとしなかったし、優しい態度など、みじんも示さなかった。

姉弟をいたわれば、損をする、といった様子であった。

わざとそういう風に、冷たくみせかけているのかも知れなかった。

静香は、いまは、左門をたよりにする以外にすべはなかったので、ともなわれるままに、弟とともに、従って来た。

数馬は、さいわい、熱がひき、食欲も出て、歩くことにつらさを訴えなくなっていた。

「あそこだ」

左門は、行手を指さした。

大きな森が、どっしりと、わだかまっている。

この一筋の野道は、その森の中の屋敷のために、通じられているようであった。

よほどの豪族と、察しられた。

「なんというお屋敷でございましょう?」

静香は、問うた。

「俗に、平家館と称ばれて居る」

左門は、こたえた。

「えっ!」

姉も、弟も、その場へ、足を釘づけた。

左門は、ふりかえって、

「どうした?」

と、見やった。

「なぜ、おどろく?」

「い、いえ……、べつに――」

静香は、動悸を抑えて、かぶりを振った。

「はは……、そなた、伊丹の平家館は、おそろしい屋敷だ、という噂をきいて居ったのであろう」

左門は、一人合点に、笑った。

「心配するな。鬼も蛇も棲んでは居らぬ。わしが、いちばん、よく知って居るのだ」

「はい――」

静香は、弟の手を、力いっぱい、にぎりしめた。

すると――。

「姉上、行こう！」

数馬が、きっぱりと、云った。

少年の心で、非常の覚悟がなされたのだ。

静香は、弟を視た。

数馬は、うなずいてみせた。

――覚悟をしたのですね？

――うん、できている！

――死んでも、よいのですね？

――死んでもいい！

姉弟は、目と目で、云い交した。

森に入り、その館の前に立った時、左門は、

「むかしと同じだ」

と、云った。

左門は、十数年前、母にともなわれて、この館へ来たことがあった。

濠に架けられた吊り橋を踏みながら、左門は、なつかしさがこみあげて来た。

神屋主膳は、本名長曽我部盛政という。左門にとっては、叔父なのであった。

長曽我部盛政は、十五歳の時、領土の代りに、一艘の八幡船を、父からもらい受け、異邦に於て雄飛すべく、大海原を渡って行ったのであった。

左門は、この叔父が、豊臣・徳川両家の争う日本をすてて、海の彼方の何処で、どのような活躍をしたか、知らぬ。

盛政という叔父の存在すら、母によって、この館へともなわれるまで、知らなかったのである。

神屋主膳が、長曽我部元親の五男盛政であることを、知っているのは、左門とその母を除いては、おそらく一人もいないのではあるまいか。

噂によれば、神屋主膳は、徳川幕府から、一万石の隠し知行を与えられている、という。

もし、公儀に於て、主膳が長曽我部盛政と知っていれば、そのような隠し知行を与える道理があるまい。

長曽我部盛政であることが、露見すれば、公儀では、そのままでは、すまさぬはずである。
左門が、この館を訪れることを、母から、かたく禁じられていたのは、そのためであった。
京、そして江戸をめざしていた左門は、この館に立寄る気持はすこしもなかったのである
が、偶然のことから、この姉弟を救って、さしあたり、庇護してくれる家がないままに、叔
父にたのむことにしたのであった。
「たのむ！」
左門は、棟門前で、声をあげた。
「くぐりをお入りなされ」
そのこたえがあった。
左門と姉弟は、城廓づくりの屋敷内に入った。
しっかと握りあった姉の手も弟の手も、緊張でふるえていた。
父母の敵と信じている者の本拠へ、入ったのである。
生きてふたたび、外へ遁れ出られるとは、思えなかった。
左門は、表玄関に立つと、取次ぎに出て来た中年の男に、
「長曽我部左門が、参った、とお館にお伝えねがう」
と、云った。
「お館は、所用あって、堺へ行かれ、ここ数日、もどられませぬが……」
「では、もどられるまで、待たせて頂こう。ごらんの通り、娘と子供をともなって居る。一

室をお借りできぬか？」
「どうぞ――」
すぐに、三人は、みちびかれて、かなり広い部屋へ、通された。
あまり遠くないところから、突然、呶号と悲鳴と、なにかをなげつける物音が、起ったのは、左門と姉弟が、その部屋にくつろいで、間もなくのことであった。
それは、しだいに、はげしくなる様子であった。
きいているうちに、左門は、いらいらして来た。血気で、心気の満ちあふれた左門は、こういう場合、黙って、そ知らぬふりをすることは、できなかった。
「主人の留守をよいことにして、勝手に、騒ぎ居る！」
むなくそわるげに、吐き出した時、呶号と呶号が、いちだんと凄まじくぶっつかり合うのが、ひびいて来た。
「くそ！　我慢ならぬ！」
左門は、はねあがるようにして、突っ立つや、廊下へとび出した。
静香と数馬は、顔を見合せただけで、黙っているよりほかはなかった。
左門は、大股に、廊下を進んで行き、騒擾の起った広間の板戸を、ぱっと、ひき開けた。
二人の浪人者が、もの凄い勢いで、擲り合っている光景を、一瞥するや、左門は、
「うるさいぞっ！」
と、叱咤した。

擲り合っていた浪人者たちも、他の一同も、一斉に、左門を視た。

「食客のぶんざいで、主人の留守に、さわぎたてるとは、何事だ。食客なら、食客らしく、作法を知れ！」

左門は、あまり面構えのよくない連中が十数人も屯しているのに、すこしも遠慮せず、きめつけた。

「なんだ、お主は？」

髯面の、大兵の男が、けげんそうに、問うた。

「何者でもよい。ともかく、うるさいぞ。しずかにしろ！」

左門は、昂然と、胸を張った。

「大きな口をたたくのう」

髯面が、のっそりと立って来た。

「まだ、二十歳ぐらいだが、腕におぼえがあるのか？」

「お主らのような、乞食同様の冷飯くらいとは、ちがう！」

「云い居ったのう。……では、ひとつ、腕をためすか。姓名は？」

「長曽我部左門」

「なに?!」

髯面は、眉宇をひそめたが、一同をふりかえると、

「おのおのがた――。この若い衆は、長曽我部、と名のったぞ」

と、云った。

「長曽我部元親の末孫か」

「左様だ！」

左門が、こたえると、どっと笑い声が起った。

「なにが、おかしいっ！」

左門は、睨みまわした。

髯面は、にやにやして、

「このあいだは、豊臣秀正、と名のる奴が現われたのう」

と、云った。

左門は、かっとなった。

「長曽我部左門という姓名を持つ者は、この世に、二人と居らぬ！　名もなき下賤のやからには、この誇りは、わかるまい！」

そう叫んで冷笑した。

「わからんのう、わしらのような野伏あがりには――」

髯面は、大仰にかぶりを振ってから、

「では、名家の末孫と野伏あがりの一騎討ちと、参ろうか」

と、云いざま、なげしの長槍をひっつかむや、庭へ、跳んだ。

「来い！　青二才！」

形相を一変させて、左門を、睨みつけた。
左門は、一間の距離を置いて、髯面と正対すると、
「姓名を問おう」
「野伏あがりは、名のるほどの姓名など、持たぬわ」
その返辞のおわらぬうちに、左門が、地を蹴った。
疾風が吹き抜けるに似た凄まじい勢いであった。
見まもる一同が、あっと声をたてた時には、血飛沫が、宙いっぱいに、散っていた。
いつ抜いて、どう斬ったか——左門が立ちどまった時、髯面は、地ひびきたてて、地に伏していた。
長槍は、柄をなかばから両断されていた。
「次は、誰だ？」
左門は、冷然として、広間を見やった。
浪人者たちは、左門のあまりの迅業に、気を呑まれて、動けなかった。
「腰抜けども！　一人でかかれぬなら、二人でも、三人でも、かかって参れ！」
この高言には、さすがに、我慢ならなくなったとみえて、数人が一斉に、立った。
左門は、三人が、庭へ降り立つや、にやっとした。
「無駄に剣は使わぬ。一太刀ずつで、お主らを、あの世へ送ってくれる」
左門は、中段に構えて、云いはなった。

「青二才め！　高言、許せぬ！」
三人は、闘志をむき出して、切先をそろえると、じりじりと前進した。
その時、縁側を急ぎ足に来た由比民部が、この光景を視て、眉宇をひそめた。
しかし、とどめるには、すでに双方の殺気が、宙にみなぎりわたっていた。
問合は、きわまった。
三人は、実戦の経験の持主らしく、正面の者が大上段にふりかぶるや、左右の二人が、すべるように、進んで、左門を挟撃する戦法をえらんだ。
左門は、しかし、そのまま、動かぬ。
見まもる由比民部の眼眸が、鋭い光をおびた。
——この三人は、剣の構えに虚実があることを知らぬ！
民部は、左門の中段の構えが、虚であるを看てとったのである。
はたして——。
「やあっ！」
「とおっ！」
左右から、猛然と、斬りかかった刹那、左門の構えは、一変した。
ぱっと、左門の姿が沈んだ。
と同時に、左門の双手が、ひらいた。
いつの間に抜いたか、右手に大刀、左手には脇差が抜き持たれていた。

左右から斬りかかった二人の浪人者は、ともに、下腹を貫かれて、のけぞった。
「おのれがっ！」
正面の者が、逆上気味の声をほとばしらせて、猛然と、斬りかかった。
すでに二刀を使った左門は、大刀も脇差も抜きとるいとまもなく、素手で、この一撃を迎えなければならなかった。
左門は、両脚をバネにして、思いきり、背後へ跳んだ。
さいわいに、自ら、自身をたたきつけたところは、白砂上であった。
敵は、左門が起き上るいとまを与えず、
「くたばれっ！」
と、一刀を、電光の迅さで、突き出して来た。
これを、かろうじて、耳朶すれすれに、かわして、切先を白砂に突き立てさせた左門は、一回転して、はねあがりざまに、敵に、体当りをくれた。
とみた瞬間には、もう、その腰から脇差を奪っていた。
「来いっ！」
脇差を構えて、左門は、叫んだ。
「こやつがっ！」
敵は、呶号もろとも、滅茶滅茶に、白刃をふりまわして、襲いかかって来た。
左門は、右へ遁れ、左へかわし、うしろへ跳び退っていたが、一瞬の隙をとらえるや、脇

差で、敵の白刃を、宙へはじきとばしておいて、
「えいっ！」
真っ向から、斬り下げた。
敵の顔面は、噴水のように血潮を噴いた。
左門は、ひと息つくいとまもなく、総立ちになった浪人者一同に向い立って、決死の気色を示した。
当然——。
浪人者一同が、襲いかかって来るもの、と覚悟をきめたのである。
と——。
由比民部が、
「お主ら、しずまれっ！」
と、制した。
浪人者たちは、民部が、若年ながら、当館の主人から、ふところ刀にされていることを知っていた。
民部は、左門へ、冷静な視線をあてた。
「勝負は、終ったことだ。上られい」
「お主は、何者だ？」
「由比民部と申す」

「浪人どもの支配か？」
「べつに、主より、支配をまかせられては、居り申さぬ。ただ、調停の役をつとめる者が、他に居らぬゆえ、買って出たまでのことでござる。……このような争闘は、徒労でござろう」
「うるさい！　お主は、対手にとって不足はなさそうだ。来るか！」
左門は、民部を睨んだ。
民部は、冷やかに笑った。
「それがしが、どうして、お手前と、勝負しなければならぬのか？」
「その小ざかしげな、したり面が、気に食わぬ！」
左門は、叫んだ。
「そのような、むたいな云いがかりをつけられても、応対にこまるが……」
「それだ！　そのように、まるで五十過ぎの分別者の態度をぬすんで居るのが、気に食わぬのだ！　降りて来い。勝負してくれる」
民部は、しかし、とりあわずに、踵をめぐらそうとした。
「待てっ！」
左門は、奔って、縁側へとびあがると、民部の前面に、仁王立った。
「挑戦を避けるか、腰抜けっ！」
そうまで叱咤されると、民部も、流石に、眼光を鋭いものにした。

民部もまだ、二十歳を出たばかりであった。
「死にいそぎをするものよ！」
民部は、さげすみをこめた口調で、云った。
「なにっ！」
「どうしても、やる、と申されるなら、やむを得ぬ！」
「兵法をもって生涯をつらぬこうとするそれがしだ。あらゆる敵をさがし出して、立ち合うぞ！」
「庭で、待たれい」
民部は、いったん、奥へ入った。
やがて、もどって来るや、その右手には、大薙刀を携えていた。
「ふん――、薙刀か」
左門は、せせら笑った。
すでに、この時代には、薙刀は、婦女子の修練するものとなっていた。兵法者で、薙刀を試合に使う者は、稀になっていた。
民部は、庭へ降り立つと、
「由比民部」
と、名のった。
「長曽我部左門」

左門は、昂然と、胸を張った。
民部は、その名をきくと、ちょっと、眉宇をひそめて、左門を、見つめかえした。
名家の末裔に対する劣等感が、由比の紺屋の伜である民部には、あったのである。
「いざ！」
左門は、大上段にふりかぶった。
民部は、薙刀を、地摺りにとると、右半身に構えた。
浪人者一同は、縁側に、ひしめくように寄り集まって、固唾をのんだ。
この館で、これまでに、これほどの殺気の横溢した真剣勝負は、一度もなかったのである。
左門と民部は、それなりに、ぴたりと大地に根を張ったごとく、微動もしなかった。
時刻が移る——。
見まもる浪人者たちは、咳ばらいするのも抑えて、おし黙っている。
左門のこめかみが、時折、ピクピクと痙攣した。
偶然であった。
杉山道満が、この館へ、戻って来た。
うしろに、天堂寺辰馬と春奈を、従えていた。
辰馬は、一頭の荷駄の口をとっていた。
馬の背にのせられたこも包みは、どうやら、千両箱らしい。
この三人は、加古川大尽の屋敷に侵入して、まんまと成功した模様であった。

道満の知能をもってすれば、千両箱のひとつや二つ盗むことぐらい、造作はないのである。
「老人——」
春奈が、叫んだ。
「なんじゃな？」
「これは、何人の屋敷なのです？」
「平家館じゃ。神屋主膳という名を、きいたことは、ないかな？」
「……」
春奈は、返辞をしなかった。
しかし、その表情は、その名を知っていることを示していた。
「この屋敷へ、金をはこび入れて、どうするのです？」
「さあ、どういたそうかの」
「しらばくれないで欲しい。この三千両は、老人一人のものではない」
三人だから、千両ずつ、分ければいい、と云ったのは、辰馬であったが、道満は、笑って、受けつけなかったのである。
春奈は、我欲ではなくして、三千両が欲しかった。大志を遂げる上で、三千両は、すくなくとも、二百の手勢を集める力を持っている。
よもや、この化物道人が、独り占めするこんたんではあるまい、と思いつつ、うしろに従って来た春奈であった。

辰馬の方は、ただもう、我欲だけの随行であった。千両とはのぞまぬが、せめて、五百両欲しかった。

五百両あれば――、と思うと、からだ中が、わくわくして来るのであった。

道満は、二人それぞれの気持を抱いて、供をして来るのを、一向にそ知らぬふりで、この平家館へ、戻って来たのである。

「べつに、しらばくれては居らんぞ。もはや、この年になると、一両でも千両でも、同じことじゃな。家を持とうとも思わぬし、女を買う料簡もないしの」

「この館のあるじにたのんで、貧民らにほどこす、という存念ならば、反対しますぞ」

春奈は、云った。

「わ、わしも、反対だ」

辰馬も、云った。

「ははは……、まかせておいてもらおうかの」

吊り橋を渡って、棟門をくぐった時であった。

家僕が、駆け出て来て、

「道人様、ちょうど、よいところへ、おもどり下さいました。……は、はよう、仲裁して下されませい」

と、たのんだ。

「どうした？」

「おそろしい勝負が、されて居りまする！」

道満は、かぶりを振った。

「浪人どもの私闘は、退屈しのぎ、うさばらしには、恰度よい。やらせておくがよかろう」

「い、いえ――。ちがいます。お一人は、由比民部殿で、もう一人の御仁は、お館を、叔父上と呼んで居られる兵法者にございます」

「ほう！」

道満は、微笑した。

「世の中の万事は、知能で片づけられると思っている由比民部が、自身で得物をとって、立ち合うて居る、というのか。面白いの。……もう一人も、若いのじゃな？」

「二十歳を越えたばかりと、見受けられまする」

「見物いたそうかの」

道満が、縁側に立った時、民部と左門は、依然として、対峙したまま、微動もしていなかった。

「……ふむ！」

双方の構えを、じっと見くらべて、道満は、ひくく、うなった。

いずれの構えも、見事といえた。

よほどの修業をしていなければ、これほどの気魄をみなぎらせた構えは、とれまい。

しかし――。

道満の目には、その構えが、いわば、ひきしぼった弓の弦のように、映ったのである。
矢を放つに似た凄まじい一撃を発するには、当然、これだけの構えは、必要であろう。
ただ、真剣の勝負というものは、必ずしも、一撃によって、きまるわけではない。
攻め撃たせておいて、その隙をとらえて、勝ちを取るのが、むしろ、兵法達人の極意とするところである。そのためには、ひきしぼった弓の弦のように、一撃のみを狙って、心身を、はりつめさせるのは、かえって、おろかといえる。
双方が、全く同じ腕前、同じ心気の状態にあるならば、対峙の時間は、永い。その時間を、持続するためには、神経も肉体も、充分の余裕をのこしていなければならない。むしろ、構えは、隙だらけの静止体であってよいのだ。
この二人は、二十歳を越えたばかりの若さのおかげで、まだ、目に見えた体力の消耗をあらわしてはいないが、このまま、時間が経過すれば、やがて、ともに、疲労しはてて、刻苦の修業によって得た業を使うことも、できなくなるであろう。
道満は、この勝負を中止させるべき立場に置かれた。
すてておけば、相討ちになってしまう、と判っていた。
しかし——。
道満は、わざと、黙って、眺めているばかりであった。
うしろに佇んだ春奈は、
——老人は、どうして、止めないのであろう？

と、いぶかった。
春奈にもまた、この勝負の結果が、看てとれたのである。
——はやく、止めればよかろうに！
春奈は、いらいらした。
半刻が、過ぎた。
依然として——。
長曽我部左門は、剣を大上段にとり、由比民部は、薙刀を下段に位取って、そのまま、同じ地点に、在った。
半刻前とちがっているのは、双方の顔面に、ようやく、疲労の色が滲んでいることであった。
眼眸だけは、なお、気魄を満々とみなぎらせて、青い焔を燃えたたせているが、顔面は、血の色をうしなっていたし、唇はかれきっていた。
のどがかれきっているのであろう、時折、同じように、生唾をぐびっと、のみ込んでいる。
また——。
左門の剣と、民部の薙刀が、ほんのわずかであるが、切先を、ぴくっとふるわせるのも、ようやく、体力が消耗したことを、示している。
道満は、しかし、悠然とおちつきはらって、縁側にあぐらをかいている。
と——。

背後に立った者があり、
「道人、いいかげんで、止めてはどうか」
その声が、かけられた。
この館のあるじが、いつの間にか、帰って来ていたのである。
「そうだの。そろそろ、止めるかの」
道満は、やおら、腰を上げた。
春奈は、ほっとした。真剣の勝負のおそろしさを知っているだけに、この緊迫した半刻は、春奈にとって、堪え難い長さであった。
庭へ、のっそりと、降りた道満は、ひょいと、小石を二個、ひろいあげた。
そして、それを、左右の手に持つと、
「やっ！」
大きな懸声もろとも、投げた。
次の瞬間——。
左門の手から剣が、民部の手から薙刀が、ぽろりと、はなれて、地面へ、落ちた。
二個の小石は、それぞれの手くびに当ったのである。
道満は、茫然として視線を向けて来る二人へ、ゆっくりと歩み寄ると、
「お主らは、幾年修業を積んだか知らぬが、あわれや、小石にも勝てぬの」
と、云った。

「……」
「……」
左門も民部も、言葉もなく、化物じみた老人を、見まもった。
「つまり、お主らは、いまだ、人間の争闘というものを知らぬ。敵を攻めることのみが、争闘というものではない。撃とうと、心がはやれば、かえって、その身は、案山子のごとく、動きのとれぬものと相成る。撃とうと思わず、撃たせようと心がける。そこが、兵法の肝心のところであろうて——」
道満は、剣と薙刀をひろって、それぞれの手へかえしてやり、
「横あいから小石が飛んで来るのを、かわすこともできぬほど、心身が、コチコチになってしもうて居っては、話になるまい。まず、これからは、撃つことより、にげることを修業せい」
殺気が満ちていた庭が、もとの静寂にかえり、そこへ宵闇が落ちた頃あい——。
神屋主膳と道満は、奥の一室で、対坐して、酒杯を手にしていた。
杯は、透明なぎやまんで、盛られているのは、血潮のように赤い南蛮酒であった。
「公儀隠密どもが、蠢動しているけはいがあるの」
道満が、何気なさそうな口調で、云った。
「うむ。……そろそろ、この館も、とりつぶされる時機を迎えたらしい。公儀では、わしが、よほど、南蛮金をたくわえた、と思っているようだ」

「お許は、われわれが想像しているよりも、よほど貧乏らしい」
「ははは……。金は、天下のもの。集まれば、散じ、散じたものは、また集まって来る。それにしても、金というやつは、人間を、狂気にもし、悪鬼にもする」
「加古川大尽の土蔵を破って、三千両ばかり盗んで来たが、役立ててもらおう」
道満は、云った。
「ほう、泥棒を働かれたか、道人が――」
「お許が、金が必要と思ってな」
「わしの計画を、看破されているらしいな？」
主膳は、笑った。
「軍船をしたてて、海を渡り、新天地をもとめる。そうであろうかの」
「……」
主膳は、黙って、杯をのみ干した。
それから、しばらく、視線を、宙へ投げていた。
――新天地を、どこに、もとめるか？　呂宋にするか、天竺がよいか、それとも、しゃむろをえらぶか？
いずれにしても、この日本に、知行をうしなった浮浪の武士が、志をたてて、驥足を展ばす余地は、なくなっているのだ。
幕府が、国をとざして、海外との交流を断つ政策をとっている今日、これに叛いて、国外へ脱出することは、容易のわざではない。
主膳は、しかし、それだからこそ、この計画を、成功してみせる決意を、もう十年も以前から、持っていた。
したてる軍船は、十艘。それに、すくなくとも、三千の浪士をのせて、出帆する。そして、ここぞと目をつけた異邦の湊へ、乗り込んで、一挙に、征服する。
男子一生の壮挙というべきではあるまいか。
徳川幕府は、日本六十余州を治めるために、敢えて、禁教鎖国したが、南蛮地図をひろげてみれば、世界は、無限の広大さである。
曽て、この平家館の食客であった山田長政は、単身海を渡って、しゃむろに行き、十年を経ずして、王にのし上ったではないか。
勇猛にして、智略ある日本武士を求めている異邦は、いたるところにあるのだ。
公儀の厳しい弾圧政策の下に、いたずらに、首を縮めて、かくれひそんでいるのは愚もきわまれるものである。
主家を喪った浪士はよろしく、目を、海の彼方に向けるべきであろう。
異邦の各地には、想像以上に、たくさんの日本人町が、つくられている。
そこの日本人たちが、いかに、大きな力を発揮しているか、幕府はもとより、一般の人々は、夢にも知らぬ。
もし、その盛んなくらしぶりを知れば、われもわれもと、新天地をもとめて、海を渡る志

願者が、続出するのではあるまいか。

主膳は、これまで、数度も、幕府評定所へ、異邦における日本人の活躍、日本人町の威勢について、くわしく述べた上書をさし出していた。しかし、にぎりつぶされてしまったのである。

いささかでも、気宇の大きな人物が、幕閣内にあるならば、一度は、朱印船を駆って、海を渡り、ひろく、異邦を視察して来るべきであろう。その考えを、主膳は、持っていた。

しかし、公儀要職の人々は、一人として、そのような思案をなさず、また、主膳の提議も採りあげようとはしなかったのである。

いや、かえって、このような考えを持つ者を、政策に叛く不埒者として、処断する肚をきめた模様である。

すでに、主膳は、どれくらいの公儀隠密が、この館を探索にやって来たか、知っている。

「道人――」

主膳は、道満を視た。

「わしの計画は、成るかどうか、うらなってもらえぬか？」

「さあ――」

道満は、あごをなでた。

「やってみなければ、わからんが……、成るも成らぬも、お許に従う面々の、団結力であろうな。……当今、貧にやつれた浪士どもは、なにやら、腰が抜けて、ふらふらしているように見受けられる故、不退転の覚悟をきめるのは、なかなか、むつかしかろうて」

「わしは、二千人は集めたく思っているが……」

「どうであろうかな。一騎当千のつわものなど、そこいらに、ざらに、ころがっては居らぬ。先刻も、あの広間にごろごろして居る浪人たちを眺めたが、これは、と思う面がまえの者は、一人も居らなかったの」

「異邦へ乗り込んで、おのが土地と城を占めるには、二千人では足らぬくらいだ。……それだけ集めるのが、不可能とすると、わしの計画は、挫折する」

「まあ、せいぜい、集めても、五百人ではないかのう」

「いや、どうしても、二千人は集めねばならぬ」

道満は、強い語気の主膳を見かえして、

「やってみられるがよかろう。……しかし、それには、金が要るのう。どうじゃな、ひとつ、この館をすてて、どこか、山砦を本拠にして、一大盗賊隊をつくって、金を集めることに専念しては――。つまり、そうしているうちに、五百人、千人と、度胸も腕もある浪人どもが集められるのではあるまいか」

道満は、平然として、云った。

「盗賊隊か――、ふむ」

主膳は、腕を拱いた。

やがて、道満は、腰を上げて、おのが茅屋へ、帰って行った。

入れちがいに、左門が、廊下から声をかけて、挨拶に入って来た。
主膳は、逞しく成長した甥を、あらためて、眺めて、
「兵法自慢のようだな」
と、云った。
「独学の力を試したく、千羽鶴家から出て参りました」
左門は、こたえた。
「母者は、止めなんだか？」
「あきらめた様子で、見送ってくれました」
「兵法者として、名を挙げるのが、お前の生涯の目的になったか」
「はい」
「天下は、広いぞ」
「広いからこそ、心が勇みます」
「わしがきいたところでは、兵法をもって天下に名を挙げようと志した者の、半数は、真剣の勝負で、斃れるという」
「やむを得ませぬ」
左門は、昂然と胸を張った。
主膳は、左門の風貌に、その父盛親の俤を看ながら、
――これを、武辺の血というのか。

と思った。
その母は、わが子に、長曽我部家再興を説きはしなかったはずである。また、旧臣たちも、そうした野心を持って、この遺児を修業させたわけではなかったであろう。
長曽我部家を流れる武辺の血が、左門をして、兵法者たらしめたに相違ない。
主膳は、血気満ちた甥を見まもって、一言の助言もむだであることを、さとった。
「これから、どこへ行く？」
「江戸を目ざします。江戸には、一流兵法者が集まっている、ときき及びますゆえ……。就いては、お願いの儀があります」
「うむ――」
「偶然のことから、姫路藩家中から追われている娘とその弟を救い、ここまで、ともないました。お預かり頂けませぬか？」
「よかろう」
「すぐに、ここへ、連れて参ります」
左門は、さっと立って、廊下へ出ると、姉弟の待つ部屋へもどって行った。
静香と数馬は、なお、緊張した気色で、そこにいた。
「そなたたちを、当館のあるじに、ひきあわせる。こちらへ――」
左門に告げられて、静香と数馬は、一瞬、顔を見合せた。
「あるじは、当分、そなたたちを預かってくれる、と承知した」

廊下を歩きながら、左門は、云った。
数馬が、なにかこたえようとすると、姉は、そっと、袖を引いて、とどめた。
主膳は、壁に貼った全世界地図の前に、立っていた。
「叔父上、連れて参りました」
左門に云われて、主膳は、頭をまわした。
姉弟を一瞥した瞬間、
——はてな？
主膳は、眉宇をひそめた。
「数馬と申します」
「姉、静香と申しまする」
頭を下げて名のる姉弟を、じっと見まもった主膳は、なにを思ったか、
「左門、由比民部と仲なおりをせぬか？」
と、すすめた。
「叔父上が、おすすめならば——」
左門は、出て行った。
主膳は、視線を、静香に当てた。
「よう似た」
その言葉を、口にした。

はっ、となって、静香は、主膳を見かえした。
主膳は、微笑して、
「母御に生写しだな」
と、云った。
姉も弟も、顔色を一変させた。
「そなたたちは、白河館の遺児であろう」
「……」
「そなたたちの母御は、むかし、御所の上臈であった。美しいひとであった。わしは、恋した。そなたたちの父上も、恋した。そして、わしの方が、やぶれた」
そこまで語った時、突然、数馬が、
「父の敵っ！」
と、絶叫するや、脇差を抜いて、突きかかった。
主膳は、その手くびをつかんで、脇差を奪うと、
「織田重四郎という浪人者が、姫路へ戻って、この神屋主膳が敵ではないことが判明した、と報せなかったか？」
と、静香に、問うた。
「織田様には、まだ、会うて居りませぬ」
「そうか。それで、そなたたちは、まだ、わしを敵と思い込んでいたか。……わしは、白河

館を夜襲した曲者ではない。これは、神明に誓うことができる」

主膳は、数馬をはなした。

「そなたたちの母御は、白河館に嫁がれ、わしの恋はやぶれたが、しかし、わしは、そのことをうらみには思わなかった。いや、そのひとの幸せを祈っていた。わしの脳裡にのこされた美しい俤は、幾年経っても、色あせはしなかった。わしにとって、そなたたちの母御は、久遠の女性であった。そのわしが、どうして、残忍非道の殺戮など、為そうか。……世間では、わしのしわざ、ときめてしまったが、わし自身が、その曲者が何者であるか、つきとめて、復讐してくれよう、と決意したほどなのだ。なお、いまだ、判明はせぬが……」

静香も数馬も、この人物がしずかに語ることを、うそだ、と否定できなかった。

かえって、ほっと安堵の思いが、姉弟の胸を占めたのである。

「ふしぎなめぐりあわせと、申すものであろう。そなたたちが、わしの甥に、ともなわれて、この館へ、やって来たとは――」

主膳は、微笑した。

「疑いはのこるかも知れぬが、しばらく逗留してくれれば、わしという男が、判ってくれるであろう。わが家のようなつもりでいてくれてよい」

文字づかいについて

新潮文庫の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。

二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。

三、一般には常用漢字表以外の漢字も音訓も使用する。

四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。

五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。

六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

柴田錬三郎著

剣は知っていた
（全二冊）

戦いの世に背を向けて人間らしい生き方を求める青年剣士・眉殿喬之介と、家康の娘・鮎姫の悲しい恋――雄大なスケールの戦国ロマン。

柴田錬三郎著

江戸群盗伝
（全二冊）

あがきのとれない階級制度の檻の中で、虚無的に生きる美貌の剣士・梅津長門を中心に、恋と欲と意地に燃え狂う大江戸を写した傑作。

柴田錬三郎著

美男城

裏切者となった卑劣な父を斬ると誓った御堂主馬之介……暗い宿命を背負って、戦国乱世を生きる孤独の青年剣士の波瀾の生涯を描く。

柴田錬三郎著

眠狂四郎無頼控
（全六冊）

封建の世に、転びばてれんと武士の娘との間に生れ、不幸な運命を背負う混血児眠狂四郎。時代小説に新しいヒーローを生み出した傑作。

柴田錬三郎著

眠狂四郎独歩行
（全二冊）

幕府転覆をはかる風魔一族と、幕府方の隠密黒指党との対決――壮絶、凄惨な死闘の渦中にあって、ますます冴える無敵の円月殺法！

柴田錬三郎著

眠狂四郎殺法帖
（全二冊）

幾度も死地をくぐり抜けていよいよ冴えるその心技・剣技――加賀百万石の秘密を追って北陸路に現われた狂四郎の無敵の活躍を描く。

柴田錬三郎著

孤剣は折れず

三代将軍家光の世に、孤剣に運命を賭け、時の強権に抗する小野派一刀流の剣客・神子上源四郎の壮絶な半生を描く雄大な時代長編。

柴田錬三郎著

赤い影法師

寛永の御前試合の勝者に片端から勝負を挑み、風のように現れて風のように去っていく非情の忍者〝影〟。奇抜な空想で彩られた代表作。

柴田錬三郎著

運命峠
（全二冊）

豊臣秀頼の遺児・秀也を守り育てる孤高の剣士・秋月六郎太。二人の行方を追うさまざまな刺客……。多彩な人物で描く時代ロマン。

柴田錬三郎著

剣鬼

剣聖たちの陰にひしめく無名の剣士たち――彼等が師を捨て、流派を捨て、人間の情愛をも捨てて求めた剣の奥義とその執念を描く。

柴田錬三郎著

眠狂四郎孤剣五十三次

幕府に対する謀議探索の密命を帯びて、東海道を西に向かう眠狂四郎。五十三の宿駅に待つさまざまな刺客に対峙する秘剣円月殺法！

柴田錬三郎著

眠狂四郎虚無日誌

大奥に出現した将軍家世継ぎ家慶の贋者。その正体を探る狂四郎は、刺客を倒しつつ江戸から京へ向かい世継ぎすり替えの陰謀を暴く。

柴田錬三郎著

眠狂四郎無情控

隠された太閤の御用金百万両をめぐって起る異変――安南の日本人町から鎖国令下の母国へ潜入した人々と共に、宝探しに挑む狂四郎。

五味康祐著

秘剣・柳生連也斎

芥川賞受賞

芥川賞受賞作「喪神」、異色の剣の使い手の苦悩を描いた「秘剣」をはじめ剣に生きる者の苛酷な世界を浮彫りにする傑作11編を収録。

五味康祐著

柳生武芸帳

（全三冊）

ひとたび世に出れば、柳生一門はおろか幕府、禁中をも危くする柳生武芸帳の謎とは？　剣と忍法の壮絶な死闘が展開する一大時代絵巻。

司馬遼太郎著

梟の城

直木賞受賞

信長、秀吉……権力者たちの陰で、凄絶な死闘を展開する二人の忍者の生きざまを通して、かげろうの如き彼らの実像を活写した長編。

司馬遼太郎著

風神の門

猿飛佐助の影となって徳川に立向った忍者霧隠才蔵と真田十勇士たち。屈曲した情熱を秘めた忍者たちの人間味あふれる波瀾の生涯。

子母沢寛著

勝海舟

（全六冊）

新日本生誕のために身命を捧げた維新の若き志士達の中で、幕府と新政府に仕えながら卓抜した時代洞察で活躍した海舟の生涯を描く。

池波正太郎著

編笠十兵衛

幕府の命を受け、諸大名監視の任にある月森十兵衛は、赤穂浪士の吉良邸討入りに加勢。公儀の歪みを正す熱血漢を描く忠臣蔵外伝。

池波正太郎著

さむらい劇場

八代将軍吉宗の頃、旗本の三男に生れながら、妾腹の子ゆえに父親にも疎まれて育った榎平八郎。意地と度胸で一人前に成長していく姿。

海音寺潮五郎著

おどんな日本一

九州の小藩に生れたばかりに出世が出来ない、恋もかなわぬ……兵法日本一を目ざして武者修業に出た愛すべき熱血漢・丸目蔵人の物語。

海音寺潮五郎著

二本の銀杏

民百姓を救うため、川内川の改良事業に取り組む薩摩隼人、上山源昌房――維新の夢に賭ける豪放な男の姿を雄渾の筆に描く代表作。

藤沢周平著

用心棒日月抄

故あって人を斬り脱藩、刺客に追われながらの用心棒稼業。が、巷間を騒がす赤穂浪人の動きが又八郎の請負う仕事にも深い影を……。

藤沢周平著

橋ものがたり

様々な人間が日毎行き交う江戸の橋を舞台に演じられる、出会いと別れ。男女の喜怒哀楽の表情を瑞々しい筆致に描く傑作時代小説。

阿刀田高著　**夢判断**

夢の予見性とは？　赤い色の夢を見ると、その夢が必ず実現されるという青年の話「夢判断」など、意表をつく恐怖と笑いの傑作14編。

梶山季之著　**女の警察**

夜の歓楽の巷を舞台に、山陽新幹線用地買収にからむ疑獄事件にまきこまれていく男の行動を描く、迫真のエロチック・ミステリー！

サトウサンペイ著　**けっこうエーことといってるんですが**

マンガみたいに暮したい！　だけども実際は、イライラ、ボヤキの連続だ——そんなムードを吹きとばす、辛口ユーモア・エッセイ。

青島幸男著　**ノミの反乱**

銀行の横暴でマイホームを奪われた男が、同じ被害者たちと組み、オンライン・システムの盲点をついて復讐をなしとげる痛快な物語。

藤本義一著　**サイカクがやって来た**

すべてこの世は色と欲、大阪人の遊びの精神をふんだんに盛り込み、西鶴の精神で現代をサイカク認する軽妙洒脱な名エッセイ98編。

色川武大著　**ぼうふら漂遊記**

ヴェガスを皮切に世界の賭場を巡りながら、睡眠発作症という奇病をもつ男が、秘書のミセス・アンとの交友を深めて行く道中記。

新潮文庫最新刊

筒井康隆著　**富豪刑事**

キャデラックを乗り廻し、最高のハバナの葉巻をくわえた富豪刑事こと、神戸大助が難事件を解決してゆく。金を湯水のように使って。

定価280円

山本周五郎著　**艶書**

七重は出三郎の袂に艶書を入れるが、誰からか気付かれないまま他家へ嫁してゆく。廻り道してしか実らぬ恋を描く表題作など11編。

定価360円

司馬遼太郎著　**胡蝶の夢**（三、四）

瓦解する幕府の海陸軍軍医総裁、松本良順は江戸を脱して会津に向う。他方、共にボンベに学んだ関寛斎も官軍野戦病院長として会津へ。

定価各400円

山口瞳著　**男性自身　困った人たち**

日々眼に映る笑いや慟哭、怒りや不満、胸の中にわだかまり、心のひだに隠された細やかな感情を、鋭く潔く描く「男の本音」51編。

定価320円

山崎豊子著　**不毛地帯**（三、四）

アメリカの巨大自動車企業フォークが、日本市場を狙う。黒いFX商戦から十年、商社マン・壺岐正は国際経済戦争の最前線に立つ。

定価各560円

北杜夫著　**悪魔のくる家**

あまりに齢をとり妖怪じみてきた老女が、傾きかけた旧家を再興すべく打った大博打。破天荒な笑いと無気味な黒魔術のあやなす世界。

定価220円

新潮文庫最新刊

三島由紀夫著
裸体と衣裳
文壇の寵児としての超人的日常の表と裏を描く表題作。ほかに「文化防衛論」等、犀利な知性と鋭いイロニーの横溢する評論全9編。
定価360円

海老沢泰久著
F2グランプリ
強い男が勝つか、速い男が制するか、新鋭が奪い去るか。チャンピオンをめざす三人の男の野望と苦悩が、サーキットを疾駆する！
定価280円

藤本義一著
元禄流行作家
—わが西鶴—
「わしは俳諧師という商人や」——愛欲と金銭欲こそが庶民の夢と説いた元禄の流行作家・井原西鶴の数奇な半生を描く力作長編小説。
定価280円

長部日出雄著
笑いの狩人
—江戸落語家伝—
江戸落語の創好者・鹿野武左衛門から、完成者三遊亭円朝まで——江戸文化の華を生み育てた五人の芸人たちの凄絶・痛快な生き方。
定価320円

滝田ゆう著
昭和夢草紙
裏町、横丁、路地、小路、〝色街〟玉の井を抜ければ思い出はみんな夢まみれ。下町の粋人が絵と文で綴る、今は昔の「夢のお話」。
定価360円

読売国際漫画大賞選
ユーモア美術館
思わず吹き出す大傑作、一瞬アタマを使わせる外国作、ほっぺたがゆるむジュニア作。読売国際漫画大賞の作品を集めたカラー文庫。
定価480円

新潮文庫最新刊

ラドラム
山本光伸訳
暗殺者
（全二冊）
僕はいったい誰なんだ？　記憶を失った男は執拗に自分の過去を探るが、残された僅かな手掛りは、彼を恐ろしい事実へと導いてゆく。
定価各480円

司馬遼太郎著
胡蝶の夢
（一、二）
巨大な組織・江戸幕府が崩壊してゆく——この激動期に、時代が求める〝蘭学〟という鋭いメスで身分社会を切り裂いていった男たち。
定価400/440円

山崎豊子著
不毛地帯
（一、二）
シベリアの収容所で十一年間の強制労働に耐え、帰還後、商社マンとして熾烈な商戦に巻き込まれてゆく元大本営参謀・壺岐正の運命。
定価560/600円

城山三郎著
男子の本懐
〈金解禁〉を遂行した浜口雄幸と井上準之助。性格も境遇も正反対の二人の男が、いかにして一つの政策に生命を賭したかを描く長編。
定価400円

深田祐介著
昨今日本白書
オイル・ショックによって一大転換を強いられた日本が苛烈な経済戦争を乗り切るには？国際的視野で現代日本社会を明快に分析する。
定価280円

柳田邦男著
マリコ
《マリコ》ハ病気ダ、悪クナルバカリダ……。日米開戦前夜の緊急交信の暗号に名を残す少女の半生を通じて描く、激動の日米現代史。
定価480円

徳川浪人伝(上)

新潮文庫　草150=25

昭和五十八年十月二十五日　発行
昭和五十八年十二月二十五日　二刷

著者　柴田錬三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
　　編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Eiko Saitō 1983　Printed in Japan

ISBN4-10-115025-7 C0193